小泉八雲全集

第五卷

東京

第一書房

熊本時代の小泉八雲と節子夫人

東の國から

心

譯者

戸澤正保
石川林四郎
田部隆次

小泉八雲全集第五巻目次

東の國から

心

9

東の國から

新日本に於ける黙想と研究

『東と西と離れて居る程遥かに——』

出雲當時のなつかしき記念として

西田千太郎へ

夏の日の夢

一

その宿屋は私に取つては極樂、そこの女中達は天人のやうに思はれた。それは私があらゆる『現代の便利な物』のある歐洲式のホテルで安樂をもとめようと試みた一つの開港場から丁度逃げ出したところであつたからである。それ故もう一度浴衣（ゆかた）を着て、冷しい疊の上に樂々と坐つて、よい聲の若い女達にかしづかれて、綺麗な物に取りまかれて居るのは、十九世紀の凡ての悲みの償ひのやうであつた。筍や蓮根が朝飯に出て、極樂のかたみに團扇を贈られた。その團扇の繪は、渚の上に白く破裂した大きな波と、その上の青空を大喜びて飛び廻る鷗の一群を描いただけであつた。しかしそれを見る事はここまでの旅行の凡ての效（かひ）があつた。それは光のすばらしさと運動のとどろきと、鷗の勝利――凡てを一にした物であつた。それを見た時、私は大きな聲で喝采したくなつた。

露臺の杉の柱の間から、私は海岸に沿うて建つた長い美しい灰色の町――碇泊したままの黄色の船――大きな緑色の絶壁の間の灣の入口――それからそのさきの地平線まで輝き渡つた夏の海を見る事ができた。その地平線には古い記憶にもたとへられるかすかな山の姿があつた。そして灰色の町と黄色の船と緑色の絶壁の外、一切の物は青かつた。

その時風鈴のやうに柔かな調子の聲でお辭儀の言葉を云つて私の默想を破つた者があつた。そこで氣がついて見ると、この宮殿とも云ふべき宿屋の主婦が茶代の禮を云ひに來たのであつた。そこで私はこの婦人の前に平伏した。彼女は大變に若かつた、そして――國貞の蛾の女、蝶の女のやうに――眺める事は非常に愉快であつた。そして私は直ちに死の事を思つた、美は時とすると豫想の悲哀となる事があるからである。

彼女は私の行先を聞いて車を命じたいと云つた そこで私は答へた、

「熊本へ。しかしお宅の名をいつも覺えてゐたいから、聞かせて下さい」

「おざしきはお粗末でございますし、女中達も氣がききませんで失禮でございます。うちは浦島屋と申します。只今車を申しつけます」

彼女の音樂のやうな聲が止んだ、そして私は――見えない蛛巣の絲のやうに――魅力が全く私の周圍に落ちて來る事を感じた。その名は人を魅する歌にある話の名であつたから

である。

譯者註　著者は明治二十六年七月二十日朝單身熊本を出發、百貫をへて長崎へ翌朝午前三時について、その日一日をそこで費し、それから船で翌二十二日午前三時三角(みすみ)港について、宿屋で朝飯をたべた。非常に歡待されて僅かに四十錢要求された。宿屋の名が浦島屋であつたので著者は一層喜んだ。その日車で熊本へ歸つたが、靴もぬがないうちに喜んで話つたのはこの浦島屋の事であつた。一八九三年七月二十二日チエムバレン宛の手紙參照。

二

一度その話を聞いたら、讀者は決してそれを忘れる事ができない。私は每年夏海を見る每に――殊に甚だおだやかな靜かな日に――この話が極めて頑固に私の心に浮んで來る。それには澤山の說があつて無數の藝術作品の靈感となつて居る。しかし最も古いそして最も深い印象を與へるのは、五世紀から九世紀までの歌集『萬葉集』に見出される、この古い歌から大學者アストンはその話を散文に譯した。そして大學者チエムバレンが散文と韻文と兩方に譯した。しかし英語讀者に取つてこの話の最も面白い物は、『日本お伽噺集』

のうちに子供のために書かれたチェムバレンの譯である、――日本の畫家によつて描かれたその美しい彩色の挿繪のためである。私はその小さい書物を前に置いて、その傳說を私自身の言葉でもう一度語つて見よう。

一千四百十六年前、若い漁師の浦島太郎は小舟に乘つて住の江の岸を離れた。夏の日は――ただいくつかの輕い眞白の雲が鏡のやうな海の上にかかつて居るだけで、あとは一面に眠たいやうな穩かな青色である事は――その當時も今も同じであつた。それから又、青い空に融けて居る――遙かの青い山の形も同じであつた、そして風は物懶さうてあつた。

そして浦島も物懶くなつて、釣をしながら、舟を波にまかせて置いた。その舟は塗つてもなく、舵もない妙な形の舟で多分讀者は見た事はないだらう。しかし一千四百年後、日本海の沿岸の古い漁村の前面にこんな舟はやはり見られる。

長い間待つたあとで、浦島は何か捕へた、それで引上げて見た。ところがそれはただ一匹の龜であつた。

さて龜は龍宮王の使で神聖である。その齡は千年――或は萬年と云はれる。それでそれ

を殺すのは非常に惡い。浦島は靜かに綸を外し、神々に祈禱を捧げてそれを放つてやつた。

しかしそれからさきもう何もかからなかつた。海は大層暖かつた、そして海と空氣と一切の物は殊の外靜かであつた。それで大きな睡魔が彼を襲うた、——そして彼は漂ふ舟の中で眠つた。

それから海の夢の中から——丁度讀者がチェムバレン敎授の『浦島』の挿繪で見るやうに——一千四百年前の王女のやうに背中から足もとまでも長い黑い髮を垂れて、眞紅と靑の着物を着た——美しい少女が現れた。

水の上をすべつて、風のやうに輕く彼女は來た、そして舟の中に眠つて居る浦島の上に立つて、輕く觸れて彼を起して云つた。

『驚いてはいけません。あなたの親切な心を愛でて、私の父なる龍宮王が私をおよこしになりました。今日あなたは龜を放ちました。それでこれから父の御殿へ參りませう、そこは常夏の國です。おいやでなければ私はあなたの花嫁になります、そして永久にそこで幸福に暮しませう』

そこで浦島は彼女を眺めて益々不思議に思ふばかりであつた。彼女程美しい人間はゐないからであつた、そして彼は彼女を愛する外はなかつた。それから彼女は一方の擢を取り、

彼は他方の櫂を取つて——丁度讀者が遙か西の方の海岸の沖て漁船が夕燒の中へ入る時、夫婦て一緒に漕いて行くのを、今もやはり見るやうに——漕ぎ去つた。

彼等は靜かな青い海の上を南の方へ穩かに速く漕ぎ去つた、——遂に彼等は夏の決して死ぬ事のない島へ、——そして龍宮王の宮殿へ來た。

〔ここでこの小さい書物の文句が讀んて居るうちに、消(譯者註)えて行つて、かすかに青い細波がページに溢れて居る。それからさきの不思議な地平線に、讀者は島の長い低い穩かな岸と、繁茂した常綠の上に聳えた屋根——一千四百十六年前雄略天皇の宮殿のやうな——海神の宮殿の屋根を見る事ができる〕

そこて禮裝をした不思議な召使——海の動物——が大勢二人を迎へに來た。そして龍宮王の婿として浦島に挨拶した。

そこて海神の娘が浦島の花嫁となつた。それは驚くべき華美な婚禮てあつた。龍宮には大宴會があつた。それから毎日浦島に取つて新しい驚嘆と新しい樂みがあつた、海の底の不思議な物、常夏の國の人を魅する色々の娛樂は海王の僕達(しもべだち)によつてそこへ出された。そしてそのやうにして三年は過ぎた。

しかしこんな事があつても、この漁夫の子は、淋しく待つて居る兩親の事を思ふと、心

がいつも重くなるのを感じた。そこで彼はたうとう花嫁に、兩親にただ一言云ひたいからほんの暫らく家に歸してくれるやうに——それから急いで彼女のところに歸つて來るから許してくれるやうに——賴んだ。

さう云はれて彼女は泣き出した、そして長い間彼女はしくしくと泣き續けた。それから彼女は彼に云つた、『あなたが行きたいと云ふ事なら、行かねばなりません。あなたがお出てになるのが私たいへん心配です、もうこれて再び遇はれないかと心配します。しかし私はあなたに小さい箱を一つ上げますから持つて行つて下さい。私の云ふ通りになされば、その箱はあなたが私のところへ歸つて來られる助けになります。それを開けてはなりません。どうしても開けてはなりません——どんな事があつても。もしそれを開けたら、あなたは決して歸つて來られません。そしてあなたは再び私に遇へませんから』

それから彼女は彼に絹のひもで結んだ小さい漆塗りの箱を與へた。「そしてその箱は今も神奈川の海岸の寺で見られる、そこの僧は又浦島太郎の釣の綸と龍宮から携へて來た妙な寶石をいくつかしまつて居る」

しかし浦島は彼の花嫁を慰めて、決して決して箱をあけない事——その絹のひもをゆるめる事さへもしない事を誓つた。それから彼は夏の光を通りぬけて永久に眠つて居る海の

上に出た、そして常夏の島の姿は夢のやうに彼のうしろに消えた。そして彼は再び眼の前に北の地平線の白い光のうちに、はつきりして來た日本の青い山々を見た。

遂に再び彼は彼の故郷の灣に入つて、再び彼はその渚に立つた。しかし眺めて居るうちに、彼に大きな當惑——不思議な疑が起つた。

その理由は場所は同じでありながら、同時に又同じでなかつたからであつた。彼の祖先以來の茅屋はなくなつてゐた。村はあつたが家の形は凡て變つてゐた。樹も野も人の顏までも變つてゐた。殆んど大概の目じるしはなくなつてゐた、神社は新しい場所に建てられたやうであつた、森は近所の坂から消えてゐた。ただ村を通つて流れる小さい川の音と山の形だけがやはり同一であつた。その外一切の物は變つて新しくなつてゐた。彼は兩親の家をさがさうとしたが駄目であつた。そして漁師達は不思議さうに彼を熟視した、そして彼が以前に見た覺えのある顏は一つもなかつた。

そこへ杖にもたれながら來る一人の大層な老人があつた、この老人に浦島は浦島一族の家に行く道を尋ねた。ところが老人は非常に驚いて、浦島に幾度もその質問をくりかへさせてから叫んだ。

『浦島太郎！お前さんはその話を知らないと云ふのは一體どこの方ですか。浦島太郎！

さあ、浦島が溺れてから四百年以上になります。それで墓場に記念碑が建ててあります。浦島の人達の墓はその墓場にありますが、――その古い墓場はもう今では使つてゐません。浦島太郎！どこにその家があるなどとお前さんが聞くのは少しばかげてゐますぞ』それから老人はこの質問者の愚を嘲笑しながら、とぼとぼと行つた。

しかし浦島は村の墓地――もう使用されてゐない古い墓地――へ行つてそこで自分自身の墓、兩親及び親戚の墓、自分の知つて居る大勢の外の人達の墓を見た。その上にある名が中々讀めない程古くなつて苔蒸してゐた。

そこで彼は何か妙な錯覺の犧牲となつて居る事を知つた。それから渚の方へ戻つた、――いつでも海神の娘の贈物の例の箱を抱へながら。しかしこの錯覺は何だらう。それからこの箱には何があるのだらう。或は箱の中にある物が錯覺の原因ではないだらうか。疑は信仰に勝つた。無分別にも彼は愛人との約束を破つた、彼は絹のひもをゆるめた、彼は箱を開いた。

直ちに、何の音もなしにそこから出たのは、夏の雲のやうに空に上つた白い冷たい不可思議な蒸氣であつた、そして靜かな海の上を南の方へ速かに流れて行つた。その箱には外に何物もなかつた。

そして浦島はその時自分の幸福を破壊した事——再び彼の愛人、海神の娘のところへ歸る事のできない事を知つた。

しかしそれはただ暫らくの事であつた。それて絶望の餘り烈しく泣き叫んだ。すぐそのつぎに彼自らも變つた。氷のやうな寒さが彼の脈管中を走つた、齒が拔けて落ちた、顏に皺がよつた、毛髪が雪のやうに白くなつた、手足はしなびた、力がなくなつた、四百の冬の重さに押し潰されて彼は砂の上に生氣を失つて倒れた。

さて日本書記に『雄略天皇の二十二年、丹後の國余社郡水江の浦島子、漁舟に乘つて蓬萊に赴く』とある。それからあと三十一代の天皇と女帝の御宇の間——即ち五世紀から九世紀まで——浦島の記事はない。それからの記事には『淳和天皇の御宇天長二年、浦島子歸る、再び又行く、そのところを知らず』とある。

譯者註　『日本お伽噺集』のうちのチエムバレン教授の『浦島』が着色の插繪のためにこんな風になつて居る。

三

仙女の女主人は萬事用意ができたと云ひに來た、そして彼女の細い手で私のかばんを持つて行かうとした、——それを私は重いからと云つて拒んだ。そこで彼女は笑つたが、私には持たせないで、背中に漢字を書いた海の物を呼んだ。私は彼女にお辭儀をした、そこで彼女は女中達の無作法を咎めないでこの粗末な家を忘れないで下さいと云つた。『それからどうか車屋に七拾五錢だけやつて下さい』と云つた、

それから私は車に乘つた、そして數分ののちこの小さな灰色の町は彎曲のうしろに見えなくなつた。私は海岸を見下す白い道に沿うて車を走らせてゐた。右の方にはうす鳶色の斷崖があり、左の方にはただ空と海とだけあつた。

何哩も私は無限の光を眺めながら海岸に沿うて車を走らせた。一切の物は青色、——大きな貝殼の心の中で來往する青色のやうな、驚くべき青色に浸つてゐた。輝いた青海原は電氣の融解の輝きのうちに蒼空と連なつてゐた、そして大きな青い物——肥後の山々——は大きな紫水晶の塊のやうに、その光のうちに色々の角度をなしてゐた。何と透明な青さ

てあらう。この大きな色を破つて居る物は、沖の一つのまぼろしの峰の上に靜かになびいて居るまばゆいやうに白いいくつかの高い夏の雲だけてあつた。それが雪のやうに白い戰慄する光を水の上に投げてゐた。遙かに逼うて行く小さい舟はそのあとに長い絲、——その一面にぼうつと輝いた物のうちのはつきりした物と云つてはそれだけてある線、——を引くやうであつた。しかし何と神々しい雲であらう。それとも一千年前に、涅槃の幸福に赴く途中休息して居る白い清められた雲の靈であらうか。浦島の玉手箱から、逃げた白霧てあらうか。

蚊のやうに極めて小さい私の魂が、海と太陽の間のその夢のやうな蒼空の中に脱れ出て——一千四百の夏の輝く靈を通りぬけて、住の江の海岸にぶーんと音を立てて歸つた。おぼろげに私は船體の動搖を私の下に感じた。雄略天皇の時であつた。そして龍宮の乙姫は銀鈴のやうな聲で云つた、『父の家に參りませう、そこはいつでも青いのです』『どうしていつでも青いのですか』私は尋ねた。『そのわけは私が雲を皆箱の中に入れたからです』彼女は云つた。『しかし私はうちへ歸らねばなりません』私は大決心て答へた。『それならあなたは車屋に七十五錢だけ拂つて下さい』彼女は云つた。

同時に眼をさましたら時は明治二十六年夏の土用であつた――その證據に道の陸の方の側に電柱が遠く目の届く限り一列をなしてゐた。車は空と山と海の同じ青い景色を前にして、岸に沿うてやはり走つてゐた、しかし白い雲は見えなくなつてゐた、――斷崖は道に迫つてゐないで、稻田と麥畠は遙かの山まで續いてゐた。電柱だけが暫らく私の注意を惹いたのは、頂上の針金に、そして頂上の針金にだけ、無數の小鳥がとまつて、悉く道の方へ頭を向けて、私共の來る事を頓着しないでゐたからである。彼等は全く靜かにしてゐて、私共をただ通過する現象として見てゐた。何哩も何哩も幾百となく列をなしてゐた。そして私は道の方へ尾を向けて居るのを只の一羽も見なかつた。どうしてこんなにして居るのか、何を見て、何を待つて居るのであらうか、私には見當がつかなかつた。時々私はその群を驚かさうとして帽子をふつて叫んで見た。そこで二三羽搏して鳴きながら立ち上つたのもあるが、又針金の上にもとのやうな位置に戻つた。大多數は私を本氣になつて相手にはしなかつた。

車の鋭いひびきは深い音響のために打ち消された、そして私共が或村を通る時、四方を

聞いた假小屋の中て、裸の男が大きな太鼓を打つて居るのを見た。

『車屋さん』私は叫んだ――『あれ――あれは何てすか』彼は足を止めないて、返事をした。

『今どこても同じてす。長い間雨は降りません、それて雨乞[譯者註]をして、太鼓を鳴らすのです』

私共は外の村を通つた、そして私は色々の形の太鼓をいくつか見て、その音を聞いた、そして燒けるやうな稻田の數哩向うの、見えない小さい村から、又外の太鼓が反響のやうに答へた。

譯者註　盛んに太鼓を打ち鐘をつけば、或は大砲を打てば、そのあとで雨が降ると東西洋に信ぜられて居るのは多少の科學的根據のある事であらう。日本の或地方では雨乞のために神社に參詣する外にこんな事もする。

四

それから私は再び浦島の事を考へ出した。私はこの人種の想像に、この傳說が影響した

事を示す繪と歌と諺の事を考へた。私は出雲の宴會で一人の歌妓が浦島の役をつとめて、小さい漆器の箱を携へてゐたが、その悲劇的瞬間に出たのは、京都の香の煙であつた事を想ひ出した。私はその古風な美しい舞踊について——それから續いてこれまでなくなつた代々の歌妓の事について——それから續いて抽象的の塵の事について考へた、それが又私が僅かに七十五錢拂ふ事になつてゐた車屋の草鞋によつてあげられる具體的の塵の事を私に考へさせた。それから私はどれ程まで、それが古い人間の塵だらうかと訝つた、そして物の永久の道理として、心臓の運動の方が塵の運動より果してもつと重大であるだらうかと訝つた。さうすると私の祖先以來の道徳觀念はびつくりした、そこで私は一千年も生きてゐて、一世紀毎に益々新しい魅力の出て來る話は、そのうちに何か眞理があるために生き殘つて居るとしか考へられないと云つて見た。しかしどんな眞理があるのだらう。暫らく私はこの質問に答へられなかつた。

暑熱はひどくなつて來た、そこで私は叫んだ、

『車屋さん、私ののどが乾いたから、水が欲しいな』

彼はやはり走りながら答へた、

『長濱[譯者註一]村へ行けば——餘り遠くありません——大きな泉があります。そこに綺麗なよい

水があります』

私は再び叫んだ、――

『車屋さん――どうして小鳥は皆いつもこちらを向いて居るのかね』

彼は一層速く走りながら、答へた、――

『鳥は皆風の方に向いてとまります』

私は自分の愚かな事を第一に笑つた、それから子供の時にどこかで同じ事を聞かされた事を想ひ出して――つぎに私の忘れ易い事を笑つた。恐らく浦島の祕密も又忘れ易い事から起つたのかも知れない。

私は再び浦島の事を考へた。私は龍宮の乙姫が浦島を歡迎するために綺麗にした宮殿で空しく待つて居るのを見た、――そしてどうなつたかを知らせる白雲の無慙にも歸つて來た事を見た、――そして大きな禮裝をした親切な大勢の異樣な海の動物が姫を慰めようと努めて居るのを見た。しかしもとの話には何もそんな事はない、そして人々の同情は全く浦島に集つて居るやうである。それて私はこんな風に自分で考へて見た、――

浦島に同情するのが一體正しいだらうか。勿論彼は神に迷はされた。しかし神に迷はさ

れない人はあるだらうか。人生その物が迷てはないか。そして浦島は迷のうちに神の目的を疑つて、箱を明けた。それから何の迷惑を受けないで死んだ、そして人々は浦島明神として彼のために神社を建てた。それに何故そんなにひどく同情するのだらう。

西洋てはそれは全く違つた風に取扱はれる。西洋の神々に不從順てあつたら、私共はこの上もない高い廣い深い悲痛を經驗するためにやはり生き長らへねばならない。私共は丁度最好の機會に全く安樂に死ぬ事を許されない、まして死後自分勝手に小さい神になる事などは猶更許されるわけはない。現身の神々の間にそれ程長く自分だけ暮らしてゐたあとて、愚かにも神の敎を守らなかつた浦島にどうして同情ができよう。

恐らく私共が同情をすると云ふ事實が、その謎に答へて居るのてあらう。この同情は自分の同情に相違ない、それだからこの傳說は無數の人の魂の傳說てあらう。靑い光と柔和な風の特別な時に、丁度こんな思が――そしていつも古い非難のやうに――浮んて來るのてあらう。その思は季節と季節の氣分に餘りに深い關係があるので、人の一生や祖先の生涯の或實在的な物にも關係せざるを得なくなつて居る。しかしその或實在的な物とは何てあつたらう。龍王とは誰てあつたらう。常夏の國はどこにあつたらう。そして箱の中の雲は何てあつたらう。

私はこの質問に恐くは答へられない。私はこれだけ知つて居る、――これは少しも新しくはない、――

私は或場所と不思議な時の事を覺えて居る、そこでは日と月は今よりももつと大きく、もつと明るかつた。この世の事か、いつか前の世の事か、私には分らない。ただ私はその空は遙かにもつと青く、そして地に近かつた事、――赤道の裏の方へ走る汽船の帆柱の上に近いと思はれる程であつた事を知つて居る。海は生きてゐて、いつも話をした、――そして風が觸れると私は嬉しさに叫んだ。以前山の間に住んでゐた聖い日に、一二度私は同じ風の吹いて居る事をただ暫らく夢想した事がある、――しかしそれはただ記憶であつた。

それからその場所では雲は不思議であつた、名は全くつけられない色、――私をいつも憧れさせた色の雲であつた。私は又日は今より遙かにもつと長かつた事、――それから毎日私に取つて新しい驚喜と新しい娛樂があつた事を覺えて居る。そしてその場所と時は、私を幸福にする方法ばかり考へて居る人によつて穩かに支配されてゐた。時々私は幸福になる事を拒んだので、彼女は聖かつたがそれでも困つた事を覺えて居る、――そして私は努めて氣の毒がらうとした事を覺えて居る。日が終つて月の上る前に夜の大きな靜けさが

下つた時、彼女は私に話を聞かせた、それて私の頭から足まで嬉しさて一杯になつた。私はその半分程も綺麗な話を外に聞いた事はない。そしてその嬉しさが餘り大きくなつた時分に、彼女は不思議な小さい歌を歌つてくれたので、それがいつも眠をもたらした。たうとう別れる日が來た、そして彼女は泣いた、そして私に彼女が與へた護符(まもり)の事を云つて、それがあれば私は年を取らない、そして歸る力を得られるから、決して失つてはならないと云つた。しかし私は決して歸らなかつた。そして年は過ぎた、そして或日私はその護符(まもり)を失つて、をかしい程老年になつた事を知つた。

譯者註一　宇土郡、長濱村。
譯者註二　ギリシヤ人であつた著者の母の事、或は或傳記家の說によれば、著者が幼時大叔母と共に赴いてその人の家によく逗留した叔母エルツッド夫人の事。

五

長濱村は往來に近い綠の斷崖の下にあつて、松の樹で陰になつた岩の多い池の廻りに集

つた十二ばかりの草葺きの小屋から成立つて居る。斷崖の胸から眞直に飛び出す流れによつて供給される冷水で、水溜は溢れて居る、――丁度人が、詩は詩人の胸から飛び出すべき物だと想像するやうである。そこに休んで居る車や人の數から判斷すれば、確かによい休み場所であつた。樹の下に腰かけがあつた、そして渴をいやしたあとで、私は煙草を吸ひながら洗濯して居る女や、池で水を飮んだり顏を洗つたりして居る旅客を見て坐つてゐた、――その間に私の車屋は裸になつて冷水を桶に汲んでかぶつてゐた。それから幼兒を背負つた若い男がお茶をもつて來た、そして私はその幼兒と遊ばうとしたが、そのこどもは『あゝ、ばあ』と云つた。

これが日本の子供が始めて發する音である。しかしそれは全く東洋的である、そしてローマ字で Aba と書く事になる。そして習はない言語として興味がある。それは日本の子供の言葉で『さやうなら』に當るが、――全くこの娑婆世界に入つたばかりの子供が發音しさうにない言葉である。何人に或は何物にこの小さい人が『さやうなら』をして居るのであらう、――未だ鮮かに記憶して居る前世の友達に、――何人もどこだか知らない冥途の旅の仲間に云つて居るのであらうか。子供は私共のために決して決定してくれる事はないから、信心深い見地からこんな風に推論する事はかなり安全である。始めて話すその神

總の瞬間に於て何を考へてゐたか、その間が分るずつと前にそれは忘れられて居るだらう。思ひがけなく、妙な思ひ出が私に浮んだ、――恐らくその若い男と子供を見て、――恐らく斷崖の水の歌を聞いて、思ひ出したのであらう、その思ひ出はつぎの話である、――

昔、昔、どこか山の中に貧しい木こりとその妻が住んでゐた。甚だ年を取つてゐて、子供がなかつた。毎日夫は一人で木をきりに森へ行つた、その間に妻はうちで機を織つた。

或日老人は、何かの種類の木をさがしにいつもよりもつと深い森へ行つた、そこで彼は突然これまで見た事のない小さい泉のふちに出た。水は妙に綺麗で冷たかつた、そして日は暑かつた上、烈しく働いてゐたから老人は渇いてゐた。そこで笠を取つて跪いて長く飲んだ。甚だ不思議な風に氣分が淸々とした。その泉に映つた自分の顏を見て驚いた。それはたしかに自分の顏だが、うちで古い鏡で見慣れた顏と全く違つてゐた。それは青年の顏であつた。彼は自分の眼を信ずる事ができなかつた。彼はつい先程まですつかり禿げてゐた頭に兩手を上げた。それが今濃い黑髮で蔽はれてゐた。それから顏は少年の顏のやうに滑らかであつた、皺は一つもなかつた。同時に彼は新しい元氣が滿ちて居る事を發見した。彼は長い間皺だらけであつた手足が今充實した若い筋肉で恰好よくかたくなつて居るのを

見て驚いた。知らないで彼は若がへりの泉を飲んで、その通り變つたのであつた。

先づ、彼は嬉しさの餘り高く跳んで叫んで見た、それからこれまで走つた事がない程の速さでうちへ走つて歸つた。うちへ入ると妻は驚いた、——知らない人と思つたからであつた、それからそのわけを聞いても、妻はすぐには信じなかつた。しかし餘程かかつて彼は今彼女の前に立つて居る青年は實際彼女の夫である事を納得させる事ができた。それからその泉のあるところを敎へて、そこへ自分と一緒に行く事を求めた。

そこで彼女は云つた、『あなたはそんなに立派に、そんなに若くおなりだから、お婆さんなぞ嫌になるでせう、それでわたしもすぐその水を少し飲まねばなりません。しかし二人共同時に家を離れる事はできません。私が出かける間あなたは留守をしてゐて下さい』それから獨りきりで森へ驅け出した。

彼女は泉を見つけて、跪いて飲み始めた。その水はどんなに冷たくて旨しかつたらう。彼女は飲んで飲んで、息をついては又飲み出した。

夫は彼女を待ちくたびれてゐた、彼は彼女か綺麗な華奢な少女になつて歸つて來るのを見ようと待ち構へてゐた。しかし彼女は一向歸つて來ない。心配になつて、家を閉ぢて、彼女をさがしに出かけた。

泉へ着いても彼女は見えなかつた。丁度歸らうとすると、泉の近くの高草の中に小さい泣聲が聞えた。彼はそこをさがして、妻の着物と赤兒、――恐らく半歳ばかりの非常に小さい赤兒を發見した。

卽ち妻は不思議な水を餘りに深く飮過ぎたのであつた、彼女は少年の時を通り越して、物の云へない幼少時代になるまでも飮んだのであつた。

彼は子供を抱き上げた。それが悲しい不思議な風に彼を見た。彼はそれをうちへ連れ歸つた、――それに向つてつぶやきながら、――妙な淋しい思ひに耽りながら。

その時、私の浦島に關する空想のあとでは、この話の敎訓は以前よりも、もつと不滿足に見えた。人生の泉を深く飮み過ぎたのでは、私共は若くはなれないのである。

裸で涼しさうになつて、私の車夫は歸つて來た、そして、この暑さでは約束通り十里の道を走る事はできないが、殘りの道を走つてくれる別の人をさがして來たと云つた。彼が走つた分だけで五十五錢欲しいとの事であつた。

それは實際暑かつた――あとで聞いたところでは百度以上あつた、そして遙か離れたと

ころに、雨乞の太鼓の音が、暑熱その物の脈搏のやうにたえず鼓動してゐた。そして私は龍宮の乙姫の事を考へた。

『七十五錢と云ふ事であつた』私は云つた、『そして約束通りは未だ來てゐない。しかしやはり七十五錢お前にあげよう、――神様が恐ろしいから』

それから未だ疲れてゐない車夫のうしろから、私は太鼓の方角に向つて――大きな炎の中へ逃げ出した。

九州學生

一

直轄學校或は高等中學校の學生は少年とは云へない、彼等の年齢は最下級の平均十八から最上級の平均二十五に到る。[譯者註一] 恐らくこの課程年限は少し長過ぎる。最良の生徒でも二十三歳以前に帝國大學に達する事は殆んど望めない、そして大學に達するには英語獨語か或は英語佛語の充分なる實用的知識と漢學の完全なる知識を要するのである。かくして學生は本國の古文學に關する凡ての知識と未だその上に三ヶ國の語學を知らねばならない。そしてこれだけの課業の如何に困難であるかはこの漢文の學問だけでも六ヶ國の語を習得するに等しい勞力が要ると云ふ事實を知らないでは分らない。

熊本の學生が自分に與へた印象は出雲の生徒と始めて相知つて受けた印象と非常に違つてゐた。これは熊本學生が日本人の少年時代の甚だ愉快な時期をすでに經過して眞面目な

無口な成年に達して居るからばかりでない、又一方では所謂九州氣質を著しく代表して居るからである。九州は昔の如く今日も日本の最も保守的地方となつて居る、そしてその主要の都の熊本は保守的精神の中心となつて居る。しかしこの保守主義は合理的で又實際的である。九州は鐵道や進歩した農業法や或種類の工業に科學の應用法を採用する事には緩慢ではなかつた、しかし日本帝國の諸州のうちで西洋の風俗習慣をまねる事を最も好まないのである。古への士魂がなほ生きて居る、その魂が九州に於て數百年間日常生活に於て極端な簡易生活をなさしめたのである。衣服の奢侈その他種々の贅澤に對する禁令は嚴しく行はれてゐた、そしてその禁令はその後廢れたとは云へ、その勢力は今も人々の甚だ質素な着物や簡單率直な風俗に現れて居る。熊本人は外では殆んど忘れられて居る動作に關する傳說を守る事や、外國人には明らかに名狀する事はできないが敎育ある日本人には直ちにそれと知られる言語擧動に於ける一種の隱しない腹藏のないところが特色だと云はれて居る。そしてここでは又淸正の大きな城の影の下に(今は大勢の師團兵が入つて居る)國民的情操卽ち忠君愛國の念が東京と雖も及ばぬ程强いと云はれて居る。熊本は凡てこれ等の點を誇り、又その傳說を自慢して居る。實際熊本には外に誇るべき物はない。ただ廣い、散らばつた、面白みのない、不體裁の町である、古風な綺麗な町は一つもない、大き

な寺も、立派な庭園[語の註二]もない。明治十年の内亂に全燒したので熊本は今もなほその土地の煙の殆んど收まらないうちに脆弱な假小屋を急いで建てた荒野と云ふ印象を與へる。そこには行つて見るやうな著名なところはない（少くとも市中にはない）見物すべき物もない、娛樂も餘りない。この道理からこの學校は場所がよいと思はれて居る、ことに住む者には誘惑物も邪魔になる物もない。しかし又別の理由から遙か離れた東京の富有な人々は熊本に子弟を送らうとする。青年が所謂『九州魂』に滲み、所謂『九州かたぎ』を得るのは望ましい事となつて居る。九州の學生はこの『九州風』のため日本で一種特別の學生と云はれる。私はこれを明らかに說明する程充分この『かたぎ』について學び得なかつたが、これは必ず昔の九州武士の擧動に近い物であるに相違ない。東京や京都から九州に送られる學生はたしかに全く違つた境遇に順應せねばならない。熊本及び鹿兒島の青年は兵式體操その他特別の場合に制服を着用せねばならぬ時の外は、昔の武士の着物に多少類する（そしてそのために劍舞[語音註三]の詩で有名になつて居る）着物を今も着て居るのである、卽ち短い着物と膝の下に少ししか達しない袴と草履とである。着物の材料は安い粗末な物で色は地味である、嚴寒の時又は草鞋の紐が肉に喰込まぬ爲にはく外は足袋は殆んどはかない。擧動は亂暴ではないが柔和ではない、そして青年は一種、性格の峻嚴なる外貌を養成するやう

である。全く彼等は非常な境遇に際しても冷静なる外貌を保つ事ができる、しかしこの自制の下に烈しい自信力が潜んでゐて、稀には恐ろしい形になつて現れる事がある。彼等は又一種東洋風に粗野な人々と云つてもよい。可なり富有の家に生れながら、どれ程肉體上の困難にたへられるかを試みる程、强い興味を外にもたない人々を私は知つて居る。多數の人々は彼等の主義を捨てるよりはむしろ直ちに生命をなげうつのである。そして國家の危險と云ふやうな噂でも聞けば全四百の學生は直ちに變じて鐵の如き兵士の一隊となるであらう。しかし彼等の外貌は解する事すらむづかしい程にいつも極めて平靜である。

ゝ長い間自分はその微笑もしない平靜の下に如何なる感情、情操、理想が潜んで居るかを知りたいといつも思つてゐたが無駄であつた。實は政府の役人である日本人の敎師はどの生徒とも親密であるとは思はれなかつた、私が出雲て見たやうな親しい關係は痕跡もなかつた、敎育者と被敎育者の關係は敎室に集まり又別れる時のラッパの聲と共に始まり又終るやうに見えた。この點に於て私はその後私が幾分誤れる事を發見した、しかし實際の關係は大抵は自然的でなくて形式的であつた、そして私が『神々の國』を出て以來私がたえず記憶して居るあの古風な深切な同情とは全く違ふやうてある。

しかし、後になつて時々この表面の見せかけよりははるかに愛すべき精神の幾分――情

緒的個性の暗示――を見るやうになつた。偶然の會話で得た物も少しはあるが最も著しい物は作文からである。作文の題は思想感情の全く思ひもかけぬ花を咲かせた事が時々ある。誤れるはにかみ、否實際如何なる種類のはにかみも全くないのは甚だ喜ぶべき事實であつた、青年は感情や希望をそのまま書く事を恥としなかつた。彼等はその家庭について、兩親に對する敬愛について、幼年時代の幸福なる經驗について、友情について、休暇中の冒險について書く、しかもわざとらしくなく全く眞面目なので、私が美しいと思つたやうに書いてあるのが度々ある。そんなに驚いた事が度々あるので、私はこれまで受取つた著しい作文は初めから皆ノートを取つて置かなかつた事を深く後悔するやうになつた。每週一回私が受取つた作文の最上の物からぬき出して教場で讀み上げて直し、その他はうちで直すのをつねとした。一番最上なのは讀み上げて大勢の爲に批評する事はいつでもできるわけではなかつた、卽ち次ぎの例で分る通り、きまつて批評を加へる事ができぬ程神聖な事に關して居るからである。

私は英作文の題としてこんな問題を與へた『人が最も長く記憶する物は何か』一人の學生は自分等は外の經驗を記憶するよりも、最も幸福な時を長く記憶する、何故なれば、不愉快な事や苦しい事はできるだけ早く忘れようとするのが凡て普通人間の天性であるから

と答へた。私は更にもつと巧みな返事を澤山受取つた、中にはこの問題について全く鋭い心理學的研究をした事を證明した物もあつた。しかし私は最も痛ましい事件は最も長く記憶せられると考へた一學生の簡單な答を最も愛した。彼はまさしく次ぎの通りに書いた、一語も直すに及ばなかつたのである。

『人が最も長く覺えて居る事は何であらうか。私は人が苦しい境遇にあつて、聞いたり見たりする事を最も長く覺えて居ると考へる。

『私がやつと四つの時私のなつかしい、なつかしい母がなくなつた。冬の日であつた。風は木の間と家の屋根の廻りをひどく吹いてゐた。木の枝には葉がなかつた。鶉は遠くで――淋しい聲で鳴いてゐた。私のしたことを思ひ出す。母が寢床に寢てゐた時――死ぬ少し前――私は母に蜜柑を上げた。母は微笑んで、取つてそれを味はつた。母の微笑んだのはこれが最後であつた。……母の息が絶えてから今日に至るまで、十六年以上も經過して居る。しかし私に取つてはそれは一瞬間のやうである。今も又冬である。母のなくなつた時吹いた風は丁度その時のやうに吹いて居る、鶉は同じ鳴聲をして居る、凡ての物は皆同じである。しかし私の母は逝いて又再び歸り來る事はない』

つぎも又同じ問に答へて書いた物である。

『私の一生の最大不幸は父のなくなつた事であつた。私は七つであつた。私は父が終日病氣であつた事と私のおもちやがかたづけられて、私が極靜かにしようと努めた事を思ひ出せる。私はその朝父に遇はなかつた、それてその日は大層長く思はれた。最後に私は父の部屋へそつと行つた、そして父の頬の近くに唇をやつて「お父さん、お父さん」とささやいた、――そして父の頬が甚だ冷たかつた。父は物を云はなかつた、私の叔父が來て、部屋の外へ私をつれ出したが何にも云はなかつた。それから私は父は死にはせんかと恐れた、妹が死んだ時その頬が冷たかつたやうに父の頬が冷たかつたからである。夕方大勢の近所の人々やその他の人々が來て、私をあやしてくれたので一時は嬉しかつた。しかし夜のうちに人々は私の父を持つて行つてしまつたので、そののち私は決して父を見た事はない』

譯者註一　當時の高等中學校は本科二年豫科三年。中學卒業生は最下級もしくはその上に入學し、最優等

者に限つて豫科の最上級に入學を許された。

譯者註二　水前寺公園など感嘆すべき物であらうが、その頃は熊本市から少し離れてゐた。

譯者註三　頼山陽の前兵兒の歌『衣骭に至り、袖腕に至る……』の事。

二

以上の文章から單純な文體が日本の高等學校の英作文の特色であると人は想像するかも知れない。しかし事實は正反對である。小さい言葉よりも大きい言葉を取り、平易な短い文章よりも長い複雜な文章を選ぶのは一般の傾向である。これには或道理があるので、それを說明するにはチエムバレン博士の言語學上の論文にまたねばなるまい。しかしこの傾向それ自身は――現今使用されて居る愚な教科書でたえず奬勵されて居るが――つぎの事實から幾分か分るであらう、卽ち最も簡單な種類の英語の云ひ表はし方は日本人に最も不明瞭である、これは熟語であるからである。學生はこれを謎のやうに思ふ、卽ちその根柢の思想が彼等の思想と相異なるが故である、この思想を說明せんがためには先づ日本人の心理を幾分知る事が必要である、そこで簡單な熟語を捨てるのが卽ち本能的に抵抗のない

方面に向ふ事になる。

私は種々の工夫によつて反對の傾向を養成しようと試みた。時々私は全く單文で、又一綴りの字でありふれた話を一組の學生のために書いた。時々その題の性質上簡單に書かねばならぬやうな題を出して見たりなどした。勿論私はいつでも私の目的を達したとは云へない、しかしそれに關して選んだ一つの題『學校へ始めて行つた日』で澤山の作文が出た、それは感情と性格が天眞に流露して居るので全く別な風に私を感ぜしめた。彼等の天眞爛漫は中々に捨て難い美點である――殊にこれ等はもはや少年でない人々の回想であると思へば。つぎのは最もよい物の一つであると私に思はれた。

『私は八歲になるまで學校に行く事ができなかつた。私はよく父にやつて下さいと願うた、遊び友達は皆すでに學校に行つてゐたからである、しかし未だ充分強くないと云ふので許して貰へなかつた。そこでうちに居て弟と遊んで居た。

『初めの日に兄は私をつれて學校に行つた。先生に何か云つて、それから私を置いて行つた。先生は私を敎室につれて行つてベンチに腰かけるやうに命じてそれから又私を置いて行つた。私はそこに默つてゐた時悲しく感じた、今一緒に遊ぶ弟はゐない――只大勢の

知らない子供ばかり。鐘が二度鳴つた、すると先生は教場に入つて石盤を出すやうにと云つた。それから黒板にカナを一字書いてそれを寫させた。その日先生は日本の言葉を二つ書く事を敎へてそれから善い子供の話を聞かせた。家に歸つて母のもとへ走つて行つて側に坐つて先生に敎へて貰つた事を話した。その時の嬉しさはどんなてあつたらう。その時の嬉しさは話にもてきない――まして書く事はなほてきない。ただ私はその當時先生は父よりも又私の知つて居る誰よりももつと學者て、――世界中て一番畏るべき、しかも又一番やさしい人てあると思つた事しか云へない』

つぎのも先生を甚だよく見て居る。

『私の兄と姉とが始めての日學校へ私をつれて行つた。私はいつも內に居る時のやうに學校でも兄や姉の側に居られるものと思つた、しかし先生は兄や姉の敎場と餘程離れた敎場へ行くやうに命じた。私は兄や姉と居ようと頑張つた、先生はそれがいけないと云つた時私は泣いて騷いだ。さうすると皆て兄が敎場を出て私と一緒に私の敎場に來る事を許した。しかし暫くして私は私の敎場に遊び友達を見出した、それて私は兄がゐないても恐れ

なかつた」

これも又中々美はしく又眞にせまつて居る。

『一人の先生（校長だと思ふ）が私を呼んで大學者にならねばならぬと云つた。それから誰かを呼んで四五十人の生徒の居る教場へ案内させた。私はそんなに大勢の友達のある事を考へて恐ろしくもあり又嬉しくもあつた。彼等は私をはにかんで見た、私も彼等をはにかんで見た。初めのうちは彼等に話をする事が恐ろしかつた。小さい子供はそんなに無邪氣な者である。しかし間もなくどうかして一緒に遊び始めた、そして彼等も私が一緒に遊ぶやうになつたので嬉しいやうであつた」

以上三つの作文は、教師の方の苛酷な事を禁ずる現今の教育制度の下で始めての教育を受けた青年の書いた物である。しかしその以前の教師はそれほどやさしくなかつたと見える。ここに全く違つた經驗をしたらしい年長の學生の作文が三つある。

一、『明治以前には今日あるやうな公立學校は日本にはなかつた。しかし士族の子弟から成立した學生塾とも云ふべき物が各地方にあつた。士族でなければその子弟はこんな塾に入る事はできなかつた。この塾は藩公の支配の下にあつて、その藩公は學生を管理する塾長を任命した。士族の重もなる學問は漢文學の研究であつた。今の政府の多數の政治家は以前こんな士族學校の學生であつた。普通の町人や百姓は寺小屋と云ふ小學校に子女を送らねばならなかつた。そこには先生が一人ゐて何もかも敎へるのであつた。それも讀み書き、算盤と修身に過ぎなかつた。私共は普通の手紙や、極めてやさしい文を書く事を學んだ。私は八歲の時、士族でないから寺子屋へやられた。初めのうちは行きたくなかつた、そして每朝祖父に杖で打たれて漸く行つたのである。その寺小屋の掟は極めて嚴重であつた。子供がきかないとその罰を受けるやうに抑へつけられて竹で打たれた。一年たつて公立學校が開かれた。そして私は或公立學校に入つた』

二、『大きな門、堂々たる建物、腰かけの列んで居る甚だ大きい陰氣な部屋――こんな物を覺えて居る。先生は甚だ嚴しいやうであつた、私はその顏が嫌であつた。私は敎室の腰かけに坐つて不平を抱いてゐた。先生は不親切に思はれた、子供のうちで私を知つて居

る者も話しかけた者もなかつた。一人の先生は黑板の側に立つて姓名を呼び始めた。彼は手に鞭をもつてゐた。彼は私の名を呼んだ。私は返事ができなかつた、そして泣き出した。そこてうちへ送られた。それが私の學校ての始めての日てあつた』

三、『七歲の時に村の學校に入らねばならぬ事になつた。父から二三本の筆と紙を少し貰つた――私はそれを貰つて非常に嬉しかつた、そして一所懸命に勉强する事を約束した。しかし學校の始めての日は如何に不愉快てあつたらう。學校に行つた時、仲間のうちて私を知つて居る者は一人もない、それて私は一人の友達もなかつた。私は敎室へ入つた。手に鞭をもつた先生は大きな聲て私を呼んだ。私は大層驚いてそして泣かずには居られぬ程嚇かされた。男の子供等は大きな聲て私をあざ笑つた、しかし先生はそれを叱つて一人を鞭てうつて、それから私に「自分の聲に恐れてはいけない、お前の名は何と云ふ」と云つた。私は鼻をつまらせながら名を云つた。私はその時學校と云ふところはいやなところて泣く事も笑ふ事もてきないところだと思つた。私は直ぐうちへ歸りたいばかりてあつた、歸る事は私の力てできないとあきらめてゐたが授業の濟むまでぢつとして居る事は中々つらかつた。やうやくうちへ歸つて父に學校て感じた事を語つて、そして「學校へ行くのは

いやだ」と云つた』

次ぎの追懐は明治時代の物てある事は云ふまでもない。作文としては私共が西洋で云ふ『特色』が現れて居る。六歳の時の獨立心を云つて居るのが面白い、始めて學校へ出るのだから自分の白足袋をぬいて弟にはかして、めかしてやる小さい姉の話も面白い。

『私は六歳であつた。母は早く私を起した。姉は私にはかせるために姉自身の足袋をくれた、――私は嬉しかつた。父は學校まで私の伴をするやうに女中に命じた、しかし私は伴はいらないと斷つた、私は全く獨りで行かれると思ひたかつた。そこで獨りで行つた、そして學校はうちから遠くないのですぐ門の前に來た。そこに暫らくじつと立つて見た、知つた子供が一人も入つて行かないからである。男の子や女の子が女中やうちの人につれられて學校へ入つて行つた、そして內の方で遊戲をして居る者があるを見て羨ましくなつた。しかしその遊戲仲間の一人が私を見て笑つて走つて來た。そこで私は大層嬉しかつた。その子供と手を取つてあちこち步いた。最後に先生は一同を敎室に呼んで演說をしたが私には分らなかつた。それから始めてだと云ふので、その日はお休みになつた。私はその友

人とうちに歸つた。兩親は果物や菓子を準備して私を待つてゐた、そして友人と私は一緒に喰べた』

又一人が書く。

『私が始めて學校へ行つた時は六歳であつた。祖父が私のために本と石盤を持つて行つた事と先生や友達が私に實際非常に親切で丁寧であつた事だけを覺えて居る、それて私は學校はこの世界で極樂であると思つた、そしてうちへは歸りたくはなかつた』

私はこの短い心からの後悔も又書いて置くだけの價値があると思ふ。

『始めて學校へ行つた時は八歳であつた。私はいたづら小僧てあつた。學校からの歸途友達の一人（私よりも若い）と喧嘩した事を覺えて居る。その子供は私に極めて小さい石をなげた、そして私にあたつた。私は路に落ちて居る木の枝を取つて力一杯彼の顏を打つた。それから路の眞中に泣いて居るのを打ち捨てて逃げ出した。心のうちて惡い事をした

と思つた。うちについてからまだ泣いて居るのが聞えるやうに思はれた。この小さい遊び仲間は今ではこの世の人でない。誰か私の心のうちの分る人はあらうか』

これ等の青年が全く自然の感情で幼年時代の場面を想ひ起す事のできる力は私には根本的に東洋的だと思はれる。西洋では人生の秋が近づかない以前に幼時をはつきり想ひ出す事は餘りない。しかし日本では幼年時代はたしかに何れの國に於けるよりも幸福である、その理由で成年になつてから思ひ慕はれる事も早いのであらう。休暇中の自分の經驗を學生が記した物から、つぎに抜いた物を見るとその幼時追懷の念が哀れに現れて居る。

『春期休業の間に、兩親に會ひに歸省した。學校へ歸るべき間際の、丁度休暇の終りの少し前に、私は鄉里の中學生がやはり熊本へ遠足に行く事を聞いたので一緒に行く事にきめた。

『彼等は小銃をもつて隊をなして行進した。私は小銃をもたないから隊の殿りについた。軍歌を合唱してそれに合せながら終日行進した。

『夕方添田に到着した。添田學校の職員生徒、及び村の重なる人々は私共を歡迎した。

それから幾隊かに分れてそれぞれ別の宿屋に陣取つた。私は最後の一隊と共に宿屋へ入つて泊つた。

『しかし私は長い間眠る事ができなかつた。五年以前同じ「行軍」にこの中學校の生徒として正しくこの宿屋に泊つた。私は疲勞した事や愉快であつた事を思ひ出した、そして私は當時の少年時代の感情を追懷して今の私の感情と比べて見た。私は私の仲間のやうに再び若くなりたいと云ふ愚かな願を起さずには居られなかつた。彼等は皆遠足で疲れて熟睡してゐた。私は起きて彼等の顏を眺めた。彼等の若い寢顏は如何に美しく見えたらう』

三

以上の拔書きは或特別の感情を說明せんがために或特種の物を選び出したので、それ以上學生の一般作文の性質を示す事にはならない。もつと眞面目な種類の題から觀念情操の例を擧ぐれば、種々變つた思想や、餘程斬新な書き方も分るであらうが、それはなかなか長くなる。しかし私の教室用手帳からぬき出した少しの拔書きは珍らしくはなくとも、多少暗示するところがあらう。

一八九三年（明治二十六年）の夏の試驗に私は卒業の組に作文の題として『文學に於て不滅な物は何ぞ』と云ふ題を與へた。こんな題について議した事はないのと、又西洋思想に關する學生の知識と云ふ點から見てたしかに新しい題であるから、斬新奇抜な答案が出る事を豫期してゐた。果して殆んど凡ての答案は面白かつた。私は例として二十の答を選ぶ。長い議論の前に直ぐつぎのやうな言葉が出て居るのが大多數であつたが、中には論文のうちに含まれたのも少しはあつた。

一『眞理と不滅は同一である、この二つは漢語で云へば圓滿をつくる』
二『人生行爲にありて宇宙の法則にしたがふ物は皆』
三『愛國者の傳、及び世界に純粹な格言を與へた人の敎訓』
四『孝行、及びこれを敎ゆる人々の敎訓。秦の時孔子の書を燒いたがその效はなかつた、今や文明世界の凡ての國語に譯せられて居る』
五『倫理學と科學的眞理』
六『善惡共に不滅であると支那の聖人は云つた。私共は善なる物をのみ讀むべきてある』
七『祖先の偉大なる思想觀念』

八『十億世紀の間眞理は眞理である』
九『凡ての倫理學說が同意する正邪の觀念』
一〇『宇宙現象を正しく說明する書物』
一一『良心だけは變らない。故に良心に基づいた倫理學の書物は不滅である』
一二『高尙な行爲の道理、これは時の爲めに變らない』
一三『最大多數の人々卽ち人類に最大の幸福を與ふる最もよい道德上の方法について書いた書物』
一四『五經』
一五『支那及び佛敎徒の聖い書物』
一六『人間行爲の正しい淸い方法を敎ゆる物は皆』
一七『七たび生れて天皇の爲に敵を亡ぼさうと誓つた楠正成の話』
一八『道德的情操、それがなければ世界はただ一大穢土、書籍は反古に過ぎない』
一九『老子道德經』
二〇　一九と同じ、ただつぎの註がある、『不滅の物を讀む人、その人の魂は宇宙の間を永久に徘徊する』

四

或特別に東洋的な情操が折々議論の間に現れて來た。その議論は私が教場で口演する話に基づいたのである、そしてその話について話して或は書いて批評をさせるのである。こんな議論の結果は後に發表してある。その議論のあつた頃には上級の學生には澤山の話を既にして置いたのであつた。私は多くのギリシャの神話を物語つた、そのうちでエディパスとスフィンクス[譯者註一]の話がその內に潛んで居る教訓のあるので特に面白かつたやうである。それからオルフユース[譯者註二]は外の音樂に關する傳說と同じく彼等に何の興味もなかつたらしい。私は最も有名な近世の話を色々話した。『ラッパシニの娘』[譯者註三]と云ふ不思議な話は大層彼等の氣に入つた、そしてハウソーンの靈は彼等のこの話の解釋をきいて少なからざる喜びを得た事であらう。『モノスとダイモノス』も氣に入つた、ポーの優れた短篇『沈默』[譯者註四]は珍らしい理由で感心されたので私は驚いた。それに反して『フランケンスタイン』[譯者註五]は餘り感心されなかつた。誰も眞面目に考へなかつた。西洋人にはこの話はいつでも一種の恐怖を抱かせるのである、それは生命の源、神の禁止の恐ろしい性質、及び自然の祕密から幕を

取り去らうとしたり、又は嫉妬深い造物者の作物をたとひ知らずになりとも嘲りでもすれば、必ず恐るべき天罰のある事、などに關するヘブリユの思想の影響を受けて生長發達し來つた感情に大打撃を與ふるからである。しかしこんな怖ろしい信仰に暗まされてゐない東洋人に取つては――神と人との隔てを感じないので――又人生を因果應報の一の定則で支配される多樣な集合であると考へて居るので――この話の怖ろしさは更に分らない。作文で批評した物を見ると大概は喜劇的な或は半ば喜劇的なたとへ話と考へられて居る事が分つた。仕舞に或朝私は『西洋の甚だ强い道德的の話』をと云ふ要求の出たので大分當惑した。

私は不意にアーサー王の或傳說を話してその效果をみようと決心した。（これは私は危いところへ無理に入らうとして居る事を知つてゐたが）これは誰か必ず元氣よく攻擊を加へるだらうと思つた。教訓はむしろ十二分に『甚だ强い』のである、それでその理由で私はその結果を聞く事に好奇心をもつたのである。

そこで私はサー・トマス・マローリーの『アーサーの死』の第十六章にあるサー・ボルスの話を彼等に物語つた、『サー・ボルスが自分の弟のサー・ライオネルが捕へられて刺て打たれて居るのに遇うた事、又辱しめられようとした婦人に遇うた事、及びサー・ボル

スが弟を捨てて少女を救つた事、ライオネルが死んだ事をきいた事』などを物語つた。しかし私は美はしい昔の物語に現れた武士の理想を彼等に說明しようとはしなかつた、これは私が物語の事實だけによつて彼等が東洋風に批評を加へる事を願うたからである。

その批評を彼等は次のやうに與へた。

巖井(譯者註六)は叫んだ『もし基督教は凡ての人間は同胞であると公言して居るのが事實であればマロリーの武士の行爲は基督教の主義にも相反してゐます。世界に社會がなければこんな行爲は正しいかも知れません。しかし家族からできた社會の存する以上、家族の愛情はその社會の勢力でなければなりません、そしてその武士の行爲は家族の愛情に反してゐます。隨つて社會にも反してゐます。彼の守つて居る主義は全社會に反して居るばかりでなく又凡ての宗教にも反してゐます、又凡ての國々の道德にも反してゐます』

織戶(譯者註七)は云つた『この話はたしかに不道德です。そこに書いてある事は愛と義の私共の精神に反してゐます、そして私共には自然にも反して居るやうに思はれます。義とはただ一片の義理ではなく、心から出た物でなければなりません、でなければ義ではありません。それは生れながらの感情でなければなりません。そしてそれはどの日本人の心にもありま

す』

安東[譯者註八]は云つた『それはいやな話です。博愛と云つても實は兄弟の愛情を犧げた物に過ぎません。ただ知りもしない婦人を救ふために自分の兄弟の死ぬのを顧みなかつた人は惡人です。多分この人は私情にかられたのです』

私は云つた『いや、この人の行爲には利己主義などは少しもない、英雄的行爲と解釋されねばならないと云つた事を君は忘れて居る』

安河内[譯者註九]は云つた『この話の解釋は宗敎的でなければならないと思ふ。變に思はれるが、しかしそれは私共が西洋の思想を充分知らないからでせう。勿論知らない婦人を救ふために自分の弟を捨てる事は私共の理解して居る正義と違つてゐます。しかしもしその武士が淸い心の人であつたら何かの約束か義務のためにさうしなければならないと思つたに相違ありません、それにしても、さうするのは餘程苦しい又恥づべき事のやうに思はれたに相違ありません、それて良心の命ずるところに反した事をして居ると感じないでは居られなかつたてせう』

私は答へた『それはまちがつてゐない。しかし又かう云ふ事も知るべきである、即ちサーボルスが服從した情操は西洋社會の勇敢なる又高尚なる人々の行を今日も支配して居る

情操である、又宗教的と云ふ言葉の普通の意味では宗教的と云へない人々の行爲でもそれに支配されて居るのである』

巖井は云つた『それでも、私共はそれを甚だ惡い情操と思ひます、そして私共は外の種類の社會に關する外の話を聞きたいと思ひます』

そこでアルケスティス[譯者註一〇]の不朽の話をしようと思ひついた。その神劇に於てヘラクリーズ[譯者註一一]の性格は彼等に取つて特別の興味があらうとその時思つた。しかし批評を聞いたら私の誤つて居る事が分つた。一人もヘラクリーズの事に云ひ及んだ者はなかつた。實際私共の勇氣、意力、死を顧みぬ事の理想は直ちに日本の少年を感ぜしめない事を記憶すべき筈であつた。卽ち日本人はこんな性質を例外視してはゐないからである。彼は勇壯を當然の事男子に附隨して離るべからざる物と思つて居る。女子は恐れても恥ではないが、男子は斷じて恐れてはならないと云ふ。それから腕力の現れとしてもヘラクリーズは東洋人を餘り感心させない、彼等の神話には力に人性を與へた物が充滿して居る、それから又日本人は力よりも熟練、早業、敏捷を遙かに貴ぶのである。日本少年には本常に巨人辨慶になりたいと心から思ふ者はない、しかし辨慶の勝利者、卽ち細い柔かな義經は凡ての日本少年の心になつかしい完全な武士の理想となつて居るのである。

龜川[譯者註一二]が云つた、
『アルケスティスの話、或は少くともアドミータスの話は臆病と不義と不德の話です。アドミータスの行爲は言語道斷です。妻の方は全く高尙で德が高い、そんな恥知らずの男にはよすぎた妻です。私はアドミータスの父はもし子供が不肖てなかつたら子供のために死ぬ事を喜んだらうと信じます。私はアドミータスの臆病なのていやな思をしてゐなかつたら、子供のために喜んで死んだてあらうと思ひます。それから又アドミータスの臣下の不忠な事はどうてせう。王の危險を聞くや否や、彼等は宮殿へかけつけて恭々しく王の代りに死ぬ事の許しを願ふべき筈てした。王がどんなに臆病で殘酷でも、さうするのが彼等の義務てした。彼等は臣下てす。君の御恩で生きてゐたのてす。しかもどんなに不忠てしたらう。こんな恥知らずの人々の居る國はすぐに亡びてしまふに違ひありません。勿論話にある通り「生きるは樂し」てあります。生を愛さない者はありませうか。死ぬ事を嫌はない者はありませうか。しかし勇敢な人は——義にあつい人ても——義務の要求する場合には自分の生命の事などは考へてもなりません』
水口[譯者註一三]は云つた、この人は少し後れて來たのて話の初めを聞かなかつたのてある、『しかし、アドミータスは多分孝行の志に導かれたのてせう。私がアドミータスて私の臣下のう

ちに私の爲に喜んで死ぬものがなかつた時には私の妻にかう云つたらうと思ひます、「妻よ、私は今父を獨りにして捨てる事ができない、外に子供がないから、そして孫は餘り小さくて役に立たないから。それで私を思ふ親切があれば私の代りに死んでくれ」

安河内は云つた『君は話を知らないのだ。アドミータスに孝行の心などはなかつた。彼は親が自分の代りに死んでくれる事を願つたのだ』

さきの辯護人は全く驚いて叫んだ『あゝ、それは、先生、よい話てはありません』

川淵[譯註一四]は云つた『アドミータスはどこからどこまで惡者てした。死ぬ事を恐れたから憎むべき臆病者てす、自分のために臣下の死ぬ事を願つたから暴君てす、自分の代りに老父の死ぬ事を欲したから不孝者てす、それから男子のくせに恐れてできもしない事を自分の妻（小さい子供のあるかよわい婦人）から求めたから不親切な夫てした。アドミータスよりも下等な者はあり得るてせうか』

巖井が云つた『しかしアルケスティス、この婦人はどこまでも善い人てした。丁度釋迦のやうに子供その外何物をも捨てました。しかも大層若い人てした。どんなに眞心のある勇敢な人てせう。彼女の美貌は春の花のやうに朽ちも致しませうが、美はしい行爲は百萬年の間も記憶されませう。彼女の魂は永久に宇宙に殘るてせう。今や彼女は形體はありま

せん、しかし私共の生きた最も親切な教師よりももつと親切に私共を教ふる物は形體を有しない人々、卽ち清い勇ましい賢い行をした人々の魂です』

裁判が嚴し過ぎる傾きのある隈本[譯者註一五]が云つた、『アドミータスの妻はただ素直であつたと云ふに過ぎません。この人も全く惡くない事はない。卽ち死ぬ前に自分の夫の愚な事をひどく叱責するのが彼女の最高義務でした。ところがそれをしませんでした――少くとも先生に聞いたところだけではそれをしませんでした』

財津[譯者註一六]は云つた『西洋人がその話を立派だと思ふのは私共には理解ができません。怒りたくなる事が澤山あります。そんな話を聞いて居ると私共の兩親の事を思はずに居られません。明治維新の後一時隨分困難な事があつた。恐らく兩親が飢にせまつた事は幾度もあつたでせう、それでも私共はいつも澤山喰べてゐました。時としては生活するだけの金も得られなかつたでせう、それでも私共は教育を受けました。私共を教育するに要した費用、私共を育てた面倒、私共に與へた慈愛、何も分らぬ幼年時代に兩親にかけた心配、それ等の事を考へると私共はどんなにつくしても足りないと思ひます。それでそのアドミータスの話は好みません』

休憩のラッパが鳴つた。私は煙草を吸ひに練兵場に出かけた。やがて銃劍をつけた少數の學生が自分の側に集つた――つぎの時間が兵式體操であつたからである。一人は云つた、『先生今度又作文の題を一つ出して下さい――餘りやさしくないのを』
私は云つた『「最も難解の物は何ぞ」と云ふ題は如何だ』
川淵は云つた『その答はむづかしい事はありません、「英語の前置詞の使用法」です』
『英語を勉强する日本の學生に取つてはさうだ。しかし私はそんな特種の困難を意味したのではない。諸君が凡ての人々に解し難いと思ふ物について考を書くと云ふ意味だ』私は云つた。
安河内は尋ねた『宇宙ですか。これは問題は大きすぎます』
緖方は云つた『私がやつと六歳の時でした、天氣のよい時海岸をさまようて、いつも世界の大きな事を不思議に思ひました。私共の家は海岸にありました。そののち宇宙の問題は煙のやうに終には消え去る物だと敎へられました』
宮川[譯者註一七]は云つた『私は最大の難問題は何故人間がこの世に生きて居るかそれを解する事であると考へます。小兒の生れ落つる時から何をしますか、喰べたり飲んだり喜んだり悲しんだりする、夜には眠り、朝には起きる。敎育を受け、生長し、結婚し、子供をもち、年

を取る、髮の毛は初め半白になりついて白くなる、次第次第に弱くなつて——それから死ぬ。

『一生のうち何をしますか。この世に於ける本當の仕事は食つて飮んで寢て起きる事です、だから公民としてどんな職業をもつて居るにしても、彼はこんな事を續けて行くためにのみ働いて居るのです。しかし本當に人間のこの世に來たのは何の目的あつてでせう。食ふためでせうか。飮むためでせうか。眠るためでせうか。毎日全く同じ事をしてそれてよく飽きない事です。不思議です。

『賞められて喜び、罰せられて悲む。金もちになれば幸福と思ひ、貧乏すれば甚だつまらないと思ふ。境遇によつて喜んだり悲しんだりするのは何故でせう。幸も不幸も一時の物に過ぎません。何故に一所懸命に勉强するのでせう。どんな大學者になつても死んだら何が殘りますか。骨ばかりです』

宮川は級中最も快活で最も機智に富んで居る、彼の陽氣な性格とこの言葉との對照が殆んど驚くべき事と思はれた。しかしかやうに不意に來る憂愁は（殊に明治以後）全く若い東洋人の頭に時々現れる。夏の雲の影のやうに早く消え去るのである、西洋の青年に於け

るよりは意味は淺い、日本人は思想や感情で生きないが義務で生きて居る。それでもこの麗ゝ來て惱ます思想は歡迎し奬勵すべき物ではない。

私は云つた『諸君に取つてもつとずつとよい問題は今日のやうなこんな日に大空を見て起す感覺、即ち大空だと考へる。實に立派ではないか』

空は世界のはてまで青い、雲の片一つない。地平線にはもやがない、大概の日には見えないずつと遠い一圍の山々も悉く立派に輝いてすき通つて居るやうだ。

それから神代は蒼空を見上げながら恭々しく古への漢詩を發した。

『かくの如き高き思想ありや、かくの如き廣き心ありや』

『今日はどんな夏の日にもない程この上もなく綺麗だが、ただ木の葉が落ちかけて、蟬はゐない』私は云つた。

『先生は蟬がお好きですか』と森が尋ねた。

私は答へた『蟬を聞いて居ると大層愉快だ、西洋には蟬はゐない』

織戸は云つた『人生を蟬の一生にたとへて空蟬の世と申します。人間の歡樂や青年時代は蟬の歌ほどに短いのです。蟬の如く人間は暫く來て又行くのです』

安河内は云つた『今は蟬はゐません、多分先生は悲しいと思ひなさるでせう』

野口は云つた『私は悲しいとは思ひません。蟬は勉强の邪魔をします。その聲を憎みます。夏蟬の聲を聞くと、そして疲れて居る時などは疲勞は益〻增加して、眠つてしまひます。讀んだり書いたり、或は考へようとしてさへその聲を聞くともう何をする勇氣もなくなります。そんな時にあんな蟲みな死ねばよいと思ひます』

私は云うて見た『とんぼは好きだらう。とんぼはちらちら飛び廻つて音を立てない』

『日本人は皆とんぼが好きです』と神代は云つた『日本は御承知の通り秋津洲と云はれますが、とんぼの國と云ふ意味です』

私共はとんぼの種々の種類について語つた、彼等は私の見た事のない一種のとんぼ、死人に何か不思議な關係があると云はれる精靈とんぼの話をした。又餘程大きな種類のとんぼ、ヤンマの事を語つた、そして或昔の歌に若い武士が長い髮の毛をとんぼの形にいつも結んでゐたのでサムライの事をヤンマと云つた事のある話をした。

ラッパが鳴り出した、將校の聲はひびいた。

『集まれ——』しかし若い人々は嚮くためらうて尋ねた。

『ところで、先生、何になさるのですか、——最も難解の物はと云ふですか』

『いや』私は云つた『大空』

その日は終日漢語の美はしさが私につきまとうて離れずに、何かの歡喜のやうに私の心をみたした。

『かくの如き高き思想ありや、かくの如き廣き心ありや』

譯者註一　スフィンクスは女の頭と胸、犬の體、蛇の尾、鳥の翼、獅子の足、人間の聲をもつた怪物、ヂユノーの神がシーブスを亡ぼさうとして下したのであつた。そこでこのスフィンクスは謎をかけて解く事のできない者を丸呑みにしたので大恐慌が起つた。シーブスの王が賞をかけてこの謎を解く者をさがした。その謎は『朝は四足、日中は二足、夕方は三足で歩く物は何』と云ふのであつた。エディパスは『人間』と解いたので。怪物はそれを聞くと共に、自ら頭を岩に打ちあてて死んだと云はれる。エディパス自身についても別に長い話があつて、ギリシヤの悲劇の主人公となつて居る。

譯者註二　オルフユースはその音樂をもつて河の流をも止め、山をも動かし、猛獸をも馴らしたと云はれる音樂の大天才。その妻ユウリディシー早く死して地獄にあつたが、オルフユースはその音樂の力をもつてここに入り、再びその妻をこの世に連れ歸らうとした。その條件はユウリディシーは夫のあとから歩く事、オルフユースはその地獄の最後のはてに達するまで決して後を顧みない事であつた。オルフユースは今少しのところで思はず後を顧みたので、その妻を永久に失つた。

譯者註三　第十三卷五〇七頁參照。

譯者註四　第十三卷四九〇頁參照。

譯者註五　詩人シエレイの夫人の作。フランケンスタインと云ふ學生が解剖學教室その他から骨、皮膚、筋肉等の材料を集めて來て、人體を完全に造り出すと共に、それが生命を得て、種々の罪惡を犯してフランケンスタインを惱ます話。シエレイ、バイロン、シエレイ夫人の三人が不思議な恐ろしい話を競爭して書いて見た時、シエレイ夫人のこの作が最上であつたと云はれて居る。

譯者註六　巖井敬太郞氏（長崎縣人）明治三十三年の政治科出身の法學士、大正六年頃、神奈川縣内務部長の時休職となる。

譯者註七　折戸（?）不明。

譯者註八　安東俊明氏（熊本縣人）明治三十一年の英法科出の法學士、札幌の辯護士、北海道著名の憲政會員。

譯者註九　安河内麻吉（福岡縣人）明治三十年英法科出身の法學士。警保局長、福岡縣知事、神奈川縣知事等をつとめた。

譯者註一〇　アルケスティスはアドミータスの妻、ギリシヤの悲劇作者ユウリピデイスの神劇の女主人公。アポロの神がもし何人か、彼のために生命を捨てて無限の愛を示す者があれば、彼に不死の力を與ふる事を約した。そこで死の神に襲はれた時、アルケスティス喜んで夫のために犧牲となつた。アドミータスはその父が僅かに殘つた數年を捨てて自分を救はなかつた事を怒つて父を罵つたので、父子の爭となつた。その時アドミータスのもとにゐたヘラクリーズは地獄に赴いて死の神を征服してアルケスティスを連れ歸つた。ユウリピデイスはアルケスティスの犧牲的精神とアドミータス及び其父の利己心との對照を示した。

譯者註一一　ヘラクリーズ或はハーキユリーズはギリシヤ、ローマの神話では非常に强い勇士で、勇氣剛毅等の理想を現實にした神として崇拜せらる。

譯者註一二　龜川德太郎氏、夭折。

譯者註一三　水口、不明。或は溝口三始氏か（明治三十　年土木工學出の工學士）

譯者註一四　川淵楠茂氏（高知縣人）明治二十七年帝大法科に進みたるのち夭折。

譯者註一五　隈本繁吉氏（筑後の人）明治三十年史學科出の文學士、現高松高等商業學校長。

譯者註一六　財津（?）不明。

譯者註一七　宮川和一郎氏（後杉井と改姓）明治三十一年土木工學出の工學士。

譯者註一八　森賢吾氏（?）明治三十三年出の法學士、大藏省官吏。

譯者註一九　野口彌三氏、明治三十年英法科出の法學士、現第一銀行の重役。

五

敎師と學生との關係は少しも形式だけてない例——古への武士の學校て昔互に相愛した尊き名殘——が一つある。漢文の老先生[譯者註一]は誰にも愛されて居る、そして青年に對する感化

は甚だ大きい。一言で如何なる怒りの破裂をも靜め、一笑で如何なる尊き志をも勵まし得る。卽ちこの人は古への勇壯、誠實、高尙なる物の理想、卽ち古日本の魂を青年に對して代表して居るからである。

秋月と云ふこの人の名は、その國では有名である。この人の肖像を入れたこの人に關する小冊子(譯者註二)が出版された。昔會津の大藩に屬する身分の高い武士であつた。年若くして信任、權勢の地位に上つた。軍隊の司令官、王侯の間の談判者、政治家、諸州の支配者、――封建時代の武士のやれる事は皆やつた。軍務政務の暇ある每にいつも人の敎師であつたやうである。今はこんな敎師もない。こんな學生もない。しかも今この人を見て、この人の下にゐた騷亂好きな劍士に如何に(愛されると共に)恐れられたかを信ずる事ができない。若い時峻嚴で名高い武士が打つて變つて溫和になつた程人の心を引きつける物はない。

封建制度が生存のために最後の戰をした時、藩公の命に應じて恐るべき戰に加はつた、この戰には會津の婦人小兒も加はつた。しかし勇氣と劍だけでは新しい戰法に勝つ事はできなかつた、會津の軍勢は破れた、そして會津軍の首領の一人なる彼は長く國事犯の囚人であつた。

しかしこの勝つた人々は彼を尊んだ、この人が敵として戰つた政府は新青年を敎ゆる役

に、禮を厚くしてこの人を迎へた。新青年は若い人々から西洋の科學と西洋の語學を學んだ。しかし彼はやはり支那の聖人の不朽の智慧を敎へた――そして忠義、名譽、その他人間をつくる物を敎へた。

この人の子供のうちで死んだ者も幾人かある。しかしこの人は淋しく感ずる事はできなかつた、卽ち彼の敎へた者は子供と同じになつて又彼を尊敬したからである。そして彼は老いて、甚だ老いて神樣のやうに見えて來た。

美術で見る神樣は佛樣と少しも似てゐない。この佛樣より古い神樣はうつむいた目つきや、虛心に默想に耽つて居るところがない。神は自然を愛する、自然の最も美はしい奥にも入る、樹木の精にもなる、河や水に音をさせ、風にも乘つて徘徊する。昔は人間と同じくこの地上に住んだ、そしてこの國の人々はその子孫である。神としても餘程人間らしい、そして種々の性癖をもつて居る。神は人間の情緖であり又人間の感覺である。しかし傳說や、傳說から生れた美術に現れたところではこれ等の神は大概愉快にできて居る。今日の不信仰な時代に不謹愼につくられた安つぽい美術について云ふのではない、神に關する古い貴い文を說明する古い美術について云ふのである。勿論神の表はし方は種々違つて居る。しかし神の普通の傳說的の形はと問ふ人があれば私は『長い白いひげをはやした白いきも

のと白い帶をした非常に溫和な容貌の、にこにこした老人』と答へる。
老教授の帶だけは黒かつたが、先日私を訪問された時丁度神道のこんな幻像に見えた。學校て自分に遇つて云つた『あなたのところに御祝事があつたさうです、私の參らなかつたのは老年だからでも、お宅が遠いからでもありません、ただ長い間病氣してゐましたからです。しかし何れお伺ひ致します』
そこで或天氣のよい午後、祝ひの品々をもつて參られた、――物それ自身は簡單だが王侯にも恥かしくない昔風の極めて禮儀正しい贈り物であつた、卽ち大枝小枝に雪のやうな花の咲きほこれる小さい梅の木、酒の入つた不思議な綺麗な竹の器、綺麗な詩を書いてある二つの卷物であつた、文句は非凡の書家兼詩人の作品としてそれだけで貴い物である、さらにこの人自身の手になつたので私には別段に貴いのである。私に云はれた事は完全には分らない。私の務めについて優しい奬勵の言葉、何か賢い強い助言、及びこの人の青年時代の不思議な話、を私は覺えて居る。しかし何れも愉快な夢のやうであつた、この人が只そこに居る事だけが一の愛撫であつて、梅花の芳香は高天原からの微風のやうであつた。そして神の來往する時のやうに、そのやうにこの人は微笑して歸つた――あとに殘つた物は皆清められた。小さい梅花は落ちた、再び花咲くまでには今一冬待たねばならない。し

かしこの空しい客座敷に何か非常に快い物が殘つて居るやうである。恐らくはその神々しい老人の記憶だけであらうか、或はその日この人の足について見えないやうに入つて來て彼が私を愛したと云ふので暫らく私の家に止まつて居る古への靈、過去のある女神とも云ふ物のためであらうか。

譯者註一　この漢文の先生の名は秋月胤永、悌次郎は稱、韋軒は號、現六高の漢文の教授秋月胤繼氏の養父。

譯者註二　この人の古稀の祝賀會を學校で擧行し職員生徒一同の祝文詩歌を呈した、これを印刷した一小冊子「鐘西餘響」の事である。この人の閲歷と愛誦する詩の作者なるが故等で學生に敬愛された。會津の藩主に從つて副將として幕府のために戰つたが、亂平いたのち終身禁錮に處せられ三年程經て特旨を以て赦された、官吏になる事は辭したが大學と第一高等中學校の教師にはなつた、明治二十二年に止めて退隱したが、二十三年九月平山校長に懇請されて熊本に赴任した。

譯者註三　實際は梅の盆栽であつた。

譯者註四　著者の長男の誕生の節。

博多にて

一

腕車の旅行では見る事と冥想へる事しか出來ぬ。動搖で讀書も苦しいし、車の囂々と風の常たりで會話も出來ぬ——縱令道幅は同伴者と轂を並ぶる程廣くとも。一通り日本風景の特長をも知つた上は、こんな旅行中に強く印象づけられる程の珍らしい物に出遇ふ事は偶にしかない。大抵の場合道は稻田、菜畝、小さい草屋の部落の何處迄往つても同じ風情なる中、さては無限に續く綠或は青の小山の間を迂廻るのである。時には愕然とさせる樣に色彩の一面に擴がれるに出會ふ事もあるにはある。例へば菜種の花盛りで眞黃色な畠地、又は紫雲英花で紫の瀰れる平野を横切る時の如きである。併しこれは何れも短時日の間に過ぎ去る花やかさである。概して云へば、廣々と綠色なす單調は何の感覺にも訴へぬので、人は夢想に沈み或は風に面を吹かれながら坐睡をしては、時に一段激しい動搖に呼び覺ま

さるゝが常てある。

自分は今博多までの秋の旅行て、正に其通り、替り番に眺めたり冥想へたり坐睡つたりして居る。自分は蜻蛉のちらつくのや、網目の様に田の畔路が目の屆く限り四方に擴がつて居るのや、見馴れた山巓の輪廓が徐々として地平線上に移り行くのや、濃い碧空に漂ふ白雲の、刻々に變はる姿やを眺めて居る。――幾度自分は同じ九州の風景を眺めねばならぬのであらう、何故ここには目覺ましい何物もないのであらうと、且つ問ひ且つ嘆きつつ。突然、しかもそうつと、かう云ふ考が胸中に忍び入つた。最も目覺ましい景觀は、我を取り卷く此世界の平凡な綠色の中にある――此不斷の生命の出現の中にある。

何處にても常に、目に見えぬ根元から綠なる物（植物）は生長しつつある――軟らかい土からも堅い岩からも――人間よりも古い、此默せる、聲なき種族は、多種多樣の形態て何處にても生長するのである。彼等の形而下の歷史は我々も其多くを知つて居る。我々は彼等に命名し彼等を分類した。彼等の葉の形狀、果實の品性、花の色の然あるべき理由をも知つて居る。我々は地上の物に形を賦與する恒久の法則の筋道を少からず學んだからてある。併し彼等が何故に存在するかの一事は知らぬのてある。此普遍的な綠色の中に表現を求める幽玄な意味は何てあらう。又は無生物と見ゆる物自身も生命てあらうか――ただ

一層靜寂で、一層かくれたる生命なのであらうか。

併しながら、それよりも、より不思議な、より敏捷な生命（動物）は地球の表面に動いて居る。空中にも水中にも住んで居る。此生命は地より離れるといふ、不思議な力を有して居る。が終極は地に呼び還され、嘗て己が食物となした物の食物となる運命にある。此生命は感ずる、知る、這ふ、泳ぐ、走る、飛ぶ、考へる。其形態は無限である。彼の綠色なる、より遲緩な生命は、ただ存在を求むるに過ぎぬが、此生命は永久に不存在（死）と惡戰苦鬪する。我々は其運動の方式、其生長の法則を知り、其構造の最奥の迷路までも闡明した。其感覺を司どる局處迄も測知し命名した。ただ其存在の意義に至つては誰れも知らぬ。如何なる根元から來たつたのであらう。もつと簡單に云へば此物は抑も何であらう。何故に此生命には苦痛があるか、何故に苦痛に依つて展開せられるのか。

而して此苦痛の生命こそは我々の生命である。此生命は見たり知つたりする。がそれは相對的の事で、絕對的には、之が食物となる、遲緩な、冷たい綠色の生命と同じく盲目で、手探りて動き廻はるに過ぎぬ。併し此生命も、亦それよりも高い、或る生命の食物となつて居るのではあるまいか。無限に、より敏活な、より複雜な、目に見えぬ生命を養うて居るのではあるまいか。幽玄の寰內には更に幽玄があり、生命の中に更に無限に生命があり、

一の宇宙は他の宇宙と相截交錯して居るのではあるまいか。

少くとも我々の時代では、人間の知識の及ぶ限界は固定して奪ふ可からずである。此限界の遙か彼方に出て、初めて右の樣な疑問の解決が出來る。併し此知識の限界とは何であらう。それは人間の賦性其者に外ならぬ。其賦性は後から來る子孫に於ても、同樣に限られてあるだらうか。彼等は、より高い感覺、より大なる能力、より機敏な知覺を發展さする事は出來ぬだらうか。之に就て科學は何と敎ふるであらうか。

クリフォードの深淵な詞『我々は造られたのではない、自ら造つたのである』の中に、多分右への答は暗示せらるる。此詞は實にあらゆる科學の敎への中で、尤も意義深いものである。人間は何故自分を造つたか。それは苦痛と死とを免るゝ爲めである。苦痛の壓迫の下にのみ、我々の現身はかく形造られた。苦痛の存在する限り、自己改造は續くであらう。遠い過去に於ては生の必需品は物質であつた。今日に於ては、物質と同樣に精神的の物が必需品である。將來に於ては宇宙の謎を解かんとする如きが、凡ての必需品中の、尤も殘虐て、尤も强大て、尤も恐ろしいものであらうと思はれる。

世界最大の思索家は――其人は何故に此謎は解かれ能はぬかを我々に告げたのであるが――又此謎を解かうとする願望は長く繼續し、人間の生長と共に生長するに相違ない事を

告げて居る。註

註　スペンサー『第一原理』

此必需品を認むる事は、それだけて、慥に其中に冀望の芽を含有する。知らうとする欲望は、將來の苦痛の、恐らく最高な一形式として、今日の不能事を成就する能力の――今日見えぬものを見得る機能の、自然な進展を人間に爲さしめぬてあらうか。今日の我々は、爾ありたしといふ願望に依つて現在の狀態に達したのである。我々の事業の承繼者は、我が今日成りたしと願ふ所の者と成り得ぬてあらうか。

二

自分は今帶織業者の市博多に居る――此處は目ざましい色彩に充てる珍奇な狹い道を有する宏大な市である――そして祈願小路に足を停めた。といふ譯は、異常に大きい青銅の首――佛像の首――がさる門口から此方を向いて微笑して居るからである。門口といふのは淨土宗の或る寺のである。そして此首は美しい。

併しあるのは首計りだ。庭の鋪石の上なる首の支柱は、大きな、夢の様な顔の頤まで積まれた、數千の銅鏡で隱れて居る。そして門内の揭示板が此問題を說明して居る。此鏡は巨大な佛の坐像――鎭座せる大蓮臺とも三丈五尺の――への婦人からの寄附なのである。そして全體を銅鏡で鑄ようとするのである。此首だけを鑄る爲めに、既に數百の鏡が費やされた。工を竣はる迄にはあと數萬を要するであらう。かやうな現況を見せられては、誰れか佛敎は亡びつゝあると云ひ得ようぞ。

けれども自分は此の狀況を見て嬉しく思ふ事は出來ぬ。自分の藝術感は、立派な佛像の期待て、多少滿足せられるけれども、此計畫が惹起す大破壞を、目の當り見せつけられては、傷けられる事が更に大きい。其理由は日本の銅鏡（今は西洋製の醜惡な安ガラス鏡に押し除けられて居る）は美術品と稱するに足る物であるからである。銅鏡の優雅な形を知らぬ者は、東洋流の、月を鏡に見立てた雅味を味ふ事は出來ぬ。銅鏡は表面のみが磨かれて、裏面は浮彫の模樣――或は花卉、或は鳥獸、或は昆蟲、風景、昔譚、福運の象徵、佛像等で飾られてある。極普通な鏡でもその通りである。併し種類は澤山ある。其中に驚くべきものは、所謂魔鏡である――魔鏡と云はるゝ理由は、表面に日光を反射させて、幕或は壁に映す時は、其圓い映像の中に、裏面の模樣が、明かるく顯はるゝからである。

註　『王立學會紀要』第二十七巻エアトン及びペリー兩教授の『日本魔鏡に就て』なる一項、及び『哲學雜誌』第二十二巻同じく兩教授が同じ題目に就て論じたる一項を見よ。

此等青銅の供物の堆積中に魔鏡があるかないかは自分には分からぬ。併し美しい細工が澤山あるのは確てある。かく驚くべき精巧な細工が、こんなに投げ出されて、間もなく全然消滅の運命にある光景を見ては、大なる感慨なきを得ぬ。多分十年ならずして、此國に於ける銀鏡銅鏡の製作は、永久に止むであらう。其時此等を購求せんとする者は、此銅鏡の運命を問いて遺憾どころの沙汰てなく感ずるのてはあるまいか。

此家庭からの犧牲が、日に照らされ、雨に濡れ、街の埃にまみれて居る光景を見て起こる感慨は、啻に之に留まらぬ。此中の多數には花嫁の微笑も映つたらう。赤兒のも母親のも映つたらう。殆ど凡ては何等かの樂しい家庭生活を映したに極まつて居る。併しこんな思ひ出が與へるよりももつと幽玄な價値が日本の鏡には附着して居る。古い俚諺に『鏡は婦人の魂』と云つてある。それは單に人が想像する樣に譬喩的の意味に於てばかりてはない。澤山の物語は鏡が持主の喜憂を感じ、或は光り、或は曇つて持主のあらゆる情緒に奇くしき同情を表はすことを述べて居る。それ故昔は――今でもといふ人もある――生死に關

すると信ぜられるやうな、怪しい儀式には鏡が用ひられた。そして持主が死ぬと一緒に埋められた。

　されば此等の腐蝕しつつある古銅を見ると靈魂――若しくは少くとも靈的の物の殘骸を偲ぶ奇しき空想が起こるのである。一度鏡に映つた顏や擧動が、全く少しも殘つて居らぬと信ずることは殆ど困難である。一度現はれたものは何處かに隱れて居ると想像せざるを得ぬ――そうつとそれ等の鏡に近寄つて、不意に其二三を反轉(かへ)し表面を上に出すならば、あなやと驚き退く刹那に過去を見ることが出來さうなものと想像せられてならぬのである。

　其上自分に取つては、日本の鏡を見ると喚起さるゝ一の記憶に依つて、此目前の光景は特に感動を強められるといふ事を述べねばならぬ――それは『松山鏡』[註]といふ日本物語の思ひ出てある。此物語は尤も素朴に尤も詞少に書かれてあるけれども、讀者の經歷と會得力と共に、其意味は深みを増すといふ、ゲーテの驚異すべき小話にも比せられ得ると思ふ。ジェームス夫人は此物語を心理的に出來るだけ或る一方面に敷衍した。其小著を讀んで感動せぬ者は人間の社會から驅逐さるべきてある。此物語の含む日本人的概念を推察なりとするには、此小著に附せられた優しい彩色版――狩野派の最後の大畫家の挿畫――の含む密接な意味を感得し得るを要する（日本人の家庭生活に通ぜぬ外國人は『童話集』（ジェ

ームス夫人の「松山鏡物語」も其中の一部）の爲めに物された挿畫の美しさを十分に認むる事が出來ぬ。併し京阪の染物師は非常に之を尊重し、高價な織物に絶えず染め出して居る）併し此物語には多くの異本がある。讀者はつぎの筋書から十九世紀式譯本を銘々勝手に作ることが出來よう。

註　此物語の日本語原本と其譯文とを知るには、チヤンバレン敎授の『日本羅馬字讀本』を見るがよい。又ジエームス夫人が小兒の爲めに物した美しい譯本は東京出版の『日本童話集』の中にある。

三

昔越後の國の松山と云ふ處に、名は忘れられたが、若い武士(サムラヒ)の夫婦が住んで居て、夫婦の間に一人の娘があつた。

或る時夫は江戸に出た――多分越後の國主の從者の列に加つてであらう。さて歸國の折、首都から土産物を持參した――娘へは菓子と人形と（少くとも挿畫家はさう告げる）そして妻へは銀がけの銅鏡を。ところが若き妻には、其鏡が不思議な物に見えた。それは鏡と

いふものが松山にもたらされたのは、それが初めてであつたから。妻はそれが何の役に立つのやら分からず、あどけなくも、中にある美しい顏は誰れのかと尋ねた。夫が笑ひながら『ハテ、それは其許の顏ぢや、阿房らしい』と答へたので、恥ぢてそれ以上は何も問はなかつたが、いかにも不思議なものと思つて、急いで仕舞つて了つた。そしてそれから幾年も祕して置いた――何故だかは原文にも云つてない。多分何處の國でも愛の贈り物は詰まらぬものでも、人に見せられぬ程貴重だといふ簡單な理由であつたらう。

併し病氣をして臨終の時、妻は此鏡を娘に與へて云つた。『わが亡き後は、毎朝毎夕、此鏡を覗いて見やれ、母は此中に居る程に。嘆きやるには及ばぬ』そして死んだ。

それから後、娘は毎朝毎夕鏡を覗き込んだ。そして鏡の中の顏は自分の顏だと知らず、自分がよく肖て居る亡母の顏だと思うて居た。そして其顏に向つて生ける者に云ふ如く話しかけた。日本の原本ではもつと優しく『母に會ふ心で』と云つてある。そして何よりも其鏡を大切にして居た。

處が遂に此事が父の目に留まつた。不思議に思つて娘に其理由を聞くと、娘は包まず話した。すると日本の原作者は云つて居る。『それをいとあはれに思うて、父の眼は淚に曇つた』

四

昔話の筋はこんなものである――併し此罪のない誤謬は、果たして父が思うた樣にあはれなものであらうか。それとも父の感じは、自分が今ここに堆積せる鏡の思ひ出と共運命とを嘆く心と同じく空虛(うつけ)なものであらうか。

自分は寧ろ娘の無邪氣な誤謬は、父の所感よりも恒久の眞理に一層近いものと思はざるを得ぬ。宇宙の因果律では、現在は過去の投影で、未來は現在の反映であらねばならぬからだ。我々は悉皆一てある。光を構成する振動は、幾億萬とも數へ切れぬ程あらうとも、光は常に一てある如くに。我々は一てある、けれども無數である。我々の各〻は靈魂の蓄積であるから。確に娘は母の靈魂を見て、それにいとしげに話しかけたのである。自分の若い眼と唇の美しい影を見ながらも。

かう考へると、此古寺の奇觀も新たな意義を生ずる――雄大な期待の象徵となる。我々の個々は眞に宇宙の何かを映す鏡である――其宇宙內に於ける我々自身の映像をも更に映す鏡である。そして我々の凡ては彼の大鑄金師『死』に依つて、或る大きい美しい非情の

一物に鎔かされる運命にあるのである。どれ程大きい作品が作られるかは、只だ我々の後から來る者のみが知り得る。現代の西洋人である我々には分からぬ、ただ空想するばかりである。併し古い東洋は信じて居る。其信仰の姿が即ちここにあるのである。凡ての形態を具へた物は、遂に滅びて或る者——其微笑は不變の安息であり、其知識は無限の洞觀である或る者に、吸收されねばならぬのである。

永遠の女性に就て

人間に譬ふべき者やあると天を探すに、
空ぢゆうに我等の寓話あり――
我等はナシッサスの眼もて自然を見る、
到る處自分の影に見惚れつつ。

ワトソン

一

日本に住む知慮ある外國人の凡てが、早晩悟らざるを得ぬ事は、日本人は吾人の美學や、吾人の情的性格の一般を學べば學ぶ程、之に依つて益〻不快の感を受くるが如く見ゆると いふ事てある。西洋の美術或は文學或は哲學を彼等に告げんと試みる歐米人は、彼等の共鳴を得る事は出來ぬてあらう。其說く處は謹聽せらるるてあらう。併し最大の雄辯も、擲

待とは全く異なる二三の意想外な評言を引き出すに過ぎぬてあらう。此種の失望を重ねると、遂には東洋の聽講者を判斷するに、西洋の聽講者が同樣に擧動へる時に於けると同じ筆法を以てする。卽ち我々が以て美術、哲學の最高表現となす所のものに對する冷淡さは、心的低能の證であると、西洋に於ける經驗から判斷するに至るのてある。そこて日本人を小兒の國民なりと呼ぶ多數の外人觀察家が現はれたり、又中には、此國に永年暮らした外國人の多數と共に、日本の宗教、文學、比類なき美術といふ證明あるにも拘らず、日本國民を以て本來物質的の國民なりと斷ずる者があつたりする。自分には、かういふ判斷は、何れもゴールドスミスが文學倶樂部に就て、ジョンソンに告げた、つぎの詞にも劣らず愚劣なものと思はれる。『我々の中には珍らしいものは何もない。我々はお互の心の中を蹈破した』之に對するジョンソンの有名な揶揄は、卽ち敎養ある日本人の答ふる所であらう。『兄よ、予は斷言する、兄は未だ我輩の心を蹈破しない』。凡てこんな大雜把な批評は、要するに日本人の思想感情は、或る場合には我々と正反對な、そして凡ての場合に妙に相違せる、祖先傳來の風俗、習慣、倫理、信仰から發展したものだといふ事實の認識が、甚だ不完全てあるに因由すると自分には思はれる。こんな心理を有する人民を材料にしては、近代的科學敎育も只だ徒に人種的相違を益々高調し展開せしむる計りてある。日本人を泰

西の卑屈な模倣に誘ふのは教育が生半可な場合に限るので、此人種の眞の識力最高の知能は、强く西洋の感化に抵抗する。こんな問題に就て、自分などよりも優れた判斷力を有つ人々から聞く處に依ると、此事は特に歐洲を旅行し、若しくは歐洲で教育を受けた優越の人士に於て認め得るといふ。實に新教育の結果は、何物よりも、ライン氏に依つて淺薄にも小兒の國民といふ銘を打たれた日本人種の健全なる保守思想の偉力を示すに役立つたのである。西洋思想の或る者に對して日本人がこんな態度を取る原因は判然分からぬながらも、我々は日本人を低能呼ばはりするよりも、寧ろ其西洋思想に對する我々の觀念を再考すべく促さるゝを覺ゆるのである。さて其原因は種々雜多であらうが、中には漠然ながら推察するに難からざるものもある。少くとも我々が安全に研究し得る尤も重要なるものがある。それは極東に數年を過ごした者には、否でも應でも認めざるを得ぬものであるからである。

二

『先生、英國の小說には、何故戀愛や結婚の事が澤山書いてあるのです——我々には實

に甚だ不思議でなりませぬ』

此間は自分が受持の文科の或る組——十九歳から二十三歳迄の青年——て、彼等がジェボンの論理や、ジェームスの心理學を了解することが出來ながら、或る模範的小說の或る一章を了解し得なんだ理由を說明せんとして居る時に、自分に向つて發せられたのであつた。其場合これは容易に答へらるゝ問てはなかつた。實際自分が既に數年日本に住んて居たのでなかつたら、之に答ふる事は出來なんだであらう。事實、自分は努めて簡潔と明瞭とを期したけれども、此說明に二時間以上を費やしたのである。

英國の社會を描寫せる小說で、日本の學生が眞に了解し得るものは先づ無い。其理由は單に英國の社會に就て彼等が正確なる概念を作ることが出來ぬといふにある。いや特に英國の社會ばかりでない、概して泰西の生活は彼等に不可思議なのである。孝道が道義的羈絆でない社會組織、子が自分の家庭を營む爲めに、親の許(もと)を去る社會組織、自分の所生よりも妻子を愛することを自然にして且つ當然と考ふる社會組織、結婚が親の意志を省みず若い男女相互の意向に依つてのみ決せらるゝ社會組織、さては姑(しうとめ)が嫁(よめ)の從順な奉仕を受くる權利なき社會組織は、空飛ぶ鳥、野を奔る獸に優さることなき生活狀態、或は精々一種の道義混沌の狀態としか、彼等には見えぬのである。我等の小說に反映して居る、こんな

生活狀態は彼等を憤激させる謎なのである。我等が戀愛觀や結婚騷ぎは此謎を供給するのである。日本人の若者は結婚は簡單な當然な義務で、其義務の當然な遂行には兩親が適當な時機にあらゆる必要な準備をして吳れるものと心得て居る。外國人が結婚するのに大騷ぎをすることは、彼には旣に不可解なのである。まして有名な作家がこんな事柄に就て小說や詩を書き、そして其小說や詩が大いに持て囃されるといふことは更に不可解で、『實に、甚だ不思議』なのである。

若き質問者は儀禮の爲めに『不思議』と云つた。彼の眞意は『猥ら』といふ詞の方がもつと正確に表されたのであらう。併し日本人の心に我等の模範的小說は猥らに、甚だ猥らに見ゆると云ふと、英國の讀者は其意を恐らく誤解するてあらう。日本人は莫迦に堅苦しくはない。我等の小說が彼等に猥らに見ゆるのは、題目が戀であるからではない。日本には戀に就ての文學が澤山ある。我等の小說が彼等に猥らに見ゆるのは聖經の『此故に人はその父母を離れ、その妻に合て』といふ句が彼等に、尤も不道德な文字と見ゆると同じ理由てである。別言すれば彼等の此評言は、社會學的說明を要するのである。我等の小說が何故に彼等の心には猥らであるかといふ事を十分に說明するには、泰西人の生活と全く異なれる日本人の家族の全構成、習慣及び倫理觀を述べねばならぬ。そしてこれには薄つぺ

らに述べるにしても尙ほ一卷の書を要する。自分は迚も完全な說明を企つるを得ぬ、ただ二三の暗示的な事實を述べ得るに過ぎぬ。

先づ概して云へば、我等の文學は小說以外にも日本人の道德感に背反せるもの多々あるが、それは戀情そのものを取扱ふが爲めではなく、淑女に聯關し從つて家族に聯關して戀情を取扱ふが故てある。概則として高級な日本文學に於て熱烈な戀愛を題目とする場合は、それは家族關係の發生（卽ち結婚）に終はる種類の戀愛ではない。それは全く別種の戀愛――東洋人が餘りやかましからぬ種類の戀愛――單に肉體の魅力に依つて鼓吹せらるゝ惑溺卽ち『まよひ』で、その女主人公は良家の處女ではない。大抵遊女若しくは藝妓である。されぱとて此種の文學に於けるその題目の取扱方は西洋の官能的文學――例せば佛國（フランス）文學の樣でもない。全く異なれる文藝上の立場から考察し、異なれる種類の情緒を描寫するのである。

凡そ國民文學なるものは必然的に反映的なものである。國民文學が描かぬ所のものは其國民の生活には陽（あらは）に現はれて居らぬのである。されば日本文學が、我等の大小說家、大詩人の好題目である種類の戀愛に就て、沈默すると同樣に、日本の社會は、かかる戀愛に就て沈默を守るのである。日本の小說にも、女主人公として、代表的の婦人が往々描かれて

あるが、それは完全なる母として、或は親の爲めに、喜んで凡てを犠牲にする孝行な子として、或は良人と共に出陣し共に戰爭し、身を以て良人を救ふ貞節な妻としてである。決して戀愛の爲めに死し、或は相手を死せしむる感傷的婦人としてではない。又日本婦人が男子の魅惑を事とする、危險な美人として文藝上の作品に現はるゝ事もない。日本の實際生活に於ても、家族の婦人は決してそんな役割を演ぜぬのである。男女兩性の混合體としての社會、婦人美を以て洗錬せられた最高の美となす存在としての社會、そんなものは東洋には嘗て存在した事がない。日本に於ても、特殊な意味に於ての社會は常に男性である。首都の或る限られた方面に於ける歐洲風の流行習慣の輸入も、遂に國民生活を泰西流の社會に改造し得る樣な社會的變化の第一歩を示すものとは容易に信じ得ぬ。其樣な改造は家族の瓦解、全社會組織の崩潰、全倫理系統の破壞——簡言すれば國民生活の破滅を招來するものであるから。

『婦人』といふ語を尤も純化せられた意味に取り、そして婦人が滅多に現はれぬ社會、婦人が決して見せびらかされぬ社會、戀が全然不可能な社會、そして、一家の妻又は娘を面のあたり讃美するなどは、許し難き無禮と考へられる社會を想像して見れば、讀者は直に我等の評判な小說が、其社會の人々に與ふる印象は、どんなものであるかといふ慄然た

る結論に達し得るであらう。併し其結論は略ゞ當を得て居ても、其社會の自制心と其背後の倫理觀を幾分知悉するのでないと、未だ正鵠を得るとは云へぬ。例せば上品な日本人は人に向つて決して其妻の事を云はぬ（概則として）、如何に内心自慢であつても、子供の事さへ滅多に口にせぬ。其外家族の何人に就てでも、又家庭生活や私用私事に就て語るのを聞く事は殆どない。併し若し家族の事に就て語る事ありとすれば、それが殆ど親の事に極つて居る。親の事に就て語る時は宗教心に近い尊崇の語調で語る、が西洋人に普通な語調とは全く違ふ。そして決して自分の親の長所を他人の親のと内心比較する様な調子は用ゐぬ。併し妻に就ては其婚姻の席に招待した友人にさへ語らぬ。尤も貧乏で尤も無學な者で窮乏が如何に甚だしからうと、日本人は決して助力を受け、又は憐憫を買ふ爲めに、妻の事を云ひ立てようとは夢にも思はぬ、と云つて間違ひは無からう――多分妻のみならず、子供の事迄云はうとはせぬであらう。それにも拘らず、父母若しくは祖父母の爲めならば、助力を乞ふに必らずしも躊躇せぬ。西洋人には尤も強い情緒である妻子の愛を、東洋人は利己的の情緒と斷じて居る。彼等はもつと高尚な情緒に支配せらるゝと稱して居る――卽ち義理、第一に皇帝に對する義理、つぎに父母に對する義理である。妻子に對する愛情は自己愛の感情に外ならぬが故に、如何に純化され靈化されやうとも、それを日本の識者が

最高の動機と考ふることを拒むのは間違ひてない。

日本の貧民の生活には祕密といふものがない。併し上流に在つては、家族生活は西洋の何の國――スペインをも入れて――に於けるよりも人目に曝(さら)されない。外人の殆ど見ることなき、又少しも知ることなき生活である。日本婦人に就て見知る所あるが如き記述が澤山ある事はあるが當てにはならぬ。(註) 日本人の友人の家庭に招かれると家族を見る事もあり

註　かうは云つても自分は日本の茶屋若しくはもつと惡るい種類の家に短時日滯在したのみで歸國の後日本婦人に就ての述作を發表する驚くべき人々を指すのではない。

見ぬ事もあるが、それに其時の模樣次第である。若し見る事が出來たら、それは多分ほんの寸時(ちよつと)の間であらう、そして其時には屹度細君を見るのであらう。先づ玄關で刺を通ずると、下女が受け取つて退出する。間もなく又現はれて座敷、卽ち日本家屋に在つては大抵最大最美の客間に案內する。其處には座布團が用意されてあり、其前には烟草盆がある。下女が又茶と菓子を運ぶ。暫くして主人公自身が入つて來て、お定まりの挨拶の後會話が始まる。若し食事の饗應に引き留められ、それを受諾すると、良人の友人として客の給仕に細君が暫時出座するの榮を得るてあらう。其時客は或は正式に紹介される事もあり、或

はされぬ事もある。が彼女の服裝髪容を一瞥すると、それで直にそれは何人であるかが判かるから、最も深厚な禮を以て彼女に挨拶せねばならぬ。彼女は大抵優雅な、嚴肅な人間といふ印象を與ふるであらう（特に、サムラヒの家庭を訪問した場合には）妄りに笑つたり低頭したりする種類の婦人とは、全く異なるのである。彼女は滅多に口はきかぬが、挨拶をして、それから暫くの間は見たばかりで驚異を値する樣な、繕はぬ品位を以て給仕する。それからするすると出て行つて、辭去の時迄は再び姿を現はさぬが、辭去の時には玄關に現はれ出て左樣ならを云ふてあらう。それから度々訪問すると其度毎に同樣な彼女の麗はしい瞥見を得るやうになる。又其上に偶には老いたる父母をも瞥見するであらう。運がよければ子供迄遂に出て來て、驚くべきしとやかさと優しさとを以て挨拶する。併しながら其家庭の最奥の內的生活は決して漏らされぬ。それを暗示すべく目に映る所のものは悉く上品で、禮儀正しく、しとやかではあるが、それ等家族の人々の相互關係は遂に知るを得ぬであらう。奥を仕切る美しい襖の背後は、凡てが沈默せる靜かな祕密である。日本人の心にはそれが當然と思はれる。こんな家族生活は神聖である。家庭は神殿で、其垂帷を引きめくるのは不敬であるといふのである。自分にも、此家庭及び家族關係は神聖だとの思想が、泰西に於ける家庭及び家族關係に對する、我等の最高の思想に何の道劣るもの

とは考へられぬ。

併し若し其家族に年頃の娘があるとすると、客は却つて大抵細君を見る機會が少い。同樣に沈默て遠慮深く、一層しとやかな若い娘が出て來て客を歡待するであらう。父の命ずるまゝに娘は或は何かの樂器を奏し、或は自分の刺繍や繪を取り擴げ、或は家什の貴重な若しくは珍らしい品物を見せて客をもてなすことさへある。併しながら國風の最高教養に屬する上品な沈默と、從順な優しさとしとやかさとは何時も相伴なうて居る。かかる場合客も無遠慮に擧動うてはならぬのである。勝手に喋り得る老年の特權を有たぬ限り、客は容貌を讃めたり、輕々しい諂諛に似た事を述べたりなどするは禁物である。西洋に於て女人尊崇と考へらるゝ事は、東洋に於ては大きな無禮となり得るのである。何んな事があつても、客は若い娘の姿色や、品位や、身ごしらへなどを讃めてはならぬ、況して細君に向つてそんな事をしてはならぬ。かう云ふと讀者は、或る種類の讃辭は避けられぬ場合もあるではないかと云ふであらう。それは其通りである。其樣な折には豫め恭しい詞で讃辭を云ふ事の辯解を述べて置くのが禮儀の要求する所で、それは我等の『何う致しまして』以上の優しい辭で受け納れられる――要するに、苟くも讃辭を述ぶることの無禮を詫びるのである。

併し、ここで我等は日本人の作法といふ大問題に觸れるのであるが、自分は之に就ては未だ全く無知である事を白狀せねばならぬ。自分がここ迄述べ來たつたのは、ただ西洋の社會小說の多くが、東方人の心に、如何に、品位に缺けて見ゆるかを暗示する爲めに外ならない。

妻子に對する愛情を語り、其外何でも家庭生活に密接の關係ある事を話題に上すのは良き教養といふ日本人の考とは全く相容れぬ。從つて我々が家庭の關係を公然話題に上せ、若しくは寧ろ見せびらかすのは、教養ある日本人には、全然野蠻とも見えぬが、少くとも妻惚(サイノロ)と見えるであらう。そして此考こそは日本婦人の地位に關して全く間違つた概念を外國人に抱かしめた、日本人の生活を少からず說明するものである。日本では夫が妻と相並んで街(まち)を步くことさへない。まして妻に腕を貸したり、階段の上り下りに扶けてやる事などをやである。併しこれは夫に愛情のない證據にはならぬ。これは我等のと全く違ふ社會的感情の結果に外ならぬ。夫婦關係を公然見せびらかすのは、宜しきを得たるものでないといふ考慮に基づける禮法に從ふまでである。何故宜しくないか。それは東洋人の　には、個人的な、從つて自己本位の愛情の自白を示すが如く思はるゝからである。東洋人には生活の法則は義務である。愛情は如何なる時如何なる場所でも、義務に從屬せねばならぬの

である。或る種の個人的愛情の公開は、道義心の薄弱を告白するに等しいと考へられる。そんなら妻を愛するのは、道義心の薄弱といふ事になるかといふに、否、妻を愛するのは男の義務である、只だ兩親よりも妻を餘計愛し、若しくは公衆の前で、父母に對するよりも餘計妻に對して慇懃を盡くすのが道義心の薄弱なのである。のみならず同じ程度の慇懃を示すのさへ道義薄弱の證となるのである。父母の生存する間は、妻の家庭に於ける地位は常に養女の地位で、そして尤も愛情深き夫と雖も、寸時たりとも家族の禮法を忘れる事は許されぬのである。

ここで自分は日本人の思想習慣と相容るゝことの出來ぬ西洋文學の一形相に觸れざるを得ぬ。讀者よ、接吻、愛撫、及び抱擁が我等の詩歌、我等の小說に在つて、如何に重要な役目を演ずるかを反省せよ。而して日本文學には此等のものが少しも存在せぬ事實を考慮せよ。愛情の表號として、接吻や抱擁やは日本には全く知られて居ぬ。ただ日本の母も世界中の母と同じく其孩兒を時に嘗めたり抱きしめたりするといふ事實だけはある。幼少の時期を過ぐるとそんな事も爲なくなる。幼兒に對する外、そんな行爲ははしたなきものと考へられる。娘達が互に接吻する事もない。父母も決して步行し得るやうになつた子供を接吻したり抱きしめたりする事はない。此法則は最高の貴族より最低の農民に至る迄當て

はまる。又此國民の歷史中如何なる時代の書物にも、愛情の表示が今日よりももつと熱烈であつた形跡は少しもない。恐らく西洋の讀者には接吻、抱擁は勿論愛人の手を握りしめる事さへ、徹頭徹尾書かれてない文學といふものは、想像する事も困難であらう——握手も接吻と同樣日本人の心には全く知られてない行爲なのである。然るに日本文學では、田舍者の天眞爛漫の歌にも、不幸な戀人を歌つた民謠にも、宮廷詩人の上品な詩歌同樣、此等の題目に就ては全く沈默である。一例として俊德丸の古民謠を擧げて見よう。此民謠は西部日本を通じて知られて居る格言や俗諺の基となつたものであるが、話の筋は結髮(いひなづけ)の男女が苛酷な運命に依つて永らく引き離され、互の行衞を尋ねて國中を漂浪し、最後に神々の惠に依り突然清水の舞臺の前で遭遇するといふのである。アリアン系の詩人がこの邂逅を描くとしたなら、雙方走り寄つて抱き合ひ接吻し愛の詞を呼び繼げると書くは請合である。併し日本の民謠はどう描いて居るか。手短に云ふが、二人は只だ一緒に坐し、一寸互に手を懸けたと書いて居る。然るに此控へ目な愛撫の形式さへ非常に稀な情緒の發露なのである。數年振りに相見る父と倅、夫と妻、母と娘などの場合に屢〻居合はすとしても彼等の間に愛の接觸の跡形をさへ見る事はあるまい。彼等は跪坐して、辭禮を交はし、微笑し、時に喜悅の聲を擧げよう。併し互に駈け寄つて抱きついたり、熱き愛の詞を交はした

りするやうの事はないであらう。實際『いとしき者よ（マイ・デイア）』、『愛する者よ（マイ・ダアリング）』、『懷かしき者よ（マイ・スヰート）』、『わが愛よ（マイ・ラブ）』、『我が生命よ（マイ・ライフ）』と云ふ樣な愛の詞は日本語に無い。其他我等の情的慣用語に相當するどんな詞も無い。日本人の愛情は言辭では表されない。聲の調子にさへ殆ど表されない。主として上品な儀禮と眞心（まごころ）の行爲に表はされる。自分は更に、愛と反對の情緒も同樣に完全に抑制されると附け加へる事が出來るが、此の著しき事實を說明するには別に一文を草する必要があるから略する。

三

東洋の生活と思想とを公平に研究しようとする者は、東洋人の見地に立つて、西洋のそれ等をも研究せねばならぬ。かかる比較研究の結果は、少からず彼を反省せしむるものがあるであらう。研究者の人物と識量に應じて、多少彼が其中に沒頭する東洋感化の影響を受けるであらう。西洋生活の樣式が、彼には、徐々に新たな、今迄夢想もしなかつた意味を有（も）ち、從來の舊觀を少からず失ひ始めるであらう。往日正しくして眞なりと思ひし事の多くが、變態にして僞りなるを悟り始めるのであらう。泰西の道義上の理想は果たして最

高のものなるかを疑ひ始めるであらう。西洋の習慣が西洋文明の上に置いた評價に遂に不信を感ずるに至るであらう。彼の疑惑が最終のものなるか否かは別問題であるが、其疑惑は少くとも彼が以前の或る確信を長へに變更する程合理的で又有力であるであらう――中にも西洋に於ける、及び難き者、解し難き者、神聖な者としての婦人崇拜、又『會得を絕する婦人』（ボドレイルの一句）といふ理想――『永遠の女性』といふ理想の道義的價値の確信の如きはそれである。此の古き東洋には『永遠の女性』は全く存在せぬ。そんな者なしに生活する事に馴れては、自然これは健全な知的生活に絕對必要なものでないと云ふ結論に達する。そして地球の他の半面（歐羅巴）にも之が永久の存在は果たして必要ありやと疑ふにさへ至るのである。

四

『永遠の女性』が極東に存在せぬと云ふのは、眞理の一班を陳ぶるに過ぎぬ。遠い將來に於ても、これが極東に輸入されようとは想像することが出來ぬ。之に關する我等の思想を、其國語に飜譯することさへ大抵は不可能である。其國語には名詞に性なく、形容詞に

比較級なく、動詞に人稱がない。チャンバレン教授は云ふ、此國語に擬人法なきは根柢深く拔け難き特質で、中性の名詞に他動詞を使用することさへ許さぬと。教授は更に云ふ、『實際、大部分の隱喩（メタフォア）、譬喩（アレゴリー）は極東人の心に説明了解せしむることさへ不可能である[註]』と。教授は之が一例として、ワーズウァースより恰好の文句を引證して居る。併しワーズウァースよりもつと平明な詩人でさへ、日本人には同樣に難解である。自分は嘗てテニズンの有名な小唄の中の、つぎに擧ぐる簡單な一行を上級生に説明するに困難した事がある——

註　チャンバレン氏『日本の事共』第二版二五五、二五六頁、『國語』の條を見よ。

『彼女は日よりも一層美しい（シー・イズ・モーア・ビューチフル・ザン・ディ）』

生徒は『日』を形容するに形容詞『美しい』の使用を了解する。又別に『乙女』といふ語を形容するに、同じ形容詞を用ふることを了解する。併し日の美と乙女の美との間に似寄りがあるといふ考が少しても人間の心に存在し得るといふことは、彼等の了解を全く超絶する。テニズンの思想を彼等に傳ふるには、心理的に之を分析し、二の異なれる印象に依つて喚起された快感の二形式の間に、神經上の類似があることを證明する必要があつた。

かく國語の性質から見ても分かる通り、日本人には人種的特性に深い根ざしを有する、古い特殊の傾向があるのである。此傾向に依つて、我等は此極東の地に、我等の理想に相當する優勢な或る理想の缺如せる所以を說明せねばならぬ――若し說明するの必要ありとせば。此傾向が凡ての源泉であるが、これは現在の社會構造よりも遙かに古く、家族觀念よりも古く、祖先崇拜よりも古く、儒教よりもずつと古い。儒教は東洋人の生活に於ける特殊の事實の說明であるよりも寧ろ反映である。尤も所信と習慣とは性質に反應し、而して性質は又習慣と所信に反應するものなるが故に、儒教の中に原因と說明とを求むる事も全く不合理ではない。それよりも不合理なのは、遽てた批評家が婦人の當然な權利を抑制した宗教的勢力として、神道と佛教とを攻擊する事である。古神道は婦人に對して、少くともヘブルーの古信仰位穩健であつた。神道の女神は數に於て男神と略〻等しく、其崇拜者の目には希臘神話の空想にも劣らぬ美しい形體で現はれたのである。衣通の娘女の若き女神に就ては、美しき體軀の光が衣服から透つたと云はれて居る。凡ての生命と光の源泉なる悠久の太陽は、美しき天照大神と云ふ女神である。處女は古の神々に奉仕し、其祭禮などには重要な役目を演ずる。又國內幾百千の神社にては英雄とし父兄としての男性の靈と等しく、妻とし母としての女性の靈が祀られる。後の外教たる佛道も、中古の基督教が

泰西の婦人に與へたよりも、より低き地位に日本婦人を追下したと非難する事は出來ぬ。釋迦も基督の如く處女から生まれたので、愛すべき佛達の多くは、地藏を除くの外女性であることは、日本人の藝術にも空想にも明らかである。又ローマン・カソリックの高僧傳に於けると同じく、佛教のに於ても婦人聖者の傳記は名譽ある位置を占めるのである。佛教も初期基督教の如く婦人美の誘惑を警むる爲めの説法に力を盡くしたのは事實である。又其祖師の教にては、パウルの教に於けると同じく、男子に社會的又精神的の優越を與へたのも事實である。併し此題目に關する佛書を探るに當たり、我等は釋迦が各階級の婦人に好意を示した實例の無數を閑却してはならぬ。又は後期の佛典にある、婦人に成道の機縁を拒否する教義が嚴かに懲戒されたといふ目ざましき物語を忘れてはならぬのである。

『妙法蓮華經』の第十一品にかう云ふ事が書いてある。或る人釋迦佛の前に來たり、一瞬時にして最高の知識に到達し、一刹那にして千日瞑想の功徳を得、萬法の精髓を證見し得たる若き女人の事を告げた。すると其女人は釋迦佛の前に來たり立つた。

併し智積菩薩は疑つて云つた。「自分は釋迦牟尼佛が成道の爲めに苦闘しつつありし時の樣を見た。そして彼は無限劫の間無限の善行を積みしことを知つて居る。世界中に芥子

粒程の地といへども彼が衆生の爲めに身命を捨てざりし地は殘つて居ない。これ程迄にして初めて釋迦佛は大悟の域に達したのである。此乙女が一瞬時にして最高の知識に到達したとは誰れが信じよう』

老僧舍利弗も同樣に疑つて云つた。『おゝ乙女よ。女人にして完全なる六德を備ふることは或はあり得るやも知れぬ。去りながら女人にして佛德に達した例(ためし)はない。女人は菩薩の階級に達することは出來ぬから』

併し乙女は釋迦牟尼を證人として呼びまゐらせた。すると忽ちにして大衆の前で、彼女の女人相は消え失せ、菩薩として現はれ出てた。三十二相の光明十方を遍照し、三千世界は六種に震動した。そして舍利弗は沈默した。[註]

註　『東方聖書』卷二十一、ケルンの英譯『法華經』第十一品の全文を見よ。

五

併し泰西と極東との間の、知的共鳴に最大の障碍を形成する者の、眞の性質を感知する

には、極東に存在せぬ此理想（永遠の女性の）が、西洋人の生活に及ぼす偉大な結果を十分に翫味せねばならぬ。其理想が西洋の文明に――其遊興に、敎化に、悦樂に、其彫刻に、繪畫に、裝飾に、建築に、文學に、戲曲に、音樂に、將た無數の工業の發展に如何なる影響を及ぼしたかを記憶せねばならぬ。又風俗習慣及び趣味の語の上に、行爲と道德の上に、努力の上に、哲學宗敎の上に、其他公私生活の殆ど凡ての方面の上に――手短に云へば國民的特質の上に、之が及ぼせる結果を思はねばならぬ。同時に我等は、此理想の形成には諸〻の影響が交錯融合した事を忘れてはならぬ――チュートン人、ケルト人、スカンヂナビア人、上世、中世、希臘人の人間美尊崇、基督敎の聖母崇拜、武士道の渴仰、凡ての既成の理想を新しい官能主義に浸染したる文藝復興の精神等――而して此等は皆其種子は兎に角、其榮養分を、アリアン語と同樣に古く、而かも極東には全く知られざる、種族的感情より得來たつたに相違ない。

　我等の理想を形成すべく結び附いた、此等諸種の影響の中では、古典的要素が明らかに優勢である。尤もかく殘存せる希臘の人間美感は古典期にも文藝復興期にも屬せざる精神美感（ヘブライ思想）に浸潤せられた事は事實である。又新しい進化哲學は、現代が過去に負ふ無限の恩義を認識せしめ、將來への義務に就き全く新しい考を起こさしめ、肉體よ

りも品性の價値を大いに重んぜしむるに至り、女性の理想を出來るだけ精神化せしむるに與つて力ありしこと舊來のあらゆる思想を併せたるものよりも多いのは事實である。併し此理想は將來の知的發展に依り、更に一層精神化されようとも、其性質上根本に於ていつまでも藝術的官能的であるに相違ない。

我等が自然を見るのは、東洋人が見るのとは、又それが東洋の美術に證明されてあるのとは大分違つて居る。我等はそれ程如實に自然を見ず、又それ程親密に自然を知らぬ。其故は專門家の眼（レンズ）を通（とほ）しての外は、我等はただ擬人法的にのみ自然を見るからである。實に我等の審美眼は、或る一方面に於ては、東洋人のそれよりも比較にならぬ程精緻な度合に發達して居るのは事實である。併しそれは情的の方面であつた。我等は古來の婦人美崇拜を透して自然美の幾分を學んだのである。多分最初から人體美の知覺が、我等のあらゆる美感の本源であつたらう。我等の釣合（プロポーション）といふ概念も、恐らく源（もと）を同じうするのであらう。我等が法外な齊整の嗜好、並行線、曲線、及び凡ての幾何學的均齊の愛惜の如き皆然りである。而して我等が美感發展の長き行程に於て、婦人美の理想は遂に我等が美學上の理想となつたのである。我等は其理想の幻影を透して世界の美を見ること、恰も熱帶の虹色の濕氣を含める空氣を透して物體を見るが如くに至つたのである。

それ計りではない。一度美術若しくは空想に依つて婦人に比(たと)へられたる物は、一時比(たと)へられたが爲めに不思議にも新たな意義を與へられ或は變形せられた。かくて幾世紀を通じて西洋人の空想は自然を益々女性化せしめたのであつた。我等を喜ばす物は、空想が直に捕へて女性化せしめた――青空の限りなきやさしみ――河海の水の動き――曉天の薔薇色――晝(ひる)の廣大な抱擁――夜と天の星――不變の山嶺の起伏までも。あらゆる花、あらゆる果物の赤らみ、其外凡て香ばしく美しく優しき物、爽かな季節と其折々の聲々、小流の笑ひ聲、木の葉のささやき、木陰の鳥の囀り――凡て見る物聞く物感ずる物にして、我等が愛らしい、ゆかしい、優雅だ、上品だと云ふ、憧憬の感を惹起す者は、我等をして麗氣に、婦人の俤(おもかげ)を偲ばしめる。我等の空想が自然を男性的と見做すのは、凄(すご)さ强さの感の起こる時のみである――恰も荒々しい巖巉な對照物に依つて永遠の女性の魅力を增進せしむるが如くに。恐ろしい物でさへ非常に美しいものを加味すれば――破壞でさへ破壞者の美しさを以て爲されさへしたら――我等には女性的となるのである。啻に見る物聞く物の美しさのみならず、不思議であり、崇高であり、神聖である物の殆ど總ては、妙にこぐらがつた

情感の神經叢を透して我等に訴へるのである。宇宙の尤も機微な力さへ我等に對しては婦人を語るのである。新しい科學は彼女の出現が我等の血管の中に喚起す旋律に、又初戀なる不思議な激動に、さては彼女の魅力の永遠の謎に新しい名を敎へた。かくて我等は簡單なりし情熱から無數の感化變形を經て遂に宇宙情緒、萬有女性觀を發展せしむるに至つた。

六

さて我が泰西の美感發展に於ける情的影響の結果は總じて有益であつたかどうか。我等が藝術の勝利として誇る、あらゆる顯著な結果の下に、目に見えぬ結果——それが將來暴露されたなら、我等の自尊心に少からぬ衝動を惹起すべきものが潜んで居らぬであらうか。我等の美的能力は、自然の多くの偉大なる方面に殆ど全く我等の目を閉ぢさせた唯一の情操の力に依つて、一方にのみ異常に發展せしめられたといふことはないであらうか。或は寧ろこれは審美感の發展に與つて、一特殊の情緒が極度に優勢を占めた避くべからざる結果ではあるまいか。そして最後に、此優勢を占めた情緒其者は果たして最高のものであつたらうか、東洋人には知られて居た、もつと高いものがなかつたてあらうか。

自分は此等の疑問を提供するものゝ、滿足な解答を爲し得られようとは思はぬ。併し自分は東洋に長く住めば住む程、丁度人間の眼には見えぬが、分光器に依つて存在の證明されるる不思議な色と同樣、我等には知られぬ優れた藝術的才能と感知力が東洋には發達して居るといふ確信が益〻深まるのを覺える。そして、そんな事が有り得べきであることは、日本藝術の或る方面に依つて指示せらるゝやうに思ふ。

餘り細密に說くことは困難でもあり危險でもある。自分は二三の大まかな觀察を述べて見るに過ぎぬ。自分には此驚くべき日本藝術は、自然の無限な種々相の中、我等泰西人に何等性的特徵を示さぬ所のもの、擬人法的に見るを得ざるもの、男性でも、女性でもなく、中性若しくは無名のものが、日本人に依つて尤も深く愛せられ會得せられるものである事を示す樣に思はれる。實に日本人は自然界に於て數千年間我等に見えずに居た多くのものを見て居る。そして我等は今彼から從來全く見るを得なんだ生物の諸相、形態の諸美を學びつゝある。我等は遂に、日本人の藝術は——西洋人の偏見が獨斷的に、其反對の主張を爲せしにも拘らず、又初めには妙不思議な非如實の感を與ふるにも拘らず——決してただ空想の產物ではなく、存在せしもの、現存するものの、眞實の反映、描寫であるといふ大發見を爲したのである。從つて我等は日本畫家の鳥類、昆蟲、草木、樹木の習作を眺める

のは、藝術の高等教育に外ならぬことを認めるに至つた。例せば我等の最良の昆蟲の圖を同じ題目の日本畫と比較せよ。ミシエレーの『昆蟲』に、ジアコメリが描いた挿畫と、日本の安烟草入の繪草、若しくは安烟管の金屬の部を裝る同じ昆蟲の圖柄とを比較して見よ。歐羅巴の版畫の細密精巧は、要するに無味乾燥な寫實に過ぎぬ。然るに日本畫家は毛筆を二三度揮るふのみで、動物のあらゆる形態上の特殊性と、之に加ふるに、其運動のあらゆる特徵を、理解し難き巧妙さを以て描出して居る。東洋畫家の毛筆から投げ出さるゝ繪畫の一つ一つは、偏見に曇らされざる人の知覺には、敎訓であり啓示であり、苟くも見得る人の眼を開かしむるものである。それはたとひ風に揉まるゝ蜘網の上の蜘蛛、日向を飛ぶ蜻蛉、葦間へ這ひ込む蟹、透明な流れの中に震動する魚の鰭、唸りながら飛ぶ蜂、空を飛ぶ鴨、身構へした蟷螂、さては杉の枝を這ひ上る蟬のやうなものでもである。此等の畫は凡て生きて居る、熱烈に生きて居る。我等の之に相當する畫は、それに比べると丸で死んで居る。

又花の畫を取つて見よう。英國或は獨逸の花の畫は、名工の數箇月の勞力の結果で、數百磅を價するものでも、高尙な意味の自然の研究としては、毛筆を二十度ばかりなすりつけて、價五錢ばかりもする日本の花の畫と比ぶことは出來ぬ。前者は精々色の配合を模せ

んとして失敗した、しかも痛ましき努力を現はすものに過ぎぬ。後者は何等粉本(モデル)の助けなしに、花の形狀の完全な記憶を、直に紙の上に投げ出したもので、個々の花の思ひ出ではなく、完全に手に入つたあらゆるていにをはの揃つた形態表現の通則を完全に實現したものである。泰西の美術批評家の中では、佛人のみが日本美術の此等の特質を十分に了解する樣に思はれる。そして泰西美術家の中では其手法に於て東洋人に接近するのは巴里人のみである。巴里の畫家は時に紙面より筆を離さずに、波狀にうねれる一條の線を以て、男女の生けるが如き特殊の形態を描出する。併し此の非凡な技能の發達は重に漫畫に限られ、そして男か女かの畫に限られる。自分が謂ふ日本畫家の技倆なるものを了解せんとならば、讀者は或る佛蘭西畫の特質なる此の卽時描出の技能を、個性を除く殆ど凡ての題目に適用したものと想像せらるればよい。卽ち殆ど凡ての認められた類型に、日本の自然物の凡ての形相に、日本風景の凡ての形式に、雲に流水に霞に、森や野の凡ての生物に、季節の凡ての樣式、空の調子、朝夕の色合などに適用したものと想像せらるればよい。但し此魔術の樣な技術の深い精神は、馴れない眼には一目瞭然と云ふ譯には行かぬ。それは西洋人の藝術的經驗に訴ふる所が至つて少いからである。併し偏見に捉はれない鑑識高き眼には、徐々に見えて來て、美に關する從前の見解を殆ど悉く更改せしむるに至るであらう。其の

あらゆる意義を會得するは、長年の日子を要するであらうが、其の描出力の幾分は短時日の間に感知する事が出來、さうなると、アメリカの輸入雜誌や歐羅巴の何の輸入刊行物でも殆ど見るに堪へられなくなるであらう。

もつと意義深い心理的相違は他の事實に依つて暗示せらるる。此事實は言語で叙述する事は出來るが、西洋の美學的尺度で、若しくは何等かの西洋人的感情で解釋する事は出來ぬ。一例を擧ぐれば、自分は二人の老人が、近處の寺の庭に苗木を植ゑて居るのを見た。彼等は時に只だ一本の苗木を植ゑるのに約一時間を費やすのである。彼等は苗木を一先づ地上に据ゑ、其一線一畫の位置を研究する爲めに少し離れた處に退いて合議する。其結果として苗木は取り去られ少し許り位置を換へて植ゑ直される。此苗木が庭の風致に完全に合致する迄には、これが七八遍も繰り返される。此二人の老人は畢竟苗木を材料にし、それを變へたり移したり、引き拔いたり植ゑ直したりして不可思議な想ひを練りつつあるので、丁度詩人が尤も優雅な、最も力强き表現を其詩歌に與へる爲め、文字を替へたり移したりするのと同樣である。

日本の大きい家には凡て若干の凹壁(アルコブ)、卽ち床の間が重なる室に一つ宛(づつ)ある。此處には家

の賓とする美術品が陳べられるのである。註 先づ必らず懸物が掛けられる。それから少し高く上げた床（普通磨ぎ板）には花瓶と一二の美術品が置かれる。花はコンダー氏の美しい著書に精しく書いてある、彼の古法に從つて床の瓶に生けられ、又懸物と、陳べられてある美術品とは、場合と季節に依つて折々變へられる。自分は或る床の間で樣々の折に、樣樣の異なれる美術品を見た。支那製の象牙の彫像、青銅の香爐——一對の雲龍を彫れる——路傍に踞して禿頭を拭いて居る行脚僧の木彫、漆器の傑作、京燒の美しい磁器、及びわざわざ合はせて作つた重い珍木の臺に載せた大きな石などであつた。西洋人には何等の美をも恐らく其石に見出せぬであらう。其石は切つてもなければ磨いてもなく、又少しの內在的價値をも有して居らぬ。單に川床から拾つて來た、水で摩り耗らされた、灰色の石に過ぎぬ。然るに此石は折々之に代はる京燒の花瓶て、それを手に入れる爲めには諸君が高價をも惜しまぬべき代物よりも更に一層高價なのである。

註　床の間若しくは床は今より約四百五十年前、支那へ留學せる佛僧榮西に依つて創められたとせられて居る。多分素と宗敎上の物品の陳列に目論まれ又用ゐられたのであらうが、今日では客間の床に佛像、佛畫などを置くのを敎育ある人士は惡趣味と考へて居る。併し或る意味に於ては床は矢張り神聖で、其上に踏み込んだり坐つたり不純なもの惡趣味の物を置く事は決してせぬ。又床に關しては複雜な禮儀がある。

上客はいつも床の間の眞近に据ゑられ、それから後は客の身分に從つて或は近く或は遠く座に着く事になつて居る。

自分が今住んで居る熊本の小さい家の庭には、樣々の形狀と大いさとを有する巖若しくは大きな石が十五ばかりある。此等も內在的の價値は更にない、建築用材としてさへない。それに庭の持主は之に七百五十圓餘を拂うて居る。此愛すべき家自身の建築費でもさうはかからぬのである。但し白川[註]の川床から運搬する費用の爲めに高くついたのであらうなどと想像したら間違つて居る。此等の石はただ或る度迄美しいと考へられ、そして美しい石に對する大なる地方的需用がある爲めにのみ七百五十圓を價したのである。此等は最上級の石でもない、若しさうであつたら、もつと遙かに高價であつたらう。諸君は大きな粗末な自然石が高價な鋼鐵版の版畫よりも、もつと美術的意義を有するといふこと、又それは美しい物であり永久の歡喜であるといふことを會得する迄は、日本人の自然の見方を了解し初める譯に行かぬ。『併し普通の石の何處が美しい』諸君はかう問ふてあらう。幾つも美しい處はあるが、自分は只だ一箇處だけ述べよう――曰く不齊整。

譯者註　熊本市に沿うて流るゝ川の名。

自分の小さい日本風の家には、襖即ち室と室との間を滑走する不透明な厚紙の目隱があるが、それには自分が決して見倦かぬ圖案がある。此圖案は室に依つて異なるが、自分は自分の書齋とつぎの間とを仕切る襖に就てのみ話さう。地の色は軟らかい玉子色で、其上に置く金色の型は極簡單である——寶珠の玉が二つ宛撒き散らされてあるに過ぎぬ。併し何の二組を取つて見ても各組から正確に同じ距離にあるものはない、そして各組も妙に少しづつ變つて居て正確に同じ位置若しくは關係にあるものは二つとない。時には一方の寶珠が透明で他が不透明、時には二つ共透明若しくは二つ共不透明であり、又時には二つの中で透明な方が大きく、時には不透明の方が大きく、時には二つ共正確に同大であり、時には二つが重なり合ひ、時には全く相觸れぬ。又時には透明の方が左にあつたり、時には右にあつたり、時には透明の方が上にあつたり或は下にあつたりする。重複の箇處、若しくは配置、並置、取合せ、大いさ、對照等に於ける齊整らしいものを尋ねようとして全面に目を配つても無益である。此外家中の諸處にある裝飾模樣の中に齊整らしいものは何もない。それをわざわざ避けた巧妙さは驚くべきである——殆ど天才の域に達して居る。さてこれが日本裝飾術の普通な特質で、其感化の下に數年住んだ後には、壁なり、絨毯なり、帷帳なり、天井なり、其他凡ての裝飾せられた物の表面にある規則正しい模樣を見ると、

甚だ野部に見えて心苦しい。これは確に我等が永らく自然を人體に擬へてのみ見馴れた結果、泰西の裝飾術に於ける機械的な醜惡に滿足し、母の背に負はれて青緑な天地の奇觀に見惚れる日本の小兒の眼にさへ明らかに見ゆる自然の美に氣附かざりしに原因するに相違ない。

佛典の一節に曰く『無は法なることを識る者は乃ち智者なり』と。

生と死の斷片

一

七月二十五日。今週私の家に三つの變つたおとづれがあつた。

第一は井戸替職人であつた。毎年一回は凡ての井戸がからになるまで吸み替へられねばならない。さうしないと水神樣の怒りを招く。この折に私は日本の井戸とその守護神の事について學んだ事が多少ある、井戸の守護神には名が二つあつて、又水波之賣命（ハノメノミコト）とも云はれる。

水神樣は水を淸く冷くして凡ての井戸を守護する、その代り家主の方では嚴しい淸淨法を守らねばならない、その規則を破る人には病氣それから死が來る。稀にこの神は蛇の形となつて現れる事がある。この神に捧げてある神社を見た事はない。しかし毎月一度神主

が井戸のある信心深い家を訪ねて水神に何か古い祈りをする、そして井戸の端に何かの符號の小さい幟を立てる。井戸替のあとでもやはりこの事がなされる。それから新しい水をくむ第一のつるべは男子によつてくまれる、もし婦人が初めに水をくめば、その井戸はそれからあといつも濁るからである。

水神にはその仕事の小さい助手がある。日本人が鮒と呼ぶ小さい魚である。水蟲を退治するために一つ二つの鮒はどの井戸にも飼つてある。井戸替の時この小さい魚を甚だ大事にする。私が始めてうちの井戸に二つの鮒の居る事を知つたのは井戸替職人の來た時であつた。鮒は井戸に水の滿つる間冷水の桶に入れられて、それからもとの淋しさへ再び投ぜられた。

私の井戸の水は綺麗で氷のやうに冷たい。しかし今ではそれを飲む毎にいつでも暗黑のうちを徘徊して、下りて來て水に落つるつるべによつていつまでも驚かされるそれ等の二つの小さい白い生命を思はずには居られない。

第二の變つたおとづれは、裝束をつけて手で動かす火消ポンプを携へた土地の消防であつた。昔の習慣に隨つて土用の間に年一回彼等の持場を一廻りしてあつい屋根に水をまい

て、富んだ家々から何か少しの報酬を受ける。長い間屋根に雨が落ちなければ太陽の熱だけて燃え出す事もあると信ぜられて居る。消防は私の屋根、樹木、庭園へ蛇管（ホース）を向けて非常に淸々した氣分にしてくれた、そしてその代りに私は酒代を與へた。

第三のおとづれは、地藏のお祭りを適當に行ふために少しの助力を乞ひに來た子供の總代であつた、この地藏の堂は街路の向側で丁度私の家に面したところにある。私はその資金へ寄附する事を甚だ喜んだ、私はこの溫和な佛を愛するからである、そして私はその祭禮は面白いだらうと思つた。翌朝早く私はその堂がすでに花と奉納の提灯とで飾つてあるのを見た。新しいよだれかけが地藏の首の廻りにかけられて、佛式の御膳はその前に供へてあつた。あとで大工連が子供の踊るために地藏堂の廣場に舞臺を組み立てた、そして日のくれる前におもちや屋連が境内に一列の小屋をたてて商店を列べた。夜になつて私は子供の踊りを見るために如何にも綺麗な提灯の光の中へ出かけた、そして私は私の門の前に三尺以上の巨大なとんぼの止まつて居るのを見た。それは私が子供等に與へた少しの助力に對する彼等の感謝のしるしの飾りであつた。私は一時その眞に迫つて居るのにびつくりした、しかしよく調べて見ると、からだは色紙でつつんだ松の枝で、四つの翼は四本の十

能て、光つた頭は小さい土瓶である事を發見した。全體は非常な影のてるやうに置いた提灯ててらされてゐた、その影も考案の一部であつた。美術的材料の一點もなくしてつくつた美感の驚くべき一例であつた、しかも全くそれは僅か八歳の貧しい子供の仕事であつた。

譯者註一　著者は熊本で二度家を借りた。初めは手取本町三十四番地、後に外坪井西堀端町三十五番地に移つた。これ等の事件は多く後の家で起つた。

二

七月三十日。南側の私の隣りの家（低い陰氣な建物）は染物屋である。日本の染物屋のあるところは、日に乾かすために家の前に竹竿の間に絹や木綿の長い切れ、濃い青、紫、薔薇、薄青、銀鼠の色の廣い帶が張り渡してあるのでいつでもすぐに分る。昨日私の隣人がその家庭を訪問するやうに私を誘うた。そしてその小さい表の方を通つたあとて、私はどこか古い京都の御殿に置いてもよい程の庭園に臨んだ奥の綠側から眺めて居る事に氣がついて驚いた。そこに優美な築山の山水があつた、そして淸い水の池があつて不思議に複

雑な尾をもつた金魚がゐた。
暫らくこの景色を眺めて居ると、染物屋は佛間になつて居る小さい部屋へ私を案内した。何でも必要上小規模にできて居るが、私はどこの寺でも、これよりもつと美術的な物を見た覺えはない。彼は私に千五百圓かかつたと告げた、私はそんな金額でどうして足りたか分らなかつた。三つの入念に彫刻した壇、——漆と金とで光つた三重の壇、やさしい佛像の數々、多くの精巧な器物、黑檀の經机、木魚、二つの立派な鐘、つまり一つの寺院の諸道具一式が縮形になつて居た。私の主人は若い時お寺で勉强した事があつた、そして御經を知つてゐた、淨土宗に用ひられる御經は悉くもつてゐた。普通の讀經なら何でもやれると私に語つた。毎日一定の時刻に家族全部がお參りのために佛間に集まる、そして主人は一同のために讀經する。しかし特別の場合には近所の僧が來てお勤めをする。

彼は私に盜賊に關する珍らしい話しをした。染物屋は格別泥棒に入られ易い、幾分はそこに委託してある高價な絹のため、又この職業は儲けが大きいと知られて居るからである。或晩このうちへ泥棒が入つた。主人は町にゐなかつた、老母と妻と女中だけがその時うちにゐた。覆面をして長い刀を携へた三人が、うちに入つた。一人は女中に職人が誰かまだ

この家に居るかと尋ねた。そこで泥棒をおどかさうと思つて、女中は、若い衆は皆未だ仕事をして居ると答へた。しかし泥棒はこの證言にはびくともしなかつた。一人は入口に立番し、二人は寢室へ大股であるいて行つた。女達は驚いて立ち上つた、そして妻は一どうして私達を殺さうとするのです』と尋ねた。頭らしい男は答へた、『殺さうとは思はない、金が要るだけだ。しかし金を出さなけりやからうだ』と云つて刀を疊につきさした。老母は云つた、『どうか嫁をおどかして下さるな。さうすればうちにあるお金はありたけ上げます。しかし御承知下さい。倅は京都へ行つてゐますから澤山あるわけはありません』彼女は金箪笥の引出しと自分の財布とを渡した。丁度二十八圓と八十四錢あつた。泥棒の頭はそれを數へて甚だ穩かに云つた、『あんたをおどかしたい事はない。あんたは大層信心深い人だと云ふ事は知つて居る、それで虛言は云はないだらうね。これで皆ですか』『はい、皆です』彼女は答へた『おつしやる通り私は佛法を信じて居ります、それであなたが今私の物を取りにお出になるのは全く昔私自身前の世であなたの物を取つた事があるからだと信じて居ります。これはその罪のための罰です。それですから虛言を云ふどころか、この際前の世であなたに對して犯した罪の償ひのできる事を有難く思ひます』泥棒は笑つて云つた『あんたはよいおばあさんだ、あんたの云ふ事は疑はない。あんたが貧乏だつたら、

わしもあんたの物を取らうとはしない。そこで着物を二枚ばかりとこれだけ欲しい』と云つて甚だ立派な絹の羽織に手をかけた。老婦人は答へた『倅の着物は皆でも上げませう、しかしそれは取つて下さるな、倅の物ぢやありません、只人から染めるために預かつて居る物ですから。私共の物なら上げますが、人樣のものは上げられません』『それは全く道理だ』泥棒は承認した『それぢやそれは取らない』

僅かの着物を受け取つたあとで、泥棒は甚だ丁寧にお休みなさいと云つたが、婦人達に自分等のあとを見送らないやうに命じた。年老いた女中はやはり戶の近くにゐた。泥棒頭はそこを通つたとき『貴樣は虛言をついたな――それやる』と云つて彼女を打ち倒して氣絕させた。泥棒は一人もその後捕へられなかつた。

三

八月二十九日。或佛敎の宗派の葬式によつて、屍が燒かれた時に、佛樣と云ふ小さい骨、一般に喉の小さい骨と想像される骨が灰の間からさがされる。實際どんな骨だか、そんなかたみを調べる折がなかつたから私は知らない。

火葬のあとで見出されたこの小さい骨の形によつて死者の來世の有樣が豫言される。その魂の次ぎの狀態が幸福であれば、骨は佛の小さい姿の形になる。しかし來世が不幸になる時には醜い形になるか、或は全く形がない。

小さい男の子、隣の煙草屋の倅が一昨夜死んだ、そして今夜死骸が燒かれた。火葬のあとに殘つた小さい骨に、三體の佛の形が發見された、それがあとに殘つた兩親に少しは精神的慰藉を與へるであらう。

註　大阪天王寺ではこの骨が窖へ投ぜられるが、その時の音で、又後生に關する知らせが與へられると信ぜられて居る。この骨が集まつて百年になると、それを粉末にして、それたこねて大佛を造ると云ふ事である。

四

九月十三日。出雲松江からの手紙に、私に羅宇を供給した老人は死んだと云つて來た。（日本のキセルは普通三つの部分、卽ち豆の入る程の大きさの金屬製の雁首と、金屬製の

吸口と、一定の時に取りかへられる竹の軸からできて居る事を讀者は知らねばならない）この老人は羅宇をいつも甚だ綺麗に塗つた、或は豪猪（やまあらし）の刺（はり）のやうに、或は蛇の皮の圓筒のやうに。彼は市（まち）はづれの變な狹い小さい町に住んでゐた。私はその町を知つて居るのは、そこに白子地藏[譯者註一]と云ふ名高い像があるからである、この地藏を私は一度見に行つた。人はその顏を何かの理由で舞子の顏のやうに白くする、その理由を私はどうしても發見する事ができないで居る。

老人にお增と云ふ娘が一人あつた、それについて物語[譯者註二]がある。お增は今も存命である。長い間幸福な妻となつて居るが啞である。ずつと昔怒つた群集が市中の或米相場師の家と倉庫を荒して破壞した。小判の大分交つて居る金錢は往來中にまき散らされた。暴徒（無教育な正直な農夫）はそれを欲しがらなかつた、彼等は盜まうとしないで破壞しようと思つた。しかしお增の父はその晩泥の中から小判を一つ拾つてうちへ歸つた。あとで近所の人が告發したので彼は拘引された。彼を前に引出した判事はその當時十五のはにかんだ娘のお增を詰問して何か證據を得ようとした。彼女はもし續いて答へてゐたら、われ知らず父のためにならない證據を與へる事になるだらうと感じた、彼女は彼女の知つて居る事を何でも彼女に認めさせるやうに造作なく強ゆる事のできる熟練なる審問者の前に居る事を

感じた。彼女は默つてしまつた、そして口から血が流れ出た。只舌をかみ切つて永久に無言になつたのであつた。父は赦された。その行爲に感嘆した或商人は彼女を娶つて年老つた彼女の父を養つた。

譯者註一　この地藏は松江市奥谷萬壽寺にあるとの事。

譯者註二　この話は杵築の事實談。

五

十月十日。子供の生涯のうちに前生の事を覺えてゐてその話をする日が一日、たつた一日だけあると云はれる。

丁度滿二つになるその日に、子供は家の最も靜かなところへ母につれられて箕の中に置かれる。子供は箕の中に坐る。それから母は子供の名を呼んで『お前の前生は何であつたかね、云うてごらん』と云ふ。そこで子供はいつも一言で答へる。不思議な理由で、それよりも長い答の與へられる事はない。時に返事は謎のやうで、それを解釋するのに僧侶か

易者を頼まねばならない事がよくある。たとへば昨日銅鍛冶の小さい倅はその不思議な問に對してただ『梅』と答へた。ところで梅は梅の花か梅の實か、女の名の梅かの意味に取れる　その男の子は女であつたと云ふ意味だらうか、或は梅の木であつたらうか。ある隣人は『人間の魂は梅の木には入らない』と云つた。今朝易者はその謎について問はれて、その男の兒は多分學者か詩人か政治家であつたらう、それは梅の木は學者、政治家、及び學者の守護神である天神の象徵であるからと斷言した。

六

十一月十七日。日本人の生活の事で外國人にはどうしても分らない事を書いた驚くべき書物を作る事ができよう。その書物のうちには稀れてはあるが、しかし恐るべき憤怒の結果に關する研究がなければならない。

國民的法則として日本人は容易に怒りを表はさない。下層社會の間でさへ、重大なる威嚇は微笑と共に、君の恩は忘れない、こちらは感謝して居ると云ふ證言になる事が多い。（しかし、これは私共の言葉の意味て反語と想像してはいけない、それはただ婉曲な辭令

て、――酷い事を本當の名で呼ばないのである）しかしこの微笑の證言は死を意味する事がないとは云へない。復讐の來る時には不意に來る。日本國内なら距離も時間もその復讐者、一日に五十哩歩ける、荷物は極く小さい手拭に皆包める、忍耐は殆んど限りを知らないと云ふその復讐者には、何の故障にもならない。彼は庖丁を選ぶ事もある、しかしそれよりも刀、――日本の刀を使ふ事がもつと多い。これが日本人の手で使はれると最も恐るべき武器となる、そして怒つた人が十人もしくは二十人を殺すに一分まではかからない。下手人は逃れようと考へる事は餘りない。古への習慣は人を殺したら自分で死ぬべき事になつて居る、それ故警官の手に落つる事は恥辱である。豫じめ準備をして書置をして、葬式の用意をして、事によれば（昨年の或物凄い例にあつたやうに）自分の墓石まで彫つて置く。自分の復讐を充分に仕遂げてから自殺する。

熊本から餘り遠くない杉上と云ふ村にさう云ふ分らない悲劇[譯者註一]が一つ、ついこの頃起つた。重もなる役者は、成松一郎、若い店商人、妻おのと二十歳、結婚して僅かに一年、それからおのとの母方の叔父杉本嘉作なるもの、一度入監した事のある怒りつぽい男、これだけであつた。この悲劇は四幕であつた。

第一段。場面――錢湯の內部。杉本嘉作入浴中。成松一郎入場、着物を脫ぎ、自分の親戚の居る事に氣がつかないで蒸氣の立ちこめて居る湯に入る、そして大聲て叫ぶ、――

『あゝ、地獄のやうだ、この湯は、あつい、あつい』

（『地獄』）は佛敎の地獄の意味だが、監獄の事にもなる、――この時は不幸なる暗合であつた）

嘉作（非常に怒つて）『おい小僧、喧嘩をする氣だね、何が氣に入らないんだ』

一郎（不意に出られてびつくりする、しかし勇氣を起して嘉作の調子に反抗する）『なに、何だ、おれが何を云はうと勝手だ。湯が熱いと云つたつてお前にもつと熱くしてくれとは賴まない』

嘉作（けはしくなつて）『おれの失敗で一度ならず二度迄監獄に行つたつて何も不思議な事はない、貴樣はばかか惡者にちがひない』

（互に飛びかかる隙をねらつてにらみ合つて居るが、互にためらつて居る、しかし日本人の口にしないやうな事を云ひ合つて居る。この老いたる人と若い人は互角の力だから手出しができない）

嘉作（一郎が怒つて來るに隨つて靜かになつて來る）『小僧、小僧のくせにこのおれと喧嘩する氣か。貴樣のやうな小僧は妻などもつてどうする。貴樣の妻はおれの親戚だ。地獄から來た男の親戚だ。おれのうちへ返しに來い』

一郎（今腕力では嘉作の方が上手(うはて)である事が充分に分つたので、やけになつて）『おれの妻をかへせ。おれの妻をかへせと云つたな。よし、すぐかへしてやる』

そこまで一切の事は充分分る。それから一郎は歸宅する、妻を愛撫する、彼の愛を彼女に保證する、一切の話をする、それから彼女を嘉作の家でなく兄の家へやる。二日たつて日が暮れてからまもなく、おのとは夫に戸口へ呼ばれてそして二人は夜のやみに消える。

第二段。夜の場面。嘉作の家が閉ぢて居る、雨戸の隙間から光が見える。女の影が近づく。たたく音。雨戸があく。

嘉作の妻（おのとを認めて）『あゝあゝ、よく來てくれたね、どうぞお入り、お茶でもおあがり』

おのと（甚だやさしく云ふ）『どうも有難う。が嘉作さんはどこにお出でですか』

嘉作の妻『外の村へ行きました、しかし直に歸る筈です。入つておまちなさい』

おのと（一層やさしく）『どうも有難う。ちよつとして又參ります。しかし、先づ見に云はねばなりませんから』

（お辭儀する、暗がりにすつと入る、そして又影になる、これが外の影と一緒になる。二つの影が動かずに居る）

第三段。場面、松の木が兩側にある夜の河の堤防。嘉作の家の黑い影が遥かに見える。

おのとと一郎が樹の下に、一郎は提灯をもつ。兩人共白い手拭で鉢卷きをして、身輕に着物をきて、袖にたすきをかけて腕のよくきくやうにして居る。銘々長い刀をもつ。時刻は日本人が、最も適切に云ふ通り『河の音が最も聲高く聞える』時刻である。松の葉に風が長い時々のつぶやきをする外は何の音も聞えない、秋の末で蛙の聲も聞えない時であるから。二つの影は話をしない、河の音が高くなるだけである。

不意に遠くでじやぶじやぶ音がする、誰かが淺い流を渡つて居る、それから下駄のひび

き、不規則なよろよろするひびき、醉どれの足音が段々近づいて來る。醉どれが聲を上げる、嘉作の聲である。彼は歌ふ、

『好いたお方に强いられて、

や　とんとん』

――戀と酒の歌である。

直ちに二つの影が、その歌ひ手の方へ走りよる、彼等の足は草鞋をはいて居るから、音はしないで輕く走られる。嘉作は未だ歌つて居る。不意にゆるい石が一つ足下で動いた、彼は足音をねぢつて怒りのうなりを發する。殆んど同時に彼の顏に近く提灯がさし出される。恐らく三十秒程それがそこにぢつとして居る。誰も物を云はない。黃色の光は三つの顏と云ふよりむしろ妙に表情のない面といふべき物を照して居る。その顏を見て、風呂屋の事件を思ひ出して、そして刀を見て、嘉作の醉が一時にさめる。しかし恐れはしない、そしてやがて嘲りの笑を突發する。

『へつへつ―、一郎夫婦だな。おれを又子供だと思つて居るな。手にそんなものをもつて何をするつもりだ。使ひ方を敎へてやらう』

しかし一郎は提灯を落して突然、兩手に力一杯をこめて斬り下したので、殆んど嘉作の右の腕が肩から離れさうになつた、犧牲がよろめくところを女の刀は左りの肩をつき通した。彼は『人殺し』と一聲恐ろしく叫んで倒れる。しかし彼は再び叫ばない。十分程二つの刀は彼に對して烈しく働いた。未だ燃えて居る提灯はそのすさまじい光景を照して居る。おそく歩いて歸る二人の人は近づいて、聞いて、見て、足から下駄を落して物も云はずに暗がりへ逃げてかへる。一郎とおのとは仕事が苦しかつたから息をつくために提灯のわきに坐る。

十四になる嘉作の倅は父を迎へに走つて來る。彼は歌を聞いて、それから叫び聲を聞いた、しかし未だ恐ろしい事を知らなかつた。二人は彼の近づくがままにして置く。彼がおのとに近づくと、女は彼を捕へてなげ倒して、膝の下で彼の細い腕をねぢて、そして刀を固く握る。しかし未だ喘いで居る一郎は、『いやいや、子供はいけない、その子は何にもしなかつたから』と叫ぶ。おのとは彼を放つてやる。子供は氣抜けして動く事もできない。彼女はひどく彼の顔を打つて『行け』と叫ぶ。彼は走る、叫ぶ事も敢てしないで。

一郎とおのとは斬りさへなんだ物を捨てて、嘉作の家へ行つて大聲で呼ぶ。返事はない、ただ死を覺悟する女と子供の悲しく蹲つて居る沈默があるだけ。しかし彼等は恐るるに反

ばないと告げられる。それから一郎は叫ぶ、
『お葬式の用意をなさい、嘉作は私の手でもう死んだ』
『それから私の手て』とおのとは金切聲て云ふ。
それから足音は退く。

第四段。場面、一郎の家の內部。客間に三人が坐つて居る。一郎、妻、及老母、老母は泣いて居る。

一郎『そこて、母さん、あなたは外に息子がないのですから、あなたを獨りこの世に置いて行くのは本當に惡い事てす。ただお赦しを願ふ外はありません。しかし叔父はいつもあなたのお世話を致します、それて叔父の家へすぐに行つて下さい、もう私共二人は死なねばなりませんから。つまらない拙い死に方は致しません、見上げた立派な死に方を致します。そこてあなたは見てはいけません。さあ、行つて下さい』

老母は悲嘆にくれながら出て行く。彼女の出たあとをしつかり戶締りする。用意ができる。

おのとは劍のさきを喉へつきこむ。しかし彼女はやはりもがく。最後のやさしい言葉て

一郎は一打て首を切つて彼女の苦痛を終りにする。

そしてそれから。

それから彼は硯箱をとり出して硯を用意し、墨をすり、よい筆を選んで、そして注意して選んだ紙の上に歌を五つつくる、最後のはつぎの物である。

『冥土より郵電報があるならば
早く安着申しおくらん』

それから彼は自分の喉を立派に切る。

さて、これ等の事實が公に調査されて居る間に、一郎夫婦はひろく人に好かれ、又二人とも幼時から愛嬌があるので著しかつた事がよく分つて來た。

日本人の起源に關する學術的問題は未だかつて解決されてゐない。しかし時々一部マレイの起源を主張する人は多少の心理的證據を味方にもつて居るやうに思はれる事がある。最も温和な日本女性の從順なやさしさの下に、(そのやさしさについては西洋の人はとて

も想像ができない）事實を目撃せずには全然考へられない冷酷の可能性がある。彼女は千度も容赦する事はできる、云ふ事のできぬ程感ずべき風に千度も自分を犠牲にする事ができる、しかし一つ特別の魂の神經が刺される事があれば、火が赦しても彼女は赦さない。さうなると突然その弱々しく見える婦人に、正直な復讐の信ずべからざる勇氣、恐ろしい用意周到なる撓まない精神が現れる。男子の驚くべき自制と忍耐の下に、達するには甚だ危險な盤石の如き物が存する。妄りにそれにふれる事があれば赦される事はない。しかし怨みはただ偶然に激成される事は殆んどない。動機は嚴密に判斷される。過ちは赦される。故意の惡意は決して赦されない。

富んだどこの家庭ででも、客はよくその家寶をいくつか見せられる事がある。そのうちには殆んどきまつて日本固有なあのやかましい茶の湯に關する道具がある。多分小さい箱が諸君の前に置かれよう。それをあけると讀者は小さい房のついた絹紐で結んだ綺麗な絹の袋を見るであらう。その絹は甚だ柔かな凝つた物で、手のこんだ模樣がある。こんな包みの下にどんな不思議な物が隱れて居るだらう。その袋を開く、又違つた種類の、しかし甚だ立派な袋がもう一つある。それを開くと、驚いた事には、見よ又第三のがあつてそれに第四のを入れて居る。それが第五のを入れ、それが第六のを入れ、それが第七の袋を入

れて居る。その第七の袋に讀者が見た事のないやうな最も奇妙な、最も粗末な、最も堅固な瀨戸物の器が入れてある。しかしそれは珍らしいばかりでなく又貴重である、それは一千年以上を經た物である事がある。

丁度その通り數百年の最も高い社會敎化は日本人の性格を包むに禮讓、優美、忍耐、温和、道德的情操の多くの貴い柔かなおほひをもつてした。しかしこれ等の優しい幾重かのおほひの下に、鐵の如く固い原始的粘土が殘つて居る、――蒙古のあらゆる血氣、――マレイのあらゆる危險なしなやかさでこねられた粘土が。

譯者註一　熊本の新聞で讀んだ事實。明治二十六年十一月頃チエムバレンあての手紙參照。

七

十二月二十八日。私の後庭を圍んで居る高い垣の向うに、最も貧しい階級の人々の居る甚だ小さい何軒かの家の茅の屋根が見える、小さい家の一軒からたえずうなり聲、――苦

しんで居る人の深いうなり聲が聞える。一週間以上夜も晝も聞える、しかしこの頃その聲は段々長くなり高くなる、一息一息が苦痛であるやうだ。私の老いた通譯萬右衞門は非常な同情の顏をして云ふ『誰かあすこで大層惡い』

その聲が私をいらいらさせて來た。『その誰かが死んだら關係のある人々にかへってよからうと思ふが』と私はむしろ殘酷に答へる。

萬右衞門は私の惡い言葉の影響を拂ひ去るやうに兩手で三度早い急な手振をして小さい佛敎のいのりを口の中で唱へて、そして非難するやうな顏をして私のところを去る。それて良心に責められて私は病人のところへ女中をやって醫者があるか、何か世話をしようかと聞きにやった。やがて女中が歸って來て、お醫者はきまって來てくれる事、外に何も施しやうがない事を報告する。

しかし蜘蛛網のやうな手付はしたが、萬右衞門の辛抱强い神經はその響でやはり惱まされて居る事に氣がつく。彼はできるだけ遠ざかりたいから往來に近い小さい表の部屋にゐたいとさへ自狀した。私は書く事も讀む事もできない。私の書齋は一番うしろにあるから、そのうなり聲はそこでは殆んど病人がその部屋に居るやうに聞える。いつでもこんな苦しみの聲のうちに、苦しみの强さの分る一種の物すごい音色がある、そして私は自分で問ひ

つづける。私がそれを聞いて苦しんで居るその本人に取つて、もつと長く苦しみつづける事ができるものだらうか。

午前おそくなつて、そのうなり聲が病室で小さい佛式の太鼓の音と澤山の聲の南無妙法蓮華經の合誦によつて打ち消されるのを聞くのは全く一安心である。たしかにその家に僧侶と親戚が集つて居る。『誰か死ぬのです』と萬右衞門は云ふ。そして彼も又妙法蓮華の讃美の聖い言葉をくりかへす。

題目と太鼓の音が幾時間かつづく。それが止むとうなり聲が又聞える。一息一息がうなりである。夕方になると一層惡くなり恐ろしくなる。それからそれが不意にとまる。數分の間死のやうな沈默がある。そしてそれから烈しい泣音が聞える。女の泣き聲、それから名を呼ぶ聲。萬右衞門は『あゝ誰か死んだ』と云ふ。

私共は相談をする。萬右衞門はそこの人々は哀れに貧しい事を見出した、そして私は良心が咎めるから甚だ僅かの金ですむ葬式の費用を贈らうと云ふ。萬右衞門は私が全くの善意からさうするのだと思つて美はしい事を云ふ。私共は女中をやつて好意を傳へさせ、又できる事なら死人の履歴を知るやうに指圖した。私は何か悲劇らしい事のある事を思はずに居られなかつた、そして日本の悲劇には大概興味がある。

十月二十九日。私の察しの通り死人の話は聞く價値があつた。その家族は四人であつた、父、母、二人とも老年で弱つて居る、それから二人の息子と。死んだのは三十四の長男であつた。七年間病んでゐた。若い弟は車屋で一家を唯一人で支へてゐた。彼は自分の車をもたない、一日使用料を五錢拂つて他人から借りてゐた。强壯で、走る事が早いが儲けが少なかつた、その仕事にはこの節競爭が多過ぎて利益が少い。兩親と病人の兄を養ふのに全力を要した、不撓の自制力がなければ、それをする事はできなかつたらう。彼は一杯の酒を飮むと云ふ樂みさへしなかつた、彼は獨身でゐた、彼は唯兩親と兄に對する義務のために生きてゐた。

これは死んだ兄の話であつた、二十の頃、魚屋の商賣に從事して居る時、彼は或宿屋の綺麗な女中を愛するやうになつた、その女は彼の愛に酬いた。彼等は互に深く約束した。しかし結婚に邪魔が起つた。女は多少財產のある人の注意を惹く程綺麗であつた、その男は習慣通り彼女を貰ひに來た。彼女はその男を嫌つた、しかしその男の申込みの條件は兩親をその方へ決心させた。一緒になれないのに絕望して二人は情死をする事に決心した。どこかで夜彼等は會つた、酒を酌交して二人は約束を新たにし、世間に暇乞をした。若者は劍の一打で愛人を殺してすぐあとで同じ刀で自分の喉を切つた。しかし人々は彼の息の

切れないうちにその部屋へかけ込んで、刀を奪ひ取り、警官を迎へにやり、師團から軍醫を招いた。その未遂の自殺者は病院へ運ばれ、巧みに看護されて健康になり、それから數ケ月の恢復期ののちに殺人犯の取調を受ける事になつた。

どんな宣告が下つたか、私はよく知る事ができなかつた。當時日本の裁判官は人情にからんだ犯罪を扱ふ時に餘程自分の獨斷的判斷を用ひた。そして彼等の憐みの行は西洋の模範でできた法典で未だ制限される事はなかつた。多分この場合では情死に生き殘つた事それだけが甚しい罰であると考へたのであらう。輿論はこんな場合には法律よりも無慈悲である。禁錮の或期間のあとでこの不幸な人は家へ歸る事を許されたが、たえず警察の監視を受けてゐた。人々は彼を避けた。生き殘つたのは彼の誤であつた。ただ兩親と弟は彼の味方であつた。そして間もなく彼は名狀のできない肉體の苦痛の犧牲となつた。しかし彼は生に執着してゐた。

當時事情の許す限り巧みに手當はされたが喉の古疵は恐るべき惱みを起し出した。表面は直つてゐたが、何か徐々たる癌種的形成がそれから擴がつて烈の通つた氣管の上下へ達した。外科醫の刀、燒鏝の苦しみはただその最期を延すだけであつた、しかしその人はたえず增加して來る苦しみの七年間生き長らへた。死人を裏切つた結果、一緒に冥途に旅し

ようと互に約束した事を破つた結果について不吉な信仰がある。殺された女の手がいつてもその疵を又開いたのだ、外科醫が晝のうちに仕上げた事を夜又もとにかへしたのだと人人は云つた。夜になると苦痛はいつでも增し、心中を企てた丁度その時刻には最も恐ろしくなつたからである。

その間節約と非常な自制とによつて、そのうちの人々は藥代、看護人、及び彼等自身がかつてそんな贅澤をした事がないやうな滋養物に拂ふ方法を講じた。彼等は彼等の恥、貧乏、負擔になる物の生命をできるだけの方法で延した。そして今死がその負擔を取り去つたので彼等は泣く。

恐らく、私共凡てはどんなに苦しくともそれに對して犧牲をするやうになつて居る者を愛するやうになるのである。實際私共に最も多くの苦痛を與へる者を最も多く愛するのではないかと云ふ疑問を起してもよからう。

石佛

一

官立學校(譯者註)の後ろの丘陵の巓(いただき)に——小さく仕切つた畠が段をなして斜面に重なつて居る其上に——村の古い墓地がある。が黒髮村の住民は今はもつと奥の方に死人を埋めるので、最早此處は用ゐられない。そして畠は既に此舊墓地の限界を侵蝕し初めつつある樣である。

譯者註　第五高等學校の事。

授業時間の間に一時間の閑暇(ひま)があるので、自分は此小山の巓を訪うて見ようと決心する。登る途中は無害な小さい黑い蛇が道を切つてのたくり、朽葉色した無數の蝗蟲が自分の影にざわめき立つ。未だ墓地の入口の破れた石段に達せぬ中に、小さい畦路(あぜみち)は野草に蔽はれて見えなくなる。墓地の中にも全く路はない——雜草と礫石があるばかり。併し此巓から

の見晴らしはよい。廣く青い肥後の平野が見え、其向うには眞靑な山嶺が半圓形をなして地平線の光りに映えて見え、更に其向うには阿蘇の火口丘が永遠の烟を噴いて居る。

自分の下には、近代都市の縮圖の樣な學校が鳥瞰圖の如くに見えて居る、皆一八八七年建造の、窓の澤山ある建物で、それが長く連らなつて居る。これは十九世紀の純實用的の建築を代表するもので、之をケントやアウクランドやさてはニュー・ハンプシャアに移しても少しも時代の調子に合はぬやうに見ゆることはあるまい。併し其上に段階をなして連らなる畠と、働いて居る農夫の姿とは五世紀頃のものとも見れば見られる。自分が倚り懸かれる墓の上に刻してある文字は梵語の音譯である。そして自分の側には、石の蓮華の上に加藤清正時代に坐せしままの態度で今も坐せる佛像がある。此佛の瞑想的の眼光は、半眼に開ける眼瞼の間から、學校と其騷がしい生活を見下ろし、そして怒るに怒られぬ傷害を受けた者が微笑する樣に微笑して居る。但しこれは彫刻師が刻み出した表情ではない。苔と垢とに歪められた結果である。自分は又兩手も缺けて居るのを認めた。氣の毒になつて自分は佛の額の象徵的な小突起から苔を搔き退けようと努める——『法華經』の古い經文の一節を想起しながら。

『世尊の眉間の白毫から一道の光明發出した。其及ぶ所一百八十萬の諸佛世界に亙り、下は阿鼻地獄、上は娑婆世界のはてに至る迄、悉く光明に照らされた。娑婆六道の界に在る者一として照らされざるなく、佛土涅槃の境地にある諸佛亦悉く照らし出された』

二

太陽は自分の背後に高く、前方の風景は古い日本の繪本にある通りだ。古い日本の彩色版には原則として影がないが、肥後の平野には全く影がなく綠色に展開し、地平線上には青い山嶺の幻が熾烈な光の中に漂ふ樣に見ゆる。併し此廣濶な平面は一樣な綠色ではない。あらゆる調子の綠色が帶の樣に、縫ひ目の樣に交錯し、丁度筆で染め出したやうである。此點も亦日本の繪本の中の景色に似て居る。

初めて日本の繪本を開いた者は、特に意想外な印象、驚愕の感を受ける。そして『日本人といふものは、珍妙不思議な風に自然を感じたり見たりするな』と考へさせらるる。此驚異の感は段々大きくなる。『抑も日本人の感覺は吾等のとは全然異るのであらうか』といふ疑が起こる。いかにもそんな事もあり得べきだ。併しも少し見て居ると第三の、そし

て最後の考が判然と浮かんで前の二つを確證する。日本の繪は同じ景色を描いた西洋の繪よりも一層自然に近いことを――西洋畫にはない自然の感じを喚起することを感ずる。そして實に其處には樣々の新たに發見すべきことが含まれて居る。併しその前にも一つつぎの樣な疑問が起こるであらう。「これは不思議に判然して居る。云ふに云はれぬ此色は正しく自然の色である。併し何故こんなに不氣味に見えるだらう』

それは主として影のない爲めである。直ぐ影のないのに氣附かせないのは、色彩の價値を識別し、之を驅使する驚くべき技能に依るのである。併し風景は光線が一方から來ないで、全體が光線に涵されて居るかのやうに描かるる。實際風景はこんな風に見ゆる瞬間があるのだが、西洋の畫家はそれを硏究して居ない。

但し昔の日本人は月下の影を愛して、それを描いたことも忘れてはならぬ。それは月影は幽玄で、色彩に何の交渉もないからである。併し白日の下に萬象の姿を暗くし其美を傷ける影を好まぬ。若し晝景色に影の點景があつたら、それはほんの薄い影である――夏の雲の下に移動する薄暗がりのやうなもので、ただ色の調子をかへるだけである。又日本人に取つては外界のみならず、內的世界も同樣に明かるいものであつた。心理的に彼等は影のない人生を見て居た。

其時西洋が彼等の佛教的平和を破つて闖入した。そして彼等の繪を見て買收を始め、取り殘された繪の中で優れたるものを保存する爲めに、國法が布かれるまで止めなかつた。最早買收すべきものもなくなり、しかも新作品が出ては、既に買收したものの價値が下落することもあらうと思はれた時、西洋は云つた。『さう云ふ風に物を見たり描いたりすることはやめ給へ。それは藝術ではない。影の見方を學ばれよ。そして、傳授料を此方(こつち)へ遣はされよ』

かくて日本は謝禮を拂うて自然の影、人生の影、思想の影の見方を習つた。西洋は神聖な太陽の唯一の業務は、安價な影の製造であることを教へた。又高價な影は西洋文明のみが産出し得ることを教へて、之を嘆美し採用することを勸めた。其處で日本は機械や烟突や電信柱の影に驚嘆した。鑛山、工場及び其處に働く人間の心の影に驚嘆した。二十階も高い家屋と其下に食を乞ふ飢餓の影、貧乏を增加するばかりの大きな慈善の影、惡弊を增加するばかりの社會改革の影、虛譌、僞善と燕尾服の影、さては火刑にする爲めに人間を作つたと云はるゝ外國の神(ゴッド)の影に驚嘆した。此處迄來て日本は稍ゝ本氣に復つて、此上影繪を學ぶことを拒絕した。世界に取つては幸運にも、日本は最初の比類なき藝術に復歸した。日本に取つては幸運にも、本來の美しい信仰に立ち戻つた。併し影の幾分かは尚ほ其

生活にこびりついて居る。恐らくそれを全く脱却することは出來まい。最早再び萬有が前の様に美しく日本の眼に映ずることはあるまい。

三

墓地の直ぐ向うては、生垣て圍つた狹い畠の中に、一人の百姓が牛を使つて神代の鋤て黒い土を犂いて居ると、女房が日本建國よりも古い耨で跡をならして居る。人も牛も勞働は生活の代價であるといふ考に、容赦なくせき立てらるゝかの如く、妙に熱心に働いて居る

其百姓を自分は前世紀の錦繪の中て屢ゝ見た。もつと古い掛物の中でも見た。更にずつと古い屏風の繪でも見た。正しく同一物である。數へ切れぬ程の他の風習は消滅しても、百姓の編笠と簑と草鞋とは依然として殘つて居る。其扮裝よりも更に古いのは、比較にならぬ程古いのは彼自身てある。彼が耕す土は、實に幾千萬回か彼を呑み込んだが、其度毎に彼を吐き出して新たな生命を賦與し、新たな力を與へた。そして彼は此反復更新に滿足し、それ以上を要求せぬ。山は其形を變へ、河は其流を改め、星も空に其位置を更へたが、

彼は決して變はることがない。彼自身は變はる事なくとも彼は變化を作り出す本元である。彼の勞働の總額から軍艦が生まれる、鐵道が生まれる、石造の宮殿が生まれる。大學や新學問、電信、電燈、連發銃、さては科學の機關、商業の機關、戰爭の機關、皆彼の手から代價を拂はるゝのである。彼はあらゆる物の寄附者である。其代りとして彼が與へらるゝ物は——永久に働く權利ばかり。さればこそ彼は人間の新しい生命を植ゑ附ける爲めに、幾千年の過去を犁くのである。かくて世界の仕事が終はるまで——人間の終末まで、働き續けるであらう。

併し其終末とはどんなものだらう。惡るいものか善いものか。それとも我等人類には遂に解き難き祕密であるだらうか。

西洋の智者は之に答へて云ふてあらう。『人間の進化は完全と幸福とへの進展である。進化の目標は平衡である。惡は善なるもののみが殘る迄、一つ一つ消失するであらう。其時知識は極度に展開せらるゝであらう。心は尤も驚異すべき花を咲かすであらう。精神の一切の煩悶と苦惱は止むであらう。生活のあらゆる禍害と過誤は消失するであらう。人間は不死といふ事の外、凡てに於て神の如くなるであらう。各人の壽命は幾百年に延ぶるであらう。生のあらゆる喜びは、詩人の夢よりも美しい地上の樂苑に於て、萬人共通のもの

となるであらう。又治者もなく、被治者もなく、政府もなく法律もなくなるであらう。一切の秩序はただ愛に依つて決せられるであらう』

併しそれから後はどうなる。

『それから後はどうなる。おゝそれから後は、勢力不滅の法、其他宇宙の理法に依つて壞崩の時が來る。一切の結合せるもの悉く解體するであらう。これは科學の證明する所である』

然らば一切の得られた物は失はれ、一切の作られた物は破壞さるゝであらう。一切の打勝たれた物は打勝ち、一切の利福の爲めに嘗めさせられた苦艱は再び無意味に嘗めさせられるであらう。未知から過去の無限の苦痛が生まれた如く、未知へ將來の無限の苦痛は沒するであらう。然らば吾等の進化の價値は何處にある。生の――闇と闇との間の幻の様な此の閃光の意味は何處にある。進化とは絕對神祕から寂滅への移行であるか。彼の編笠の農夫が、之を最後に己が耕す土中に永久に歸つて仕舞つたら、其時今迄幾百萬年の勞働は果たして何の役に立つてあらう。

西洋は云ふ、『否、さういふ意味の寂滅といふものはない。死はただ變化を意味す。其後には別の宇宙が現はるゝであらう。我等に壞崩を信ぜしむる所のものは、同様に更生を

信ぜしむる。溶けて星雲となつた宇宙は、再び凝つて別に無數の世界を形成する。其時彼の農夫は忍耐强き牛と共に再現し、紫色若しくは菫色の太陽の下で何處かの土地を耕すであらう』併し其復活の後はどうなる。『新たな進化が起こり、新たな平衡が現はれ、新たな壞崩が來る。これが科學の敎ふる所、これが恆久の法則である』

併し其復活した生は果たして常に新しいであらうか。寧ろ無限に古いのではあるまいか。現在あるものは確に永久にあるに相違ないと同樣に、將來あらんとするものは永くあつたものに相違ない。終りなきが如く始めもなかつたに相違ない。さう考へると、時といふものも幻覺に過ぎない、そして替はり番に現はれる幾千億の太陽の下に新しいものは何もない。死も死てない、休息てない、苦の終はりでもない。ただ恐ろしい虛僞である。しかも此永久の苦痛の渦卷からの逃げ路は誰れも知らぬ。然らば彼の編笠の農夫より我等は少しも優つては居らぬ。彼はそれを知つて居る。彼は子供の時寺小屋で手習を習つた僧侶から、彼自身には無數の前身があつた事や、宇宙が出現したり消滅したりする事や、さては生の統一などに就いて敎へられて居る。西洋人が數理的に發見した所のものは、東洋人には佛陀出現前から知られて居る。どうして知つたかと云へば、宇宙の度々の壞崩にも拘らず、生き殘つた記憶があつたのであらう。併しそれはどうであらうと、西洋人の所說は非常に

舊い。ただ方式のみが新しく、東洋古來の宇宙說を肯定したに過ぎぬ。そして永久の謎のもつれを益〻もつらすばかりである。

かう云ふと西洋は答へる、『さうでない。乃公(おれ)は世界が或は現はれ或は消ゆる永久作用の韻律(リズム)を發見した。乃公は凡ての有情生物を發展させる苦痛の法則、思想を發展させる苦痛の法則を推測した。乃公は悲みの減ぜられる方法を發見し、發表した。乃公は努力の必要と、生の最高義務を敎へた。生の義務を知る事は、たしかに人間に尤も價値ある知識である』

或はさうであらう。併し西洋人の發表した樣な必要の知識、義務の知識は、彼等が未生以前から存在する知識である。多分彼の農夫は此地球上で五萬年も前にそれを知つて居たらう。いや神々にさへ忘られた古い古い昔に、今は消え失せたもとの地球上にあつた時でも知つて居たらう。若しこれが西洋人の知識のどん底なら、彼の編笠の農夫は佛陀に依つて無知の者――『生き替はり死に替はり墓地を賑やかす』者の中に數へられては居るが、知識に於ては我等と同等である。

科學は之に答へて云ふ、『農夫は知るとは云へぬ。精々ただ信ずるのみだ、或は信ずる

積りて居るのだ。彼を教へた最も賢明な僧侶でさへ證明する事は出來ぬのだ。乃公のみが證明した。乃公のみが絕對の證明を與へたのだ。乃公は破滅を證明したと非難されるが、倫理的革新を證明したのだ。乃公は人知の超ゆ可からざる最極限を定めた。併し又最高の疑問——此疑問は卽ち希望の實體であるが故に、至つて有益な疑問——の動かす可からざる基礎を永久に定めた。乃公は人間の思考行爲はどんな小さいものでも、永遠の中へ沒入する日に見えぬ震動に依つて、自ら登錄しつつ永久に記錄を殘すことを示した。そして乃公は恒久の眞理の上に新道德の基礎を置いた。尤も之に依つて古來の信條を只だ毀ばかりにはしたが』

然り西洋の信條を毀ばかりにした。併し更に古い東洋の信條をではない。未だ西洋人はそれを度つても見ない。此農夫の信條の一部は西洋人が吾人の爲めに證明した以上、彼自らそれを證明し得ぬとて何でもない。彼は其上に西人を遙かに超越する他の信條を有する。彼は其上に西人を遙かに超越する他の信條を有する。併し彼はそれ以上を教へられた。げに彼も行爲と思想は人の死後迄殘ることを教へられた。併し彼はそれ以上を教へられた。彼は各人の思想行爲は、己れ一個人の存在の埓を越えて、未だ生まれざる他人の生に影響することを教へられた。又彼は最も祕密な願望を制御すべきことを教へられた。それはそんな願望は、樣々な潛在せる能力を有するからである。そして彼は之を彼が着る簑の藁の

様に質素な言葉と簡單に織り成せる思想とて教へられた。彼が自分の所說を證明し得ぬとてそれが何か、西洋人が彼の爲めに、又廣く世人の爲めに證明したてはないか。いかにも彼はただ未來に關する說を有したのみてあるが、西洋人はそれが全く夢に基するものてないといふ、爭ふべからざる證據を提供した。又西洋人の從來の研究は、ただ彼が單純な頭の中に蓄積した所信の一部を、確證するに過ぎなんだことを思ふと、將來の研究も、亦西洋人が未だ調査の勞を取らぬ彼が所信の、他の一部の眞なることを、證するに過ぎまいと臆定しても全く愚てはあるまい。

『例へば、地震は大きな鯰の所爲と云ふが如きことをか』

嘲笑し給ふな。そんな事に就ては我等西人の思想も遂二三代前迄は丁度そんな馬鹿らしいものてあつたのだ。否、自分の意味することは、行爲と思想は、只だ人間あつて而して後に起こる事件てあるのみてない、人間を作る素因てもあるといふ、古い教理の事てある。それは經文にもかう書いてある。『我々の現在は凡て考へた事の結果てある。考へた事に基礎を有し、考へた事て作られたのてある』

此處で自分には妙な實話が想ひ出さるる。

四

現世の不運は前世で犯した罪過の結果で、現世の過失は來世に祟るといふ一般民衆の所信は、多分佛教よりも古く、しかも佛敎の立派な倫理觀と相牴觸せざる、樣々な迷信に依つて妙に助成せられる。其中で恐らく尤も著しいのは、心の極の奧底でも人を呪ふと、それが他人に不祥な影響を及ぼすといふ事である。

自分の友人の一人が今住んで居る家は憑物がして居たといふ。其家は並外づれて明かるく、非常に美しく、そして比較的新しいから、憑物がして居るとは想像し難い。隅々端々まで暗い處もなく、周圍は大きな明かるい庭になつて居る――九州風の風景庭園で、幽靈の隱れるやうな大木もない。けれども憑物がして居た、それも白晝に出た。

讀者は先づ此極東には、二種類の憑靈があることを知らねばならぬ。死靈と生靈とである。死靈は單に死人の靈で、此國でも他國に於けると同じく、夜間のみ現はれるといふ古來の習慣に從ふ。併し生靈は生ける人の靈で、これはいつ何時でも現はれる。そしてこれ

は人を殺す力があるので、死靈よりも遙かに恐ろしい。

處が今云つた家には生靈が憑いて居るのである。

其家を建てた人は金持ちて且つ尊敬された役人であつた。彼は老後を樂む爲めに其家を設計し、工竣はるや美しい品々を集め、軒には風鈴を下げなどした。白木の良材の羽目板には、秀でた畫工が、燦爛たる櫻と梅の枝、松の木の頂上に金色の眼したる鷹の棲れる姿、楓樹の陰に食を漁る華奢な鹿の子、雪中の鴨、飛ぶ白鷺、燕子花の花、水中の月を攫む手長猿、其外あらゆる四季の景物、幸運の象徴などを描いた。

家主は實に幸運な人であつた。けれども只だ一つの嘆きがあつた——彼には跡取りの子がなかつた。そこで妻の承諾を得、古來の習慣に從つて、子を生ませる爲めの女を家に入れた——田舍出の若い女て莫大な報酬の約束があつた。やがて男子が生まれて女は還された。そして其男子をして實母を知らしめぬ爲めに、乳母が雇ひ入れられた。これは凡て前以て契約されたので、古來の慣例の認むる所てあつた。併し男子の母が還される時、前に與へた約束は履行されなかつた。

程なく金持ちの主人は病みついて、日に日に重るのみてあつた。家人は此家には生靈が憑いてると云ひ出した。數人の名醫が出來るだけの手當てをしても衰弱は加はるばかり、

遂には彼等も最早絶望だと白狀した。妻は氏神に供物を供へて平癒を祈つた。併し氏神はかういふ答へを與へた。『これは人に難儀をかけた報てある。其人の宥恕を得、かけた難儀を償ひ、罪亡ぼしをせねば病人は助からぬ。其方の家には生靈の祟りがある』

それを聞いて、病人は思ひ出した。そして良心に責められ、遂に家來を遣はして女を家に呼び戾さうとした。併し女は居なかつた――何處か四千萬同胞の中に行衞を失つて居た。そこで病氣は益〻重る、捜索は無効に歸する、さうする中に數週間が過ぎた。すると門に一人の百姓が來て女の在家を知つてる、旅費さへ與れるなら尋ねて見ようと告げた。併し病人は聞いて云つた、『いや、もう遲い。彼女が己を宥さうと思つても宥すことは出來まい』そして死んだ。

其後寡婦と一族と小兒とは此新宅を棄て、緣もゆかりもない人が移り住んだ。

奇妙な事には、世人は小兒の母を非難した――憑依の罪を責めるのであつた。

自分は最初不思議に思つた。それは此事件の正邪曲直に關して何等自分に判然した意見があつた爲めではない。自分は精しい顚末を知る事が出來ぬのだから、そんな判斷を下すことは出來る筈がない。併し人々の批評を甚だ奇怪だと思つた。

何故だらう。それは只だ生靈を出すのは、出す者が故意にする譯ではないからである。

それは決して妖術ではないのである。生靈は當人が知らずに出て行くのである。（意識的に物を出すと信ぜられてる妖術もあるが、生靈はさうでない）これて讀者は自分が若い女が受ける非難を甚だ不思議と思つた理由が分かつたてあらう。

併し此問題の解決は讀者には想像がつくまいと思ふ。それは全く西洋には知られてない觀念を含む宗教的の問題なのである。生靈の出た女は決して妖女として非難はされぬ。人人は彼女が意識的に生靈を出したとは噯氣にも出さぬのみか、彼女の不平を至當とし同情して居る。ただ彼女が甚だしく恨んで居る事を――腹の中の憤怨を十分に制御せぬ事を非難したのである。その故は、人知れず怨恨を抱いて之を抑制せぬと、不祥な結果を他に及ぼすといふことは、彼女も心得て居べき筈だからてある。

自分は生靈などといふものが、良心の苛責としての外、存在し得べきであると、臆定して貰はうとは思はぬ。併し此思想も行爲を愼ませる感化力としては價値がある。其上此思想は暗示的である。心の奧の呪、外へ漏らさぬ怨恨、包める憎惡などが、此等を懷抱せる意志の外に力を及ぼさぬとは、誰れが斷言し得よう。佛陀のつぎの詞には西洋の倫理が認め能はぬ深い意味がありはせぬか。『憎惡は如何なる時でも憎惡に依つて停止されぬ。憎惡は愛に依つて停止せられる。是れ古來の法則てある』それは佛陀の時ても古法てあつた。

我等の時代にはかう云はれて居る。『人汝に害惡を爲す時、汝之を怒らざれば、其害惡は消滅す』併し果たして消滅するだらうか。之を怒らぬだけで果たして十分であらうか。害惡を爲されたと感じた時心に起こつた動搖は單に被害者が何の行動もせぬといふだけで消滅するだらうか。どんな力でも力は消滅せぬ。我等の知る力はただ形を變へ得るのみだ。此事は我等の知らぬ力に於ても然りであらう。而して生命感覺、意志——凡て『我』なる無窮の神祕を形成するものは皆我等の知らぬ力である。

五

科學は答へる。『科學の職務は人間の經驗を組織立てるにある、幽靈に就て學說を立てるのではない。そして時代精神は、日本に於てさへ、科學が取る此態度を支持する。彼の下[註]では今何を敎へつつあるか——予の敎旨か、抑も草鞋穿きの百姓の敎旨か』

註　五高の建物を指す。

そこで石佛と自分とは共に學校を見下ろす。すると佛の微笑は——多分光線の變化の故

に――表情を變へて嘲笑となつたやうに見ゆる。併し實は彼は非常な强敵の要塞を瞰下しつつあるのである。三十三人の教師に依る四百の青年の教育には、信仰の教授は少しもない。ただ事實の教授のみ――人間の經驗を組織した明確な結果のみが教授せらるゝのである。自分は絶對に信ずる、若し三十三人中の誰れにても、佛教の事に關して問うて見た所で（漢文の教師である七十歳の一老人を除いては）答へ得る者は一人もあるまい。彼等は新時代の人間で、こんな問題は簑を着る百姓のみの考へる問題だ、明治二十六年の現代に於ては、學者は須らく人間經驗の組織の結果に沒頭すべきであると考へて居る。併し人間經驗の組織化は、決して何處から、何處へ、或は最大の難問たる何故に、に就て吾人を啓發する處がない。

『生の大法は一因より出發する――此大法を破壞するも亦此一因なりと佛陀は說いた。大釋迦牟尼は實にかかる眞理をさへ說き給ふ』

自分は考へた。此國に於ける科學の教授は遂に佛陀の教へを忘れしむるであらうか。科學は又答へる。『一信仰の生存權の有無は、科學の啓示を受納し之を利用する力の有無に依る。科學は證明し得ぬものを肯定せぬと同樣に、合理的に反證し得ぬものを否認せぬ。超自然力（神佛）の論議は人間性の止むを得ざるものとして、科學は承認し且つ憐れ

む。其論議が科學の事實と並行線に進む間だけは、汝も、簑着る百姓と共に論議を續けて差し支へない。併しそれから先きはいけない』

それて自分は石佛の微笑の深い諷刺から靈感を求めつつ並行線上の論議を試みる。

六

近代學問の全傾向、科學教育の全傾向は、古印度の婆羅門が考へた如く超自然力は人間の祈願を受け付けぬといふ終局的確信に向ひつつある。我等の中にも、西洋の信仰は結局永久に消滅し、我等の心的成年期に達すれば我等をして神に手縁(たよ)らず、自分のみに手縁らむこと、恰も愛情深き母も、遂には其子を手放すに至るが如きであると感知して居る者が少くない。其遠き將來に於ては、信仰は其役目を果たし終はり、我等をして十分に或る永久の精神的法則を承認せしめ、十分により深い人間同志の同情を成熟せしめ、又十分に寓話や童話や方便の虛僞に依つて、深刻な生の眞理を會得せしめた上て消滅するてあらう。——人間同志の愛の外、神の愛などといふもののない事を、世には全能の神も救世主も守護神もないことを、我等には我等自身の外に逃げ場のないことを知らしめた上て。

けれども其遠き將來の日に於てさへ、數千年前佛陀に依つて與へられた啓示には我等も辟易せざるを得ぬであらう。『己れ己れの燈火たれ。己れ己れの逃げ場たれ。他の逃げ場に赴くことなかれ。佛はただ指導者に過ぎず。眞理に縋ること燈火に手繰る如くなれ。逃げ場として眞理に縋れ。己れ以外に逃げ場を求むることなかれ』

此語驚くべきではないか。けれども天の助け、天の愛といふ美しい長夜の夢から、茫然と目覺めるといふ前途も、人間に取つて尤も淺ましい前途ではない。もつと淺ましい前途がある。それも東洋の思想に依つて暗示されて居る。科學はリヒテルの夢――死んだ子等が父ジエーサスを求むれども逢はぬといふ夢の實現よりも遙かに恐ろしい發見を、我等自ら爲すがままに委ねて置くかも知れぬ。唯物論者の信仰否定の中にさへ、或る慰藉の信仰があつた――自己斷絕の、永久忘却の自信があつた。併し現存の思索家にはそんな信仰もない。我等は多分將來此小世界の上で遭遇するあらゆる難問を征服した後、更に其先きに征服すべき障害が我等を待つて居る事を、自ら會得せねばなるまい――如何なる組織の世界よりも洪大な障害が――幾百千萬の組織を有する、想像をだも許さぬ全宇宙よりも洪大な障害が待つて居る事を、又我等の仕事は今始つた許りである事を、そして云ふを得ず考ふるを得ざる程の時劫の助力の外には、如何なる助力の影さへも與へられぬことを會得せ

ねばなるまい。我等が逃るゝことの出來ぬ生死の輪廻は、我等自ら作るもの、我等自ら求むるものなることをいつかは知るてあらう――又三千世界を結び附ける力は過去の業障なることを――永久の悲哀は飽くなき願望の永久の飢餓に過ぎざることを――そして又燃え盡くした日輪は死せる生命の不盡不滅の情炎に依つてのみ再び點火せられることを、いつかは知るてあらう

柔　術

人之生也柔弱。其死也堅強。草木之生也柔脆、其死也枯槁。故堅強者死之徒。柔弱者生之徒。是以兵強則不勝、木強則折。

「老子道德經」

一

官立學校の構内に他の校舍とは全く構造を異にする建物がある。紙の代はりにガラスを張つた障子がある外は、純粹の日本建築と云つてよい。長く廣い一階建ての家で、唯だ一つの大きな室があるばかり。床は百枚の疊が　厚に敷かれてある。又此建物には日本名がついて居る――瑞邦館――『聖き國の廣間』と云ふことを意味する。其名を表はす漢字は、

入口の上の小扁額に、皇族の一親王の手に依つて書かれてある。内には何の家具もない、も一つの扁額と二つの繪畫が壁に掛けてあるばかり。繪畫の一は、内亂の折、忠義の爲めに決死隊を組織した十七人の勇敢なる少年より成る、有名な『白虎隊』を描けるもの、他の一は、漢文の敎授、秋月氏の油畫肖像である。氏は會津の人で、老いて益ゝ敬愛せられるが、若い時には有名な武士であつた。其頃は武士や紳士の養成には今日よりも遙かに大なる敎養を要したのである。も一つの扁額には勝伯の手で漢字が書いてあるが、其文字は『深淵な知識は最上の所有物』なりとの意味を寓する。

併し此大きな空洞(がらんどう)の室で敎へらるゝ知識は何であらう。それは柔術と云はるゝ物である。

柔術とは何か。

ここで自分は斷わつて置かねばならぬが、自分は柔術は殆ど少しも出來ぬのである。この術は少年の時から學び初めねばならぬ。そして先づこれならばと云ふ程度に習得するにも、尚ほ長き間學修を續けねばならぬのである。名手となるには、優れた天分を有するとしても、七年間の不斷の練習を要する。自分は柔術の精しい話は出來ぬが、ただ其原理に就て敢て概要を語らうとするのである。

柔術とは武器なくして戰ふ、古武士の術である。門外漢には相撲の樣に見える。柔術演

習中、瑞邦館に入るならば、十人若しくは十二人の若い柔輭な學生が、素足素手で、互に疊の上へ倒し合つてる、其周圍には一群の學友がそれを凝視して居るのを見るであらう。此時ただ妙に思はれるのは室內闃として聲なきことである。一語も發せられず、讚嘆のけはひも面白さうな素振りも表はさず、微笑する顏さへない。絕對平靜、これが柔術道場の規約の要請する所である。併し此全員の平靜なことと、此大勢の沈默せることのみが多分看者に異常の感を與ふるであらう。

若し看者が本職の力士ならば、もつと目につく事があるに相違ない。彼は稽古中の青年等は、力を用ふるに非常に用心深くして居る事、又握るのも、制へるのも、投げるのも一風變つて居て、同時に危險な手捌きである事を見て取るだらう。非常に用心深いにも拘らず、彼は全體が危險な稽古であると判斷し、西洋流の『科學的』な規則の採用を忠告したい氣になるだらう。

併し此術の實行は――稽古でなく――西洋の力士が一見して推察するよりもずつと危險なのである。其處に居る師範は、華奢に見えても、普通の力士を、恐らく二分間にして不具にする事が出來るだらう。柔術は決して見せる爲めの術でない、見物人を喜ばす爲めの技術の練習でない。これは尤も嚴密な意味に於ける自衞術である、戰術である。斯道の達

人は、術を知らぬ相手に瞬く間に戰鬪力を失はしむる事が出來る。彼は或る恐ろしい早技て、突然敵の肩を脫臼せしめ、關節を外づし、腱を切り或は骨を折る――それも何等目にとまる努力もせずにてある。彼は鬪士てあるばかりてない――解剖學者てもある。其上敵を殺す手捌きを知つて居る――恰も電擊に依つての如くに。併し此致命的の祕術は、其濫用を殆ど不可能ならしむる底の條件の下にあらざれば、彼は之を何人にも傳授せざることを誓つて居る。完全な自制心を有し、非難すべからざる道德堅固の人にのみ傳授さるゝといふのが堅い慣例てある。

併し自分が讀者の注意を促したい事實は、柔術の達人は決して己れの力に手緣らぬといふ事てある。彼は最大危機に臨んても、殆ど己れの力を使用せぬのてある。然らば何を用ふるか。單に相手の力を用ふるのてある。相手の力こそ、相手を倒す唯一の武器てある。柔術は敵の力に依つて勝ちを制せよと敎ふる。敵の力が大なれば大なる程敵には不利て、己れには有利てある。自分は柔術の大師範の一人から、自分が愚かにも、弟子中の最上の者と想像した强壯な一學生に、此術を敎ふるの甚だ困難なることを聞いて、少からず驚いた事を記憶して居る。其理由を聞けば答へて云ふ、『彼は己れの腕力に依賴し、それを使用するからてある』と。柔術といふ名が既に逆らはずして勝つといふことを意味するのて

ある。

註　嘉納治五郎氏の事。氏は數年前『亞細亞協會紀要』に、柔術に關する興味ある論文を寄稿した事がある。

自分の云ふ事は恐らく說明にはなるまい、ただ參考になるだけであらう。拳鬪術で『受止め』といふ語は誰れでも知つて居る。が此語を以て柔術の逆らはぬ手にしつくりと當てはめる譯にいかぬ。拳鬪家が受け止める時は、全力を相手の衝擊に對抗せしめるのだが、柔術の達人は正しく其反對に出るのであるから。併しそれでも拳鬪の受け止めと柔術の逆らはぬ手との間にはかういふ似寄りがある——何れの場合に於ても此手を食ふ相手は自ら統制し得ざる己れの攻擊力に依つて負けると云ふ似寄りがある。然らば大體に於て柔術には、あらゆる撚り、扭り、押し、引きなどの場合に、一種の『受止め』を以て之に對抗すると云つても宜からう。ただ達人は此等の攻擊に全然抵抗せぬのである。否、攻擊されるままに委すのである。そればかりではない。巧妙な早技ですかして、相手の力を極度に出させ、それに由つてわれから肩骨を外づし、腕を碎き、甚だしきに至つては、頸、或は脊骨を折らしむるのである。

漠然たる說明ではあるが、それでも讀者は之に依つて柔術の眞に驚異すべき點は、其達人の最高の技術にあらずして、全技術が表はす東洋獨得の思想にあることを、既に看取せられたであらう。西洋人の何人か果たして此樣な奇拔な敎へを編み出し得たらう――力を以て力に對抗せず、攻擊し來る敵の力を誘致して利用し、敵の力に依つてのみ敵を倒し、敵の努力に依つてのみ敵に勝てといふ不思議な敎へを案出し得た者が西洋にあらうか。確にそんな者はない。西洋人の心は直線にのみ働き、東洋人の心は驚くべき曲線と圓をなして働くやうに思はれる。けれども暴力を挫く手段としては何たる絕好の智惠の象徵であらう。柔術は自衛の學たるに留まらず、哲學であり、經濟學であり、又倫理學であり、(自分は云ふのを忘れたが、柔術訓練の大部分は全く道義的なのである)そして何よりも、東洋に此上の侵略を夢みつつある强國に依つても未だ看取せられざる、種族的天才の表現である。

二

二十五年前――もつと新しくも――外國人はかう考へた。日本は西洋の服裝のみならず

風習までも、速力の大きい我等の交通運搬の方法のみならず、我等の建築の原則までも、我等の工業や工學のみならず、我等の哲學や妄斷妄說までも採用するであらうと推定した。そしてそれがいかにも道理らしく思はれた。或る人の如きは實に國を擧げてやがて外國の植民地として開放せられるてあらう、外國の資本は、異常な特權が與へられて、種々の產業開發に資するべく誘致せられるてあらう、そして國民は遂に我等が基督敎と稱するものに突然改宗することを勅令て公布するてあらう、とまて信じた。併しこんな妄信は民族の性格――その深遠な能力、その眼識、その昔ながらの獨立の精神に對する、止むを得ざる、併し完全な無知より來るものてある。これも日本がただ柔術を實行しつつあつたのだとは何人も少しも想像しなかつた。實際當時西洋ては何人も柔術に就て全く聞く所がなかつたのてある。

併しそれは悉く柔術てあつたのだ。日本は佛獨兩國の最高の經驗に基づく軍制を採用し、其結果一朝事あらば二十五萬の精兵と强力な砲兵を召集し得るやうになつた。又强大な海軍を興こし、其中には世界最良の巡洋艦を若干有するに至つた――其組織は範を英佛に取つて。佛人の指導の下に造船所をも建て、汽船を建造し、或は購求し、朝鮮、支那、マニラ、メキシコ、印度及び南洋に產物を運搬し初めた。軍用、商用の爲めに鐵道を敷くこと

約二千哩。英米の助力で最安價な、併し恐らく最有効な郵便電信事業を起こした。又日本の海岸は兩半球中尤もよく照明せられたものだと云はれる程巧妙に燈臺を建て、合衆國にも劣らぬ信號設備を調へた。更に米國から電話と電燈の最上の方式を輸入した。公立の學校は獨佛米の諸國に於ける最良の結果を完全に研究した上に其組織を定めたが、完全に他の諸制度と調和を失はざらしめた。警察制度は範を佛國に取り、而かも日本特殊の社會的要求に完全に適合するやうに按排した。初めは鑛山、工場、砲兵工廠、鐵道等に機械を輸入し、多數の外人技師を雇ひ入れたが、今やそれ等の教師を解雇しつつある。併し日本が爲した事及び爲しつつある事は之を列擧するにさへ多くの紙數を要する。詮ずる處日本は我等の工業、我等の應用化學、我等の經濟的、法制的、經驗が提供する、凡ての物の中より最上のものを選擇し採用したといふに盡きる。そしてどの場合にも、ただ最上のもののみを利用し、必らず之を己れの要求に適するやうに按排したのである。

さてこれは何れも只だ模倣せんが爲めに採用したのではない。之に反して日本の力の增加を助け能ふ物のみを、試して見て取つたのである。日本は今や殆どあらゆる外國の技術上の教授を受くるを要せざるに至つた。而かも巧妙な法制に依つて、其富源の凡てを確と己が手に保留する。但し日本は西洋の衣服、西洋の生活、西洋の建築、若しくは西洋の宗

敎などは採用しなかつた。それは此等の物、特に宗敎は其力を增加せずして却つて減少すべかりしが故である。其鐵道と汽船航路、其電信と電話、其郵便局と通運會社、其鋼鐵砲と連發銃、其大學と工藝學校を有するにも拘らず、日本は今も一千年前と同じく東洋的であるに變はりはない。自己は少しも變はらずに居ながら、敵の力を極度に利用し得たのである。未曾有の驚くべき知的自衞法で――驚くべき國民的柔術で、日本は自己を衞りつつあり、又あつたのである。

三

自分の前に三十餘年前の寫眞帖が橫たはつて居る。日本が洋服と外國の制度の實驗を始めた時に取つた寫眞が詰まつて居る。何れも武士(さむらひ)や大名の寫眞である。そして、其多くは、國風の上に外國の感化が及ぼした、初期の結果を反映するものとして、歷史的價値を有する。

軍人階級が新感化を受けた最初のものであつたのは當然だ。それて彼等は色々に洋服と和服の折衷を試みたらしい。此中の十數枚の寫眞は家來に取り卷かれた藩主の肖像である

が、皆彼等考案の特有の服を着けて居る。外國製の切れ地を用ゐた外國風のフロックコート、チョッキ、ずぼんを着ながらも、上衣の下には尚ほ絹地の長い帶を締めて居る。これは全く刀を佩す爲めである。（サムラヒは決して伊達に刀を差す遊蕩兒ではない。又彼等の怖ろしい、精巧な刀は、腰に吊らるゝ様には出來てない。――且つ又大抵西洋風に佩くには長過ぎる）又服の切れ地は羅紗であるが、武士は家の紋を棄てようとしない。様々に工夫して新服裝に之を適用しようとして居る。或る者は上衣の裾に白絹をかぶせ、其上に家紋を染め出し若しくは刺繡して居る――左右の裾に各ゝ三つ宛。一同が、或は殆ど一同が光る鎖で歐洲製の時計を下げて居る。中に一人は多分最近調へたらしい時計を物珍らしげに眺めて居る。又一同西洋靴を穿いて居る――護謨短靴を穿いて居る。併し一人もまだあの厭はしい歐洲風の帽子を被らない――これは不幸にも後年一般に用ゐられる様な運命にあつた。彼等は尚ほ陣笠を被つて居るのだ――丈夫な木製の被り物で赤地に金模様の蒔繪がしてある。そして此陣笠と絹帶とが、彼等の怪奇な制服の中の、唯一の美しい部分である。洋袴も上衣もしつくり合つて居ず、靴は徐々に足を痛めつつある。そこで此新裝の人々には云ふに云はれぬ窮屈さうな、だらしない、むさくるしい態度が一貫して居る。彼等は從容さを失つたのみならず、立派に見えぬ事を意識して居る。不釣合も極れば可笑し

いものだが、それ程でもなく彼等は只だ醜く痛ましいばかりだ。當時外國人で日本人は永久に彼等の美しい服裝の嗜好を失ふてあらうと信ぜざるを得た者があつたらうか。

別の寫眞にはもつと一層珍妙な外國影響の結果を示すものがある。ここには西洋服裝の採用は肯んじないが、此新流行熱に讓歩して羽織と袴とを英國製の最も厚い最も高價な羅紗――厚いのと彈力のない爲め、日本服には尤も不向きな材料――で仕立てて着て居る武士がある。最早どんな熱した火熨斗でも、延ばすことの出來ない皺が表はれて居る。

此等の肖像から、新流行熱には全く留意せず、最後まで國風の軍服を脱ぎ棄てぬ、二三の舊弊家の肖像に目を轉ずるのは、確に美感の慰藉である。ここには騎馬武者の長袴がある、優れた刺繍のある陣羽織がある、裃がある、鎖帷子がある、完備せる鎧一具がある。ここには又各種の冠がある――昔から諸侯や高級武士が、儀式の折に被つた、奇妙な併し嚴かな被り物で――或る輕い黑布で出來た蛛網のやうに薄い珍らしい構造の物である。此等の物には凡て威嚴がある、美しさがある、或は軍職美がある。

併し此寫眞帖の最後の寫眞には凡てのものが氣壓されて了ふ。――それは鷹のやうな凄い、素晴らしい眼光を有つた美しい若武者で、封建時代の華やかな甲冑姿の松平豐前守である。片手は總のついた大將の采を持ち、片手は刀のめざましい欛の上に載つて居る。兜

は天工を奪ふ程の逸品である。胸や肩は西洋のあらゆる博物館で有名になつてる鎧師が細工した鋼鐵である。陣羽織の紐は金糸を撚り合はせ、金波金龍を刺繍つた、驚嘆すべき厚絹の下着は、鐵の腰から脚元まで火衣のやうに流れて居る。そしてこれは夢ではない――あつた事實なのだ――今自分は中世の實在の一人物の、太陽が燒き附けた寫眞といふ記錄を眺めつつあるのだ。此人物は鋼鐵と絹と金を着て、めざましい金綠色の玉蟲の樣に輝いて居る――併しこれは戰鬪甲蟲で、玉の色彩の眩さはあつても、全體が角と顎と威嚇だらけてある。

四

松平豐前守が着たやうな、封建時代の服裝の、王侯的絢爛から、過渡時代の言語道斷な服裝への變遷は隨分大なる墮落である。國風の衣服と衣服に對する國民的嗜好とは、確に永久に消滅の運命にあるやうに思はれた。宮廷にさへ一時巴里風の服飾が行はれた時は、總て全國民も服制を變更せんとするものと外國人は極めてしまつたのであつた。事實、當時重なる市には一時的ながら洋裝熱が高まつて、夫れが歐洲の輸入新聞に報道せられ、暫

しの間美しい日本はけばけばしいスコッチ服や、シルクハットや、燕尾服の國となり了せりと云ふ印象を惹起した。併し今日では、首府に於てさへ、千人の通行人中洋裝せる者は一人の割りにも達しまい。勿論制服の兵士と學生と警官とは除いてである。往日の熱は實は國民の實驗を示したもの、其實驗の結果が歐洲人の期待に副はなかつたのだ。日本は陸海軍及び警察官に、西洋風の制服の種々な樣式を巧みに剪裁して採用したが、それはそんな服裝がそんな職業には一番適するからである。[註一] 又外國の平服も日本の官吏社會に採用せられて居る。併しこれは近代風の机と椅子を具へた歐洲風の建物内に於ける勤務時間だけ着らるゝのみだ。[註二] 歸宅すると陸海軍の大將でも、判官でも、警部でも國服に着換へる。そして最後に、小學校を除くの外、凡ての學校の教師も學生も制服を着用する事になつて居る。それは學校教育は一部分軍事教練であるからである。此制服着用の義務は一時甚だ嚴重であつたが、今は大分弛緩した。多くの學校では、教練の時と何か儀式張つた折のみに制服を着る樣に規定せられて居る。九州の學校では師範學校を除き、教練のない折には、學生が國服、草履、大きな麥稈帽子を自由に着用する。併し何處でも授業時間後は、教師も學生も歸宅して國服（キモノ）を着、白縮緬の帶を卷きつける。

註一　此事に關して日本が爲した唯一の重大な過誤は、歩兵に革靴を穿かしめた事である。草履の寛濶に馴れた、そして我等の所謂魚の目や肉刺の存在を知らぬ青年の柔らかい足は、此不自然な穿き物の爲めに殘刻に苦しめられる。尤も長い旅行には草鞋を穿くことが許されるから、穿き物の轉換といふ事も出來る。草鞋だと日本人は小兒でさへ、殆ど疲勞せずに一日三十哩を樂に歩むことが出來るのである。

註二　高き教育ある日本人が實際自分の友人につぎの樣な事を語つた——眞實の處僕等は洋服が嫌ひだ。僕等は或る動物が或る折に或る色を取る樣に——乃ち保護色を取る樣に只だ一時それを着用するのである。

然らば、手短に云ふと、日本は正しく其國風の服裝に還つたのである。再びそれを棄てる事はあるまいと思はれる。日本服は日本の家庭生活にぴつたり合つてる、唯一の服裝であるのみならず、恐らくは世界中で、尤も重々しい、尤も快適な、又尤も保健的な服裝であらう。或る點に於ては明治年間に、前の時代に於てよりも國服に大なる變化があつたのは事實だ。併しこれは重に士族階級の廢棄に原由する。それも樣式の變化は僅少で、色合の變化が主なるものである。此民族の優れた嗜好は今でも式服に織られる絹物或は木綿物の美しい色合、色、模樣に現はれる。併し明治以前の着物よりは色合は薄く、色はくすんて居る——樣々の形式を含める一般國民の服裝も、封建時代よりは調子が大分ぢみになつて居る。小兒と若い娘の派手な衣裳とても同樣である。目ざましい色の驚嘆すべき昔の衣

服は民衆の生活から消え失せた。それはただ劇場でか、或は過去を保存する日本時代劇の美しい空想的な場面を描ける美しい繪本で見るばかりだ。

五

國服を棄てる事は、實に殆どあらゆる生活の様式を變ふるといふ高價な必要を來たすであらう。洋服は全く日本の屋内生活に適せぬ。國風の跪坐は洋服を着ては非常に苦しく困難である。從つて洋服の採用は洋風の家庭生活の採用を必然の結果とする。休息に椅子、食事に卓、暖を取るにストーブ若しくは煖爐（日本服が暖かいのでばかり、今はこんな洋風の設備が不必要なのである）床に絨毯、窓に玻璃——要するに從來日本人が無くとも濟まされた無數の贅品を家庭に入れねばならぬ事になる。一體日本の家庭には家具といふものがない（歐洲人の所謂家具）——寢臺も卓子も椅子もない。小さな書棚、或は寧ろ本箱が一つ、又襖で隱された或る隅に箪笥が一對は大抵ある。併しこんなものは西洋の家具とは似ても似つかぬものだ。概して日本室には、喫煙の爲めに青銅か陶器かの小さい火鉢、季節に從つて藺草の敷物或は座布團、の外何もない。ただ床にのみ畫幅か花瓶がある。數

千年間日本人の生活は床の上にあつた。毛布團の樣に軟らかて塵一つ留めぬ淸らかな床は、寢臺でもあり、食卓でもあり、そして往々机でもあるのだ。尤も高さ約一尺の小さい綺麗な机があることはある。こんな生活法の非常に經濟的であるのを考へると、之を棄てる事は萬あるまいと思はれるし、殊に人口の夥多と生活難が增しつつある限りは。且つ又、高き文化を有する國民が――西洋侵入以前の日本人の如き――單なる模倣の精神から、祖先の風習を棄てたといふ樣な、前例がないといふことも忘れてはならぬ。日本人をただ徒に模倣的だと考へる者は又日本人を野蠻人だと考へるものである。處が事實彼等は少しも模倣的でない。彼等は只だ同化、適合の才に富むのみで、それも天才と云ひ得る程度に達して居る。

西洋の防火的建築材料の經驗を丹念に硏究した結果、日本都市の建築に、多少の變化を來たすことはありさうに思はれる。旣に東京の或る方面には門並煉瓦建ての街路がある。併し此等の煉瓦造りの家屋にも古來の疊が敷いてある、そして其住人は祖先の家庭生活を續けて居る。未來の煉瓦造り若しくは石造の建築は、單に西洋建築の模倣たるに留まらず。甚だ興味ある、新しい、そして純な東洋味を展開せしむべきことは殆ど確實である。

日本人は何でも西洋の物なら盲目に讚嘆すると信じて居る人は、內地でよりも開港場て

は純粹な日本品（骨董を除き）を見ることが少いであらう、日本風の建築、日本風の衣服、風俗、さては古來の宗敎、神社佛閣などは滅多に見られぬであらうと思ふかも知れない。併し事實は正反對である。外國風の建物はあるが、それは概して外國人の居留地で外國人の使用の爲めである。但し防火的設備を要する郵便局、稅關、及び少數の釀造所と製絲場は普通除外例である。併し日本建築は凡ての開港地で立派に幅を利かして居るのみならず、內地の何の市でよりも立派である。建前が高く廣く、伸びて居る。其癖一層東洋風を發揮して居る。神戶、長崎、大阪、横濱などでは、本質的に、完全に、日本風な點が（精神的の特質は別として）洋風の侵入に挑戰するかの如く、悉く强調せられて居る。或る高い屋根或は露臺（バルコニー）から神戶を見渡した人は、誰れでも自分の意味する所のものの最適の例を見たであらう――十九世紀に於ける日本の港の高さ、雅味、魅力。白い條を交じへて波狀に起伏する靑灰色の瓦の海。破風、棧敷其外筆舌を絕する建築上の突飛な氣紛れな設計の杉材の世界がそれである。それから京都の聖都以外では、開港場に於けるよりももつと美しく古來の宗敎上の祭事を見る事は出來ぬ。又神社、寺院、鳥居、凡て神道佛敎の建設物の多くは日光と奈良、西京の古都を除いては、內地の都市に於て開港場に比肩し得る處はない。否、開港地の特質を硏究すればする程、日本民族の精神は、柔術の規約を超越してまで洋

風の侵入に進んて屈從するものてない事を感ずる。

六

日本は間もなく基督敎の採用を世界に宣言するだらうとの豫想は、往時の他の豫想程不道理なものではなかつた。けれども今になつて見ると一層不道理てあつたやうに思はれる。そんな大きな期待を基づけるやうな前例は何處にもなかつたのだ。東洋人種て基督敎に改宗したものは未だ嘗てなかつた。英國治下の印度に、舊敎宣傳の大努力も遂に水泡に歸した。支那ては二百餘年の傳道の後、基督敎といふ名さへも嫌惡せらるるに至つた——それも理由なしてはない。西敎の名て支那に對する幾回かの侵掠が行はれたからてある。近東の方面ても東洋民族の改宗事業はさつぱり捗らない。土耳其人、アラビア人、モーア人或は何れの回敎徒をても改宗せしめ得る望みは露程もない。猶太人改宗協會の思ひ出の如きはただ一笑を博するに足るばかり。併し東洋人種を度外に措いても、我等は誇るに足るべき改宗事業は爲してない。近代史の範圍内ては基督敎國は、苟くも國民的生活を維持し得るの望みある民族に、其敎理を採用せしめ得た例はないのてある。二三の蠻族或は滅亡し

つつあるマリオ種族の間に於ける傳道の、名目計りの成功の如きが、通則であるに過ぎない。(註) 那翁の所謂宣教師は政略上大いに有用なることありといふ、少しく皮肉な宣言にても聽かぬ限り、我等は外國傳道會社の全事業は何の效果もなき精力と、時間と、金錢との大浪費に外ならぬといふ結論を避くる事が出來ぬ。

註　名目計りと云つたのは、傳道の眞の目的達成は單に不可能であるといふ事實に基づくのである。此問題は、ハアバアト・スペンサアに依つてつぎの數行に明晰に論斷されて居る。——「何處にても特殊の敎義の伴なふ特殊の神學的傾向は多くの社會問題を斷ずるに偏頗に流るゝは避く可からず。或る一の信條を絕對的に眞なりと考へ、從つて他の之と異る信條を絕對的に虛僞なりと考ふる者に在つては、一信條の價値は相對的のものなりとの推定を爲す能はず。各宗敎は大體に於て、其宗敎の存在する社會の部分的一要素なりとの考を外道として忌み退け、彼の獨斷的なる神學的系統は凡ての場處凡ての時代に適合するものなりと考ふ。彼は之を蠻族の中に移し植うるも適當に了解せられ、適當に歸依せられ、而して彼自身經驗せるが如き結果を彼等の上に及ぼすことを疑はず。此の如き偏見に捉へらるゝが故に、彼は凡て民族は其天分より高き政體を受け入るゝこと能はざるが如く、分に過ぎたる宗敎をも受け入るゝこと能はず、强ひて之を受け入れしむれば、政體と同じく、名目計りは同じくも實質は甚だしく劣等なるものに墮するといふ實證を閑却するなり。換言すれば彼の特殊なる神學的傾向は彼をして社會學的眞理の重要なるものに盲目ならしむ」

十九世紀の最後の十年期といふ今日に於ては、兎に角其理由は明白である。宗教といふものは超自然に就ての一獨斷說である許りでない。一人種の全倫理的經驗、多くの場合に於ては其賢明なる國法の基礎となりたる太古の傳說、及び其社會的發展の記錄並びに結果、此等のものの綜合されたものが宗教なのである。されば宗教は本質的に種族的生活の一部分で、他の全く異れる種族の倫理的、社會的經驗に依つて——換言すれば外國の宗教に由つて、取つて代はらるゝは常道でない。又健全な社會狀態にある國民は、其倫理的生活と深く契合せる信仰を自ら進んで棄てられるものでない。或る國民は其敎條を改造する事はあらう、進んで他の信仰を受け入れる事さへもあらう。併し進んで古い信仰を棄てる事はあるまい、縱令其古い信仰は倫理的にも社會的にも無用の長物となつて居るとしてもである。支那が佛教を入れた時、支那は古聖賢の經書をも、原始的の祖先崇拜をも棄てはしなかつた。日本が佛教を入れた時も、日本は神の道を棄てなかつた。古代歐羅巴の宗教史にも同様の例は擧げられる。尤も寬容な宗教のみが、其宗教を生み出した民族以外の民族に入れられる。但しそれは既存の宗教の外に追加せられるので、既存のものに、取つて代はるのではない。古代佛教傳道の大いに成功せし所以は其處に在る。佛教は他宗教を吸收はしたが取つて代はる事はせなんだ。他信仰を其廣大な組織の中に合併して、之に新しい釋

義を與へたのである。然るに回教と基督教――西部基督教――とは始終不寛容の宗教であつて、何物をも合併せず、凡てに取つて代はらうとのみした。基督教を入れるには、特に東洋の一國に入れるには、其國在來の信仰の破壞のみならず、同じく在來の社會組織の破壞をも必然に惹起す事になる　然るに歷史の教ふる所に依れば、こんな大袈裟な破壞はただ暴力に依つてのみ成就される。若し非常に進步した社會ならば、尤も殘忍な暴力を要する。過去に於て基督教宣傳の重な道具であつた暴力は、今でも我等が傳道の背後に存する。只だ我等は露骨な劍鋒の代はりに、金力と威嚇とを置き換へた、或は置き換へた振りをする。折々は基督教徒たる事の證據に商業上の理由で其威嚇を遂行する。例せば我等は戰爭に依つて强要した條約の條項に於て、宣教師を支那に强ひつける。そして砲艦で彼等を掩護し、自ら進んで殺された人間の生命に、莫大な償金を强請する。だから支那は何年毎かに代償金を拂はせられ、我等が基督教と稱するものの價値を年と共に學びつつある。かくてエマースンの、眞理は或る者には事實で證明せられる迄は了解せらるゝ事なしといふ金言が、最近支那の正直な抗議に依つて證明せられた。其抗議といふのは支那に於ける宣教師の侵害の無道を責めたものである。宣教師騷ぎは遂に純粹の商業的利益に惡影響を及ぼすであらうと云ふ事が發見せられなんだら、此抗議も決して傾聽されなかつたであらう。

併し以上の所論にも拘らず、實際一時は日本の名目だけの改宗は可能と信ぜしむべき相當の理由があつた。人は日本政府が政治上の必要に迫られて十六、七世紀の驚くべきジエシユイット傳道[註]を絶滅せしめた後、基督教徒といふ語は憎惡と輕蔑の語となつた事を忘る事は出來ぬ。

註　此傳道は一五四九年八月十五日九州の鹿兒島に上陸した聖フランシス・ザビエーに依つて開始された。面白い事にはスペイン若しくはホルトガル語のパドレの轉訛バテレンといふ語は二世紀前に日本語となつたのだが、それが今でも或る地方では民間に遺つて居て魔法遣ひといふ意味に用ゐられる。も一つ記すに足る面白い事は、自分は見られずに家の外の通行人を見る事の出來る一種の竹製の簾がキリシタン（クリスチヤン）と呼ばれる事である。

グリツフイスは十六世紀に於けるジエシユイット傳道の大なる成功は、半ば羅馬舊教の外形と佛教の外形とが相似て居るに依ると說明して居る。此如才なき推定はアーネスト・サトウ氏の硏究に依つて確證された。（『日本亞細亞協會紀要』第二卷第二部を見よ）氏は山口の領主大内氏が傳道師に與へた『佛法の說敎』を許すといふ免許狀の模寫を公にした――基督教は初めは佛教の高等なものと取り違へられたのである。併し日本から出したジエシユイット教徒の文書、或はもつと流布して居るシヤールボアの著書をでも讀んだ人は、傳道の成功がこれで完全に說明されてゐるとは思はぬであらう。此問題は顯著な心理的現象を吾人に示すものである――恐らく宗教史上に再び反復(くりかへ)される事のあるまじき現象で、ヘツケルに依つて傳

染的と宣せられた情緒的活動の珍らしい形式に似寄つて居る。（ヘツケルの『中世の傳染病』を見よ）古ジェシュイット教徒は近代の傳道會社よりも遙かによく日本人の深い情緒的性質を了解して居た。そして彼等は驚くべき鋭敏さを以つて、種族的生活のあらゆる源泉を研究し、それを利用することを知つて居た。彼等でさへ失敗した處に現代の福音宣傳者が成功を望むのは無用である。ジェシュイット傳道の最盛時に於てさへ、たつた六十萬人の信者を有したと稱するに過ぎぬ。

併し其後世界は變化した、基督教も變化した。そして三十餘の異れる基教の宗派が、日本改宗の名譽を贏ち得るに汲々した。正統不正統の重なる異說を代表する、此等多數の教條(ドグマ)の中から、日本は確に己が好むままの形の基督教を選み得たのだ。そして國內の事情も兩教の輸入には何時の代よりも都合よかつたのだ。社會の全組織が一時中心まで崩壞した。佛教は國教たる保護を解かれて、よろめき出した。神道も持ち堪(こた)へはむつかしさうに見えた。大武士階級は廢棄せられた。統治の組織は一變せられた。地方は戰爭に依つて震駭せしめられた。數百年間帷幄の後ろに在した帝(みかど)は、突然前に現はれ出てて臣民を驚かした。騷然たる新思想の瀾は、あらゆる國風を一掃し、あらゆる信仰を破碎せんと威嚇した。そして基督教の國禁は再び法律に依つて解除された。事は之に留まらなかつた。政府は社會再建の大努力の時に當つて、基督教の問題を實地に研究した——丁度外國の教育、陸海軍

の制度を研究したと同様に、敏活に虚心坦懐に研究した。委員を設けて外國に於ける罪惡、不德の防止に關する基督教の勢力を調査せしめた。但し結果は、十七世紀に於ける、蘭人ケンペルが日本人の道德に就て下した、公平な判斷を裏書するに過ぎなかつた。『彼等は彼等の神に大なる尊崇の念を表し、樣々の方法にて崇拜す。予は思ふ行の正しきことに於て、生活の淸きことに於て、而して表面に現はれたる信心深さに於て、彼等は遙かに基督教徒を凌駕すと斷言するを得と』手短に云ふと、彼等は賢明にも、基督教は、東洋の社會情態に不適切のみならず、西洋に於ても、倫理的勢力としては、佛教が東洋に於けるよりも有效ならずと斷定した。慥に『人はその父母を離れ其妻に合ふ』べしといふ教へを採用することは相互救濟の精神の上に立てる、家長本位の家族的社會には、國家經營の大柔術に於て失ふ所多くして得る所少かるべきは、明らかである。註

註　近頃佛國の一批評家は、日本に於て慈善事業や慈善的設備の比較的少きは此人種が人道に缺くる所あるを證するものと斷言した。併し事實は舊日本に於ては相互扶助の精神が、かゝる設備を不必要のものと爲したのである。又西洋に於てかゝる設備の數多きことは、我等の文明が慈悲心よりも寧ろ不人情に富めることを證明するといふのも事實である。

勅令に依つて日本を基督教國とする望みは全く絶えた。社會の建て直して、基督教をどんな手段でても國教としようとする機運も段々減少した。今後暫くの間は、多分宣教師も、彼等の職務以外の事に立ち入るにも拘らず、大目に見られるに相違ない。併し彼等は何等の善事をも成就すまい。そして其間に彼等は彼等が利用せんと欲する者に却つて利用せられるだらう。一八九四年には、日本に新敎約八百人、ローマン・カソリック九十二人、グリーク・カソリック三人の宣教師が居た。然らば日本に於ける凡ての外人宣教師の費やす總費用は一年一百萬弗以下ではあるまい――恐らくは以上であらう。此大支出の結果として、新教の諸派は五萬の信者を得、兩カソリックも略〻同數を得たと稱する――但し三千九百九十萬の不信者を殘してである。宣教師の報告は嚴密に批評せぬのが風習になつて居るが實は惡るい風習だ。其風習に背いて自分は露骨に云ふが、以上の數字でさへ全く當てにはならぬ。ローマン・カソリックの宣教師は、遙かに小なる資金で、彼等の競爭者と同じ程の功績を擧げたと稱するのは注目に値ひする。そして彼等の敵さへも其功績の確實さを承認するのであるが、彼等は先づ小兒の教化より始めるのは確に合理的だ。併し宣教師の報告に全く疑を懷かぬ譯には行かぬ。それは最下級の日本人の中には、金錢の補助若しくは職業を得る爲めに改宗を誓ふことを辭せぬ者が澤山あるのを知つてるからである。又貧少

年の中には外國語の教授を受ける爲めに信者を氣取る者もある。又一時信者となつた上て、公然彼等の舊來の神々に復歸する靑年のある事も絶えず聞く所である。又洪水、飢饉、地震などの時、宣教師が外國よりの寄贈品を分配したと思ふと、直に多數の改宗者を得た報告がある、それを見ると改宗者の誠意が疑はるゝのみならず、傳道者の道義心をも疑はざるを得ぬ。とはいへ日本に一年一百萬弗の割て百年間振り撒いたら大なる結果が得らるゝてあらう。但し其結果の品質は想像するに難くないが、感服は出來ぬてあらう。そして土着の宗教は自衞の爲めの教化力も資金も共に微弱なのであるから、其點大いに他の侵蝕を誘發する。幸今や帝國政府は教育上佛教を補助せんとするの樣子が見えるが全くの空頼みでもあるまい。一方基督教國は遠からず其尤も富める傳道會社も大きな相互扶助會社と變形しつつあることを認めるだらうといふ、少くとも微かな可能性がある。

七

日本は、明治の年代が始まると間もなく、內地を外國の工業的企業に開放するてあらうとの說は、基督教に改宗するてあらうとの夢と同樣に、はかなく消えて了つた。日本は事

實上外人の移住に閉鎖されたまでであつた、今でも閉鎖されて居る。政府自らは保守的政策を固守せんとはせず、條約を改正して日本を大規模な外資輸入の新市場たらしめようと種々に畫策した。併し結果は國民の進路は政道に依つてのみ左右せらるべきでない、それよりも誤謬に陷り易からざる或る物――卽ち民族本能に依つて指導せらるゝものであることを證明した。

世界最大の一哲學者は、一八六七年（慶應三年）に書いた著書の中でこんな判斷を下した。『其型式の極限まで發展し盡くし、均衡不安定の域に達した社會に、崩壞の始まる方式の好例は日本に依つて供給された。人民が經營組織して仕上げた建物は、新たな外力に觸れざりし限りは殆ど不變不動の狀態を維持した。併し歐洲文明の衝擊を受くるや否や――一部は武力的侵入の、一部は商業的動機の、又一部は思想的感化の衝擊を受くるや否や此建物はばらばらに崩れ始めた。今は政治的崩壞が進行中である。多分間もなく政治的再建が起こるであらう。併し、それはどうあらうと、外力に依つてこれまで惹起された變化は崩壞への變化である――作成運動から破壞運動への變化である』[註]スペンサー氏の所謂政治的再建は速に起こつたのみならず、其作成的進行が甚だしく又突然に妨害せられざる限り、望ましき限りの建て直しなることは殆ど確實と思はれた。併しそれが條約改正に依つ

て妨害せられるかどうかは甚だ疑はしい問題のやうに思はれた。或る日本の政治家は、外人の內地雜居の爲めに凡ての障害を除かうと熱心に運動したが、或る者は之に反して內地雜居は、未だ安定せぬ社會組織の中へ攪亂的分子を輸入するもので、新たな崩壞を來たすこと請合であると感じた。前者の趣旨は現條約を愼重に改正して雜居を許せば、帝國の收入は增加するに相違なく、而かも入り込み來る外人の數は極めて少數であらうといふにあつた。併し保守的思想家は、國を外人に開放する眞の危險は外にある、多數流入の危險ではないと考へた。そして此點に於て種族本能は之に唱和した。それはただ漠然と危險を感知したのであるが、たしかに眞理に觸れて居た。

註　スペンサー著『第一原理』第二版一七八節。

其眞理には二側面がある、其一側面は西洋側ので、亞米利加人には能く知られて居る筈だ。西洋人は平等の勝負では、どうしても生存競爭に於て、東洋人に叶はぬ事を知つた。彼は濠洲に於ても合衆國に於ても、東洋人の移住を防止する法律を通過する事に依つて此事實を十分に白狀した。それにも拘らず支那日本の移住民へ加へた侮辱に對して、莫迦らしい多くの道義的理由を述べ立てた。併し眞の理由はただつぎの數語に盡きる。——『東

洋人は西洋人よりも安價に生活し得る』然るに日本に於ける、他の一側面の理由はかういふ風に述べる事が出來る――『西洋人は或る都合よき條件の下に、東洋人を壓倒する事が出來る[註]』都合よき條件の一は氣候の溫和な事である。も一つの條件はそれよりも重要な條件で、西洋人は競爭の權利を悉く具備する上に、攻勢を取る力を有するといふことである。彼は其力を用ふる積りであるかどうかといふ事は常識的論點でない。彼はそれを用ふることが出來るかどうかが眞の論點だ。用ふることが出來るとなると、彼が將來の攻略的方針の性質は、工業的か、財政的か、政治的か、或は三者を打つて一丸となしたものか、などと云ふ議論は全く時間の浪費であるだらう。西洋人は、結局反對者を粉碎し、資本の大合同に依つて競爭を麻痺せしめ、富源を專有し、生活の標準を土着の人民の力以上に高める事に依つて、日本民族を押し除け、己れ之に取つて代はらぬまでも、之を勝手に統御するの手段方法を見出すに至るかも知れぬといふ事を知れば十分である。アングロ・サキソンの統治下に、幾多の劣弱な民族が或は滅び或は亡びつつある處もあるのである。日本の樣な貧乏な國に於ては、外資の輸入だけでも、國家の危險を生み出さぬと誰れが保證し得ようか。勿論日本は西洋の一強國に依つて征服せられるのを恐れるには及ばない。如何なる一外國に對してでも、本土に依つて、己れを守る事は出來る。又強國の聯合軍の侵入の危

險に面する事もあるまい。西洋諸國間の嫉妬は、土地攻略の目的でばかりの侵掠を不可能ならしむるであらう。併し餘り早く內地を西洋人の移住に開放した爲めに、布哇（ハワイ）の運命に陷ることなきやといふ事——土地は外國人の所有に歸し、政治は外國人の勢力に依つて按排せられ、獨立は有名無實となり、祖先の領土は遂に、一種の混合民族より成る、工業的共和國と變形せられはせぬかといふことは日本の恐るゝ所で、これは尤もの事である。

註　こゝに東洋人といふのは勿論日本人の事である。西洋人が支那人に打ち勝たうとは、數の上の不權衡がどれ程であらうと、自分には信ぜられぬ。日本人でも支那人と競爭する事の出來ぬのを認めて居る。無條件の內地雜居に反對する最上の論據の一は、支那移住民の危險なる事である。

以上は日支戰爭の起こる前迄、兩派に別かれて猛烈に論諍された論旨であつた。其間政府は困難な協議に時を移した。反動的國粹論を排して國を開放するのは非常に危險だ、併し開放せずして條約を改正するのは不可能に思はれた。西洋諸強國の日本に對する壓迫は、彼等の敵意ある聯合が、外交に依り若しくは兵力に依つて妨げられざる限り、繼續することは明らかであつた。此窮境を救つたのは青木の敏腕に依つて爲された英國との新條約で

あつた。此條約に依れば國は開放せられる。併し英國人は土地を所有する事が出來ぬ。借るにしても、日本の法律に從へば、賃貸人の死亡と共に消滅する賃貸期間だけ土地を保有する事が出來るのである。沿岸航海は彼等に許可されぬ——舊來の開港場にまでさへである。そして其他の貿易は重税を課せられる。居留地は日本に返還され、英國の移住者は悉く日本の司法權の下に移される。此條約に依ると英國は凡てを失ひ、日本は凡てを得るのである。此の條件が始めて公示された時、英國商人は、茫然自失、母國に賣られた——法律的に手足を縛られ、奴隷として東洋に引き渡されたと公言した。或る者は此條約が施行せられぬ中に日本を去らうといふ決心を述べた。日本は慥に外交の成功を祝してよい。國は開放せられるには相違ない、併し外國資本の投資を求むるものを防ぐのみならず、既に存在する資本をまで驅逐する樣な條項が設けられたのである。同樣な條件が他の列强からも得られるとすると、日本は不利に締結された舊條約に依つて失つた所のものを、悉く回復して尙ほ餘りある譯だ。靑木案は確に外交に於ける柔術の奧の手を示すものである。

併し何人も、此條約若しくは他の新條約が實施せられぬ中に、何事か起こるかは豫言する事が出來ぬ。日本が柔術に依つて結局其目的を悉く果たし得るかどうかは尙ほ不明である。——たとひ歷史上、非常な劣勢の地位に居ながら、こんな勇氣と才能を發揮した人種

はなかつたにしても。日本が其陸軍を歐洲の或る二三の國と匹敵し得る迄に發展させたのは、まだ老人でもない人でさへ記憶する程近來の事である。工業的には速に東洋の市場で歐洲の競爭者となりつつある。敎育上には、西洋の何れの國よりも、より安價な、併しより效力なきにあらざる學校制度を設けて、既に進步の前線に立つた。そしてこれは、不正な舊條約に依つて、年々絶えず利益を奪はれながら、洪水と地震とて莫大な損失をしながら、國內の政爭に惱まされながら、國民の魂を掘り崩さうとする改宗敎唆者の努力にも拘らず、又人民の非常な貧窮にも拘らず、成し遂げた仕事なのである。

八

日本が若し其の光榮ある目的を果たさぬやうな事があれば、其不運な成行は確に國民精神の缺乏に依るものではなからう。其精神は日本は近代に比類を絶する程度に有して居る――愛國心といふ陳腐な語はそれを表はすに全く無力である程度に有して居る。心理學者は日本人に個性の缺如或は缺乏せることを如何に論じようとも、國民としての日本は我等よりも遙かに强大な個性を有することに疑ひはない。我等は寧ろ西洋の文明は個性を養ひ

過ぎて、國民感を破壊したのではないかと疑ひたくなる。

國家に對する義務といふ事には全國民ただ一つ心である。小學生でも此事に就て問はるれば、『天皇に對する日本人の義務は、我が國を富强にし、國家の獨立を擁護持續するに努力する事だ』と答へるであらう。凡ての日本人は危險を知つて居る。凡てが之に當たるやうに精神的物質的に訓練されて居る。あらゆる公立學校は其學生の軍事教練の豫備知識を授ける、あらゆる都市には學校兵士がある。正式の練兵の出來ぬ幼い小兒は毎日古い忠君愛國の歌と近代の軍歌の合唱を教へられる。新たな愛國者の歌が一定の時に作曲される、そして政府の同意を得て、學校と兵營とに配付せられる。自分が教へて居る學校で四百人の學生が此種の歌を歌ふのを聞くのは全く愉快だ。こんな時には學生は皆制服で軍隊式に整列させられる。指揮する士官が『足蹈み』の命を下すと凡ての足が太鼓のやうな音を立てて一齊に床を蹈み始める。そして音頭取りが先づ一節を歌ふと全員が勇ましくそれを繰り返す。各行の最後の音節を必らず妙に高調するので、恰も小銃の一齊射撃の様に聞こゆる。歌ひ方は甚だしく東洋的だが又甚だしく感銘的で、一語一語に舊日本の勇猛な精神が躍つて居る。併しそれよりも更に感銘的なのは兵士が同様な歌を歌ふ時である。現に自分が之を書いて居る瞬間にも、熊本の古城から雷の轟くやうに、八千の兵士の夕べの歌が、[註]

長い優しい物悲げな幾十の喇叭の音と雜じつて聞こゆるのである。

註　この一文は一八九三年に草したのである。

政府は忠君愛國の精神を維持する努力を決して弛めない。此貴い目的の爲めに新しい國祭日が近頃定められた。舊來の祭日も年と共に益々盛んに祝せられる。天長節には國內の凡ての官公立學校凡ての官衙では必らず天皇陛下のお寫眞に對して、折に合ひたる唱歌と儀式とを以て、嚴かな拜賀式[註一]が擧げられる。時に宣敎師に敎唆されて、己れは基督敎徒であるといふ莫迦らしい理由で、此簡單な忠誠と感謝の禮を拒む學生が現はれる。其結果は同輩から絕交せられ、遂には不愉快の餘り學校にも居惡くなるのが常である。すると宣敎師は本國の同宗派の新聞に、日本に於ける基督敎徒の迫害といふ話を報告する、そして其理由は『皇帝[註二]の偶像を崇拜することを拒める爲め』と稱する。こんな出來事は勿論偶にしかない。そして外國宣敎師が彼等の使命の眞の目的を破壞する遣り口の一斑を示すだけである。

註一　陛下の御肖像を拜する儀式は、宮中で拜謁の時の儀式を其まゝ實行するだけである。先づ一禮し、三步進んで敬禮、更に三步進んで最敬禮をする。御前を罷り出る時は、賜謁者は後退りをしながら前の樣

に再び三度敬禮するのである。

註二　此一節には立派な證據がある。

彼等が日本の國民的精神、日本の宗教、日本の道德は勿論、日本の服裝風習までも狂信的に攻撃した結果だらうと思はれるのは、近頃日本人基督敎徒に依つてなされた國民的感情の異常な表現である。或る者は公然と外國宣敎師の駐在を謝絕し、精神に於て根本的に日本的な、根本的に國民的な、新しい特殊な基督敎を作り出さうといふ冀望を發表した。又或る者は更に進んで、凡ての傳道學校、敎會及び現在[註]日本人の名義に依つて所有せられる凡ての財產を、名義のみならず事實に於ても日本人基督敎徒に引き渡し、以て彼等が公言する動機の純眞なることを證せよと要求する。[註]そして事實傳道學校は全く日本人の管理に引き渡すの止むを得ざることは、既に大抵了解せられた。

註　日本の法律に叶はせる爲め或は法律をくゞる爲めに。

自分は舊著に於て、全國民が政府の敎育上の努力と目的とをめざましい熱誠を以て助成した事を述べた。[註一]之に劣らぬ熱心と克己とが國防の經營に於ても示された。天皇親[みづか]ら軍艦の新調に御手元金の大部を割いて範を垂れられたので、同じ目的の爲めに、凡ての官吏の

俸給の十分の一を献納せしめる法令が出ても怨言などは少しも起こらなかつた。あらゆる陸海軍士官、あらゆる教授教師、其外殆ど凡ての官衙の使用人はかくして毎月海軍へ献納金を納めるのである。[註二]大臣、貴族、國會議員等も、尤も低い郵便局書記と同様に其數には漏れぬのである。此法令に依る献納金は六年繼續の筈であるが、此外にも國内を通じて富裕な地主、商人、銀行家等が進んで巨萬の献納金を爲した。これは日本が國家を救ふ爲めには一日も早く兵を强うせねばならぬのに、外部の壓迫は益〻甚だしく、少しも遲延を許さぬからの事である。日本の努力は殆ど虚言の様である、其成功も不可能とは思はれない。併し形勢は日本の爲めに甚だしく不利である。日本は遂に——蹉跌するやも圖られぬ。果たして蹉跌するだらうか。豫言は甚だむつかしい。併し蹉跌するにしても、必らずやそれは國民精神の衰弱せる結果ではない。それは大抵政治的誤謬——無謀な自信の結果として起こるであらうと見る方が眞に近い。

註一　『知られぬ日本の面影』を見よ。

註二　郵便脚夫及び巡査は除外された。併し巡査の俸給は一箇月約六圓に過ぎず、郵便脚夫は更にそれよりも少いのである。

九

尙ほ一つ殘つて居る疑問は、此吸收、此同化、此反動の眞中で、日本の舊道德はどんな運命の下にあるかといふ事である。之が解答は自分が最近に一大學生と交はしたつぎの談話の中に一部分暗示せられて居ると思ふ。これは記憶に手緣つて書いたので、逐語的に精確てはないが、新時代人の、思想を代表するものとして――神々の消滅の證言として興味がある――

『先生、先生が初めて日本へお出の時、日本人をどう御覽になりましたか、何卒率直にお話し下さい』

『今の若い日本人の事てすか』

『いゝえ』

『そんなら今ても昔の習慣に從ひ、昔の禮式を守つて居る人々――君の以前の漢文の先生の樣な、今ても昔の武士(サムラヒ)氣質を存して居る、愉快な老人の事てすか』

『左樣てす。A――先生は理想的の武士てす。彼樣(あんな)人の事てす』

『僕は彼樣な老人を善いもの貴いものの限りに思ひました。僕には丁度日本の神樣の樣に見えました』

『今でも其樣にお考へですか』

『さうです。若い日本人を見れば見る程、昔の日本人を益々嘆美します』

『我々とても嘆美します。併し先生は外國人として彼等の缺點をもお認めになつた筈と存じますが』

『どんな缺點ですか』

『西洋流の實際的知識の缺乏です』

『併し或る文明に屬する人を、系統の全く異る他の文明の標準で判斷するのは正當でありません。或る人が其人の屬する國の文明を完全に代表すればする程、我々は其人を市民として又紳士として益々尊重せねばならぬと思ひます。舊日本人は道義的に甚だ高かつた彼等自身の標準で判斷すれば殆ど完全な人の樣に僕には見えます』

『どういふ點で』

『親切、禮讓、俠氣、克己、献身的精神、孝行、信義の諸點、及び足ることを知るといふ美風などで』

『併しさういふ諸點は、それだけて西洋流の生活の競爭に實地の成功を收めることが出來ませうか』

『確とさうも云はれぬが、其中の或るものは助けになるてせう』

『西洋流の生活て實地の成功に眞に必要な性能こそ、舊日本人に缺けて居る性能てはないてせうか』

『さうてせう』

『日本の舊社會は先生のお讃めになる、非利己心、禮讓、仁義などの德を養成しましたが、其代り個性を犧牲に供しました。然るに西洋の社會は無制限の競爭て、個性を養成しました――思想、行動の競爭て』

『それはその通りてす』

『併し日本が諸國民の間に其地位を維持し得る爲めには、西洋の工業、商業の方法を學ばねばなりません。日本の將來は一に懸かつて工業の發展に在ります。然るに我々が祖先の道德慣習を墨守して居たのでは何の發展も出來ません』

『何故てすか』

『西洋と競爭の出來ぬ事は破滅を意味します。併し西洋と競爭するには、西洋の方式に

則らねばなりません。然るに舊道德は之と矛盾します』
『多分さうでせう』
『それに疑ひはないと思ひます。他人の仕事に障るやうな利益を求めてはならぬといふ觀念に妨げられては、大規模な仕事は出來ません。然るに、競爭に制限のない處では、全くの慈悲深さから競爭を躊躇する樣な人間は失敗するに極つて居ます。競爭の法則は强き者、活動する者は勝ち、弱き者、愚かな者、悟濟なる者は敗るゝのであります。併し日本の舊道德はこんな競爭を罪惡視しました』
『それはさうです』
『そんなら、先生、舊道德は如何によくても、それを守つて居たのでは、我々は工業上の大進步も出來ませず、國家の獨立を維持する事さへ出來ぬではありませんか。我々は我我の過去を棄てる外ありません。道德に代ふるに法律を以てする外ありません』
『併しそれはよい代りではない』
『英國の物質的强大を手本にして判斷してよいならば、西洋ではそれが至つてよい代りでありました。我々は日本に於ても情緒的に道義的であることを止めて、理性的に道義的となるやうにせねばなりません。法律の理性的道義を知ることは、夫だけて道義を知るこ

とになります』

『君達や宇宙の法則を研究する人々に取つては、或はそれで宜からう。併し一般民衆はどうなる』

『彼等は古い宗教を守らうとするでせう。神佛の信頼を續けるでせう。併し恐らく彼等にも生活は益々困難になるでせう。彼等は昔は幸福でした』

註　右の一文は二年前に書いたのであるが、其後起こつた政治上の事件新條約の調印は昨年之を訂正するの止むを得ざるに至らしめた。然るに今其校正中支那との戰爭が起こつた爲め更に又一言附記せざるを得ざるに至つた。一八九三年（明治二十六年）には豫言し得なかつた事も一八九五年には全世界が驚嘆を以て認めるに至つた。日本は、柔術に於て勝つたのである。日本の自治權は實際上恢復せられ、文明國としての地位は確立されたやうだ。日本は永久に西洋の保護から脱した。其藝術でも其德操でも得ることの出來なかつたものを、新しい科學的の攻擊力、破壞力の最初の發現で獲得した。

日本　此戰爭の爲めに長らく祕密に大準備をなしたとか、開戰の口實は薄弱だとか、隨分輕率な批評があつた。併し自分は日本が戰備を修めた目的は前章に說いた所に外ならなかつたと信ずる。日本が二十五年間絕えず兵力を培養したのは全く其獨立を恢復する爲めであつた。併し其間に外國の壓力に對して打つた人民の反動の脈搏は――一打每に次第に高く――國民が伸びつゝある力の自覺と、條約に對して次第に增加する憤慨とを政府に知覺せしめた。一八九三――九四年の反動は衆議院で大分切迫した形を取つたので、

途に議會解散が差し當つての必要事件となつた。併し重ね重ねの議會解散も只だ問題を延期するに留まつた。其後漸く新條約の成立と突然支那に對する兵力の放散とで此危機は避けられたのであつた。日本に對する西洋諸國の無慈悲な工業的並びに政治的の壓迫か此戰爭を促成した事は明らかではあるまいか――ただ抵抗力が最も少い方面に力が漏出したのである。幸に其力の漏出は效果を擧げる事が出來た。日本は世界を相手にして其地位を守り得ることを證明した。日本は西洋との工業的關係を、更に此上壓迫せられぬ限り斷絕しようとは望まぬ。併し帝國陸軍の復活で、西洋が日本を威壓する――直接にも間接にも――時代は斷然過ぎ去つた。物の自然の順序として、更に排外的反動が期待されぬでもない――その反動は必らずしも亂暴な或は不道理なものではあるまい。が、國民的個性の强固な主張を體現したものであらう。幾世紀となく專制政治に馴れた國民が爲した立憲政治の實驗の結果の不確さを考へると、政體の變化さへ幾らかあり得べからざる事でもない。併しサー・ヘンリー・パークスが、日本は南米共和國の如きものとなるだらうと云つた豫言の外づれたことを思ふと、此の驚くべき謎的な人種の將來を豫想しようとするのは危險である。

戰爭は未だ終はらぬ事は事實だ――併し日本が終極の勝利を得ることは疑ひない――支那に革命の偉大な機運を與へる事を斟酌して見ても。世界は既に不安を以て、つぎに何事が起こるかと心配して居る。多分此最も平和な最も保守的な支那國民をして、日本並びに西洋の壓迫の下に、自衞上西洋の戰術を能く學ぶの止むを得ざるに至らしむるであらう。然る後に軍事上に支那の大覺醒が來るであらう。すると新日本と同じ事情の下に支那は多分其兵力を南と西に向けるであらう。最後の結果がどうなるかは、ドクトル・ペ

アソンの近著『國民性』を見らるゝがよい。

柔術は支那で發明せられた術であることを忘れてはならぬ。而して西洋はこれから支那を相手にせねばならぬのだ――日本の師匠なる支那――征服の嵐が後から後からと、たゞ瞬間を分ける風の樣に、其頭上を通過しても、幾千萬の住民には些の影響を與へ得なかつた支那をである。實際支那は、强制されて日本の樣に柔術に依つて其保全を圖るの止むを得ざるに至るかも知れぬ、併し其驚くべき柔術の終極は全世界に尤も重大なる結果を及ぼすかも知れぬ。西洋が植民の爲めに弱小人種を處理するに犯した貪食、强奪、鏖殺の罪を責罰するの任は、支那に保留されてあるのかも知れぬ」

既に或る思想家は――閑却する事の出來ぬ英佛の思想家――二大植民國の經驗より結論して、世界に決して西洋民族に依つて悉く統御せられぬであらう、將來は寧ろ東洋に屬すると豫言した。又長らく東洋に滯留して、我等と全く思想を異にする不可思議な民族の一と皮めくつた下面を見ることを――其民族の生の潮の深さと强さを了解することを――其測るべからざる同化心を見拔くことを――其南北兩極間の殆ど如何なる環境にも適合し行く力を認知することを學んだ多くの人々も之と同樣の確信を有するのである。かういふ人々の考では世界の人口の三分の一以上を包含する此人種を絶滅せざる限り、我等が文明の將來をさへ保證し得ぬといふのである。

恐らく最近ドクトル・ペアソンが斷言した樣に、西洋人の膨脹侵略の長い歴史は今や其終末に近づきつゝあるのである。恐らく我等の文明は世界を帶の樣に卷いたが其結果はたゞ我等の破壞術、我等の工業競爭術を、我等の爲めよりも我等を脅かす爲めに用ゐんとする民族に學修せしめたに過ぎない。しかも之を爲

す爲めに世界の大部分を屬國にした――それ程大きな力が入用であつたのだ。我等は多分さうせざるを得なかつたのであらう、その故は我等が創造した社會といふ機關（からくり）は昔噺の鬼のやうに、それに最早授ける仕事がなくなるや否や我等を食はんと脅かすからである。

思へば我等の文明は驚くべき創作物である――益々深まる苦痛の深淵から益々高まり行くのである。多くの人には驚きよりも更に奇怪なりといふ感を與へる。社會的地震で突然崩れるかも知れぬとは、文明の頂上に坐る人々の久しい間の惡夢であつた。其道德的基礎の故に社會的建造物として此文明は長持ちはすまいとは東洋の賢者の敎ふる所である。

此文明が生み出した結果は、此地球上に人間が其生存の劇を十分に演じ盡くす迄滅亡せぬ事は確であらう。此文明は過去を復活さした――死せる國語を蘇生せしめた――自然から其貴重な祕訣を無數にもぎとつた――星辰を分析し、時と空間とを征服した――見えぬ物を見えざるを得ぬやうにして、無窮の帳の外のあらゆる帳を引きめくつた――數千百の學問を建設して、近代人の腦髓を中世人の頭蓋骨には入り切れぬ程膨脹せしめた――尤も厭ふべき種類の個性をも進展せしめたが同時に尤も貴い個性をも進展せしめた――他の時代には嘗てなかつた利己主義と苦惱とを發展さしたが、未だ嘗て人間に知られざりし程の尤も細かい同情と尤も崇高（けだか）い情緒をも發展さした。知的には此文明は星の高さよりも高く生長したのである。兎に角此文明が將來に及ぼす影響は希臘文明が其後の時代に及ぼした影響よりも遙かに大であらうとは信ぜまいとしても信ぜぬ譯に行かぬのである。

併しながら此文明は年と共に益々、「或る組織體は複雜になればなる程、致命的の傷害を益々受け易くな

る』といふ法則を例證する。其力が增すに從つて、其中に、より深い、より鋭い、より細かく分岐した神經が發達して、あらゆる激動・傷害――あらゆる變化の外力を、感ずる樣になる。もう既に世界の遠い果てに起こつた旱魃や飢饉の結果、極小さい原料供給の中心地の破壞、鑛山の枯渇、商業上の諸動脈たる運輸のほんの一時的中止などでも、忽ち混亂を起こして偉大な建造物の各部分に苦痛の衝動を傳へるのである。然るに此建造物には外力の刺激に應じて內部に變化を起こし之に對抗する驚くべき能力を有したのであるが、それも今やそれとは全く異る性質の內的變化に依つて危らせられるやうに見ゆるのである。我等の文明は個人を益々發展させつゝある事は確であるが、人工の熱・色附けた光、及び化學的肥料で、植物をガラス箱の中で育てるやうに發展させるのではあるまいか。それは長く維持することの出來ない境遇に特に適應し得るやうに、幾百萬の人間を速成的に養成してあるのではあるまいか――卽ち少數者を無限に贅澤な境遇に、而して多數者を鐵と蒸氣の殘酷な奴隷的境遇に。此疑問に對してはかういふ答が與へられてあつた、――社會の改變で危險に備ふる方法と凡ての損害を償ふ方法とを得らるゝであらうと。少くとも一時は社會の改革が奇蹟を演ずるであらうことは殆ど確實である。併し我等の將來に關する終極的の問題は如何なる社會改良でも巧く解くことは出來ぬやうに思はれる――絕對に完全な共產主義の社會が建設せられると假定しても――といふのは、高等民族の運命は自然力の將來の經濟に於ける彼等の眞價に依つて決せられるものであるからである。『我等は優等人種でないか』との問には力強く『然り』と答へ得る。併し此の肯定は『我等は生存の適者であるか』といふ、更に一層重要な問に對する滿足な解答にはならぬであらう。

抑も生存の適者たる資格は何に在る。それはあらゆる環境に自己を適合せしむる能力にある、豫知し得ざる事物に對して臨機應變の處置を執り得る技倆に在る、――凡て不利なる自然力に對抗し、之を統御する天賦　力量に在る。決して我等自ら作成したる人工的環境に、卽ち我等自身の製造にかゝる變態的の情勢に自己を適合せしむる能力に在るのではない――全くたゞ單なる生きる力に在るのである。而して此單なる生活力に於ては我等の所謂高等民族は極東の民族に劣ること甚だしい。西洋人の體力と知力とは東洋人を凌駕するけれども、彼等は此民族的優秀さと全く釣り合はぬ生活費に於てのみ生活し得るのである。處が東洋人は米の飯を食ひつつ我等が科學の結果を研究し熟達するの能力あることを示した。又同じ簡單な食物で我等が尤も複雜な發明品を利用したり製造したりすることを學び得るのである。然るに西洋人は二十人の東洋人を生活さするに足るだけの費用をかけぬと一人が生きる事さへ出來ぬのである。我等が優秀さの中に我等が致命的な弱點が潜むのである。民族競爭と人口夥多の壓迫が來ること確實なる將來に於て、我等の肉體といふ機關は之を運轉するのに到底割りに合はぬ薪炭を要するのである。

人間の出現前には又恐らく出現後にも、今は絕滅して居る種々の巨大な驚くべき動物が此地球上に生存して居た。彼等は悉く外敵の攻擊に依つて亡ぼされたものではない。其多くは地球の惠澤が段々減少する時代に彼等の體軀が餘りに消費的であるばかりに自然に滅亡したやうに思はれる。丁度その樣に西洋民族は彼等の生活費の故に滅亡するといふことになるかも知れぬ。乃ち彼等は其事業の極限を仕盡くした後、此世界の表面から姿を消し、もつと生存に適した人種に依つて取つて代はらるゝかも知れぬ。

我等が丁度弱小種族を、たゞ彼等よりも贅澤に生活することに依り――殆ど無意識に、彼等の幸福に必要

なる凡ての物を專有し吸收する事に依り絶滅せしめた樣に、此度は我等自身が、我等よりも安價に生活し得る、我等のあらゆる必要品を專有し得る民族に依つて遂に絶滅せしめられるかも知れぬ——即ち我等よりも忍耐に富み、克己心に富み、繁殖力强く、自然の恩惠を浪費すること少き民族に依つて。而して此等の民族は疑もなく我等の知識を承繼し、我等の有用な發明を採用し、我等の工業の優れたるものを續行するであらう——多分我等の學問藝術の後世に傳ふべき價値あるものを永久に傳へるであらう。併し彼等は我等の消失を別段惜しみもせぬこと丁度我等が恐龍や魚龍の絶滅を見ると同樣であらう。

赤い婚禮

一と目で戀をする事は日本では西洋で程普通でない、其理由は一つは東洋の社會の特殊な組織からで、一つは兩親の執成で、戀の悲みを知らぬ中に早く結婚するからである。然るに一方に戀故の自殺は餘り珍らしくもない、ただ其場合は大抵二人一緒であるといふ特殊性がある。且又大抵は不義の關係の結果と考へられる。でも正直な勇敢な除外例もある。そしてそれは普通田舍に多い。そんな悲劇の戀は最も無邪氣な、自然な、幼馴染から突然發展したものなどで、尋ねれば二人の幼年時代に溯る歴史を有つのがある。併しそんな時でも西洋の情死と日本の情死との間には、甚だ奇妙な相違がある。日本の情死は苦惱から起こる盲目な急速な狂氣の結果ではない。冷靜で秩序ある上に宗教的でもある。死を以て誓約書とする一種の結婚を意味する。男女は神々を證にしてお互に誓詞を立て、遺言狀を認め、そして死ぬのである。如何なる誓詞もこれよりもつと神聖であることは出來ない。

だから若し思ひ掛けぬ外部の妨害と醫療とて、情死の片割（かたわれ）が死の手からもぎ離された時は、其片割は愛と名譽の嚴かな誓約に依つて、出來るだけ早い機會を捉へて命を捨てる義務がある。勿論雙方救はれた時は問題はない。併し一旦女と死ぬる誓をした後に、女だけを一人で冥途に旅立たせた男として後指さされるよりは、惡虐な罪過を犯して半生を牢獄の裡に送る方が遙かに優（まし）だとされて居る。女は誓に背くことがあつても幾分寛大視されるが、男は妨害に逢うて死に損ね、一度目的が挫かれたばかりに、おめおめと生き存へようものなら、終生僞誓者、殺人犯、人非人、人間の面汚し（つらよごし）として見らるゝが常である。自分はそんな實例を一つ知つて居る――併し自分は今寧ろ東國の或る村にあつた、賤が家の戀物語を紹介する。

一

村は廣いが極淺い川に臨んで居て、其川の石多い川床は雨季の間のみ完全に水に蔽はれる。そして此川は、南北は地平線に連らなり、西は青い山脈に圍（かこ）ひ込まれ、東は森林の茂れる丘陵に仕切られてる、廣濶な水田の中を横斷して居る、村と丘陵との間は僅に半哩の

水田に隔てられてる計りてあるが、其手近い丘陵の頂上に、十一面觀音の堂があつて、其附屬地に村の重なる墓地がある。村は物資の集散地として餘り詰まらぬ村ではない。普通の田舍風の藁葺家が數百軒ある外に、繁盛な二階建ての商店、綺麗な瓦屋根の宿屋などが一杯並んで居る街路が一筋ある。其外に又風雅な氏神、卽ち日の女神を奉祀した神道の社(やしろ)と、桑畠の中に蠶神を祭つた美しい祠(ほこら)がある。

明治の七年に此村の內田といふ染物屋に、太郎といふ男子が出生した。處が其出生の日が惡日であつた――陰曆の八月七日であつた。そこで舊弊な兩親は心配し且つ悲しんだ。併し同情せる隣人は彼等に說いて、曆は勅令に依つて改正せられた、其新曆では其日は吉日であるから萬事意の如く運んだではないかと、思ひかへさせようとした。此忠告は幾分か兩親の心配を緩和した、併し小兒が氏神へ宮詣りの折には、神前へ大きな紙燈籠を献納し、凡ての殃禍(わざはひ)を小兒の身上から拂はせ給へと熱烈に祈願した。神主(かんぬし)は古風な儀式を繰り返し、神聖な御幣を小さな坊主頭の上へ振り廻はし、小兒の頸へ掛ける小さな護符を作つて吳れた。兩親はそれから更に丘の上の觀音堂へ參詣し、そこでも供物を供へて、彼等の初生子(うひご)を護らせ給へとあらゆる佛に祈願した。

二

太郎が六歳になつた時、兩親は村の近處に建てられた新しい小學校へ通はせようと決心した。太郎の祖父が筆紙、敎科書、石板などを買ひ與へて、或る朝早く手を引いて學校へ連れて行つた。太郎は大悦喜であつた。石板だの其他のものは新たな玩具の様に思はれるし、又誰れも彼れも學校は面白い處で、遊ぶ時間が澤山あると云ふ上に、學校から歸ると澤山菓子をやるといふ母の約束もあつた。

ガラス窓のある大きな二階建ての學校へ到着すると、校僕が大きな質素な室へ案内する。其處には嚴肅（まじめ）な顏をした人が机を控へて坐つて居た。太郎の祖父は其嚴肅な人に丁寧にお辭儀をして先生と呼び懸け、恭しく此小兒を御敎授下されと乞うた。先生は立ち上がつて禮を返し、鄭重に挨拶した上、太郎の頭へ手を載せて優しい言葉をかけた。併し太郎は直に怖（こは）くなつた。祖父が別辭を述べた時益々怖くなつて、逃げて還りたくなつた。が、先生は彼を連れて、大勢の男女の子供が腰掛に並んで居る、大きな、天井の高い、白壁の室へ往つて、一つの腰掛を指し、坐るやうに命じた。男女の生徒は悉く頭を轉じて太郎の方を

見ながら、互に耳語きあつて笑つた。太郎は笑はれると思ふと、甚だ悲くなり出した。大きな鐘が鳴つた。と、室の一方の教壇に上がつた先生は、太郎を喫驚させた程の聲で靜かにと命じた。一同靜まり返つた處で先生は喋り始めた、其詞は太郎に非常に恐ろしく感ぜられた。學校は面白い處だと先生は云はない、學校は遊ぶ處でない、勉强する處だと告げた。又勉强は苦しいものだ、併し苦しくてもむつかしくても生徒は勉强せねばならぬと告げた。又守るべき校則の話や、それに背いたり不注意の時に蒙るべき處罰の話しをした。一同恐懼して蕭然とした處て、先生は全く語調を變へて慈父の如く語り出した――我が子の如く一同を愛すると約束して。つぎに學校は天皇陛下の叡慮に依つて建てられたことや、それに依つて此國の男兒も女兒も賢男善女となり得ることや、天皇を深く敬愛し陛下の爲めには喜んで身命をも抛つべきことを告げた。それから又彼等は父母を愛すべきこと、彼等の父母は彼等を學校へ通はす爲めに職業に一層骨を折つて居ること、それに勉强すべき時間に怠けて居るのは忘恩悖德の所業であることを告げた。それが濟むと先生は生徒を一一指名して、今告げたことに就て試問をした。

　太郎は先生の詞の一部分しか聽き取れなかつた。彼の小さい心は彼が初めて室へ入つた時、生徒一同が彼を見て笑つた事實で殆ど一杯になつて居たのだ。何を笑はれたかが彼に

は非常に切なかつたので、其外の事などは考ふる餘裕もない、從つて先生が彼の名を呼んだ時にも全く彼には用意がなかつた。

『內田太郎、お前は一番何が好か』

太郎は驚いて起立して正直に答へた。

『菓子です』

男生女生悉く彼の方を見て又笑つた。先生は叱るやうに問ひ返した。「內田太郎、お前は父母よりも菓子が好か。お前は天皇陛下に盡くす忠義よりも菓子が好か」

其時太郎は何か大きな間違ひを云つたなと氣が附いた。それで顏は熱くなる、一同には笑はれる、遂に泣き出した。それも一同を益〻笑はせるに過ぎなかつた。先生が一同を叱り飛ばして、同じ問をつぎの生徒に懸けるまで笑ひは止まなかつた。太郎は袖を眼に當てて啜り泣いた。

軈て鐘が鳴つた。先生はつぎの時間には、他の先生から初めての習字の授業があるが、先づ敎室を出て暫く遊んで來てもよいと告げて出て行つた。男女の生徒は悉く校庭へ遊びに出た、誰れあつて太郎を顧るものもない。太郎は初めに衆目環視の的となつた時よりも、かう打棄れた事を一層心外に感じた。先生の外に誰れ一人言葉をかけるものもなかつたが、

今は其先生も彼の存在を忘れた樣だ。太郎は小さい腰掛に又腰を下ろして泣きに泣いた。生徒等が又歸つて來て笑はれぬやうに聲を立てまいと苦心しながら泣いた。

突然彼の肩に手が掛けられ、優しい聲が耳元に聞こえた。振り囘るとこれ迄に見た事がないやうな情深い二つの眼を認めた——太郎より一歳位年長な小娘の眼であつた。

『どうしたの』彼女はやさしげに問うた。

太郎は一寸啜り泣いて、手緣りなげに鼻を鳴らした後に答へた。『面白くない。家へ歸りたい』

『何故』と娘は腕を太郎の頸へそつとかけながら問うた。

『皆が己れを嫌ふんだ。口もきいて吳れず、遊ばうともしない』

『さうぢやあないよ』娘は云つた。『誰れもお前を嫌やアしないよ、ただお前は新參だからよ。妾が去年初めて學校へ上がつた時も、丁度其通りだつたよ。怒つちやいけない』

『外の奴はみんな遊んでる、己ればかりここに居るんだ』と太郎は抗議を持ち込んだ。

『アレ焦れちやアいや、サアお出て、妾と遊ばう。妾がお友達になつてあげる。サア』

太郎は聲を擧げて泣き始めた。自ら憐むの念と、感謝と、新たに得た同情の喜びとが、彼の小さい胸に一杯になつたので、遂に制へ切れなかつたのだ。泣いてるのを慰められる

のはそれ程嬉しかつたのである。

併し娘はたゞ笑つて、素早く太郎を室外に誘ひ出した。彼女の胸にある小さい母性愛が機を察して動いたのである。『泣きたいならお泣き』娘は云つた。『だが、遊ぶのもいいよ』かくて二人は愉快に遊んだのである。

學校が濟んで太郎の祖父が迎へに來た時、太郎は又泣き出した。それは此小さい遊び友達に別かれを告げなければならなかつたからである。

祖父は笑つて云つた。『およしぢやアないか――宮原およしだ、およしも一緒に來て家で遊ぶがよい。丁度歸り途だ』

太郎の家で二人は一緒に約束の菓子を食べた。およしはからかふ様に先生の嚴格な態度を模ねながら問うた。『内田太郎、お前は妾よりもお菓子が好か』

三

およしの父は若干の田を手近に所有つて居る上に、村にも店を持つて居た。母は武士の子て、士族の解放された時、宮原家へ養はれたのであつた。子供は大勢生んだが末子のお

よしのみが生き殘つて居た。其母もおよしがまだ赤ん坊の時死んで了つた。宮原は中年を超えて居たが、小作人の娘の伊東お玉といふ若い娘を後妻に娶つた。お玉は新しい銅貨のやうに赤黒かつたが、目立つて綺麗な百姓娘て、丈高く丈夫て活潑であつた。併し讀み書きは少しも出來ないので、人々は宮原が此娘を選んだのを奇異に思つた。奇異の思ひはやがて可笑しさに變つた。それはお玉を家に入れると、直ぐお玉は絶對主權を握つて、それを振り廻はしたからである。併しお玉の人となりが段々分かると、隣人は宮原の意氣地なしを笑ふのを中止した。お玉は良人の事業を良人よりも能く了解して、萬事を監督し、巧妙に家政を處理するので、二年と經たぬ中に彼の收入は倍加した。宮原は明らかに、お蔭て金持ちになれる女房を貰つたのである。繼母としては自分の長子が生まれた後までも親切に擧動(ふるまつ)たから、およしは手厚き介抱を受け、學校へも正式に通はせられた。

子供等がまだ學校通ひをして居る中、久しく待ち設けられた驚くべき事件が起こつた。頭髮と鬚の赤い、長(せ)の高い妙な人間——西洋人——が日本人の勞働者を大勢連れて此村へやつて來て鐵道を造り上げた。それは田甫と村の後ろの桑畠の向うの、低い丘陵の麓に沿うて出來たのだが、觀音堂へ行く舊道と交叉する處に小さい停車場が建てられて、歩廊(プラツトフオーム)に立てた白い札に村の名が漢字で記された。少し經(た)つてから一列の電信柱が線路と並行に立

てられた。も少し經つてから汽車が來て、笛を吹いて、停まつて、そして出て行つた――古い墓地にある佛像を蓮華の臺石から搖り落とさぬばかりにして。

子供等は此不思議な、水平な、灰の撒布されてる道に、二本の鐵がぴかぴか南北へ延びて雲烟の中に沒し去るのを見て驚嘆した。更に列車が嵐を吹く龍の樣に、大地を震るはせながら、吼えたけり煙を吐きつつ來るのを見て恐怖した。併し此恐怖の後には好奇心が入れ替つた。――此好奇心は教師の一人が黑板に圖を描いて、機關車の構造の說明をしたので一層强められた。其教師は又、電信の更に一層不思議な作用を教へた。そして新東京と京都との間は鐵道と電線で結び附けられるから、兩都の間を二日以內で旅行も出來るし、數秒で通信も出來るといふことを告げたのである。

太郎とおよしは大仲善しになつた。一緒に勉强もし、遊びもし、相互の家を訪問しあつた。併し十一の時およしは學校を下げられて、繼母の手傳ひをさせられる事になつたので、太郎がおよしに會ふことは稀になつた。する中に彼は十四になつて學校を卒業し、父の家業を習ひ初めた。悲みは來たつた。彼の母は一人の弟を生んで死亡した。其年の中に、彼を初めて學校へ連れてつた親切な祖父も、母の後を追うた。それから後は世界が暗くなつ

たやうに思はれた。併し彼が十七になる迄、彼の生活には其後何の變化も起こらなかつた。折々はおよしと話しをする爲めに宮原の家を訪れた。およしはすらりとした美しい女になつた。が彼には樂しかつた昔の面白い遊び仲間に過ぎなかつた。

四

或る柔らかな春の日に、太郎は甚だしく淋しさを覺えておよしに逢つたら樂しからうといふ考がふと浮かんだ。多分彼の記憶には、淋しいといふ一般感覺と、彼の初めての學校生活の特殊な經驗との間に或る確な關係が存在したのであらう　兎に角胸の中の或る物——多分死んだ母の愛が作り上げた、さうでなければ他の死んだ祖先に屬する或る物が——一片の情味を要求した、そしておよしから其情味が貰へると信じたのである。そこで太郎はおよしの小さい店へと歩を運んだ。店の眞近まで來た時、およしの笑ひ聲が聞こえてそれが馬鹿に優しく響いた。およしは年老いた百姓に物を賣つてる所であつたが、百姓は滿足な樣子で聲高に喋つて居た。太郎は待たせられて早くおよしの談話を獨占し得ぬのを腹立たしく感じた。併しおよしの近くに居るだけでも少しは晴れ晴れしくなつた。彼はじろ

じろ彼女を眺めて居たが、突然今迄彼女がこんなに美しいと思はなかつたのを不思議に思ひ始めた。實際彼女は美しかつた――村の何の娘よりも美しかつた。太郎は且つ眺め且つ驚きつつあつたが、彼女は益々美しくなるやうに見えた。餘り不思議なので彼には譯が分からなかつた。併しおよしはその熱烈な凝視の下に、初めて恥づかしく覺えて耳の根まで眞赤になつた。其時太郎は彼女が世界中の何の女よりも美しく、可愛く、立ち優つて居ることを確信し、それを彼女に云ひたいと思つた。と忽ち老いたる百姓が只だの女にでも話すやうに、およしに喋々と饒舌つて居るのが癪に障つて堪らぬのを感じた。數分にして太郎には全宇宙が全く一變した、しかも彼はそれに氣が附かぬ。彼はただ暫く逢はぬ中に、彼女が天女の樣になつたのを認めた。それで機會が來るや否や、彼が愚かしき心中を打明けた、彼女も同じく心中を打明けた。そして二人の心がかうも同じであつた事を不思議に思つた。さてそれが大難の始めてあつた。

五

太郎が、およしに話してるのを見た年老いた百姓といふのは、ただ買ひ物に彼の店を訪

れたのではなかつた。彼は本業の外に仲人即ち媒介を職業にして居たので、其時は岡崎彌一郎といふ富める米商の手先きを勤めて居たのであつた。岡崎はおよしを見て非常に氣に入つたので、此仲人業者に頼んで、彼女の身性と家族の状況を調べようとして居たのであつた。

岡崎彌一郎は百姓共や、村の隣人等にも酷く嫌はれる中老の男で、粗野で醜男で騒がしい無作法者であつた。彼は又邪慳な男と評判された。一年飢饉の折に米相場をして儲けた事は知られた事實て、百姓共はそれを罪惡だとして赦さない。彼は此縣に生まれた者でもなく親戚があるのでもない。十八年前に女房と一人の子を連れて西國の方から此村へ移住したのである。女房は二年前に死に、虐待されたといふ評判の一人子息は、突然家出をして行衛知れずである。其外彼には色々の惡るい評判がある。其一つは西國に居た時、激せる暴民に家藏を掠奪されて、命からから逃げたといふのである。今一つは彼が結婚の晩に地藏尊に御馳走を出させられたといふのである。

不人望な農民が結婚の時、花聟に地藏を饗應させるのは今でも或る地方では行はれる。屈疊な若い衆の一隊が、石地藏を大道から或は近處の墓地から借りて來て、花聟の家に擔ぎ込むと、大勢が後からついて行くのである。さて石像を座敷に置いて、酒肴をしてたま

供養せよと命ずる。これは勿論彼等自身への供養の意味で、それを拒むのは非常に危險だ。そして此の招かれざる客共は、もう飲めぬ食へぬと云ふ迄御馳走になるのである。こんな饗應をさせられるのは、公然の懲戒であるばかりでなく、消すに消されぬ公然の恥辱であるのだ。

岡崎は年にも恥ぢず若い美しい妻を娶らうといふ贅澤な野心を持つて居た。併し彼の富を以てしても此願望は思つたやうに容易くは達せられなかつた。緣談を申し込まれた家の中には、實行不可能な條件を並べて卽座に謝絕したのが少くない。村の村長はもつと無遠慮に己れの娘はお前に遣る位なら鬼に遣ると云ひ放つた。そこで此米商は縣外で嫁探しをするより外はないと諦めるだらうと思つてると、最後に偶然にもおよしを見附けたのである。此娘が又非常に氣に入つたし、家は定めて貧乏であらうから、幾らか金でもやつたら手に入るだらうと考へた。それで仲人を通して宮原家と談判を開始しようと試みたのである。小作人の娘であるおよしの繼母は、全く無敎育ではあるが、一條繩で行く女ではない。彼女は其繼娘を少しも愛しては居ぬが、怜悧だから理由なく虐待する樣な事はしない。且つおよしは彼女の邪魔になる處ではない、忠々しく働きもするし從順で、氣輕て、家の役

にも立つて居るのである。併しおよしの美點を認めた其冷靜な敏感は、同樣に結婚の市場に於けるおよしの價値をも計算した。岡崎は猾智に於て己れよりも性來上手な女を相手にするとは夢にも思はなかつたのであらう。お玉は岡崎の經歷を大分知つて居り、富の程度をも知つて居た。彼女は亦岡崎が村の內外の處々から女房を貰ひ損ねたことも聞いて居た。それておよしの美顏が眞に彼の熱情を惹起したのではないかと推察した。そして老人の熱情は多くの場合利用し得るものだといふことも知つて居た。およしは實の處驚くべき程の美人てもないが、實際綺麗て優しく何處か愛嬌のある娘て、先づこれ位の娘を手に入れるには、此近鄕では望みがない。此娘を女房にする爲めに岡崎が金を惜しむ樣なら、外にもよい心當たりの若者がお玉にはあつたのである。およしを岡崎に遣ることは遣るが、それには並大抵てない條件を附ける。先づ最初の申し込みをはねつけて見ると、其後の彼の出方て心の底が分からう。ほんとにおよしに執心なら、此界隈の人ては誰れにも出來ない程の支度金を仰せ附ける事も出來よう。そこて岡崎の眞の執心の程度を知ることが非常に肝要て、又それ迄は當分此事をおよしに知らせぬやうにする必要がある。仲人業の評判のよしあしは沈默の點にあるのだから、仲人が此祕密を漏らすといふ恐れはなかつた。

　宮原家の政策はおよしの父と繼母との協議て定められた。老宮原はとにかく女房の計畫

に反對する樣な男ではないが、お玉は先づ用心深く、結婚は色々の廉で娘の利益になるやうにせねばならぬといふことを强く說法した。そして岡崎に遣るとした時の經濟上の利益を話し合つた。この結婚には面白くない多少の危險もあるが、それは豫め岡崎に二三の契約を結ばせれば防ぐことも出來ると說いた。それから宮原が此芝居で演ずべき役割を敎へた。そして此談判中は太郞にも成るたけ度々來るやうに勸める事にした。此二人が好き合つてるのは、ほんの蜘蛛の巢の樣な薄つぺらな情愛だから、必要な時には拂ひ退けるに手間暇はいらぬが、當分は之を利用して遣るがよい。岡崎が若い鞘當て筋があると聞いたら、決心を早めて此方の思ふ壺にはまるであらう。

丁度其時、太郞の父は太郞の爲めにおよしを貰ひたいと初めて申し込んだ。併し右の理由で宮原家は唯とも云はなければむげに斷わりもしなかつた。只だおよしは太郞よりも一つ年上だといふこと、それからそんな配偶は習慣には背くといふことを述べた——それは實際其通りである。けれどもそれは薄弱な故障であつた。尤もそれは明らかに薄弱なればこそ、そんな文句を選んだのであつた。

同時に岡崎の最初の申し込みは其誠意が疑はしいと云はん計りの態度で迎へられた。宮原夫婦は仲人の意味が分からぬと稱して、明瞭な證言をも頑固に腑に落ちぬ風を裝うたの

て、岡崎は遂にこれならばと思ふ誘惑的な提議を持ち出すといふ政略に出た。宮原老人は其時此一件は妻の手に委ねて決定を待つことにする由を告げた。

するとお玉はあらゆる侮蔑的驚愕の態度で其提議を卽座に拒絕した。そしてつぎの樣な不快な話しをした。昔、金のかからぬ美しい女を手に入れようと思ふ男があつた。到頭一日に二粒の飯しか食はぬといふ美人を見附けて結婚した。其女は每日二粒の飯しか口にしないので彼は大いに滿足して居た。然るに或る夜旅から歸つて來た時、天窓から竊に覗いて居ると、彼女は食ふも食ふ、山程の飯と魚とを頰張つた上に、あらゆる食物を頭の頂上の髮の毛に隱れて居る穴の中へ押し込んで居るのを見た。そこで結婚した女は山姬であつたことを知つた。

お玉は謝絕の結果を一と月も待つた。欲しいと思ふ物の價値は、手に入れる困難が增せば增すやうに思はれるといふことを知つて居るから安心して待つた。すると案の定仲人が再び現はれた。此度は岡崎は前の樣に鄭重でなく單刀直入に問題に觸れた。最初の申し出を增額した上に誘惑的な約束をまで附け加へた。お玉はもう岡崎はこつちのもの、どうにでもなると知つた。彼女の作戰は混入つたものではないが、本能的に人間の醜い方面を知つて、其處に建てられた計畫であつた。そして彼女は成功を確信した。併し約束は愚者の

餌食、契約證書は律義者の罠に過ぎぬ。およしを手に入れる前に岡崎は財産の少からぬ部分を抛たねばならなくなつた。

六

太郎の父は太郎とおよしとの結婚を心から願つて、それを成り立たせようと一通りの手を盡くして見たが宮原家から判然した返答が得られぬのに驚かされた。彼は質朴な率直な人間だが同情的な性分に特有な直覺力があるので、平生好かぬお玉のわざとらしい丁寧な態度から、これは望みがないなといふ疑惑を起こした。寧そ此疑惑は太郎に話すが宜いと考へて、打明けた處が、太郎は焦慮の餘り熱病に罹つた。併しおよしの繼母は、作戰の初期に太郎を失望に陥れようといふ意志はない。それて病中は親切げな傳言を人に託したり、およしにも手紙を出させたりしたので、彼の希望も又生き返るといふ、思ふ通りの結果を來たした。恢復後に太郎が尋ねて行くと、歡待して店でおよしと談話をさせた。が彼の父からの申込に就ては一言も云はなかつた。

好いた同志には、又氏神の境内で折々出遇ふ機會もあつた。およしは繼母が末の孩兒を

背負つて屡〻其處へ出懸けたのである。其處では守娘や子供等や若い母達の間に混じつて、噂に上る憂ひもなく言葉を交はす事が出來た。一と月程の間は彼等の希望もかういふ風に何の邪魔も受けなかつたが、やがてお玉はからかひ半分に太郎の父に迚も出來さうもない金錢上の相談を持ち懸けた。彼女は己が假面の片隅を持ち上げたのである。岡崎は彼女の張つた網に掛かつて猛烈にもがいて居たが、もがきやうが激しいので、もう最後の決定も遠くないと見込んだからである。およしはまだこんないきさつは知らなかつたが、どうも太郎の處へ嫁つて呉れぬてはなからうかといふ不安を感じて、日増しに肉は痩せ色は青ざめつつあつた。

　太郎は或る朝およしに逢ふ機會もがなと思つて、末の弟を連れて氏神の境内に往つた。丁度出逢つたので何やら心配になるよしを告げた。それは太郎が子供の時、母が頸に掛けて呉れた小さい木の護符が、絹の袋の中で破れて居たといふのであつた。

『それは緣起が惡るいのではありませんか』およしが云つた。『神樣が貴君を守つて下さつた證據てす。村に疫病が流行つた時、貴君も罹つたてせう、そして快くなつたてせう。護符が守つて下さつたのてす。だから破れたのてす。今日にも神主に話して新しいのをお貰ひなさい』

彼等は心甚だ樂まない、遂ぞ今迄人に惡るい事をした覺えもない。それで自然因果應報の道理に話しが向いた。

太郎は云つた。『己れ達はたしか前世で仇だつたのだらう。己れがお前に惡るい事をしたか、お前が己れにしたか、どつちかだらう。これは報いなんだ。坊さんはさう云ふよ』

およしは例の冗談を交じへて答へた。『其時妾は男で、貴君は女だつたのね。妾は貴君を思つて思ひぬいたのに、貴君は妾を嫌つたの。よく覺えて居ますよ』

『菩薩ぢやアあるまいし』太郎は悲みを抑へて微笑みながら答へた。『前世の事を覺えて居られるものか。十階ある菩薩道の第一階に達した時、やつと覺えて居られるといふぢやアないか』

『妾が菩薩でないこと、どうして分かります』

『お前は女ぢやないか。女は菩薩になれやしない』

『併し觀音樣は女ぢやないの』

『それはさうさ。併し菩薩なら、お經の外に何も愛さないよ』

『お釋迦樣だつて奥樣も子供もあつたわ。そしてどちらも愛したぢやないの』

『さうさ。併しお釋迦樣は後に妻子を棄てたのだよ』

『お釋迦様でもそれは惡るいわ。併し妾、其話みんな虚僞だと思ひます。貴君妾を貰つたら、後で棄てるの』

彼等はこんな理窟を云ひあつて時には聲を立てて笑つた。一緒に居るのがそんなに嬉しいのであつた。併し突然娘は嚴粛な顔をして云つた。——

『あのね、昨夜妾は夢を見たの。知らない河と海があつて、妾は河が海へ流れ込む直ぐ傍に立つて居ましたの。すると何だか理由も分からずに慄然としたんです。見ると河にも海にも水はなくつて、其代りに佛の骨が一杯あるんです。それが丁度水の様に動いて居るんですの。

『すると又いつか家に還つて居て、貴君から絹地の反物を貰つたのを衣服に仕立てて着ましたの。處が驚いた事には、初めは色々の色模様があつたのに、いつか眞白になつて仕舞つたんです。それを又何て頓馬でせう、死人の着るやうに左前に着たんです。それから親類廻はりをして、これから冥途へ參りますつて、暇乞ひをしましたの。みんなから何故行くかつて尋ねられて、返事が出來なかつたんです』

『それは善い夢だ』太郎が答へた。『死人の夢は目出度いんだ。多分夫婦になれる吉兆だらうよ』

此度は娘が答へなかつた。微笑さへしなかつた。

太郎も暫し默つて居たが附け加へて云つた。『善い夢でないと思ふんなら、庭の南天の木へみんな小聲で話して了ふんだね。さうすると眞夢にならないよ』

然るに其日の夜になつて、太郎の父は、およしは岡崎彌一郎の嫁に遣るといふ通告を受けた。

七

お玉は實に怜悧な女であつた。今迄に遂ぞ大きな誤り等をしたことがない。彼女は愚劣な人間を何の苦もなく操つて成功して行くやうに巧く出來てる人間の一人であつた。忍耐、狡智、惡る賢い知覺、素早い先見、强固な勤儉など先祖代々の農民としての經驗が、彼女の無學な腦髓の中の完全な機關に集中して居たのである。其機關は之を生み出した環境の中て完全に運轉した。そしてその機關にぴつたり當て嵌まるやうな百姓といふ特殊な原料を處理して行つた。併し祖先傳來の經驗でも說明することが出來ないので、お玉には理解の出來ぬ別種の人間があつた。彼女は武士と平民とは性來が違ふといふ舊思想を强く疑つて居た。國法と習慣とて作り上げた差違の外には、武士階級と農民階級の間に何も相違な

い。そして此國法と習慣とは惡るかつたと考へて居た。此國法と習慣との結果が昔の武士階級を無力に、阿房にして仕舞つたのだと考へて、竊に凡ての士族を輕蔑して居た。彼女は彼等が荒い勞働は出來ず、商法は全く知らぬ爲めに、金持ちから貧乏に落ちたのを見た。又新政府から彼等に與へた公債證書は、彼等の手から尤も卑劣な狡猾な山師の把握に歸したのを見て居た。彼女は意氣地なしと無能とを排斥した。そして極下等な八百屋でも、老體を晒して當初(そのかみ)通行の度毎に、履物(はきもの)を脫いで土下座をさせた者から憐れを乞ふ家老の果てよりは遙かに優れた人間だと考へて居た。それておよしの母が士族の女てあることを何の光榮とも思はず、却つておよしの弱々しいのはそれが原因だと考へ、不幸な血統だと思つて居た。彼女は又およしの性格の中で、劣等階級に屬する彼女にも讀まれるだけは明瞭に讀み取つた。中にも此子は猥りに虐待しても何の德もないといふことを讀み取つた。そしてそんな性質はお玉も滿更嫌ひてもなかつた。けれどもおよしには彼女が判然と見定めることの出來ぬ他の特質があつた――妄りに現はしはしないが、道義上の過誤に非常に敏感な事、傷つけ難き自尊心、如何なる肉體の苦痛にも打勝ち得る意志の力を深く藏して居る事などてある。それが爲め岡崎へ嫁(い)くのだと告げられた時のおよしの態度には、反抗を豫期して居たお玉はすつかり欺(だま)されて了つた。彼女は誤算をしたのてある。

およしは初めは死人の樣に眞靑になつた。が、つぎの瞬間には顏を赧くして、微笑を浮かべて、お辭儀をした。そして孝心深い言葉遣ひで、萬事御兩親の仰せに從ひます、と答へて宮原夫婦を驚かした。彼女の態度にはその外に心中の不服を漏らすやうなところは見えなかつた。それでお玉は喜んで萬事をおよしに打明け、緣談進行中に起こつた喜劇を話したり、岡崎がどれ程の犧牲を拂はせられたかを精しく話しなどした。更に進んで、當人の承諾も求めずに、老人へ嫁られる事になつた若い娘へ云ふやうな管々しい慰藉の詞の外に、岡崎操縱の方法といふ實際巧妙な祕訣を授けた。其間太郎の名は一度も口頭に上らない。およしは繼母の告諭にはおとなしくお辭儀をして好意を謝した。そしてそれは確に立派な告諭であつたのだ。實際怜悧な百姓娘が、お玉の樣な良敎師に十分に敎育されたら、岡崎の好伴侶となり得るに相違ない。併しおよしは全くの百姓娘ではない。彼女に保留せられて居た運命の宣告を聞いた後、最初は眞靑になり、つぎに眞赤になつたのは、お玉には全く推量も出來ぬ二樣の情緒から起こつたのである。そしてどちらもお玉が打算的の經驗に現はれたよりももつと複雜な、もつと迅速な頭腦の閃きを示すものである。

　最初のは、繼母が道義的に全く無感覺な事、抗辯の全然望みなき事、此結婚は不必要な利得を得ようとする唯一の動機から、此身を醜い老人に賣るに等しいこと、緣談の談合が

残酷で恥づべき所爲であつた事等を認めるに伴なつて起こつた恐怖の衝擊であつた。併しながら最惡の場合に面する勇氣や力と、强固な猾智に對抗する機智とが必要だといふ十分な認識が、直ぐ後から彼女の心に突進したのである。彼女が微笑したのは其時であつた。そして微笑した時には彼女の若い意志は、刄もこぼさずに鐵を割く鋼となつたのである。彼女は直に己が爲すべきことを精確に自覺した——武士の血がそれを教へた。そして時機を伺はうといふ日算を立てたのである。彼女は其時旣に聲を立てて笑はうとしたのをやつと制へ附けた程の勝算があつた。お玉は彼女が眼の中の光に完全に欺かれて、それはただ滿足の感を現はすものと思ひ、更に其滿足感は金持ちとの結婚で得られる利益の點を俄に悟つたものと想像した。

　其日は九月の十五日であつた。そして婚禮は十月の六日に擧げられる筈であつた。然るに其三日後に、お玉が朝早く起きて見ると、およしは夜の中に消え失せて居たのを發見した。内田の太郎は前の日の午後から父親に姿を見せなかつたといふ。併し二三時間後には兩人からの手紙が到着した。

八

京都發の一番汽車が入つて來た。小さい停車場は雜沓と雜音に滿たされた。下駄の音、話し聲、菓子辨當を賣る村の子供の斷續する――『菓子よろし』――『壽司よろし』――『辨當よろし』――。五分間經つた。下駄の音も、列車の扉の開閉の音も、賣り子の叫び聲もはたと止んで、笛が鳴り列車が一と搖り搖れて動き出した。そして嚣々といふ音を立て煙を吐いて北の方へと徐に姿を隱すと、小さい停車場は空虛になつて了つた。改札口に見張つて居た巡査も、木戸を締めて砂を撒いた步廊に出て、稻田を見渡しながら步き廻はり始めた。

秋――大明の節――が來て居た。太陽の光は俄に白く、影は銳く、物の輪廓は凡て裂れたガラスの緣の樣にかつきりと見える。夏の署さで反り返つて久しく目に附かなかつた苔は復活して、凡て火山灰から出來た黑土の物陰になつてる明地は、明かるく軟らかい綠色が一面に若しくは帶狀に擴がつて居る。松の樹の森は悉くツクツクボウシの銳い聲て慄へ

て居る。そしてあらゆる小さい堀や溝の上には、音のしない小さい電光の閃きが見える―
―濃綠色や薔薇色や鋼色の光が稻妻形に音もなく動いて居る――蜻蛉が飛び違つて居るの
である。

朝の空氣の非常に透明なのに依るか、巡査は此時北の方を見ると軌道の遙か彼方に、何か或る物を見附けた。すると驚いて手を目の上に翳し、そしてつぎに時計を引き出した。併し概して日本の巡査の目は空を舞ふ鷹の眼の樣に、其視域内に何か變はつた事があると、屹度直ぐ見附ける。自分は嘗て遠い隱岐の國で、泊まつて居る宿屋の前の街路に假裝踊りがあるのを、人に見られずに見ようと思つて、二階の障子に小さい穴を明けて覗いたことがある。すると、下を雪白の制服と帽子被ひとを着けた巡査が濶歩して居た。時は夏の眞中であつた。彼は踊り子と見物の中を分けて進んだが、何を見る樣子もなく、首を左右に曲げることさへしなかつた。然るに彼は突然足を停めて眼を丁度障子の穴へ据ゑた。それは彼が直に其恰好から外人の眼だと思つたものを認めたからである。そして宿屋へ這入つて來て自分の旅券に就て問ひ質した。併しそれは既に檢べられて居たものであつた。

さて停車場で巡査が認めて後に報告したのは、停車場の北半哩餘の處で二人の人間が、明らかに村のずつと北西方の百姓小舍から出て來て、田甫を横切つて軌道に達した事であ

った。其一人は女で衣服と帯の色で極若い女だと彼は斷定した。其時東京發の急行列車が、あと十分で到着する筈で、其進んで來る煙は既に停車場から見分けられるのであつた。二人は列車の來る軌道に沿うて走り始めたが、曲り角を過ぎると見えなくなつた。

此二人は太郎とおよしであつた。彼等が走つたのは一は巡査の目を逃れる爲め、一は出來るだけ停車場から離れて列車に出會ふ爲めであつた。併し曲り角を曲ると煙の來るのが見えたので走るのを止めて歩いた。汽車の車體が見え出すと機關士を驚かさぬ爲めに一旦軌道を離れた、そして手に手を取つて待つて居た。忽ち低いどよめきが聞えたので、時こそ至れりと、再び軌道に歩み還つた。くるりと方向をかへると兩腕をお互に捲きかけ頬と頬とを押し附けて、靜に素早く、其時既に突進して來る汽車の震動で、金硝の様に唸つて居る内側の鐵軌へ横さまに寢轉んだ。

太郎は微笑んだ。およしは太郎の頸へ廻はした腕をしめて耳元へささやいた。

『二世も三世も妾は貴君の妻、貴君は妾の夫ですよ、ね！太郎さん』

太郎は何も云ふ暇もなかつた。其瞬間に、空氣制動機のない汽車は、停めようと焦つても距離は百碼餘りしかないので、遂に二人の上を通過した——大きな鋏の様に平等に切斷して。

九

村人は比翼塚の上へ花を一杯挿した竹筒を立て、線香を燒いて祈りを上げる。これは決して正則ではない、といふのは佛法では情死を禁じてあるのに、此處は寺の墓地であるから。併しこれには宗教がある――深い崇敬を値する宗教がある。

讀者は、かういふ死者に人々は何故又、どうして祈るかと疑ふであらう。が凡ての者が祈る譯ではない、ただ戀をする者、殊に不幸な戀人が祈るのである。其他の者はただ香花を供へ、經文を唱へるだけである。併し戀する者は經驗ある同情と助けを祈るのである。自分も其故を尋ねた事があるが、答は單に『此二人は並々ならぬ苦痛を嘗めたからです』といふにあつた。

されば、この祈りを促す思想は、佛教よりも古く同時に新しいものであるやうに見える――卽ち永遠の苦痛の宗教といふ思想である。

叶へる願

汝肉體を去り自由なる精氣の中に入る時、汝は恒久不滅の神となるべし
——死も最早汝を領することなかるべし。

希臘古詩

一

街には白い軍服と喇叭の音と砲車の轟きとが充ち滿ちて居た。日本軍が朝鮮を征定したのは歴史上これが三度目だ、そして支那に對する宣戰の詔勅は市の新聞に依つて、眞赤な紙へ印刷して布告された。帝國の陸軍は悉く動員された。第一豫備兵も召集された。そして兵士は隊をなして熊本へ溢れ込みつつあつた。幾千人かは市民の宿へ割り當てられた。兵舍と旅館と寺院だけでは、通過の大軍を宿すことが出來なかつたからである。併しそれでも尚ほ足りなかつた、いくら特別列車が全速力て、下ノ關に待たせてある運送船指して、

北へ北へと輸送しても。

それにも拘らず、大軍の移動といふことを考へて見ると、市は驚くべき程靜かであつた。兵士は授業時間中の日本の學生の如く靜肅で從順で、威張り散らす者もなければ、けばけばしい擧動をする者もない。佛教の僧侶は寺院の庭で彼等に說教して居る。練兵場ではわざわざ京都から來た眞宗の法主に依つて既に大法會が擧行された。數千の兵士は彼に依つて阿彌陀の保護に託せられた。一々若い頭顱の上に剃刀を載せるのは、進んで現世の欲望を棄てるといふ象徵で、それが兵士の授戒であつた。神道の神社では到る處神職と市民に依つて、昔國の爲めに戰死した者の靈と、軍神とに祈願が籠められつつあつた。藤崎[譯者註]神社では守札を兵士に配付しつつある。併し一番莊嚴な儀式は、日蓮宗の名刹本妙寺のそれであつた。これは朝鮮の征服者、ジエシユイツトの敵、佛教の擁護者であつた、加藤清正の靈が三百年間眠れる處である。——此處は參詣人の唱へる南無妙法蓮華經の題目が大浪の樣に響く處だ——又此處は神と祀られる清正公の小さい肖像を入れた寺院形の珍らしい護符を賣つて居る處である。此寺の本堂并びに長い並木路に沿ふ兩側の末寺では、特別の法

譯者註　熊本の古社八幡宮。

要が行はれ、清正の靈へ神助を仰ぐ特別の祈禱が上げられた。三百年間本堂に保存された清正の甲冑、兜、太刀は姿を隱して了つた。これは或る人の說では軍紀を鼓舞する爲めに朝鮮へ送られたのだと云ふ。又夜な夜な寺の庭で馬蹄の音が聞こえて、再び日の御子の軍を勝利に導かんと、墓穴(おくつき)より出現せる清正の幽靈が過ぐるを見たなどといふ者もある。疑ひもなく田舍の素朴な勇剛な青年兵士の中には、それを信じた者も多からう——恰もアゼンの兵士がマラソンでセシウス將軍の在陣を信じた如くに。殊に多數の新募の兵には熊本その者が既に偉人の傳說で神聖化された驚愕の市と見え、其城は朝鮮で立て籠もつた城砦の設計に倣つて清正が築いたもので、世界の不思議とも見えたのであらうから、尙ほ更の事である。

こんな騷ぎの最中に市民は不思議に靜かにして居た。外見だけでは外人には迚も一般の感情は推測されぬ。

註　此一文は一八九四年（明治二十七年）の秋、熊本で書いたのである。國民の熱誠は凝聚して靜肅となつた。其外見上の靜けさの下には封建時代の獰猛さが燻(くすぶ)つて居た。政府は幾千とも知れぬ義勇隊——重に劍客の申し出を謝絕せざるを得なかつた。若しそんな義勇隊を召集したなら一週日の中には十萬人の應募者は得られたらうと自分は思ふ。然るに敵愾心は意外な、又更に痛ましい方法で顯はれた。出陣を謝絕さ

れたので自殺した者が多數ある。地方の新聞紙から手當たり次第に二三の奇怪な實例を引用しよう。京城に居た某憲兵は大島公使を日本に護送することを命ぜられたので、戰場へ行くことが出來ぬので無念の餘り自殺した。又石山といふ一士官は病氣の爲め所屬の聯隊が朝鮮に向け出發する日に、行を共にすることが出來ぬので病床から立ち上がり、天皇の聖影を拜した後、劍を拔いて自刄した。大阪の池田といふ兵士は何か軍紀に背いた廉で出征を許されぬと聞き、我れと我が身を銃殺した。混成旅團の可兒大尉は、彼の聯隊が忠州附近の一要塞攻擊中病氣で卒倒し、無意識の狀態で病院に收容されたが、一週間後に意識を恢復すると卒倒した處へ行つて（十一月二十八日）自殺した――其時の遺書は『ジャパン　デーリー　メール』がつぎの如く飜譯した。『予は病氣の爲め此處に停まり、予が部下の要塞襲擊に參加するを得ざりしは、終生拭ふ可からざるの恥辱なり。此恥辱を雪がんが爲めに余はこゝに死す――予が衷情を語るべく此一書を遺して』

東京にある一中尉は、已が出征後、母のない一人の少女を世話する者もないので、其幼兒を殺して、發覺せざる中に已が隊と共に出征した。彼は其後戰場に、我が子と冥途の旅を共にすべく、死を求めて遂に之を得た。此一事は封建時代の殺伐な氣象を思ひ起さしむる。武士（サムラヒ）が勝算なき戰場に出る時、妻子を豫め殺して出陣した話がある。それは武士が戰場で思うてはならぬ三つの物を忘るゝに都合よいからである――卽ち家、妻子、及び我が命。妻子を殺した後の武士は死に物狂ひに働く事が出來る――敵に情（なさけ）をもかけねば、敵の憐れみをも乞はずに。

公衆の靜肅さは特に日本的であつた。民衆は個人の樣に、感動すればする程、外見上は益々自制的になるのである。天皇は在鮮の兵士に酒肴と、慈父の如き愛憐い詔書を下賜された。國民も之に傚つて便船毎に酒、食糧、果物、菓子、烟草其他各種の寄贈品を送りつつある。高價の寄贈に堪へぬ輩は、草鞋を贈りつつある。全國民は軍事資金に献金しつつある。熊本は決して富める市ではないが、尚ほ貧富とも全力を盡くして其忠誠を證明せんと力めつつある。商人の小切手、職人の紙幣、勞働者の銀貨、車夫の銅貨、雜然混淆して、何れか同胞の爲めに微力を致さんと奢侈を戒め、冗費を省きたる結果にあらざるはない。子供すら献金した。そして其同情ある小献金は謝絶されなかつた。それは普遍的な愛國心の動きは決して挫折されぬ樣にとの注意からである。併し又豫備兵の家族の爲めに特別の寄附金募集が町々で企てられた。――豫備兵は旣に結婚して、大部分は低級の職業に從事して居るのだが、突然召集されたので、妻子は糊口の道を失うたから、其糊口の道を立ててやらうと、市民が自發的に嚴然と誓つて努力しつつあるのである。こんな非利己的な同胞の愛を背後に有する兵士が、兵士としての義務を十二分に盡くすべきは疑ふの餘地がない。

そして彼等は盡くしたのである。

二

自分に逢ひたいといふ兵士が玄關に來て居ると萬右衞門が云つた。

『萬右衞門、それは兵隊の宿を此家(ここ)へ割り附けようといふのではあるまいな――此家は狹過ぎるから。何の用だか聞いてお吳れ』

『聞きました』萬右衞門が答へた。『あの兵隊は貴君(あなた)を御存じ申して居ると申します』

自分は玄關へ出て行つて見ると、軍服姿の好靑年が、自分の現はれたのを見て微笑して帽子をとつた。自分には見覺えがない。併し其微笑には覺えがある。一體、何處で見たのだらう。

『先生眞(ほんと)に私をお忘れになりましたか』

又暫くいぶかりながら自分は彼を凝視した。すると彼は穩かに笑つて名を名乘つた――

『小須賀淺吉です』

自分が兩手を差し出した時、自分の心臟まで彼の方へと躍つた。

『さあお上がりお上がり』自分はどなつた。『併し君は實に大きく立派になりましたね。

分からなかつたのに不思議はない』

彼は靴を脱ぎ劍を外づしながら、小娘のやうに赤面した。彼は授業中間違つた時も、賞められた時も、此通りに顏を赧くした事を想ひ出した。明らかに彼は松江の中學で十六歳の羞恥がちの少年であつた時と同樣に、今でも尙ほ清新な心を有して居るに相違ない。彼は暇乞ひの爲め、自分を訪問する許可を得て來たのだが、彼の聯隊は明朝、朝鮮へ出發するのだといふ。

自分は彼を引き留めて會食した。そして往事を談じた。——出雲の事、杵築の事、其外色々愉快な事を話した。初めは知らずに彼に酒を勸めたが、彼は決して飲まなかつた。軍隊に在る間は、決して飲酒せぬと母に約束して來たといふことを後で知つた。それで酒の代りに珈琲を進めて彼が身上話を引き出さうと力めた。彼は卒業後富める農家である一族に助力する爲め故郷へ歸つたのであつたが、學校で學んだ農學が大分役に立つたといふ。一年後に十九歳に達した村の凡ての青年と共に、徵兵候補として寺へ召集され、規定の檢査を受けた。處が檢査官の軍醫と司令部の少佐との合議で一番に合格し、つぎの入營期に引き出された。そして十三箇月の勤務の後伍長に昇進した。彼は軍隊が好きであつたのだ。初めは名古屋に居たが、つぎに東京へ轉じた。併し名古屋の聯隊は朝鮮に出征せぬのを知

つて、熊本師團へ轉勤を願ひ出てて許されたのであつた。『私は非常に嬉しいです』と彼の顏は軍人らしい喜びを以て輝きつつ叫んだ。『我々は明日立つのです』そして喜びを露骨に發表したのを恥づるが如く又顏を赧くした。自分はカーライルの、誠實な心を誘ふものは快樂でなくて、苦難と死だと云つた深い言葉を思ひ出した。自分は又――これは日本人には云へない事だが――此青年の眼中の喜悅は、自分が今迄に見た何物よりも、婚禮の日の朝の花婿の眼の色に髣髴たるものであると思つた。

『君は覺えて居ますか』自分は問うた。『君は學校で陛下の爲めに死にたいと云つた事がありましたね』

『ハイ』笑ひながら彼は答へた。『そして其機會が來たのです。私にばかりではない。級友の多くにも』

『みんな何處に居ます』自分は問うた。『君と一緒かね』

『いや、みんな廣島師團に居ました。今はもう朝鮮に往つて居ます。今岡（先生御記憶でせう。身長の高い男です）と長崎と石村――これだけは皆、成歡の戰爭に參加しました。それから教練の先生であつた中尉――御記憶ですか』

『藤井中尉か、覺えて居る　退職士官だつたね』

『併し豫備てした。彼の人も朝鮮へ行きました。先生が出雲を去られてから、男の子をも一人儲けられました』

『僕が松江に居た時は、女の子が二人、男の子が一人ありましたね』

『さうでした。今は二人男の子があります』

『そんなら家族は大分心配して居ませう』

『中尉自身は心配しません』青年は答へた。『戰爭て死ぬのは名譽てす。戰死者の家族は政府て世話して呉れます。だから士官達は少しも心配がありません。ただ――子息がなくつて死ぬのは一番悲むべきてす』

『僕には解せない』

『西洋てはさうてありませんか』

『却つて我々は子供があるのに死ぬのが尤も悲むべきだと思ひます』

『どういふ理由てせう』

『善良な父は凡て子供等の將來を心配しませう。若し突然父親が居なくなつたら、子供等は色々の難儀をしようぢやありませんか』

『日本の士官の家族はさうてありません。子供は親戚て世話するし、政府からは扶助料

が下がります。だから、父親は心配するに及びません。だが子供が無くて死ぬ者は氣の毒です』
『といふのは妻と其他の家族が氣の毒だといふのかね』
『いや當人が氣の毒です、夫自身が』
『それはどうして。子供があつたつて死人には何の役にも立つまいぢやないか』
『子供があれば後を繼ぎます。家名を保存します。そして供養を致します』
『死者への供養ですか』
『さうです。お分かりになりましたか』
『事實は分かつたが、感情が僕には分からない。軍人は皆、今でもこんな信念を有つて居ますか』
『有つて居ますとも。西洋にはそんな信念はありませんか』
『今はないね。昔の希臘人や羅馬人はそんな信念を有つて居ました。祖先の靈は家に遺つて居て、供養を受け、家族を守護すると思つて居ました。彼等が何故さう思つたか我々にも幾分分かります。併し彼等が何う感じたか、それは判然分かりません。それは我々自分が經驗しない、若しくは遺傳しない感情といふものは、分かるものでありませんから。

同じ理由で僕には死者に對する日本人の眞の感情は分かりません』

『そんなら先生は、死は凡ての終はりだ、とお考へですか』

『いや僕の不可解(わからない)のはさう考へるからではない。或る感情が遺傳する――或る思想も多分遺傳する。死者に就ての君の感情と思想、又死者に對する生者の義務感といふものは、西洋のとは全然違ひます。我々には死といふ概念は生者からのみならず、此世からの全き別離を意味するのです。佛教も死者は長い暗い旅行をせねばならぬ事を說いてゐるぢやありませんか』

『冥途の旅ですか。さうです、みんな其旅を致します。併し我々には死を全き別離とは考へません、我々は死者も我が家に居る如く考へて、毎日言葉をかけます』

『それは知つてます。僕に分からぬのは其事實の背後の思想です。若し死人が冥途へ行くのなら、何故佛壇の祖先に供物を供へ、實際在すが如くに祈禱をしますか。一般俗衆はかうして佛教の敎と神道の信念を混同して居ませんか』

『多分混同して居る者も澤山ありませう。併し全くの佛教信者にも死者への供養と祈禱は、同時に異る場處でなされます。――檀那寺でも又家庭の佛壇でも』

『併しどうして靈魂が冥途に在ると同時に、此世の樣々な場處に在ると考へられるでせ

う。たとひ靈魂は分割されると信ずるにしても、それだけては此矛盾を說明し盡くされません。佛敎の敎へに從ふと、死人は彼世で裁判を受けて、居處を決せられるやうになつて居ますから』

『我々は靈魂は一にして又二にも三にもなるものと信じて居ます。我々は靈魂は一人のものとして考へますが物質的のものとは考へません。丁度空氣の動く樣に同時に幾箇處にも居られるものと考へます』

『或は電氣の樣に』と自分は補つた。

『さうです』

此の若き友の心には明らかに冥途と家庭の供養といふ二つの概念は、調和し得ぬものとは思はれぬのであつた。多分如何なる佛敎哲學の學者にも、此二つの信念が重大な矛盾を含むものとは見えぬだらう。『妙法蓮華經』は佛の境界は廣大無邊――大氣の涯なきが如しと說いて居る。又久しく涅槃に入りたる佛に就ては『其完全なる滅後と雖も、十方世界を徘徊す』と宣べて居る。又同じ經は凡ての佛達の同時に出現せし由を說きたる後、釋迦をして宣せしむらく、『是皆我が分身なり。其數は恒河の砂の如く千萬無量なり。彼等は

妙法を實現せんが爲めに現はれたり』併し平民の無邪氣な心に、神道の原始的な思想ともつと的確な佛教の靈魂裁判の教義との間に、眞の調節が出來て居ない事は、自分には明らかに見ゆる。

『君はほんとに死を生と同樣に、又光と同樣に考へますか』

『さうですとも』微笑しながら答へた。『我々は死後も家族と一緒に居ると思ひます。兩親や友達にも逢ふてせう。卽ち此世に遺つて居るでせう――今と同樣に光を見ながら』

（此處で突然自分には或る學生が義人の未來を論ずる作文の中で「彼の靈は永久に宇宙を翱翔するならん」と書いた言葉が新しい意味を以て、思ひ出された）

『ですから』淺吉は續けて云つた。『子供のある人は元氣好く死ねるのです』

『飮食物の供物を子供が靈魂に供へるからですか。そしてそれがないと靈魂は困るのですか』と自分は問うた。

『そればかりではありません。供養よりも、もつと重大な義務があります。それは誰れでも死後に、自分を思慕して呉れる者を要求するからです。お分かりになりましたか』

『君の言葉だけは分かりました』自分は答へた。『君の信念の事實だけは分かりました。

感情は僕には解せません。僕には僕の死後、生きてる者から思慕されても幸福になるとは考へられません。いや僕は死後に何等の愛をも感知し得るとは想像されません。して君はこれから戰爭に遠くへ往くのだが——子供のないのは不運だと思ひますか』

『私が。いや、私自身が子供です——末の方の子供です。兩親はまだ生きて居て丈夫です。そして、兄が世話をして居ます。私が殺されたら、私を思つて吳れる者が澤山あります——兄弟や姉妹やそれから幼い者もあります。我々兵士は別です。我々はみな、極若いですから』

『何年間程』自分は尋ねた。『供物は死人に供へられるのかね』

『百年間です』

『たつた百年間』

『ハイ、寺でも百年間だけしか、祈禱と供養は致しません』

『そんなら死人は百年で追懷されずともよくなるものですか。それとも彼等は遂に消滅するのかね。魂魄の死滅といふ事があるのかね』

『いや、百年後にはもはや家に居なくなるのです。生まれ更はるのだとも云ひますが。又或る人は彼等は神になるのだと申します。そして神として尊敬し、一定の日に床の間て

供へ物を致します』

（これは普通行はれて居る解釋であるが、これと不思議にも相反せる思想に就て聞いた事がある。非常に德望のある家では、祖先の靈が物質的の形態を取つて、數百年の間、折折現はれるといふ傳說があるのである。昔、或る千箇寺參詣者が、遠い或る邊鄙の地で二人の靈魂を見たといふ記錄を遺して居る。彼等は小さい朦朧たる形態で『古銅器の樣に黑い』と云つてある。彼等は口はきけないが、低い呻く樣な聲を發する。又每日供へられる食物を食ひはせぬが、ただ暖かい湯氣を吸入する。彼等の子孫の云ふ處に依ると、彼等は年々益〻小さく、益〻朦朧となるといふ）

註　これは日蓮宗の名ある寺を千箇處巡拜する信者の事で、此旅行を終はるには數年を要するのである。

『我々が死者を思慕するのは甚だ變だとお考へですか』淺吉は尋ねた。

『いや』自分は答へた。『それは美しい事だと思ひます。併し西洋の一外人としての僕には、其慣習は今日のものらしくない、寧ろ昔の世界のものらしく思はれます。古希臘人

の死者に對する考は、現代の日本人に大分似て居つたらうと思ひます。ペリクレスの時代のアゼンの兵士の感情は、多分明治時代の君等と同じてあつたらう。君は學校て、希臘人が死者に犧牲を供へたり、英雄や愛國者の靈に敬意を拂つた事を讀んだてせう』

『讀みました。彼等の習慣の中に我々のに似て居るのがあります。我々の中て支那と戰つて倒れる者も同樣に敬意を拂はれるてせう。神として崇められるてせう。天皇陛下すら敬意を寄せられるてせう』

『併し』自分は云つた。『先祖の墳墓の地を遠く離れて、外國て戰死するのは、西洋人にすら、甚だ氣の毒に思はれます』

『いやいや。鄕里の村や町には戰死者の爲めに記念碑が建てられませう。そして屍骸は燒いて骨にして日本に送ります。少くともそれが出來る處てはさう致します。ただ大戰の後てはむつかしいてせう』（突然ホーマーの詩の記憶が胸に漲つて、『屍の山が其處にも此處にも絕え間なく燒かれた』といふ古戰場の幻影が自分の眼に浮かんだ）

『そして此戰爭て殺された兵士の靈は』自分が問うた。『國難の時には、國を護り給へと常に祈られるのだらうね』

『さうですとも。我々は全國民に敬愛せられ、崇拜されるのです』彼は既に死ぬと極まつた者の樣に「我々」と云つたが、それは、全く自然に聞こえた。暫し沈默した後で又續けた——

『去年學校に居る時行軍を致しましたが、其時意宇地方の英雄の靈の祀られてある神社へ參りました。それは丘陵に圍まれた美しい淋しい處で、祠は高い樹木で蔽はれて居ます。そしていつても薄暗く、冷たい靜とした處てす。我々は祠の前に整列しましたが、一人も物云ふ者はありませんてした。其時喇叭が、戰場への召集の樣に神の森に鳴り響きました。そして私の眼には涙が出ました——何故とも分からずにてす。同輩を見ると、みな私と同樣に感じたらしいのです。多分先生は外國人ですから、お分かりになりますまい。併し日本人なら誰れでも知つて居る、此感情をよく表現した歌があります。それは西行法師といふ高僧が昔詠んだものです。此人は僧侶にならぬ前は武士であつて、俗名を佐藤憲清と云ひました。——

なにことのおはしますかは知らねども
ありかたさになみたこほるる』

自分がかういふ經驗談を聞いたのは、これが初めてではなかつた。自分が教ふる學生の多くは、古い神社の緣起と朧氣な嚴肅さとに依つて喚起された感情を語るに躊躇しなかつた。實際淺吉の此經驗は深海の漣と同樣、決して單獨のものではなかつた。彼はただ一民族共有の祖先傳來の感情——神道の漠乎たる併し測り知られぬ深さを有する情緒を述べたに過ぎぬ。

我々は軟らかい夏の闇が落ちかかる迄話し續けた。星と兵營の電燈が諸共に閃き出した。喇叭が鳴つた。そして淸正の古城から、雷の樣な一萬の兵士の歌ふ太い聲が夜の中へ轉げ出した。——

西も東も
　みな敵ぞ、
南も北も
　みな敵ぞ。
寄せ來る敵は
　不知火の
筑紫のはての

『君もあの歌を習つたかね』と自分が聞いた。
『習ひました』淺吉が云ふ。『兵士は誰れでも知つてます』
それは籠城の歌『熊本籠城』といふ軍歌であつた。我々は耳を欹てて聞き入つた。その偉大な合唱の響の中に、詞の幾分を聞き分くることも出來た。

天地も崩る
　ばかりなり、
天地は崩れ
　山川は
裂くるためしの
　あらばとて、
動かぬものは
　君が御代。

暫しの間淺吉は歌の强い律(リズム)に合はせて肩を搖りながら聞いて居たが、突然目覺めた者の

如く笑つて云つた。——

『先生、お暇致します。今日はお禮の申し上げ様もありません、非常に愉快でした。併し先づ』——と胸から小さい包みを出して『どうぞこれをお納め下さい。久しい以前に寫眞をと仰しやいましたが、紀念(かたみ)に持つて參りました』と立ち上がつて劍を着けた。自分は玄關まで送り出して彼の手をぢつと握つた。

『先生、朝鮮から何をお送り致しませう』彼は問うた。

『手紙さへ貰へばよい』自分は云つた。『つぎの大勝利の後でね』

『筆さへ握れましたら、それは屹度』彼は答へた。

さて銅像の様に身體を眞直ぐにして、制規の軍人式敬禮を行つて、闇の中へ大股に消えて了つた。

自分は淋しい客間へ歸つて冥想した。軍歌の轟きが聞こえる。汽車の轟音が聞こえる。其汽車は幾多の若き心、幾多の貴い忠義、幾多の立派な誠と愛と勇とを載せて、支那の稻田の疫癘の中へ、死の旋風の眞中央(まつただなか)へと運び去るのであつた。

三

地方の新聞紙に依つて發表された長い戰死者名簿の中に、小須賀淺吉の名を發見した日の夜、萬右衞門は客間の床の間を祭祀用に裝飾して燈明をつけた。花瓶には花を一杯挿し、色々の小さい燈火を並べ、靑銅の小さい鉢に線香を焼いた。準備が調つた處で自分を呼んだので、床の間へ近寄つて見ると、中に淺吉の寫眞が小さい臺の上に立ててあるのを見た。その前には飯、果物、菓子などが小さく並べてあつた――老人の供物である。

『多分』萬右衞門がおづおづ云つた。『旦那が何とか物を云つて上げたら、淺吉の靈が喜びませう。旦那の英語が了解りませうから』

自分は彼に物を云つた。すると寫眞は線香の煙の中で微笑むやうに見えた。併し自分の云つた事は、彼と神々にばかり分かる事であつた。

横濱にて

我等は今日美しい光景に接した――美しい夜明け――美しい日の出
――我等は大悟の士が流を横斷したのを見た。

――「雪山經」

一

地藏堂は、小店ばかり並んで居る町の、露地の奥に潜んで居るので、探すのが容易でなかつた。二軒の家の狭い庇間（ひあはひ）にある露地の入口は、風の吹く度にはためく古着屋の暖簾で掩はれた。

暑いので小さい堂の障子は取り外づされ、本尊は三方から拜まれた。自分は黄色い疊の上に、勤行の鉦、經机、朱塗りの木魚などの佛具が並んで居るのを見た。須彌壇の上には子供の亡靈の爲めに涎懸けを着けた石の地藏があつた。更に其尊像の上には長い棚があつ

て、金箔を塗つた極彩色の二三の小像が載つて居た――頭から足まで背光のある地藏尊、燦爛たる阿彌陀佛、慈顏の觀音及び亡者の判官である閻魔大王の恐ろしい像などが。それより又上には奉納の繪馬がどつさり雜然と掲げられて居た。其中にはアメリカの繪入新聞から取つた版畫を額にしたのが二つあつた。一つはヒラデルヒア博覽會の光景、他の一つはジユリエツトに扮したアデレイド・ニイルソン孃の肖像であつた。本尊の前には普通の花瓶の代りにガラス製の壺があつて、それには『レイン、クロード（佛國産の李）果汁、貯藏請合、ボルドウ市ツーサン、コーナー會社』と書いてある貼紙（レツテル）が張つてある。それから線香の入つて居る箱には『香味豐富――ピンヘツド紙卷』といふ文字が書いてある。之を寄附した善人は、此世でもつと高價な寄附をする見込みがなかつたのであらう。そしてこれでも外國品である故に美しいと思つたのであらう。又こんな不調和にも拘らず自分には此堂が實際綺麗に見えた。

龍を出してる羅漢の不氣味な繪のある衝立が奧の室（ま）を仕切つて居た。そして姿は見えぬ鶯の聲が境内の靜けさに床しさを添へて居る。赤猫が衝立の陰から出て來て我等を眺めたが、又使命を傳へるかの如く退却した。間もなく一人の老尼が現はれて、歡迎の意を述べ、上がれと乞うた。彼女の滑々（すべすべ）と剃つた頭はお辭儀をする度に月の樣に輝いた。我等は靴を

脱いで、彼女の後から衝立の後ろの、庭に面した、小さい室へ通つた。そして一人の老僧が布團に坐つて、低い机で書き物をして居るのを見た。老僧は筆を差し措いて我等を迎へた。我等も彼の前の布團に席を占めた。彼の顔は見るも愉快げな顔で、取る年波の描いた皺は、悉く善なるものを語つて居た。

尼が茶と法の車の印してある菓子を運んで呉れた。赤猫は自分の側に丸くなつて寝た。そして老僧は語り出した。彼の聲は太くて優しい。寺の鐘の響きに伴なふ、豊かな餘韻のやうに、青銅のやうな音色がある。我等は彼が身上話を聞く様に談話を仕向けた。彼は八十八歳になつて、眼も耳もまだ若い者同然だが、慢性のルーマチスの爲めに、歩行が叶はぬといふ。二十年間、三百冊で完成するといふ日本の宗教史を書いて居るが、既に二百三十冊だけ稿了したさうである。そして殘部は來年中に書き上げたいと云つて居る。彼の背後の小さい本箱には、きちんと綴ぢた原稿が嚴めしげに詰まつて居た。

『併し、此人のやつてる計畫が間違つて居ます』と自分の伴れて居る學生の通譯子が云つた。『其宗教史が出版される事はありますまい。奇蹟談やお伽噺の様な、有り得べからざる噺ばかり集めてるのです』

(自分はどうぞ其噺を讀みたいものだと思つた)

『そんなお年にしては、大層御丈夫に見えますね』と自分は云つた。
『どうやら、あと數年生きられさうて御座います』老人は答へた。『が、此歴史を書き上げるだけしか生きて居ようとは願ひません。書き上げたら、私は動く事も出來ぬ、あはれなものてあります故、早く死んて生まれ替はりたいと思ひます。こんなに片端になるといふは、何か前世て罪を犯したものと見えまする。併し、彼岸に段々近寄ると思ふと嬉しう御座います』
『生死の海の向う岸といふ意味てす』と通譯が云ふ。『御存じの通り、其海を渡る船が法(のり)の船て、一番遠い岸が涅槃てす――ニルバナてす』
『我々の身體(からだ)の弱點とか、災厄とかは』自分が問うた。『みんな前生に犯した過失の結果てありませうか』
『我々の現在は』老人が答へた。『我々の過去の結果てあります。日本ては萬劫(まんごう)、因業(いんごう)の結果だと申します――これは二種類の行爲てあります』
『善と惡との』自分は問うた。
『いや、大と小とてあります。人間に完全な行爲と申すは御座いません。どんな行爲にも、善もあり惡もあり、丁度どんな名畫ても好い處もあり惡るい處もあると同じて御座い

ます。併し行爲の中の善の總額が惡の總額よりも多い時には、丁度名畫の長處が短處に優る時の樣に、結果は精進となります。此精進で惡が凡て徐々に除かれます』

『併しどうして』自分が尋ねた。『行爲の結果が肉身に影響を及ぼします。子は父祖の道に從ひ、强いも弱いも父祖から承け繼ぎます。但し靈魂は父祖から受けるのではありませんが』

『因果の鎖は手短に說明する事は容易でありません。それを悉く悟得するには、大乘を研究せねばなりませぬ。又小乘をも研究せねばなりませぬ。それを御研究になると、世界といふものも、ただ行爲故に存在するといふことをお悟りになりませう。丁度字を習ふのでも初めは大層むつかしいが、後には上達して何の苦もなく書く樣に、行爲を正しい方へ正しい方へと振り向ける努力も、絕えず繰り返せば習慣になります。そして其努力は彼世までも繼續致します』

『前世を記憶する力を得る人がありませうか』

『それは滅多にありません』老人は首を振つて答へた。『その記憶力を得るには、先づ菩薩であらねばなりません』

『菩薩になることは出來ませんか』

『今の世では出來ません。今は汚濁の世で御座います。初めに正法の世が御座いました、其時は人の壽命も長う御座いました。つぎに色相の世になりまして、人間は其間に最高の眞理を離れました。そして今は世界が墮落致して居ります。今の世では善行を積んでも佛にはなれません。と申すは世間が腐敗して壽命が短いからで御座います。併し信心深い人は、德を積み常に念佛を唱へますれば、極樂には參れます。極樂では正法を行ふことも出來ます。日も長し壽命も長う御座いますから』

『私は經文の英譯で』自分が云つた。『人は善行に依つて順々に前よりも優れた生へ生へと生まれ替はり、其度毎に、前よりも優れた能力を得、前よりも優れた悅びに包まるゝといふことを讀みました。富や力や美や、又美女や、何でも人が此世で欲するものが手に入る樣に云つてあります。すると精進の道は進めば進む程段々むつかしくなるに相違ないと思はぬ譯に參りません。といふのは、若し此經文が眞なら、人は佛法の修業に依つて煩惱の對象から離れ得れば得られる程、又之に復歸させようとする誘惑が益々強くなるからであります。さうすると德の酬いはそれが却つて妨げとなるやうに思はれますが』

『さうでありません』老人が答へた。『持戒自制に依つてそんな此世の幸福を得るやうになつた者は、同時に靈力と眞知を得て居ます。一生を進める毎に己れに打勝つ力も勝し

て往つて、遂に物質を離れた無色相の世界に生まれます。さうなると低級な誘惑は御座いません」

赤猫は此時下駄の音て不安さうに身動きをしたが、尼に尾いて入口の方へ出て往つた。二三の來客が待つて居るのてあつた。それて老僧は彼等の精神上の要望を聞かんが爲め、暫し容赦を乞ふ旨を告げた。我等は直に新參の客に席を讓つた。——彼等は何れも氣持のよい人間て、我等にも挨拶した。一人は子息を亡くした母親て、其子の冥福を祈るやうに、讀經を請ふのてあつた。今一人は病める夫の爲めに、佛の憐れみを得ようとする若い女房て、あとの二人は遠い處へ往つた誰れかの爲めに、佛の助けを乞はうとする父と娘てあつた。老僧は一同に慈愛に滿ちた挨拶をした後、子を失つた母には地藏の版行繪を與へ、病める夫を持つ女房には、洗米の紙捻りを與へ、父と娘には何か尊い文言を書いて與へた。自分には、ふと全國の無數の寺て、毎日無數の無邪氣な祈禱がかうして行はれて居るのてあるといふ考が浮かんだ。又誠實な愛情から來る凡ての心配、希望、苦悶といふやうなもの、及び神佛にしか聽かれない、あらゆる謙遜な悲歎を思ひ浮かべた。通譯の學生は老人の書棚を漁り始めた。そして自分は考ふべからざるものを考へ始めた。

生——創られたのでない、整つて定めたとき、統一體としての生——我々は只だ其明かるい影のみを見る生——永久に死と戰ひつつ、常に征服せられ、しかも常に生存する生——それは一體何であらう——何故にそれは存在するのであらう。何百萬回か宇宙は消失した——何百萬回か復活した。消失するごとに生も共に消失する、つぎの週期には再現する。宇宙は星雲となり、星雲は宇宙となる。星や遊星の群は永久に生まれ、永久に死滅する。新たに大變異が行はれる毎に、燃える氣體は冷却し、成熟して生となり、生は成熟して思想となる。我々各個の靈魂は幾百萬の太陽の熱を潜つたに相違ない——將來も更に幾百萬の宇宙の消滅に逢ひ、しかも生存するに相違ない。記憶も如何にかして、如何なる處にか生存し得ぬであらうか。或る知られざる方法と形式とにて、其記憶が生存せぬとは我々は斷言し得ぬ——過去に在つて將來を記憶すとも云ふべき、無限の洞觀力の如くに。吾々混沌の深淵に於ける斯如き蟻壁の夜の中に、過去將來の夢が永久に夢みられつつあるのであらう。

僧家の者等は讀經を述べ、祭壇に少し許りの供物を供へ、それから我等にも挨拶して歸つて行つた。我等は小さい庭の圍の縁の座に還つた時、老人は云つた。

『世の中の悲歎を誰れよりもよく知るのは僧侶で御座いませう。西洋人は金はあるが、矢張り西洋にも苦惱は多いさうですね』

『ハイ』自分は答へた。『西洋には日本によりも却つて苦痛が多いでせう。金持ちの快樂は日本よりも大きいが、貧民の苦痛も大きいでせう。我々西洋人の生活は日本よりも困難です。其理由でせう。我々の思想は此世の不可解に惱まさるゝ事が多いのです』

老僧は之に興味を持つらしかつたが、一言も云はなかつた。自分は通譯の助力で詞を續けた。――

『西洋諸國の多くの人々が、常に心を惱ます三つの大きな疑問があります。（何處から）（何處へ）（何故）と云ふのであります。それは人生は何處から來たか、何處へ行くか、そして何故に存在し、何故に惱むかといふ意味であります。西洋の最高の哲學は、それを解き難き謎だと申します。けれども同時にそれが解けぬ限りは、人間の心に平和がないと白狀致して居ります。凡ての宗教は其說明を試みましたが、何れも異說まちまちであります。私は此疑問の解答を得ようとして佛書を漁りました。そして何れよりも立ち優つた解答を見附けました。それでもまだ不完全であるので、私を滿足させる事は出來ません。貴僧のお口から、少くとも第一と第三の疑問の解答を伺ひたいと存じます。私は證明や議論

は一切何はうとは致しません、ただ結論の御教義を承りたいのであります。一切の物は始めは宇宙心靈にあるのでせうか』

此質疑に對して自分は實は明快な答辯を豫期しなかつた。それは『一切有經』といふ經の中で、『考ふべからざる物』とか、六想說とか、『茲に物あり、此者何れより來り何れに行くか』などと論議する者を、非難する言を讀んだ事があるからである。然るに老僧の答は、歌の樣に調子よく音樂的に聞こえだした。

『一個體として考へた萬物は、發展繁殖の無數の形式を經て、宇宙心靈から出現したのであります。萬物は其心靈の中に潛在的に久遠の昔から存在したのであります。併し我々が心と呼ぶものと、物と呼ぶものとの間には、本質の相違は御座いません。物と呼ぶものは我々の感覺、知覺の總計で、それは皆心の現象であります。物の本體に就ては、我々は何の知識も御座いません。我々は我が心の諸相以外の事は何も知りません。心の諸相は外部からの影響若しくは外力に依つて心の中に現はるゝもので、此影響外力を指して物と申します。併し物と心と申すも又無窮の實在の二つの相に過ぎません』

『西洋にも』自分は云つた。『それに似た說を敎ふる學者があります。それから近代科學の深淵な研究も、我々が物質と呼ぶものは、絕對の存在を有しないと說くやうです。併

し貴僧の仰しやる無窮の實在に關しまして、それが何時如何にして、我々が物と心と區別する二つの形式を初めて生み出したかといふ、佛の教はないてせうか」

『佛教は』老人が答へた。『外の宗教の樣に、萬物が天地開闢といふ事で創造られたとは教へません。唯一無二の實在は宇宙心靈で、日本語で眞如と申します。――これが無窮久遠の實在其物で御座います。さて此無窮の心靈は自體の中に自體の幻影を見ました。丁度人が幻覺て眼に映つた物を實物と思ふ樣に、此宇宙實在も自體の內で見た物を外物と思ひ違へたのであります。此迷妄を我々は無明と申します。其意味は光を發しないとか、照明を缺くとか申すのであります』

『其言葉を、西洋の或る學者は』自分が口を挿んだ。『「無知」と譯しました』

『私もさう聞いて居ります。併し我々が用ふる言葉の意味は「無知」といふ言葉で現はす意味とは違ひます。寧ろ誤つた教化とか、或は迷執の意味であります』

「そして其迷執の起こつた時に關しては、何と教へてありますか」

『最初の迷執の起こつた時は、數へ切れぬ遠い過去で、無始卽ち始めを超越して居ると申します。先づ眞如から我と非我といふ第一の差別が出現して、それから精神上並びに物質上のあらゆる個體が起こり、又同樣にあらゆる情と慾とが出て、それが生死流轉の緣を

作つたので御座います。だから全宇宙は無窮の實在からの出現であります。けれども我々は其無窮の實在に依つて創造られたとは申されません。我々の本元の我は宇宙心靈であります。我々の内には宇宙我が、最初の迷執の結果と共に存在して居るので御座います。此迷執の結果の裏に、本元の我が包まれて居る狀態を、我々は如來藏[註]即ち佛の胎と申します。我々が何の爲めに努力するかと申すと、只だ此無窮の本元我に歸着する爲めで、其處が佛陀の根本で御座います。』

註　如來藏は梵語で Tathāgata gharba と云ふ。Tathāgata は日本語で如來で、佛の最高の稱號である。先人の來るが如く來る人といふを意味す。

『も一つ疑義がありますが』自分は云つた。『それに就て佛教の教へを承りたい。我が西洋の科學は、我々の目に見ゆる此宇宙は、無限の過去に於て無數回、替り番に展開したり、崩壞したり致したので、無限の未來に於ても、又無數回滅したり現はれたり致すに相違ないと申します。又印度古哲學や佛典の英譯にも同樣の事が述べてあります。併し遂にはあらゆる物に最終の消滅、永遠の靜止の時が來たらうとは教へてありますまいか』

彼は答へた。『いかにも小乘には、宇宙は過去に於て無數回現はれたり消えたりを反復

した。將來の無限劫の間にも、又替り番に崩れたり立て直したりするてあらうと說いてあります。併し又一切の物は遂には永久に涅槃の狀態に入るてあらうとも說いてあります』

これとは筋違ひてあるが、併し抑制し難い空想が突如として此時自分の胸に起こつた。科學は絕對靜止の狀態を攝氏の零下二百七十四度即ち華氏の零下四百六十一度、二といふ公式て表はすといふことを思ひ出したのであつた。併し自分はただ云つた。——

『西洋人の頭には絕對靜止を、幸福の狀態とは考へ難いのですが、佛教の涅槃といふ思想は、無限の休止、普遍的の不動といふ思想を含むのでせうか』

『否』と老僧は答へた。『涅槃は絕對自足、凡てを知り凡てを見る狀態であります。我我はそれを全然不活動の狀態とは思ひません。却つて凡ての繫縛を脫した大自在の境地と想像致します。いかにも我々は肉體のない感覺若しくは知覺の境地を想像する事は出來ません。我々の五感も思想も肉體といふ條件に隸屬するのでありますから。併し我々は涅槃は無限の視力、無限の安心の境地てあると信じます』

赤猫は老僧の膝の上に躍り上がつて、氣樂さうに圓くなつた。老人はそれを撫でてやつて居る。自分の通譯子は小さく笑つて——

『肥えて居ますね。前世に善行を積んだのでせう』
『動物も』自分は問うた。『前世の功罪に依つて、境涯が定まるのでせうか』
僧は嚴粛に自分に答へた。――
『凡て生物の境涯は前世の境涯に依るので、生は一てあります。人間に生まれるのは幸運てあります。人間てあればこそ我々は幾何かの教化を受け、功を積むの機會もあるのてあるが、動物の狀態は心の闇の狀態て、誠に憐憫の至りてあります。どの動物でも眞に幸福だとは考へられません。併し動物の生活にさへ、限りなき境涯の相違が御座います』
後は暫く沈默が續いた――猫の咽喉を鳴らす音が折々聞こゆるばかりてあつた。自分は丁度衝立の上に見える、アデレード・ニールソンの肖像を見た。そしてチュリエットを思ひ出し、又自分が若し立派に日本語て話し聞かせることが出來たら、沙翁の驚くべき情熱と悲哀の物語に就て、僧は何といふだらうと考へ廻らした。其時突然其疑惑に對する返答てあるかの如く、『法句經』の第二百十五節の文句が胸に浮かんだ――『愛より悲は來り、悲より恐は來る、愛に繋がれぬ者は悲もなく恐もなし』
『佛教は』自分は尋ねた。『一切の性愛は禁止せらるべきものと敎へるてせうか。性愛は必然的に修業の障りとなりませうか。私は眞宗の僧侶の外、凡て僧侶は結婚を禁ぜられ

て居ることを承知致して居ります。併し俗人には獨身と結婚といふことに就て、何ういふ教がありますか存じませぬ』

『結婚は道の障りともなり、又助けともなります。それは場合によります。凡ては場合次第であります。若し妻子の愛の爲めに、憂世のはかない名利に餘り酷く執着する樣ならば、そのやうな愛は障礙となりませう。併し之に反して、妻子の愛の爲めに獨身の狀態に於てよりも、純潔に非利己的に生活する事が出來るならば、結婚は修道の大なる助けとなりませう。大智の人には結婚の危險が多く、小智の人には獨身の危險が一層大であります。又時としては情熱の迷ひが性來利根の人を大智に導くこととも御座います。これに就てお噺があります。大目蓮、[註] これは普通目蓮で通る人ですが、此人は釋迦の弟子でありました。處が美男なので一人の娘に思ひつかれました。然るに目蓮は既に僧籍に入つて居るので、夫に持つことは出來ぬと、娘は失望して竊に嘆いて居りました。が遂に勇氣を奮ひ起こして釋迦の前に行き、心のたけを打明けました。其詞もまだ終はらぬ中、釋迦如來は彼女に深い眠りを投げかけると、彼女は目蓮の樂しい妻となつた夢を見ました。樂しい幾年月かが夢の裡に過ぎ去ると、此度は悅びと悲みの雜じつた幾年かが過ぎました。すると突然夫が死んで了ひました。それで彼女は生きて居られぬと云ふ程の悲歎に遇ひまして、其苦悶

の中に目を覺ますと、如來は微笑して居られます。そして彼女に申さる：やう「妹よ、御身は凡てを見た。御身の欲する通りに選ぶがよい――目蓮の妻となるとも、或は目蓮が既に入つて居る高き道を求むるとも」そこて彼女は髪を切つて尼となりましたが、後には輪回の苦を脱れる境涯に達しました」

註　梵語にては Mahāmaudgalyāyana

暫し自分はかう考へた。此噺は愛の迷妄が人を成道に導くといふ事を示しては居らぬ。又娘の入道は强ひて苦惱を知らしめられた直接の結果で、愛の結果ではないと。併し間もなく、彼女に見せつけられた夢も、利己的な下劣な人間には、立派な結果を生ぜしむることもなかつたらうと考へ直した。又自分は現今の世態では己が將來の運命を前以て知らされることは、云ふ可からざる弊害を伴なふてあらうと考へ、我々の將來が目に見えぬ幕の後ろで作られる事は、我々の多くに取つては幸であると感じた。それから自分は又、其幕を揚げて覗く能力は、其能力が人間に眞に有益であるやうになれば、直に發展するか或は新たに得られるてあらうが、それ迄は望はないなどと想像した。そして云つた。

「未來を見る力は悟道に依つて得られませうか」

僧は答へた——

『得られます。六神通を得る所迄修業が進みますれば過去も未來も見ることが出來ます。此力は前世を思ひ出る能力と同時に起こります。併し左樣な悟道の域に達することは、只だ今の世では甚だ困難で御座います』

通譯子は此時自分にもう辭去すべき時だと密かに合圖をした。我々は少し長居を爲過ぎた——其點には寛大な日本の作法で測つても長過ぎた。自分の突飛な質問に答へて吳れた好意を謝した上て附け加へた。——

『まだ承りたい事が澤山ありますが、今日は餘り長くお邪魔を致しました。又別に出ましても宜しいてせうか』

『喜んてお迎へ致します。何卒幾度てもお出て下さいませ。まだお分かりにならぬ所は何ても御遠慮なくお聞き下さい。悟を得、迷を霽らすのは熱心な探究に依るのみて御座います。いやどうぞ度々お出て下さい——小乘に就てお話しが致したう御座りますから。そしてこれを何卒お納め下さい』

と彼は自分に二個の小さい包を渡した。一つは白い砂――善人の靈が死後巡拜に出懸けるといふ善光寺の祠堂の砂で、も一つは極小さい白い石で、舍利即ち佛陀の遺骨であつた。

其後自分は幾度も此親切な老翁を尋ね度いと思つたが、學校と雇傭契約をしたので、横濱を去り幾多の山を越えて赴任した。それて其後は彼に遇はなかつた。

二

自分が再び地藏堂を見る迄に、五年の歲月は徐に過ぎた。其五年は悉く此條約港から遙かに遠い處で過ごしたのであつた。其間に自分の內外に多くの變化が起こつた。日本の美しい幻――初めて其魔力ある雰圍氣の中に入る者には、殆ど氣味惡るい程に感ぜられる妖美も、自分には實際長らく感ぜられたが、遂に全く消え失せた。自分は魅惑されずに有の儘に極東を見るやうになつた。しかも大いに過去の感動を思慕して止まなかつた。

併し其感動は或る日復活した――ほんの一瞬の間だけ。自分は横濱に來て、も一度山の手から、四月の朝に浮かべる神々しい富士の山靈を凝視した。其偉大なる春の光の青く漲

れる裡に、自分が初めて日本を見た日の感じが戻つて來た。美しい謎に充ちた世に知られぬ仙境――特殊の日輪と、獨得の色澤ある大氣とを有する妖精の國の光彩に、初めて驚喜せる感じが戻つて來た。自分は再びかがやかしい平和の夢に浸つた、眼に映る物悉く再び心地よき幻となつた。東洋の空は――極めて淡い白雲のあるかなきかに點々せるばかり、涅槃に入らんとする靈魂の如くに曇りなき――再び佛陀の空と化した。朝の色は次第に濃くなり行き、枯木も花咲き、風は薫り、生きとし生ける者愛憐の情を起こさざるはなかりしと云ひ傳へた、釋迦降誕の日の面影を現ずるに至つた。漠然たる香氣は四方に薫じて聖師再來を告ぐるが如く。通行人の顏さへ凡て聖誕の豫感で微笑する樣に見えた。

間もなく靈氣は四散して、物は皆俗惡に見え出した。自分が經驗した凡ての幻、地上の一切の幻は實物の如く、宇宙の森羅萬象は却つて幻の如く思はれ出した。是に於て無明といふ詞が想ひ出された。そして自分は直に地藏堂の老いたる思索家を尋ねようといふ氣になつた。

其界隈は大分變つて居た。古い家は消え失せて、新しい家が驚く程櫛比して建ち並んだ。併し自分は遂に彼の露地を發見した、そして彼の記憶して居た通りの小さい寺を見附けた。入口の前には女達が立つて居た。そして若い一人の僧が幼兒と遊んで居たが、其幼兒の小

さい鳶色の手は、僧の綺麗に剃つた顔を弄つて居た。其顔は切長の眼を有つた、利根さうな親切さうな顔であつた。

『五年前に』自分は拙い日本語で彼に云つた。『私は此寺へ參りました。其時年老た坊さんが居ましたね』

若い坊さんは赤兒を其母らしい女の腕に渡して答へた――

『ハイ、彼の老僧は亡くなりました。それで私が代りました。何卒お上がり下さいませ』

自分は上がつた。小さい須彌壇は變はり果てて、あどけない美しさは無くなつて了つた。地藏は尙ほ涎掛の中から微笑して居るが、其外の佛達は消え失せた。同様に繪馬類も――アデレード・ニィルソン孃の肖像も――見えなくなつた。若僧は自分を老僧が書き物をして居た室で寛がせようと試みて、烟草盆を自分の前に据ゑた。例の書物のあつた隅を見たがもう無かつた。凡てが變つたやうであつた。

自分は尋ねた――

『何時老僧はお亡くなりになりました』

『遂去年の冬』と僧は答へた。『大寒の節に亡くなりました。脚を動かせないので、大分寒さに惱まされました。これが位牌です』

彼は床の間に行つて得體の知れぬ瓦落多——大方佛具の破片であらう——の亂雑に載つて居る棚の間から、左右に花の挿してあるガラス瓶を置いた小さい佛壇の扉を開いた。中には黒漆へ金字を書いた新しい位牌が見えた。彼は其前へ燈明を點し、線香を一本立てて云つた。——

『一寸失禮致します。檀家の者が待つて居りますから』

自分はかうして獨り取り殘されたので、位牌を見、小さい燈明の動かぬ炎と、線香の青くゆるやかに上る烟を凝視めながら、老僧の靈は此中に居るだらうかと初めは怪しんだが、暫しの後には眞に居る樣な氣がして、口の中で彼に話し懸けた。つぎに自分は佛壇の兩側にある花瓶には、まだボルドーのツーサン　コーナア會社の名が附いて居、線香箱には、香味豐かな紙卷烟草の銘が入つて居るのに氣が附いた。室を見廻はすと、自分は又赤猫が日當たりのよい隅の方に眠つて居るのを見附けた。側へ往つて撫でてやつたが、自分を覺えても居ず、眠さうな眼を開きもしない。が前よりも毛艶があつて幸福らしかつた。入口の方で此時悲しさうに呟く聲が聞こえたが、やがて僧の聲で相手の半解の答を氣の毒さうに繰り返すのが聞こえた。『十九歳の女、フム、それから二十一歳の男——さうですね』

其時自分は歸らうとして起ち上がつた。

『御免下さい、もう一寸お待ち下さい』僧は何か書いて居た顔を上げて云つた、女達は自分に禮をした。

『いや』自分は答へた。『お邪魔致しますまい。私はただ老僧にお目に懸かりに來たのですが、お位牌にお目に懸かりました。これは少しばかりですが靈前へ、それからこれは貴僧へ、何卒』

『暫くお待ち下さいませ、お名前を承り度う御座いますから』

『多分又伺ひませう』自分はごまかすやうに云つた。『老尼もお亡くなりになりましたか』

『いやいや、達者で寺の世話を燒いて居ります。只だ今外出致しましたが、直ぐ戻りませう。お待ち下さい。何か御用でもお有りになりはしませんか』

『ただ御祈禱を願ひませう』自分は答へた。『私の名はどうでも宜しいです。四十二歳の男、其男に尤もふさはしい物が得られるやうにお祈り下さい』

僧は何か書き下した。自分が彼に祈つて吳れと依賴したことは、確に自分の心の眞底の願ではなかつた。併し佛陀は、失はれた幻の復歸を願ふやうな、愚かしい祈禱には耳を藉さぬであらう事を自分は承知して居た。

勇子――追憶談

明治二十四年五月

誰れか勇敢なる婦人を見出すべき――勇敢なる婦人は貴重にして容易に國內に見出されず――

――拉典譯聖書

『天子様御心配』。　天の子宸襟を惱まし給ふ。

町は不思議にしんとして、萬民喪に居るが如き靜けさてある。行商人さへ平常より低い聲て賣り歩く。何時も朝早くから夜遲くまて雜沓する劇場も悉く閉鎻した。あらゆる遊び場、あらゆる興行物（みせもの）――花の會まて閉鎻した。あらゆる宴席料亭も同様てある。淋しい藝者町に三味線の音一つ聞こえねば、大きい旅人宿に酒飮み騷ぐ者もなく、客は低聲て話すばかり。道行く人の顔にも平生の微笑は何處へやら、町角の貼紙は宴會や餘興の無期延期を報じて居る。

こんな火の消えた樣な淋しさは、大きな天災若しくは國家の危機――大震災、首都の破壞、宣戰の布告の樣な報道のあつた後に起こるべきだ。併しそんなものは實際何もない――ただ天皇叡慮を惱まし給ふと云ふ報道があつた計り。それに國內幾千の都會を通じて、同じ憂愁の雲に掩はれ、萬民主君と悲みを同じうするの衷情を表して居る。

君王の悲みを悲む此偉大な表現の直ぐ後から、過てるを正し、損はれたるを償はんといふ、自發的の願望が一般に起こつて來た。此願望は直に衷情から出て、天眞爛漫な、無數の形で現はれた。殆ど各地各人から慰問の書面や電報、又は珍らしい献上品が國賓に宛てて送られた。富めるも貧しきも、重代の品物や、貴重な家の寶を取り出して、負傷した皇太子に捧げたのである。其外露國皇帝に傳送すべき無數の書面が認められた――皆何れも自發的に個人が爲したのである。或る奇特な老商人は自分を尋ねて來て、露國皇太子襲擊に對する全國民の深厚な悔恨の意を表はす電文――全露國皇帝への電報――を佛語にて認めて吳れと乞うた。自分は丹精をこめて認めてやつたが、高貴な方への電文の文言には、全く無經驗であることを云つて聞かせた。『おゝそれは關ひません』彼は答へて云つた、『セントピータースバーグの日本公使宛てに送ります。間違ひがあつたら公使が形式通りに直して吳れませう』自分は更に、電報の料金を承知して居るかどうかを尋ねて見た。處

が彼は正確に百餘圓と計算した。これは松江の小商人に取つては莫大な支出であつた。

頑固な老サムラヒ達は、これとは全く異つた荒つぽい方法で彼等の所感を示した。大津て露太子警衞の任に當つた一髙官は、特別便で、利刀と書面とを受け取つたが、其書面には、早速切腹して、男子の面目を完うし、兼て遺憾の意を表せと書いてあつた。

一體日本人には、神道の神と同樣、二種類の魂(たましひ)がある。和御魂(にぎみたま)と荒御魂(あらみたま)とである。和御魂はただ補償を求め、荒御魂は贖罪を要求する。今や國民の生活を掩ふ暗憺たる大氣の中に到る處此の相反する衝動の奇なる震動が、恰も二種の電氣の如くに感ぜられる。

遠い神奈川の或る富家に一人の若い娘の婢女(めしつかひ)が居る。名は勇子(ゆうこ)と云ふ。これは勇敢といふことを意味する、昔の武家風の名である。

四千萬の同胞が悉く悲しんで居るが、勇子の悲みは群を抜いて居た。何故(なぜ)何うしてといふことは西洋人には十分に了解(わか)らぬ。が、彼女の全身は感動と、我々には極漠然としか分からぬ衝動とに領せられて居る。善良な日本少女の精神の一端は我々にも解せられる。其精神の中には戀もある——但し深く靜かに潛在して居る。汚濁を受け附けぬ純潔もある——其佛教的象徴は蓮花である。又梅花にかかる初雪の樣に纖細な感觸もある。又武家傳來

の死を恐れぬ氣性が、音樂の樣に和らかな温順さの中に潛んで居る。堅實で素朴な宗教心もある――神佛を味方にして、日本の禮節に背かぬ限りの心願を掛けるに憚らぬ衷情からの信仰がある。併しこれと此外の色々の情感の上に、全體を統率する優越な一つの情緒があるが、それは西洋の語では表現することが出來ない――忠義(ローヤルチー)といふ譯語では全く物足りない、寧ろ我々の所謂神祕的興奮に近い或る者で『天子樣』への極度の崇拜歸依の心である。これはただ個人一代の感情ではない。押し詰めると、忘れられたる遠い遠い過去の間へ遡る先祖傳來の不朽不死の道念と意志である。彼女の肉身は、我々西洋人のとは全く異る過去の憑依せられた靈の住家(すみか)である。――其過去に於ては無數劫の間、凡ての日本人は一人の如くに、我々とは異る風に、生き、感じ考へたのである。

『天子樣御心配』此報道に感應して勇子の心には何か獻上したいといふ燃ゆる樣な願望が直に湧き起こつた――制すべからざる願望ではあるが、給金から剩(あま)した僅少の貯への外には、何一つ所持せぬ彼女には全く無望であつた。けれども此熱望は執着して彼女に少しの平和をも與へぬ。夜になると彼女は考へに沈んで、自分に色々の問を發すると、祖先の靈が彼女に代つて答へるのである。『天子樣の御心配を安め奉るのに、何を獻上したら宜

からう』『汝の一身』と聲のない聲が答へる。『併し妾にそれが出來ませうか』と彼女は心許なげに問ふ。『汝には兩親とも無い』と聲が答へる、『さればとて汝の力では何を献上する事も出來まい。汝は我々の犧牲となるがよい。聖上の爲めに一命を抛つのは最高の忠義、最高の悦びではないか』『そんなら何處て』と尋ねると、『西京て』と沈默な聲が答へる、『古例に則つて死ぬ者の玄關口て』

夜が明けると、勇子は起きて太陽を拜する。朝の任務を終はる。暇を乞ふ、許される。つぎに取つて置きの晴衣と、一番華美な帶と、一番白い足袋を着ける。これは天子様の爲めに命を捨てるに相應しくする爲めてある。一時間後には京都への旅に上つて、汽車の窓から滑り行く風景を眺めて居る。其日は美しい日で、遠方は眠たげな春霞て靑くぼかされ、見る目に心地善い。彼女は此好風景を祖先が見た樣に見て居る――併し西洋人には不思議て怪奇て美しい、古い日本畫帖ての外、そんな風に見る事は出來ぬ。彼女は生の悅びを感ずる、併し彼女が生きて居れば、其生は將來如何に樂くなるだらうなどとは夢にも想はぬのである。彼女の死後も世界は昔通りに美しいだらうと思つても、何の悲みも伴なはぬのである。彼女は佛教的の憂欝に壓せられて居ぬ、全く古神道の神々に身を委ねて居る。其

神々は清淨な森の薄暗がりから、又後へ飛び行く小山の上の古い祠から、彼女に微笑を向けつつあるのである。そして多分神の一柱は彼女に伴なうて居るのであらう。死を恐れぬ者に墓を宮殿よりも美しく見せる神、死神と呼ばれる、死を厭はしむる神が伴なうて居るのであらう。彼女には未來は暗黑でない。彼女はとこしへに山上の日の出、水面の嫦娥の微笑、四季の永久の魔術を見るであらう。歳月は幾廻轉しても、彼女は八重の霞の彼方、松の森陰の靜寂の中の、美しい場處々々に住むであらう。彼女は又櫻花の雪を吹く微風の中に、流泉の淙々の中に、綠野の沈默を破る樂い囁きの中に、靈妙な生を經驗するであらう。併し先づ、何處か此世ならぬ薄暗い座敷で、彼女の來るを待つ血族に逢つて、こんな事を聞くだらう、『けなげな擧動を致したな――それてこそ武士の娘ぢや。サア、上がれ、今夜は汝故に神々が我等と御會食下さる筈ぢや』

娘が京都に着いた時は夜が明けて居た。彼女は先づ宿屋を見附けて、それから上手な女髮結の家を探した。

『どうぞこれを磨いて下さい』勇子は小さい剃刀（これは女の身じまひには缺く可からざる品である）を髮結に渡して云つた、『此處に待つて居ますから』と買つたばかりの新

間を開いて、帝都からの最新報道を探した。其間、店の者は無禮を許さぬ嚴肅な美しい態度に打たれて、不思議さうに眺めて居た。顔は子供の顔のやうに穩かだが、聖上の憂慮の件を讀んでる中に、心の中では祖先の靈が小休みなく動いて居る。『早く時が來ればよい』と考へた。『併し待つて居よう』小さい刄物は遂に遺憾なく磨ぎ上げられたのを受け取り、少し許りの賃錢を拂つて、宿に歸つた。

宿屋で二通の書面を認めた。一通は兄への遺書、一通は御膝下の高官への見事な訴狀で、粗末ながら若き命一つ、贖罪の爲めに進んで捨てた微衷を酌んで、天子樣の御憂慮を鎭めさせ給はれと祈るのであつた。

彼女が再び宿を出た時は、曉前の最も暗い時で、四邊は墓地のやうに寂寞として居た。街の燈火も數少く且つ微かであつた。彼女の下駄の音が妙に音高く響いた。見て居るものは星計り。

間もなく御所の奧深い御門が眼の前に現はれた。其影の中へ忍び込んで、祈禱を小聲で唱へながら跪いた。さて古式に則つて丈夫な軟らかい絹の長い腰帶を取つて、衣裳をしつかりと身體に結(ゆは)ひつけ、膝の上で結び留めた。それは盲目的な苦悶の刹那に、どんな事があらうとも武士(サムラヒ)の娘は取り亂した死姿(しにざま)を見せてはならぬからである。それから沈着(おちつい)た正確

さを以て咽喉を切ると、滾々と脈を搏つて血が流れ出た。武士の娘はこんな事を間違はぬ。動靜脈の所在を心得て居るのである。

日出の頃、巡査が冷たくなつた彼女と、二通の書面と、それから五圓なにがしの入つて居る財布を發見した。（彼女は葬式の費用にはそれで十分と思つたのだ）そして屍骸と携帶品とを取り片つけた。

此顛末は電光の樣に直に數百の都會に報ぜられた。

帝都の大新聞は此報道を受け取つた。そして皮肉な記者は、あらぬ事共を想像し、此献身的行爲に有り勝ちな動機を發見しようと力め、隱れた罪惡とか、家庭の悲劇とか、戀の失望とかを探らうとした。併し否、彼女の淸廉な生活には、何の祕密も何の缺點も何の卑吝な黠もなかつた。半開の蓮の蕾もそれと淸さを爭ふに足らぬ。それで皮肉な記者も、武士の娘にふさはしい立派な事ばかりを書いた。

天子も此事を聞こし召され、陛下の赤子が如何に陛下を愛するかを知ろし召され、悲歎を止めさせられた。

大臣達も聞いて、玉座の陰て相互に囁き合つた。「凡ての物は變はるだらう、併し國民の此心だけは變はらぬてあらう」

それにも拘らず、政府の高等政策て、政府は知らぬ振りをして居た。

心

日本内面生活の暗示と反響

詩人、學者、愛國者なる

友人　雨森信成へ

心

この一卷のうちにある諸篇は日本の外面生活よりは、むしろ內面生活を取扱つて居る、――この理由で『心』と云ふ名稱の下にまとめられたのである。心の漢字は情緒的の意味で又心意とも解せられる、精神、勇氣、決心、情操、情愛、それから――私共が英語で『物の心』と云ふやうに、――內面の意味とも解せられる。

一八九五年・九月十五日・神戶。

第一章　停車場にて

明治二十六年六月七日

昨日福岡から電報で、そこで捕へられた重罪犯人が、今日裁判のために正午着の汽車で熊本に送られる事を知らせて來た。一人の警官がその罪人護送のために福岡へ出張してゐた。

四年前一人の强盜が夜相撲町の或家に押入つて、家人をおどかして縛つて、澤山の貴重品を奪ひ去つた。警官のために巧みに追跡されてその盜賊は二十四時間内に贓品を賣捌く間もないうちに捕へられた。しかし警察署へ送られる途中鎖を切つて、捕縛者の劍を奪つて、その人を殺して逃げた。先週までそれ以上その盜賊の事は何も分らなかつた。

それから熊本の探偵がたまたま福岡監獄を見に行つて、その囚徒のうちに彼の頭腦に四ケ年間寫眞を燒きつけたやうになつてゐた顏を見た。看守に向つて『あれは誰です』と尋ねた『ここでは草部と記入されて居る竊盜犯です』と答があつた。探偵は囚人に近づいて

云つた、――

お前の名は草部ぢやない。野村貞一、お前は殺人犯の件で熊本へ御用だ、その重罪犯人は悉く白狀した。

私は停車場への到着を目撃するために大勢の人々と一緒に行つた。私は憤怒を聞き又見る覺悟をしてゐた。私は暴力の行はるべき事をさへ恐れてゐた。殺された警官は大層人望があつた。その親戚は必ずその見物のうちに居るだらう、それから熊本の群集は甚だ穩かとは云へない。私は又澤山の警官が警戒に當つて居る事と思つた。私の豫想はまちがつてゐた。

汽車は忙しさと騷しさのいつもの光景、下駄をはいて居る乘客の急ぎ足とカラコロ鳴る音、日本の新聞と熊本のラムネを賣らうとする子供の呼び聲のうちに止まつた。

埓の外に私共は五分間程待つてゐた。その時警部によつて改札口から押されて罪人が出て來た、頭をうなだれてうしろ手に繩てしばられた大きな粗野な樣子の男であつた。罪人と警官と兩方共改札口の前にとまつた、そして人々は前に押し出て、しかし默つて、見ようとした。その時警官は大聲て呼んだ、――

『杉原さん　杉原おさび、来てゐますか』
背中に子供を負うて私のそばに立つてゐたほつそりした小さい女が『はい』と答へて人込みの中を押しわけて進んだ。これが殺された人の寡婦であつた、負うてゐた子供はその人の息子であつた。役人の手の合圖で群集は引き下つて囚人とその護衛との周圍に場所をあけた。その場所に子供をつれた女が殺人犯人と面して立つた。その靜かさは死の靜かさであつた。
少しもその女にではなく、ただ子供だけに向つてその役人は話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐたので、私は一言一句きく事ができた、――
『坊つちやん、これが四年前にお父さんを殺した男です。あなたは未だ生れてゐなかつた。あなたは母さんのおなかにゐました。今あなたを可愛がつてくれるお父さんがないのはこの人の仕業です。御覽なさい、（ここで役人は罪人の顎に手をやつて嚴かに彼の眼を上げさせた）よく御覽なさい、坊つちやん。恐ろしがるには及ばない。厭でせうがあなたのつとめです。よく御覽なさい』
母親の肩越しに男の子はすつかりあけた眼で恐れるやうに見つめた、それからすすり泣きを始めた、それから涙が出た、しかし畏縮しようとする顏をしつかり、そして從順に、

續いて眞直におつと見て、見て、見ぬいた。

群集の息は止つたやうであつた。

私は罪人の顔の歪むのを見た、私はその鎖も構はないで突然倒れて跪いて、そしてその間開いて居る人の心を震はせるやうに悔恨の情極つたしやがれ聲で叫びながら、砂に顔を打ちつけるのを見た、——

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんして下さい、坊つちやん、そんな事をしたのは怨みがあつてしたのではありません、逃げたさの餘り恐ろしくて氣が狂つたのです、大變惡うございました、何とも申しわけもない惡い事を致しました。しかし私の罪のために私は死にます。死にたいです、喜んで死にます、だから坊つちやん、憐れんで下さい、勘忍して下さい』

子供はやはり默つて泣いた。役人は震へて居る罪人を引き起した、沈默の群集はそれを通すために左右へ分れた。それから全く突然全體の群集はすすり泣きを始めた。そしてその日にやけた警官が通つたとき、私は前に一度も見た事のない物、めつたに人の見ない物、恐らく再び見る事のない物、卽ち日本の警官の涙を見た。

群集は退散した、そしてこの光景の不思議な教訓を默想しながら私は殘つた。ここには罪惡の最も簡單なる結果を悲痛に示す事によつて罪惡を知らしめた容赦をしないが同情のある正義があつた。ここには死の前に只容赦を希ふ絶望の悔恨があつた。又ここには凡てを理解し、凡てに感じ、悔悟と慚愧に滿足し、そしてままならぬ浮世と定め難き人心をただ深く經驗せるが故に憤怒でなく、ただ罪に對する大なる悲哀を以てみたされた群集（怒つた時には恐らく帝國に於て最も危險な群集）があつた。

しかしこの一挿話のうち、最も東洋的であるから、最も著しい事實は、罪人の親たる感じ、どの日本人の魂にも一大分子となつて居る子供に對する潛在的愛情に訴へて悔恨を促した事であつた。

日本の盜賊のうちで最も名高い石川五衛門が或夜人の家に入つて殺して盜まうとした時、自分に手をさしのべた子供の笑顏に氣を取られて、その子供と遊んでゐて、遂に自分の目的を果す機會が全く失はれたと云ふ話がある。

この話を信ずる事はむつかしくはない。毎年職業的犯罪者が小兒に對して憐みを示した

事が警官の記錄にない事はない。數ケ月前地方の新聞に恐るべき殺人事件（盜賊が一家をみなごろしにした事件）が記されてあつた。眠つて居る間に七人の人が文字通り寸斷されたが、警官は一人の小さい子供が全く害をうけずに血の溜りに獨りで泣いて居るのを發見した。警官は加害者がその小兒を害しないやうにと餘程注意したに相違ない事の疑のない證據を見出した。

第二章　日本文化の眞髓

一

一艦を失ひ一戰に敗るゝことなく、日本は支那の勢力を挫き、新たに朝鮮を興こし、領土を擴張して東洋の政局面を一變した。是れ實に政治上驚異すべきことと思はれたが、心理上には更に驚異すべきことである。蓋し日本人が曾て諸外國から期待せられなかつた技能——頗る優級なる技能——を大いに働かしたことを示すからである。僅三十年間に於ける所謂『西洋文明の採用』が日本人の頭腦に從來缺けて居た機能を附加した筈はない、と心理學者は知つてゐる。日本人の心性、德性の急激な變化を生じた筈はないと知つてゐる。斯の如き變化は一世代の間には起こらない。移植せられた文明の影響は遙かに緩慢で、永續性ある心理的効果を生ずるには幾百年を要するのである。

この點から觀る時に、日本は實に世界に於て最も異數な國と見えるのであつて、日本の

歐化の跡を眺めて最も驚歎すべきは國民の頭腦がよく斯程の衝撃に耐へたことである。この事實は史上他に比類の無い事であるから、その眞義は果たして何であるか。それは單に既存せる思想機關の一部を改修しただけであるといふ事になる。それすら幾多敢爲の若き心には致命の苦痛であつた。西洋文明の採用は決して思慮なき人々の想像せるが如き容易な事ではなかつた。從つて今日まだ計上し盡くせざる代償を拂つて行つたこの心的改作が、この民族が常に特殊の技能を示し來たつた方面に於てのみ好結果を示してゐる事は極めて明白である。現に西洋の工藝上の發明の應用が日本人の手によつて立派に行はれたのも、主として國民が固有の奇異なる手法によつて年來熟練した職業に於て優秀な成績を擧げてゐるのである。それには何等根本的改變があつたのでは無い。在來の技能を新しき大なる規模に轉じたに過ぎぬ。科學的職業に於ても同樣の結果を見る。或る種の科學、例へば醫學、外科手術（世に日本の外科醫の右に出る者は無い）、化學、檢鏡法には日本人の天性は生來適してゐて、是等の學藝に於ては何れも全世界に聞こえた成績を擧げてゐる。戰爭と國策とに於ても驚く可き手腕を示したが、日本人は往古以來、偉大な軍事的並に政治的手腕を以て特徴としてゐたのである。之に反して、國民性に合はない方面に於ては、何等目覺ましき事は行はれなかつた。例へば西洋音樂、西洋美術、西洋文學の研究に在つては、時

日を費やして何等得る所なきの觀がある。註 歐米の藝術は歐米人の心情には深甚なる感興を與へるが、日本人の心情には少しも同樣の感興を與へぬ。而して教育によつて個人の心情を改造することが不可能であるのは深く思索する者の皆辨へてゐる事である。東洋の一民族の感情が僅々三十年の間に西洋思想の接觸によつて改造されようなどと考へるのは愚の至りである。理性よりは古くから存在し、從つて更に深奥な心情が、環境の變化によつて急激に變化し得ないのは、鏡の面が來往する反影によつて變化し得ないのと同一である。日本が神技の如く見事に成し遂げた事は、凡て何の自己改造もなくして行はれたもので、日本が今日、三十年前よりも、心情の上に於て歐米人に接近したと想像する者は、議論の餘地なき科學上の事實を無視するものである。

註 或る局限された意味に於ては、西洋の藝術は日本の文學及び演劇に影響した。但しその影響の性質が自分の語つてゐる民族的相異を立證してゐる。歐洲の演劇が日本の舞臺に向く樣に改作せられ、歐洲の小說が日本の讀者向きに書き直されて、併し詳譯は滅多に試みられない。原作の事實思想感情等が一般の讀者や觀客には理解し難いからである。筋だけが採用せられて、情緒や事實は全然改められる。『今樣マグダレン』が異つた部落と結婚する日本娘になり、ヴィクトル・ユーゴーの『レー・ミゼラーブル』が日本の戰亂の物語となり、オンヂョルラが日本の學生になる類である。但し、『ヴェルテルの哀愁』の詳譯の

同情は理解によつて局限せられる。吾人は吾人の理解する程度まで同情を持つことが出來る。自分は或る日本人か支那人かに同情を持つてゐると思ふ人もあらうが、その同情は、小兒も大人も差等のない様な極めて普通な感情の單純な部面を除り離れては、決して眞實なものではあり得ない。東洋人の感情の中の複雜なものは、西洋の生活には何一つ正確に該當するものの無い、從つて吾人が充分に知ることの出來ない、祖先以來或は個人の種々の經驗の結合によつて成り立つたものである。同じ理由で、日本人は歐米人に對して至甚な同情を與へることは、よし心には願つても、出來ぬものである。

西洋人に取つて、日本の生活は、理性感情何れの方面も（兩者は互に織り組まれてゐるので）その眞相を見分ける事が、依然として不可能であるが、同時に、又、日本の生活が自分等の生活に比して極めて小規模である、といふ確信を避けることは出來ぬ。日本の生活は風雅である。其は一方ならぬ興味と價値とを有つた美妙な可能性を具へてゐる。が、其を除いては、規模が如何にも小さく、西洋の生活はそれとの對照で殆ど超自然と見える。我々は眼に見える測定し得る體象を判斷するより外はないから、さう批判して見ると、東

西の感情の世界の間に、理智の世界の間に、何たる對照が見えることか。日本の首都の脆弱な木造の街衢と、パリやロンドンの往來の宏壯堅牢なのとの對照などは未だ遠く及ばぬ。東西兩者が彼等の夢想や抱負や感覺を發表したものを比較する時に、ゴシックの大伽藍を神社の建築に比べ、ヴェルディの歌劇かヴァグナの三部歌劇を『藝者』の演奏に比べ、歐洲の叙事詩を和歌に比べる時に、感動の容積に於て、想像の力量に於て、藝術的綜合に於て、その差異が如何に計數に絶してゐることか。成る程、西洋の音樂は事實新興の藝術には相違ないが、遠く何れの時代に遡つても創作力に於ける差異は顯著の度を殆ど減じない。大理石の圓形競技場や、國又國に跨がる高架水道の築かれた、彼の羅馬の偉大を極めた時代に於て、或は彫刻は技神に入り、文學は比倫なき希臘の盛時に於て、固より然うであつたのである。

つぎには日本の國力の勃興に關する今一つの驚異すべき事實を考察する事になるが、生産と戰爭とに於て日本が示し來たつた巨大な新勢力の物質的兆候は何處に現はれてゐるか。何處にも無い。吾人が日本の心情と理智との生活に缺けてゐると認める巨大といふ事は、産業商業にも缺けてゐる。國土は依然として舊の如く、地表は明治の變遷によつて殆ど面

目を改めてゐない。玩具のやうな鐵道や電柱、橋梁や隧道は、日本の綠の野山に隱れて殆ど眼に入らぬ。開港場とその外人居留地を除いては、全國の都會に市街の外觀に於て西洋思想の感化を思はせるものは殆ど一つも無い。日本內地を旅行すること二百哩に及んで尚ほ大規模な新文明の兆候を認め得ぬかも知れぬ。何處に往つても、商業が巨大な倉庫にその抱負を示してゐるのや、工業が幾萬坪の屋根の下に機械を据ゑ附けて居る有様を見出すことはない。日本の都市は今尚ほ千年前の儘で、彼の岐阜提灯の樣に風雅であるかも知れぬが、それ以上に丈夫とは謂へぬ。木造の小舍の雜然たる集團に過ぎぬ。大なる動めきと騷ぎとは何處にも無い。重い車馬の往來もなく、轟々轣轆の響もなく、甚だしい急速もない。東京に於てすら、僻村の平穩を求めて得られぬ事はない。現今西洋の市場を脅威し極東の地圖を改めつつある新興勢力の、眼に見え耳に聞こえる兆候が斯くも乏しいことは、奇異な、殆ど不氣味と謂つて可いやうな感じを與へる。是は或る神社を目指して、寥々たる數哩の坂路を登りつめた時、唯だ虛無と靜寂の神域——ささやかな祠のみが千古の樹陰に朽ち果ててゐる光景——を見る時の感想と略〻等しい。日本の力は、その古來の信仰の力のやうに、形に表はすことを必要としない。この兩つの力は大國民の深い實力の存する所、即ち民族精神の中に存在する。

二

斯く冥想してゐるとき、一大都會の記憶が喚起される。空高く築き上げられて海の如くに轟いてゐる都會である。その轟きの記憶が先づ歸つて來る。つぎに幻想が形を成して來る。立ち並ぶ家々の山、その間の街路の峽谷の光景である。煉瓦や石の絶壁の間を幾哩も跋渉し乍ら、寸地をも踏まず、唯だ岩石の板を踏み、喧噪の雷霆の外何をも聞かなかつたので、自分は疲れてゐる　彼の廣漠たる鋪石の路面の下深く、廣大なる洞窟の世界があつて、そこに水や蒸氣や火力を供給するために考案された脈絡系統の層又層がある。兩側には幾十層列の窓を穿つた垂直面が屹立してゐる。日の目も見せぬ建築の斷崖である。仰げば蒼白な細布の如き空は縱横無盡に裁たれてゐる、それは蜘蛛手に連らなる無數の電線である。右手の一廓には九千の人間が住んでゐる。向ひの家の借主は年額百萬弗の家賃を拂つてゐる。その先きの空地を壓する大普請には七百萬弗の巨資もなほ足りぬのである。鋼鐵とセメント、眞鍮と石材とを以て造られ、費用を惜しまぬ欄干を附けた階段は十階二十階と續いてゐる。が、それを踏む者は無い、今は水力蒸氣力電氣力によつて昇降する。足

を運ぶには餘りの高さに眼くらみ、行程も亦遠すぎる。この種の建物の十四階に五千弗の家賃を拂つてゐる友人は、一度もこの階段を踏んだことが無い。自分が今歩いてゐるのも物好きにしてゐるので、用を足すためなら歩きはせぬ。距離は遠く時間は貴重て、そんな悠長な骨折りをしては居られぬ。區から區へ、家から事務所へ、人は皆蒸氣の力で通ふ。家が高すぎて聲が屆かない。用を言ひ附けるにも願へるにも機械による。電氣の力で遠方の扉を開き、一指を動かして一百の家を照らし久暖める

凡てこの巨大たるや、堅く、嚴めしく、無言てある。堅牢保存の實利的眼目に應用された數理上の力の巨大である。幾哩となく續いてゐる是等の殿堂、倉庫、店舗、その他名狀し難き各種の建物は美しいと謂はんよりは、寧ろ不快てある。斯の如き建築を作り出した巨大なる生命、そは同情なき生命の巨大を感じ、彼等の絶大なる力、そは憐みなき力の絶大なる顯現を感ずるのみて意氣銷沈を覺える。是等は新しき産業的時代を建築に表はしたものである。而して車輪の轟き、蹄の音や人の跫音の騷がしさにはをやみもない。物一つ尋ぬるにも相手の耳に喚かねばならぬ。その高壓な環境の中に在つては、見るにも、理解するにも、動くにも、經驗を要する。馴れぬ者は恐慌の中に、暴風の中に、旋風の中にあるの感を有つ。而も凡て是れ秩序てある。

怪しくも廣き街路は、石橋鐵橋を架して、河を越え水路に跨がつてゐる。眼のとどく限り、叢立つ帆柱、蜘蛛手の帆綱が煉瓦や石の斷崖なる岸を隱して居る。錯綜極まりなきその帆柱や帆桁に比しては森の木立も密ならず、さし交ふ枝も繁くはない。而も凡て是れ秩序てある。

三

約言すれば西洋人は永存のために建て、日本人は當座のために建てる。日本に於て永存の考を以て作らるゝ日用品は少い。旅路の驛に着く毎に損じては更へる草鞋。小幅幾つかを輕く縫ひ合はせては着、解いては洗濯する着物。旅館で客の代はる毎につける新しい箸。窓にもなり壁にもなり、年に二回張り替へる手輕な障子。秋ごとに表を替へる疊。この外枚擧に遑ない日常の事物が皆國民一般に永存せぬ物に甘んじてゐることを示す。

普通の日本住宅はどんなにして出來るか。朝自分の家を出て、ぢき先きの四つ角を通る時に、そこの空地に竹の柱を立ててゐる者がある。五時間出てゐて歸つて來ると、その地所に二階家の骨組みが出來てゐる。翌日の午前には壁が泥と藁づたとてあらまし塗られて

ゐる。日の暮れには屋根に悉皆瓦が葺かれる。つぎの朝には壁が敷かれ、内壁の上塗りが仕上がつた。五日の中にその家が落成した。是は勿論安普請で、立派な家は建てて仕上げるのにずつと時がかかる。併し日本の都會は大部分斯ういつた風の建物で出來てゐる。家屋は粗末で金もかからぬ。

支那の屋根の曲線が遊牧時代の天幕の記憶を傳へてゐるかも知れぬ、と云ふ意見に何處で初めて出會つたか、今想ひ起こすことは出來ぬが、その考は、自分が不實にも其を讀んだ本を忘れて了つたずつと後まで、自分の心に來往して、出雲に來て古い神社の、破風の端と棟の上とに奇異な十字形の突起を附けた、特殊の構造を見た時に、其よりは新しい建築樣式の可能なる起原に關する、彼の忘られた論文の筆者の提案が力强く想ひ起こされた。併し日本に於てはこの原始的建築の傳統以外にも、この民族の祖先が遊牧の民であつた事を示す事柄が多い。何時何處を見ても、我々が堅牢と呼ばんとするものが全然缺けてゐる。不永存と云ふ特徴が國民の外的生活の一切の物に認められる。唯だ僅に農民の昔ながらの服裝と彼の農具の形が例外てある。その歴史に記された比較的に短い期間に於てすら、日本には六十餘の首都があつて、その大多數は全然跡をも留めぬと云ふ事實はさて措いても、

日本の都市は一世代の間に改築されると概說して差支ない、幾つかの神社佛閣と一二の老大な城砦だけが例外をなしてゐる。が、通則として日本の都市は人一代の間に、形は兎もあれ、實質を變へる。火事や地震やその他の原因が幾分その理由と考へられるが、主な理由は家が永存する樣に建てられるのでないと云ふ事である。普通の人は祖先傳來の家を有つてゐない。凡ての人に親密なのは誕生の地でなくして、墳墓の地である。死者の安息の場所と、古い廟社の境域を除いては、永久なものとては殆ど無い。

國土そのものが轉變の地である。河は水路を變へ、海岸は輪廓を變へ、平野は高さを變へる。火山は或は高まり或は崩れる。谷は流れ出づる熔岩や地滑りによつて堰かれる。湖水が生じたり消滅したりする。實に二つなき「不二」の嶺の雪を頂いた奇しき姿に幾百年來畫家に靈感を與へた、その山の容すら、自分がこの國に來てからでも、少し變つたと云ふことである。同じ短日月の間に全然容を改めた山も少くない。僅にこの國の大體の輪廓と、その山川の大體の容姿と、四季の變遷の大體とが固定してゐるばかりである。風景の美しさそれ自體からして大半幻覺的で、變化する色彩と去來する霧の美しさである。實にかかる風光に目馴れた者ならでは、大八洲の歷史に於ける、ありし實際の轉變も亦起こらんとする轉變の怪しき豫想も事なげに、立つ山々の霧の心に知る由もない。

神々こそは變はることなく、山の上なる御社に現はれ給ひ、木下の闇に優しき畏こさを漲らせ給ふ。姿も體も具へられぬ故てあらう。御社は流石に人の住居のやうに忘られ果つることは無い。が社殿は皆僅の年月の間に改築される。中にもいと畏こき伊勢の神宮は、神ながらの慣らはしに從ひ、二十年毎に毀たれる定めて、神木は割かれて數々のお守に作られ、參詣者に分かたれる。

轉變の大敎義を說く佛敎はアリアン族の印度から、支那を經て傳來した。日本に於ける初期の佛閣を建てた人々は、他の民族の建築者て、堅牢に建てた。鎌倉にある支那風の建築を見るがよい。その周圍の大都會は跡も留めないのに、幾百年を經てなほ存してゐる。併し佛敎の精神上の感化は何處の國に於ても、人心を驅つて物質の安定を愛させることは出來なかつた。宇宙は一つの迷夢てあると云ふ敎義、人生は無限の旅の束の間の息ひ、人に對し場所に對し、物に對する一切の執着は悲哀の種てあると云ふ敎義、一切の願望を滅し、涅槃の願望をすらも滅することによつてのみ、人間が永久の平和に達し得ると云ふ敎義は確にこの民族の古來の感情と調和した。彼等はこの外來の信仰の深き哲理には一向心を用ゐたことはないが、その轉變の敎義は、永い間に、深く國民性を感化したに相違ない。

この教義は悟道と慰藉とを與へた。萬事をけなげに辛抱する新たな力を與へた。國民の特性である忍耐力を强めた。日本の藝術は佛教の感化によつて、事實創始せられたと謂はぬまでも、大いに發達したものであるが、そこにも轉變の教義がその痕跡を示してゐる。佛教は、天地自然は夢である、迷である、幻影である、と說いた。が、又その夢の消えゆく印象を捕へ、最高の眞理に照らして解釋することも教へた。

　而して日本人はそれをよく學んだ。咲き出づる春の花の紅の色に、蟬の現はれては又去る態に、色褪する秋の紅葉に、雪の怪しき美しさに、見る眼を欺く浪や雲の往きかひに、不斷の意義ある古き寓話の心を解した。火災、洪水、地震、疾病等の災禍すらも、絕えず彼等に寂滅の理を悟らしめた。

　時間の中に存在するものは凡て死滅を免れず。森も山も、一切のものは斯くあるべく存在す。有情の萬物は時間の中に生まる。

　日も、月も、帝釋天と雖も、數多の隨神と共に、皆悉く死滅す。一として永存するものはあらず。

　初には諸物固定す、終には皆分解す。新たなる結合は新たなる物質を生ず。蓋し自然には一定不變の本體なきを以てなり。

凡て合成せるものは老朽す。凡て合成せるものは永存する事なし。一粒の胡麻に至るまで、凡そ合成物にして永存するはあらず。萬物は變遷す。萬物は本來分解性を有す。凡ての合成物は、悉く不永久、不安定にして卑しむべきもの、必滅にして分解す。消え易きこと蜃氣樓の如く、幻影の如く、泡沫の如し。陶工の作れる凡ての陶器が終に破碎するが如く、人間の一生も亦終はる。

物質自體の信仰は之を述べ難く、又表はし難し。物質は物にもあらず、物外にもあらず。この理は兒童無智者と雖も知悉する所なり。

四

日本の國民生活に於ける前記の不永存性と小規模とに對し、之に伴なふ何か代償的の長所があるのではないか。それを探究することは徒勞ではない。

この國民性の極度の流動性はその特徴の著しきものである。日本國民はその微分子が斷えず循環してゐる一物質の樣である。而して其運動からして變はつてゐる。西洋諸國の人

民の移動に比して、一點から一點に到る運動は微弱でも、全體に於ては大きく且つ變化に富んでゐる。その運動は又遙かに自然である。西洋文明には存在し得ぬほど自然である。歐洲人と日本人との移動の比較は、或る高速度の振動と或る低速度の振動との比較によつて示すことが出來る。但しこの場合高速度の方は人爲の力が加はつてゐることを示すが、遲い振動の方にはさういふ事はない。而して斯ういふ種類の上の差異には外觀以上の意義がある。或る意味では、米國人は盛んに旅行する國民だと自ら思つてゐてよい。が、又他の意味では、さう思ふのは慥に間違つてゐる。一般の米國人は、旅行する點に於ては、一般の日本人には及ばない。勿論諸國民の移動を比較するには、單に少數の有產階級のみでなく、大衆卽ち勞働者を主として考へなければならぬ。國內に於ては日本人は文明人の中で最も盛んに旅行する國民である。彼等が最も盛んに旅行する人民であると云ふのは、彼等が殆ど山脈から成つてゐる國土にありながら、何等旅行に對する障碍を認めぬからである。日本で一番旅行をする者は汽車とか汽船とかに乘せて貰はんでも困らぬ手合である。

我々に在つては、一般勞働者は日本の普通勞働者よりも遙かに不自由である。彼等はその種々の力が集團凝結の傾向を有する西洋の社會の複雜なる機關のために拘束せられるのである。彼等が倚存せねばならぬ社會上產業上の機關が、自己の特殊の要求に應じて、彼

等をして常に他の本然の能力を棄てて、或る特殊の人爲的能力を發達せしめるやうにするからである。

彼等は單に勤儉によつて經濟的獨立を得る事を不可能にする樣な生活の標準で暮らさねばならぬ故にさうなのである。さうした獨立を得るためには、同じ束縛から脫しようと等しく努力してゐる幾千の異數の競爭者に優つた異數の性格と異數の材能とを有つてゐなければならぬ。約言すれば、彼等の特異な文明が機械や大資本の力を藉りずに生活してゆく彼等の本然の力を萎えさせたがために、日本人の如くに自由でないのである。斯く不自然な生活を營む事は、やがて獨立した移動の力を失ふ結果になる。西洋人が移動する前には色々な事を顧慮しなければならぬ。日本人の方は何も顧慮することはない、彼等は何の造作もなく嫌な所を去つて好な所に往くのである。何も彼等を妨げるものは無い。貧窮は障碍でなく、却つて刺戟である。荷物といふ程のものは無く、あつても數分間に始末の出來るものである。道の遠近などは何の事はない。彼等は一日五十哩を苦もなく飛ばす脚を具へてゐる。西洋人の到底生活して往かれぬ樣な食物から、多分の榮養を攝取することの出來る不思議な胃囊を具へ、更に彼等は、未だ不健全な衣服や過多な便利品や爐やストーヴから暖を取る事や、皮の靴を穿く習慣によつて害せられてゐないので、能く寒暑や雨露を

凌ぐ體質を具へてゐる。

歐米人の履物の適否は普通に考へられてゐるよりも以上の意義を有つてゐる樣に思はれる。この履物が卽ち個人の自由の拘束を示してゐる。價格の高い事だけでも既にさうである。が、その樣式に於ては更に甚だしいものがある。歐米人の足は靴のために原の形から歪められて了つて、其目的のために進化し來たつた働きに堪へなくなつてゐる。其生理上の影響は足だけに止まらない。直接間接に移動機關に影響するのは當然、身體全部にその影響を及ぼす筈である。其弊害は全身だけで止まるであらうか。我々があらゆる文化の中に存してゐる最も愚劣な因習に從つてゐる事も、靴屋の横暴に多年屈服し來たつた影響かも知れぬ。政治にも、風敎にも、宗敎制度にも、皮の靴を穿く習慣に多少關係のある缺陷があるかも知れぬ。肉體の壓屈に對する忍從は必らずや精神に對する忍從を助成する。

普通の日本人——同じ樣な仕事にかけて西洋の職工よりは遙かに賃銀の安い日本の熟練工——は仕合せにも靴屋や仕立屋の世話にならぬ。彼等の足の恰好はよく、身體は健康で、心は自由である。彼が千里の旅行を思ひ立つたとすれば、五分間には旅の支度が出來る。彼の旅裝は七十五仙とはかからぬ。彼の手まはりは手巾一つに包める　十弗あれば一年の間働かずに旅が出來る。或は自分の腕だけでも渡つて歩ける。或は又順禮として歩く事も

出來る」そんな事は野蠻人ならいくらでも出來る、といふかも知らぬ。其には相違ないが、文明人では誰れにも出來るとは言へぬ。而して日本人は過去少くも一千年來開明の民であつた。日本の職工が昨今西洋の製造業者を脅威する力を示してゐるのは是がためである。

斯うして自由に移動し得ることを、我々は從來、歐米の乞食や浮浪人の生活と聯想することに馴れきつてゐたので、この事の眞の意義を正當に考へることが出來なかつた。我々は更に之を不潔と惡臭と云ふ樣な不快な事柄と聯想し來たつた。併しチェインバレン教授が道破して居る樣に、『日本の群集は世界中で一番氣持ちがよい』浮浪人の如き日本の旅行者でも何厘といふ湯錢さへあれば毎日入浴する。無ければ水で洗ふ。彼の包には櫛や小楊枝や剃刀や齒刷子が入つてゐる。彼は何事があつても鼻持ちならぬ樣になることはせぬ。行先へ着くと粗末ではあるが非のうてぬ着物を着た行儀のよいお客になりすます。[註]

註　日本人の集まつてゐる所はヂレイニヤムの花の樣な匂がする、と云ふエドウィン・アーノルド卿の評言を嘲笑しようとする批評家もあつたが、この形容は的中してゐる。『麝香』と呼ぶ香料は控へ目に使へば、ニホヒヂレイニヤムのかをりと取り違へられ易い。女子を交じへた日本人の寄合でけ、何時もほんのりとした麝香の匂がする。着てゐる衣類が少量の麝香を入れた箪笥の中に藏つてあつたからである。この軟かな匂の外には日本の群集には何の臭氣も無い。

家財もなく、道具もなく、さつぱりした衣類を少し持つて暮らせることは、日本民族が生存競爭に於て持つてゐる勝味を示すばかりではなく、歐米の文明に於ける弱點の本質をも示すものである。是は我々の日常生活に於ける必需品の徒に多數なることを反省せしめずには措かぬ。我々は肉とパンとバタが無くては暮らせぬ。硝子窓と煖火、帽子、白シャツ、毛の下着、深靴、半靴、トランクや鞄や箱類、寢臺、蒲團、シーツ、毛布が無くては暮らせぬ。何れも日本人が無くても濟ます、否實際、無くて却つて樂に暮らしてゐる品物である。假りに白いシャツと云ふ金のかかる一項目に就いても、それは歐米の衣服の非常に大切な一部ではないか。而も『紳士の徽章』と謂はれるこのリネンのシャツからして無用な衣類である。別に暖かくもなければ好い氣持ちでもない。これは歐米の服裝に於て、嘗ては贅澤な階級差別の遺風であつたが、今では袖の外側に縫ひ附けてあるボタンの樣に無意味無用の長物である。

五

日本が成就した眞に偉大なる事蹟に對し、何等巨大なる象徵の無いことは、日本文明の特殊の作用を證明する。永久にその樣な作用を續けることは出來ぬが、今日までは然ういふ風にして驚く可き成功を收めて來た。日本は、我々が考へてゐる樣な大きな意味では、資本なくして生産してゐる。日本は本質に於て機械的人工的になることなくして産業的になつて來た。米の大收穫は幾百萬の微々たる農場から産出する。絹は幾百萬の小さい貧しい家庭から、茶は無數の小さい畠から産出する。京都に往つて世界に知られた陶磁器の大家、その人の作品が日本よりはロンドンやパリで更に名高い名工に、何か注文しに往つて見ると、その工場と云ふのは、米國の農夫なら到底住めぬ樣な木造の小さな家であらう。五吋程の高さの品物に對して二百弗も取る樣な七寶燒の名人は大方小さな室六つ程の二階家の裏で、彼の稀代の珍品を拵へてゐる。全帝國に鳴り響いた日本で最上の絹の帶地は、建築費五百弗とはかからぬ建物の中で織られてゐる。仕事は勿論手織りである。然し機械で織つてゐる工場、遙か大規模の外國の工業を倒すほど精巧に織つてゐる工場とても、少

數の例を除いては、大して其より立派ではない。長い輕い低い一階か二階の小舍で、歐米に於て幾棟かの木造の廐を建てる位しかかゝりさうもない。然し斯うした小舍が世界中に賣れる絹を作り出す。時によると、庭口の上に掲げた漢字が讀めるのでないと、聞き尋ねるか、機械の鳴くやうな音か何ぞで、漸くその工場と昔の屋敷や舊式の小學校舍との見別けがつく位のものである。大きな煉瓦の工場や釀造場もあるが、その數は至つて少く、外人居留地に接近してゐる時ですらも、四邊の景色と不釣合に見える。

歐米の怪異的な大建築や、雜騷極りなき機械は產業資本の大なる結合によつて實現したものである。然るに斯ういふ結合は極東に於ては存在しない。その樣に結合せらる可き資本からして存在しない。假りに數世代の中に、斯の樣な金力の結合が出來上がるにしても、建築物の構造に於て同樣の結合を豫想することは容易でない。二階建の煉瓦造りさへ主なる商業の中心地に於て好成績を擧げなかつた。其上地震が日本をして永久に建築を簡單にすることを餘儀なくさせてゐるらしい。國土そのものが西洋建築の强制に反抗し、時には鐵道線路を搖り枉げ、押し流して、新しき交通制度にすら反對する。

斯く組織されるに至らないのは產業のみではない。政府までが同じ樣な狀態を呈してゐる。皇位の外何物も確立してゐない。不斷の變遷は國策と同一である。大臣も知事も局長

も視學官も、凡ての文武の高官が極めて不定期に、驚く程の短期間に異動し、群小吏員は其餘波によつて散亂する。自分が日本在住の初年を過ごした縣では五年間に四人の知事を迎へた。熊本在住の間、大戰の初まるまでに、彼の重要地點の師團長が三度代つた。そこの高等學校は三年間に三人の校長を戴いた。教育界に於ける更迭の頻繁なことは特に著しいものであつた。自分の在職中にすら、文部大臣の更まること四度、教育方針の改まること四度以上であつた。二萬六千の公立學校はその管理上各地方會議に支配せられ、他の勢力の影響がなくても、議員の改選ごとに始終改變するを免れない。校長や教員が常に轉々してゐる。僅に三十を越したばかりで、國内の大抵の府縣に奉職したといふ樣な者もある。斯ういふ事情の下に、一國の教育が何等かの効果を收めたといふことは、實に奇蹟的と謂ふの外あるまい。

我々は常に、凡そ眞の進歩、大なる發達には、或る程度の安定が必要だと考へてゐる。が、日本は何等の安定もなくして大なる發達の可能なこととの論破し難い證左を擧げてゐるその理由は種々の點に於て歐米の國民性と正反對な國民性に存する。本來一樣に移動的なこの國民は、又一樣に感動し易く、大目的の方に擧國一致して進んだ。四千萬の全一團を、砂や水が風によつて形をなす樣に、その主權者の意向によつて形成せられるに任せた。而

してこの改造を甘受することはこの國民生活の舊態、卽ち稀なる沒我と完全なる信義の行はれた往時の狀態に屬してゐる。日本の國民性の中に利己的個人主義の比較的に少いことは、この國を危地より救ふものであつた。この國民をして甚だしき優勢に對抗して自己の獨立を保つことを得しめた。之に對して日本はその道德を創生し保存した二大宗敎に感謝して可い。一つは己が一家又は自己を考へる前に先づ君と國とを思ふことを個人に敎へた神道と、今一つには、悲しみに勝ち、苦しみを忍び、愛する者の消滅と厭へる者の暴虐とを永久の法則として受け容れるやうに各個人を鍛錬した佛敎とに感謝して可い。

今日は硬化の傾向が見えてゐる。支那の呪であり弱味であつたと全然同樣な官僚主義の形成を誘致する樣な變化の危險が見える。新敎育の道德的効果は物質的の効果に比ぶ可きものが無かつた。純然たる利己と云ふ一般に認められた意味での『個人性』の缺如と云ふ非難は、つぎの世紀の日本人に對しては大方加へ得ぬであらう。學生の作文までが智力を單に進取の武器と見做す新しい觀念と、嘗てなかつた侵略的主我主義の情操とを反射してゐる。佛敎思想の消えなんとする名殘を胸中に留めて斯う書いてゐるものがある。『人生は本來無常である。昨日は富裕にして今日は貧困な者を屢〻見る。是は進化の法則による

人間の競爭の結果である。吾人は競爭を免れ得ない。假令それを望まずとも、相互に闘はなければならぬ。如何なる武器を執つて闘ふべきか。其は教育によつて鍛へられたる知識の劍を以てする』

抑も自我の教養には二つの形式がある。一方は高貴なる性質の非凡なる發達に到り、他は之に就いて成るべく言はざるを可とするものを意味してゐる。然るに新日本が今攻究せんとしてゐるものは前者ではない。自分は人間の心情は、全國民の歷史に於いてもなほ、人間の理性よりは遙かに優つて貴重なものであり、人生のスフィンクスの凡ての殘忍な謎に答へるにも、比較に絕して勝つてゐることを、早晩示すであらうと信ずる一人であることを告白する。自分は今なほ、昔の日本人は、彼等が德に優れたることを智に優れたるよりも勝されりと考へてゐるだけで、歐米人よりも人生の難問題を解決するに近かつたと信じてゐる。終に臨んでフェルディナン・ブルンチエールの教育に關する所論の一部を引用して結論に代へて見たい。

『一切の教育的方策は、つぎに記すラメネーの名言の意味を人心に嵌入して之を深く印象しようとする努力が無いなら、無效に終はるであらう。「人間社會は相互の授與、即ち人が人のために、或は各人が他の凡ての人々のために獻身することに基づいてゐる。而し

て献身こそ凡ての眞の社會の要素である」然るに吾人はこの事を約一世紀間忘れ去らうとして來たのである。それ故、若し吾人が改めて教育を受けることになれば、それはこの事を學ぶためにするのである。これを辨へねば、社會もなく教育も無い。教育の目的が人を社會のために養成するのであるなら、たしかに然うである　個人主義は今日社會の秩序の敵であると同時に、教育の敵である　初からさうであつた譯ではないが、さう成つて來たのである。永久に然うではないであらうが、今は慥にさうである。そこでこの個人主義を亡ぼさうとは努めぬまでも（さうするのは一方の極端から他の極端に陷ることになる）吾人は家族に對し、社會に對し、教育に對し、國家に對して何をしようといふにも、個人主義に敵對してその事が行はれるのだ、と云ふことを認めなければならぬ』

第三章　門つけ

三味線を携へて七八つの男の子に手を引かれた女が(譯者註一)私の家へ歌を歌ひに來た。彼女は農夫のなりをして、頭に青い手拭を卷いてゐた。醜かつた、そしてもとよりの醜さが殘酷な疱瘡に襲はれたために一層ひどくなつたのであつた。子供は版にした流行歌の一束をもつてゐた。

そこで近所の人々は私の表ての庭に集まつて來た、——多くは若い母親や背中に赤ん坊を負うた子守だが、爺さん媼さん——近所の隱居達——も同じく來てゐた。それから又つぎの町角にある帳場から車屋も來た、そしてやがて門の內にはもう餘地がなくなつた。

女は私の入口の階段に坐つて、三味線の調子を合せて伴奏の一節を彈いた。そこで一種の魅力が人々の上に落ちた、そして彼等は微笑しながら驚いてお互に顏を見合せてゐた。

即ちその醜い不恰好の唇から奇蹟のやうな聲、——若い、深い、透るやうに妙へなると

ころは名狀のできぬ程の感動を與へる聲が流れたりさざなみをうつたりして出たからである。一人の見物は『女か、それとも森の仙女か』と尋ねた。只の女であるが、甚だ甚だ偉大なる藝術家である。その樂器の取扱ひ方は最も熟練なる藝人をも驚かしたてあらう。しかし、こんな聲はどんな藝人からも聞かれた事はなかつた、そしてこんな歌も。彼女は只農夫が歌ふやうにしか歌はなかつた、恐らく蟬や藪鶯から習つた聲の節で歌つた、そして西洋の樂譜に決して記された事のない聲の細い、又その半分程の細い、その半分の半分程の細い調子で歌つた。

　そして彼女が歌つて居ると、聞いて居る人々は默つて泣き始めた。私には言葉の意味ははつきりしなかつた、しかし私は日本生活の悲しさと樂しさと苦しさが彼女の聲と共に私の心へ通つて行くのを覺えた、——決してそこにない何物かを悲しげに求めながら。目に見えない哀れさは私共の周りに集まつて震へて居るやうであつた、そして忘れられた場所と時間の感覺が、——人の記憶にある場所や時間の感情でない、もつと靈的な感情と混つて靜かに歸つて來た。

　その時私はその歌ひ手は盲目である事を見た。

歌が終つた時私共は女を誘つてうちへ入れて身上を聞いて見た。昔は彼女のくらしが相應によかつたので小さい時に三味線を習つた。小さい子供は彼女の倅であつた。夫は中風であつた。彼女の眼は疱瘡のためにつぶれた　しかし彼女は强壯で遠くまで歩く事ができた。子供が疲れて來るといつも彼女は背中に負うてやる。彼女は床についた夫と又子供とを養つて行かれる、それは女が歌ふ時、きく人は泣いて彼女に小錢と食物を與へるからである。……彼女の身上話はこんなであつた。私共は彼女にいくらかの金と食事を與へた、それから子供に手を引かれて彼女は去つた。

私は近頃の心中に關する流行歌―玉米竹次郎の悲しき歌、作者大阪市南區日本橋四丁目十四番屋敷竹中よね』と題する物を一部買つた。それはたしかに木版であつた、そして小さい繪が二つあつた。一つには若い男女が一緒に歎いて居るのを表はし、他方は『終りの繪』のやうになつて、机、消えかかつた燈火、開いた手紙、燒香、死人へ供物をする佛式に用ひられる聖い植物、樒のさしてある花瓶を示してあつた。たてに書いた速記のやうに見える妙な草書は、譯して見ると只こんな物になつた、

『評判名高き大阪の西本町一丁目——心中話の哀れさよ。
『十九歳の玉米を、——見て戀をせし若き職人竹次郎。
『二世も三世も變らじと誓ひし二人、——遊女を戀ひし悲しさよ。
『互の腕に彫りしは龍と竹の文字、——浮世の苦勞をよそにして。……
『女の身代五十五圓を拂はれぬ、——竹次郎の心の切なさよ。
『この世で添はれぬ兩人は、共に死なんと誓する。……
『回向を朋輩に賴みしのち——露と消え行く二人の哀れさよ。
『死ぬ人々の誓する水盃を取り上ぐる。……
『心中する人の心の亂れ、——寥しく消ゆる命の哀れさよ』

要するに話には何も甚だしく變つた事はない。詩に著しいところは少しもない。その演奏の感嘆を博したのはその女の聲のためであつた。それにしてもその歌ひ手の行つたずつと後まで、その聲が未だ殘つて居るやうであつた、——不可思議な聲の祕密を私は說明しようとしないでは居られない程、不思議な快感と悲哀感とを私の心に起させながら。

そして私はつぎに書いた事を考へた、——

凡ての歌、凡てのふし、凡ての音樂は只感情の原始的な自然の表現の或進化、――樂音によつて表はされる悲哀、喜悦、激情の自然の言葉に外ならない。外の言葉に變化のあるやうにこの音の結合の言葉にも變化がある。それ故私共を深く動かす音曲は日本人の耳には何の意味もない、そして私共に少しも觸れない音曲は青色と黄色と違ふ程、私共と違つた精神生活をもつ人種の感情に力强く訴へるのである、……それでも私に分りもしないこの東洋の歌が、――この下層社會の一盲目の女のありふれた歌が、――外國人である私の心に深い感動を與へたのは何の理由であらう。必ずこの歌ひ手の聲に一人種の經驗の全體よりも大きな物、――人生程廣い物、そして善惡の知識程古い物に訴へる事のできる性質があつたからであらう。

二十五年の前或夏の夕、ロンドンの或公園で一人の少女が誰か通りかかりの人に『お休み』と云つて居るのを聞いた。只その『お休み』と云ふ二つの小さい言葉だけ。その少女は誰であつたか私は知らない、私は彼女の顏を見もしなかつた、そして私はその聲を再びきかなかつた。しかし今もなほ、一百の季節の過ぎ去つたあとで彼女の『お休み』を思ひ

出すと快感と悲哀感との不可思議な二重の刺戟を感ずる、——疑もなく私のでなく、私一生のでなく、前生の、前世界の快感と悲哀感とである。

けだし、こんなに只一度きいた聲の魅力となつて居る物はこの世の物ではない。それは無限無數の忘れられた人生の物である。たしかに全く同じ性質をもつた二つの聲はなかつた。しかし愛の言葉のうちには、凡て人生の幾千億の聲に共通なやさしい音色がある。遺傳の記憶によつて生れたての赤子でもこの愛撫の調子の意味がよく分る。疑もなく、同情、悲嘆、哀憐の調子に關する智識もそれと同じく遺傳である。そしてそのわけで、極東のこの町に於ける一人の盲目の女の歌が西洋の人の心にも一個體よりももつと深い感情、——漠然たる物を云はない忘れられた悲哀の情、——覺えてゐない時代のおぼろげな愛の衝動、——を起させるのであらう。死人は決して全く死ぬと云ふ事はない。死人は疲れた心臟、忙しい頭惱の最も暗い小さい室[譯者註二]に眠つて居る、そして稀に彼等の過去を呼び起す或聲の反響によつて目をさますのである。

譯者註一　明治二十八年三月チエムバレン教授に送つた手紙參照。

譯者註二　小さい室、即ち細胞の事。

第四章　旅行日記より

一

一八九五年四月十五日　大阪京都間の汽車中にて

乘合の席で睡氣ざした時、横になると云ふ譯にも往かぬ場合、日本の婦人はその左の長い袂を顏にあててから坐睡する。今この二等客車の中に三人の婦人が並んで睡つてゐる。何れも左の袂に顏を隱して、列車の動搖と共に一齊に搖れながら、緩やかな流に咲く蓮の花の樣に。（左の袂を使ふことは偶然か、それとも本能によるか、大方は本能によるのであらう。強く搖れる時に右手で吊り革か座席に掴まるに都合がよいから）この光景は美しくも亦可笑しい。が、上品な日本婦人が何をするにも、いつも出來るだけあてやかに氣を兼ねて、品よくすることの例として美はしく見える　それは更にいぢらしくもある。その姿は又悲哀の姿であり、又時には惱ましき祈りの姿でもあるからである。是は皆、出來るだけ愉快な面もちの外は人に見せまいとする、練られた義務の觀念からである。

この事で自分の經驗を想ひ起こす。

長年自分の使つてゐた下男が世にも快活な男と思はれてゐた。物を言ひかけられると何時も笑つてゐる、仕事をする時にはいつも嬉しさうにしてゐる、人世の面倒などといふものは少しも知らぬ顏に見えた。處が、或る日當人が誰れも側に居るものは無いと思つてゐる時に覗きこんで見ると、彼の氣の弛んだ顏に自分は喫驚した。豫て見た顏とはうつて變つてゐた。苦痛と憤怒の怖はい皺が現はれて、二十ほども老けて見えた。咳拂ひをして自分の居ることを知らせると、顏は忽ち滑らかに、柔らいで明かるくなつた。若返りの奇蹟でもある樣に。是は實に不斷の沒我的自制の奇蹟である。

二

四月十六日　京都にて

宿屋の自分の室の前の雨戸が押し除けられると、朝日がぱつと障子に射して、金色の地の上に小さい桃の樹の、くつきりした影を申し分なく描き出した。人間の筆では、假令日本の畫家の筆でも、この影繪を凌駕することは出來ない、ほつかりと黄色い地色の上に紺

色に描き出されたこの不思議の繪は、目に見えぬ庭樹の枝の遠近に從つて、濃淡の差までも示してゐる。家屋の採光のために紙を用ゐる事が日本の美術に影響したのではないかと思はれる點などを考へさせられる。

夜分障子だけを閉てまはした日本の家は、大きな行燈の様に見える。外へ繪を寫す代りに内側へ活動する影を寫す幻燈の様である。晝間は障子に寫る影は外からばかりであるが、日の出る頃、恰も今朝の様に、その光線が洒落た庭の上を眞横に射す時には、その影繪は實に絶妙である。

藝術の起原を、壁にさした戀人の影を不用意に寫さうとした事に歸してゐる希臘の昔物語にも決して笑ふべきことは無い。大方一切の藝術的意識は、凡ての超自然の意識と等しく、影の研究にその抑もの發端を開いてゐる。然し障子に寫る影は如何にも著しいので、原始的どころか、比類なく發達した、他には説明し難い、或る日本特有の畫才の説明を暗示する。勿論、如何なる磨硝子よりも影の良く寫る日本紙の特質と、影そのものの特質も考察を要する。例へば、歐米の植物は、自然の許す限り恰好をよくするため、幾百年來の丹精によつて作り上げられた、日本の庭樹の様な趣のある影繪を寫さない。

自分は、この室の障子の紙が、寫眞の乾板の様に、横に射す日の寫した最初のうましき

印象に對して、感受性を持つてゐてくれゝばよいと切望する。自分は既に形の崩れたのを憾みとしてゐる。美しき影は間延びを見せ初めた。

四月十六日　京都にて

三

日本に於て特に美しきものの中で、最も美しきは、高い所にある禮拜、休息の場所に到る途中、卽ち、是ぞといふものも無い所へ往く道路や、何があるといふでもない所に登る石段である。

勿論、その特別な妙味は、人間の造營と、光や形や色に於ける自然の好氣分とが一致した時の感じで、雨の日などには消えて了ふといつた樣な、折にふれての妙味である。然しこれは、斯く氣まぐれなものであるに拘らず、嘆美すべきものである。

斯ういふ登り口は、先づ石疊の坂道で、巨木の立ち並んだ、七八丁程の並木路といつた樣なもので初まる。石の怪獸が合間合間に置かれて道を護つてゐる。つぎに鬱蒼たる樹木の間を登つて更に大きな老樹の陰暗い墓地に出る大きな石段がある。其處からまた、何れ

も陰に浸つた幾つかの石段を登つては幾度か墓地に出る。登り登つて又更に登ると、漸くにして蒼然たる鳥居の彼方に當の目的が見える。小さな空な木造の祠、卽ち一つの「お宮」てある。長い參道の莊嚴を極めた後、この靜寂と陰晴の高處に於て、斯うして受ける空虚の感じは眞に幽玄そのものである。

佛閣に對する同樣の經驗は、幾百となく、之を得んと欲する者を待つてゐる。一例として京都市内に在る東大谷の寺域を擧げてもよい。堂々たる並木路が寺院の境内に通じ、境内からは幅員優に五十尺の、重くるしい、苔蒸した、立派な欄干の附いた石段が、壁を取りまはした臺地へ通じてゐる。その光景はデカメロン時代のイタリヤの遊園地へでも出さうに思はせる。が、上の臺地に着くと、唯だ門があるだけで、その中は墓地である。佛者の庭造りが、一切の榮華も權勢も美容も唯だ斯うした寂滅に到る、といふ事を示さうとしたのであらう。

四

四月十九日より二十日まで　京都にて

内國勸業博覽會を觀るのに大方三日間を費やしたが、出品の大體の性質と價値とを鑑識するには中々十分でない。主として工藝品であるが、其にも拘らず、あらゆる種類の生産物に驚くばかりに藝術の應用がしてあるので、殆ど皆氣持ちのよいものである。外國商人や自分等よりも炯眼な觀察者は、別な今少し變つた意味を見出してゐる。これまで東洋人が西洋の商工業に與へた最も恐るべき脅威が卽ちそれである。ロンドン・タイムズ紙の通信員の所論に『英國に比べると凡てが一片に對する一ファージング（四分の一片）の割である。……日本のランカシャ（の工業）に對する侵略の歷史は朝鮮支那に對する侵略の歷史よりも古い。それは平和の征服で、事實成功せる無痛除血法である……この度の京都の博覽會は生産的企業に於て更に一大進歩をなしたことの證明である……勞働者の賃銀が一週三志、其他の生活費も之に準ずるといつた樣な國は、外の事が皆同じでも、一切の費用が日本の四倍に當たる競爭者を滅ぼすに極まつてゐる』とある。確に産業上の柔術は意想外の結果を生ずべきである。

博覽會の入場料も亦意義ある事である。唯だの五錢。然しこの少額でも巨額の收入になりさうである。蝟集する觀覽者の數が如何にも多い。多數の農民が每日京都に押し寄せる。多くは徒歩で、巡禮でもする樣に。して又この度京へ上ることは、眞宗の大本山の落成式

があつて、事實巡禮なのである。

美術部は一八九〇年の東京の美術展覧會に比しては遙かに劣つてゐると思つた。結構なものもあるにはあるが、至つて少い。恐らく全國民が熱心にその精力と技術とを有利な方向に傾注してゐる證左かも知れぬ。現に美術が工業と組み合はされてゐる諸部門――陶磁器、象嵌、刺繡等に於ては、嘗て無い精巧貴重な作品が陳列されてゐる。たしかに、そこにあつた幾つかの陳列品の眞價は、『支那が西洋工業の方式を採用したら、世界の市場に於て日本品を驅逐する事にならう』と云ふ。友なる日本人の感想に對する答辯を暗示した。

そこで自分は答へた。『廉價品に於ては或はさうかも知れぬ。併し日本が製品の廉價なことのみを手緣りにする必要はない。日本は技術と良趣味とに於ける卓越に手緣る方が一層安全であると思ふ。一國民の技術的天才は安價な勞力による如何なる競爭も及び難い特殊な價値を有つてゐる。西洋諸國の中では佛蘭西がその一例である。佛蘭西の富は隣國よりも低廉に生産し得ることに基因しては居らぬ。佛國製品は世界中最も高價である。佛國は奢侈品及び美術品を賣り出してゐる。是等の品物はその類の中で最良品であるが故に、凡ての文明國に於て賣れ行きがよい。日本が極東の佛蘭西となつて惡い筈はあるまい』

美術部の中で殊に貧弱なのは油繪、西洋風の油繪の部である。日本人が日本固有の描法による油繪具て見事な繪の描けないと云ふ譯は無い。然し彼等が西洋の描法に倣はうとする企圖は極めて寫實的な取扱ひを要する習作に於てのみ、僅に平凡の域に達したに過ぎぬ。油繪具による理想畫は、西洋美術の法則に從つては未だ日本人の企及し得る所でない。大方油繪に於ても、將來、西洋の方式を國民精神の特殊の要求に適應せしめて、美の殿堂に入る新門戸を自ら發見することもあらう。が、今の處その樣な傾向は見えぬ。

大きな鏡に向つた全身裸の婦人を描いた一畫面が公衆の惡感を惹起した。全國の新聞紙はその畫の撤回を要求し、西洋の藝術觀に對しては香ばしからぬ意見を吐いてゐた。然しその繪は日本の畫家の作であつた。それは駄作であつたが、思ひ切つて三千弗といふ値段がついてゐた。

自分は少時その前に立つた、この繪の衆人に與へる感興を觀察しようと思つたのである。觀衆の大多數は農民で、驚いて見てはせせら笑ひ、何か嘲るやうな言葉を遺して、十圓乃至三十五圓といふ値段附けてこそあれ、遙かに見ごたへのある掛物の方へ往つて了ふ。その人物が西洋人の髮形をして描いてあつたので、批評は主に西洋の好尚に對して向けられてゐた。それを日本の繪と思ふ者は無いらしかつた。それが若し日本婦人の圖であつたな

ら、公衆はそんな繪を無事に置く事すらも承知すまいと思ふ。
繪そのものに對する侮蔑は至當であつた。その作には少しも理想的の所がない。單に裸體の婦人が、人目のある所で仕たい筈のない事をしてゐる姿を描いたに過ぎぬ。而して唯だ裸體の婦人を描いただけの繪は、どれほど巧みに描けてゐても、藝術が何等かの理想を意味するなら、藝術ではない。その寫實的な所がそれの不快な點であつた。理想の裸體は神聖なもので、超自然なるものに對する人間の想像の中最も神に近いものであらう。が、裸體の人間は少しも神聖ではない。理想の裸體には何も纒ふことは入らぬ。その美妙さは蔽うたり切つたりすることを許さぬ美しさ線から來るものである。生きた實物の人體はさういふ神韻ある線や形を有つてゐない。借問す、畫家はその裸體より實感のあらゆる痕跡を除去し得るにあらずして、裸體そのもののために裸體を描出して可なりや。
佛教の格言に、個體に卽せずして物を觀る者のみ賢なり、と道破したのがある。而してこの佛者の見方こそ眞の日本藝術の偉大をなす所以である。

斯ういふ考が浮かんだ。

五

神聖なる裸體、絕對美の抽象である裸體は觀る者に幾分悲哀を交じへた驚愕と歡喜との衝擊を與へる。美術の作品にして之を與へるものは少い、完全に近いものが少いからである。然しさう云ふ大理石像や寶石細工がある。又『藝術愛好會』で出版した版畫の樣な、其等の作品の精巧な模寫がある。視れば視るほど驚歎の念が深くなる。一つの線でも、その一部分でも、その美が凡ての記憶を超絕してゐないものは無い。それ故斯ういふ藝術の祕訣は古來超自然と考へられた。事實又それが與へる美の觀念は人間以上である。現在の人生以外であると云ふ意味に於て超人間である。卽ち人間の知れる感覺の及ぶ限りに於て超自然である。

その衝擊は如何なるものか。

それは初めての戀の經驗に伴なふ心的衝擊に不思議にも似て居り、たしかにそれに緣のあるものである。プラトーンは美の衝擊を靈魂が神來の思想の世界を半ば想ひ起こすので

ある、と說いてゐる。『この世界に於て彼の世界に在るものの姿又はその類似を見る者は、電擊の樣な衝擊を受け、謂はば己の內より取り出される』ショーペンハウワーは初戀の衝擊を全人類の魂の意志力と說いてゐる。現代に於てはスペンサーの實證心理が人間の感情中最も强烈なものは、その初めて現はれるときに、一切の個人的經驗に絕對に先行するものであると斷言して居る。斯く古今の思想が、哲學も科學も、人間の美に對して個人が初めて深く感ずるのは、決して個人的のものでないことを等しく認めてゐる。

卓絕せる藝術の與へる衝擊に就いても同じ理法が行はれて差支ない。斯かる藝術に表現せられた人間の理想は、たしかに、観る者の感情の中に祀られてゐる彼の全人類の過去の經驗、卽ち數へ盡くせぬ先祖等から遺傳した或るものに感銘を與へる。

數へ盡くせぬとは正にその通りである。

一世紀に三世代の割として、血族結婚が無かつたとすれば、或る佛國の數學者は、現在の佛國人は何れも紀元一千年代の二百萬人の血をその脈管內に藏してゐる割たと計算してゐる。若し西曆の紀元から起算すれば、今日の一人の先祖は千八百京（卽ち一八、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）といふ總數になる。然も二十世紀間くらゐは、人類生存の期間に比しては何程のものでもない。

さて美の情緒は、人間の一切の情緒と等しく數へ難き過去に於ける、想像もつかぬ程に數知れぬ經驗を遺傳した產物に相違ない。個々の美的感覺にも頭腦の不思議な沃土に埋もれた億兆不可測の幽玄なる記憶の動めきがある。而して各人は己の中に美の理想を有つてゐる。それは嘗て眼に美しく映じた形や色や趣のありし知覺の無限の複合に外ならぬ。この理想は本質に於ては靜能的であるが、潛伏してゐて、想像を對象として、任意に喚起することは出來ぬが、生ける感官が何物か略々相連らなるものを知覺するときに、突如として點火する。その時彼の異樣な、悲しくも嬉しい身震ひを感ずる。其は生命の流と時の流との急激な逆行に伴なつて起こるものであつて、そこに百萬年千萬代の感動が一瞬時の感激に總括されるのである。而して己の精神から美の民族的理想を分離して、その濛へる輪廓を珠玉や石に彫みつける奇蹟を行ふことの出來たのは、唯だ一つの文明に屬する美術家達、卽ち希臘人のみであつた。彼等は裸體を神聖なるものとして、吾人をして彼等が自から感じたと略々等しく、その神聖を感ぜしめずには措かぬ。彼等がその樣な作をすることの出來たのは恐らくエマースンが提言してゐる如く、彼等が完全な感覺を有つて居たからであらう。確に彼等がその彫像の如く美しかつたからではない。如何なる男も女もそのやうに美しくはあり得ぬ。是だけは確である。彼等は眼や眼瞼や頸や頰や口や顋や胴や手足

の、今は亡き美しさの幾百萬とも數知れぬ記憶の複合である彼等の理想を觀取して、之を明瞭に定着したのである。

希臘の彫刻そのものが、絕對の個性は存在せず、換言すれば肉體が細胞の複合體なるが如く精神も亦複合體なりとの證據を示してゐる。

六

四月二十一日　京都にて

全帝國に於ける宗教的建築の最高の典型が丁度落成した。それでこの殿堂の大都會は、今またありし世紀間にその比を見たとは思はれぬ二大建築を加へた。一つは帝國政府の造營で、今一つは一般庶民の寄進である。

政府の造營は大極殿で、この聖都を開かれた人皇五十一代桓武天皇の大祭を記念するために建てたものである。この天皇の英靈に大極殿は奉献されたので、是は神道の社殿否凡ての社殿中最も壯麗なものである。然しそれは神社建築ではなくて、桓武天皇の時代の宮殿をその儘の模寫である。この在來の神社の樣式を脫した大建築が國民の感情に及ぼす影

響とそれを思ひ立つた畏敬の念の深き詩趣とは、日本が今なほ祖先の靈によつて支配されてゐることを辨へてゐる者でなくては十分に理解することは出來ぬ。大極殿の建物は美しと云ふも愚かてある。日本の都會の中て最も古いこの京都に於てすら、この建物は視る眼を驚かす。笄のついた屋根の反りかへつた線によつて、今とは異つた奇想に富んだ時代の物語を蒼空に語つてゐる。宛然支那の奇想そのものてある、と人は謂ふてあらう。色彩や構造に於ても樣式に劣らす奇拔なのに人目を惹く。それは殊に色交りの屋根に綠色の古代瓦を巧みに用ゐたために一層引き立つてゐる。桓武天皇の英靈も、建築の巫術によつて、過去が斯くも面白く呼びかへされてゐるのを、必らずや喜ばれるに相違ない。

然し庶民の京都市への寄進は更に偉大てある。壯麗なる東本願寺(眞宗)がそれてある。西洋の讀者はその建築に八百萬弗の巨資と十七年の歲月を費やしたといふ事て、その結構の一斑を知ることが出來る。唯だ大きさの點ては粗末な普請の他の日本建築に遙かに凌駕されてゐるが、日本の寺院建築に通じてゐる者は、高さ百二十八尺奥行百九十二尺長さ二百尺餘の伽藍を建てることの苦心を直に悟るてあらう。その特殊の形狀、殊に屋根の長大な單線輪廓のために、この本願寺は實際よりも遙かに大きく見える。山の樣に見える。然

し何處の國に持つていつても、是は驚く可き建築と見做されるてあらう。長さ四十二尺直徑四尺の木材が使つてある、周圍九尺の圓柱がある。內部の裝飾の性質に就いては、正面の護摩壇の後ろに立てた襖の蓮の花の繪を描くだけに一萬弗かかつた、といふのでも推量出來る。斯う云ふ驚く可き造營が、殆ど凡て、勞作してゐる農民から銅貨で寄附された金てなされたのてある。それでも佛敎が滅びつつあると考へる連中があらうとは。

十萬餘の農民等がこの大落成式を見物に來た。廣庭に幾町歩といふほど敷き詰めた庭の上に彼等は幾萬の群をなして坐つてゐた。自分は彼等が午後三時に斯うして待つてゐるのを見た。庭は生ある海と謂つてよかつた。併しその雲霞の群集は、儀式の初まるのを午後七時まで食はず飮まず、日の射す所に待たなければならなかつた。庭の片隅に、何れも白い着物を着て綺麗な白い帽子を被つた、二十人程の若い女の一隊が見えた。どういふ人達かと聞くと、側に居た人が「この大勢が幾時間も待つて居なければならぬから、中には病人も出るだらうと懸念される。そこで看護婦が發病者の手當てをする爲めに詰めて居るのだ、擔架も備へてある、それから運搬人夫も、醫者も大勢居ますよ」と答へた。

この辛抱と信心とを自分は驚歎した。然しそれらの善男善女がこの壯大な寺院を斯く大切に思ふのは當然てある。それは事實彼等自身の作り上げたものであつた、直接にも間接

にも。と云ふのは、建築の仕事も少からず寄進の積りて行はれ、分けても大きな棟木などは、遠國の山腹から京都まで、信者の妻や娘の頭の毛で作つた綱で曳いて來たのであつた。その綱の一つで寺の內に保存されてゐるのは長さ三百六十呎餘、直徑約三吋もある。

自分には國民の宗教心のこの二大記念物の教訓が、國家の繁榮の增進と比例して、その宗教心の倫理的勢力と價値との、未來に於ける確實なる增進を暗示した。一時財力の減少した事が、佛教が一時衰運に向つたと思はれることの實際の說明である。外に表はれた佛教の或る形式は衰亡するに相違ない。神道の或る迷信は自滅するに相違ない。併し、中心の眞理と之に對する認容は、擴まり强まり、國民の心に却つて根ざしを深め、今後國民が入らんとする、更に大なる更に困難なる生活の試煉に對して、力强き覺悟を與へるであらう。

七

四月二十三日　神戸にて

兵庫で、海に近い庭園にある魚類其他水産の展覽會を見物した。場所の名は和樂園と呼んで『平和の樂みの庭』と云ふ意味である。風景を象どつた昔の庭園風の段取りで、まことその名にふさはしい。その端を越して廣い灣が見え、小舟に乘つた漁師や、照り榮える白帆の沖行く樣や、遙かの彼方には、地平線を塞いて、紫色に霞む山々の高く美しき群ら立ちが見える。

澄んだ海水を湛へた色々な形をした池があつて、色の美しい魚が泳いでゐる。自分は水族館に入つた。そこには特に變つた魚類が硝子越しに泳いでゐた。紙鳶の樣な形をした魚や、刀身の樣な形をした魚や、裏返しになつてゐる樣な魚や、袖の樣な鰭振りはえて舞妓の振るまひする、蝶の翁色をした妙な可愛らしい魚がゐた。

小舟や網や釣針や浮子(うけ)や漁火のあらゆる種類の模型を見た。あらゆる種類の漁獵法の繪圖や、鯨を屠つてゐる模型と繪圖も見た。一つの畫面は凄いものであつた。大網にかかつ

た鯨の死の苦悶と、眞紅な泡の逆卷く中に小舟の躍つてゐる樣、裸な男が一人巨獸の背に乘り、その姿だけが水平線上に飛び拔けて、大きな魚杈を以て鯨を突き刺すと、それに應じて血汐の噴水が迸つてゐる圖であつた。自分の側に日本人の父親と母親とが幼い男兒にその繪の說明をしてゐるのが聞こえた。母親は言つてゐた

『鯨が死にかかる時には、南無阿彌陀佛と唱へて、佛樣のお助けを願ひますよ』

自分は別な方へ往つた、そこには馴れた鹿が居たり「金色の熊」が金網の中に飼つてあつたり、鳥舍に入れた孔雀も居り、手長猿も居た。自分は鳥舍の傍の茶屋の緣に腰をかけて休んだ。すると捕鯨の圖を見てゐた人達が同じ緣にやつて來た。やがて彼の小兒が斯う言つてゐるのが聞こえた。

『お父さん、大變お爺さんの漁師がお舟の中に居ますね。あのお爺さんはどうして浦島太郎見たいに龍宮に行かないの』

父親は答へた。『浦島は龜を捕へたが、それは本當の龜ぢやなくて、龍宮の王樣のお姬樣だつたから、その龜を親切にした御褒美があつたのさ。あのお爺さんは龜を捕へやしなかつたし、捕へたつて、あんまり年を取つてお婿さんになれやしないから、それで龍宮へは往かなかつたのさ』

するとその子は花を眺め、噴水を眺め、白帆のある日の當たつた海を眺め、一番先きの紫色の山々を眺めて叫んだ。

「お父さん、世界中にもつと綺麗な所がありますか」

父親は嬉しさうに微笑んで、何か答へようとするらしかつた。が、まだ何も言はぬ中にその子は大聲を擧げ、飛び上がつて、手を拍つて喜んだ。孔雀が不意にその見事な尾を擴げたからであつた。皆が鳥舍の方へ馳け寄つた。それで彼の可愛い問に對する答は聞くことが出來なかつた。

併し後になつて自分はつぎの樣に答へてもよからうと思つた。

『坊や、これは實に美しいが、世界には美しいものは澤山あるから、之よりも美しい庭が幾つもあるだらう。

『併し一番美しい庭はこの世には無い。それは西方淨土にある阿彌陀樣のお庭である。

『生きてゐる間に惡い事をしない者は誰れでも、死んでから、そのお庭に住むことが出來る。

『そこでは天の鳥の尊い孔雀がその尾を日輪の如くに擴げながら、七階「七菩提分の意か」五力の法を唱へる。

『そこには玉泉の池「七寶の池の意か」があつて、その中に名づけ様のない美しさの蓮華が咲いてゐる。その花からは絶えず虹色の光と、新しく生まれた諸佛の精靈とが升る。『水は蓮の蕾の間をさざめき流れながら、その花の中に宿る魂に無限の記憶と無限の幻想と四つの無限の感情とに就いて語る。

「そこには神と人との差別が無い。阿彌陀の榮光の前には神々も身を屈め、「無量壽光の御佛」といふ句を以て初まる頌歌を唱へねばならぬ。

『併し、天上の河の聲は幾千の人の和讃の樣に、「是れ未だ高しとせず、更に高きものあり。是れ現實に非ず、是れ平和に非ず」と歌つてゐる』

第五章　阿彌陀寺の比丘尼

一

お豐の夫は遠緣の者で、好いた同志で婿に來たのであるが、彼が領主に呼ばれて京へ出た時は、お豐は末の事など案じはしなかつた。唯だ悲しいばかりであつた。二人が一緒になつてから、斯うして離れて暮らすのは初めてであつた。然し父や母も一緒にゐるし、また、それとは人には愚か我が心にさへ明かしはすまいが、誰れよりも可愛い、いたいけな男子があつた。その上いつも用事の多い體であつて、家の事もせねばならぬし、絹や木綿の着料を織る仕事もあつた。

毎日定めの時刻に、お豐は出てゐる夫の爲めに、お馴染みの座敷へ、可愛い漆塗りの膳に何もかも調へた少量の食事（先祖の靈前や神棚に供へる樣な眞似事の食事[註]）を据えた。此食事は座敷の東側に供へられ、主人の座蒲團が其前に敷かれた。東の方に据えた譯は主

人が東の方へ旅立つたからである。食事を下げる前に、お豐はいつも小さい椀の蓋を取つて見た。それは漆塗りの蓋の內側に湯氣がついてゐるかどうか見るためで、出した吸ひ物の蓋の內側に湯氣がかかつてゐれば、出てゐる人が無事だといふからである。若し湯氣が見えなければ其人は死んでゐる、それは其人の靈魂が食物を求めて歸つて來た徵である、と云ふのである。お豐は每日每日漆塗りの蓋に湯氣の珠が厚くかかつてゐるのを見た。

註　斯うして愛する不在者の爲に供へる食事を『かげぜん』（影の盆の義）と云ふ。『膳』といふ語は小さい卓子の樣な脚のある漆塗りの盆に載せた食事を指すにも用ゐられる。それ故『影の御膳』といふ意味に英譯するが『かげぜん』の適譯であらう

かの幼兒はいつも側に居る喜びの種であつた。滿三歲で、神々でなければ本當には答へられぬ樣な問をかけるのが好きであつた　この兒が遊びたいと言へば、お豐は仕事を措いて相手をした。子供が休まうとすれば、お豐は面白い話をして聞かせたり、誰れも到底分からない樣な事柄に就いて子供の問ふがままに、可愛い敬虔な返答をしたりする。夕方佛壇や神棚に小さい燈明が上がると、まはらぬ舌に父親の無事を祈る言葉を敎へた。子供が寢つくと側に針仕事を持つて來て寢顏の愛らしさを見成つた。時によると夢を見てにつこ

りすることもある。すると觀音さまが子供と夢の中に遊んでゐるのだと心得て、世人の祈願の音を常住觀じ給ふ彼の乙女の菩薩に向つて口の中に經文を唱へた。

時には、晴天の續く頃、坊やを背に負つてダケヤマ（嶽山）に登ることもあつた。かうした遊山を坊やは大層喜んだ、面白いものを見せて貰へるばかりでなく、色々なものを聞かせて貰へるので。坂道は木立の中や森の中を拔け、草の生えた斜面や、形の面白い岩の側をまはつて往く。そこには胸に物語を祕めた花や、木の精を宿した樹木があつた。山鳩はコロッコロッと啼き、鳩はオワオ、オワオと鳴く。蟬はヂーヂーと啼いたりミンミンと啼いたり、カナカナと啼いてゐた。

大事に思ふ人の不在を待ち侘びる者は、往かれさへすれば、皆この『だけ山』と呼ぶお山へお詣りをする。これは市（松江）の何處からでも見える。又その頂上からは幾箇國も見晴らせる。頂上には大方人の丈ほどの石が垂直に立てられてゐて、その前とその上とに小石が積まれてある。その傍に神代のさる姫宮を祀つた小さな神社が建つてゐる。この姫宮が懷かしき人の歸りを茲の山の上に待ち焦れて、遂に石に化した。そこでこの處にお宮を建てたので、出てゐる人を案ずる者は今も此處に來てその無事に歸ることを祈願する。

そしてそこに積んである小石を一つ持つて歸る。案じた人が歸つた時は、山の上の石の積んであつた舊の場所に、その小石の外に今一つの小石を、お禮と記念との印として置いて來ることになつてゐる。

お豐と坊やとお詣りをして家に歸り着くまでには、いつも夕闇が靜かに四邊をこめた。道も遠い上に、往きも還りも、町を圍む水田の間を、小舟に乘つて渡らねばならず、隨分時のかかる事であつた。星や螢が道を照らすこともあり、月さへ上ることもあつた。するとお豐は小さい聲で月を詠じた出雲の童謠を坊やに歌つて聞かせるのが常であつた。

ののさん（或はお月さん）いくつ。
十三　ここのつ。[譯者註一]
それはまだ　若いよ、
わかいも[譯者註一]　道理。
赤[註]い色の帶と、
白い色の帶と、
腰にしやんと結んで、

馬にやる　いやいや。
牛にやる　いやいや。

註　派手な色の帯は子供だけが締めるので斯ういふ。
譯者註一　『十三ここのつ』は有りふれた『十三七つ』に比して口調も悪しく歌の感じも異様ながら、出雲では今も斯く歌つてゐる由。
譯者註二　原文のローマ綴をその儘に譯せば『若いえも道理』となるが、原文の『いえ』の二音は松江の方言の『い』の間のびしたのを、著者がその儘に音譯したものである、との落合貞三郎氏の説明を附記して置く。

藍色の夜の空には幾里も續く水田から、實に土より湧く聲と謂ふべき、聲高くも亦靜かに、泡立つ樣な合唱——啼き交はす蛙の聲——が立ちのぼる。お豐はそれを『メカユイ、メカユイ』『眼が痒ゆい、睡むくなつた』といつてゐるのだ、といつも坊やに言つて聞かせた。

さうしてゐる間は樂しい時であつた。

二

さうしてゐる中、三日の間に二度までも、永遠の神秘に屬する攝理によつて生死を司どる者が彼女の心を擊つた。初には幾度となく無事を祈つた優しき夫が已が許には歸られぬ、一切の形體の成り出でた元の塵に還つたと知らされた。その後間もなく坊やが、唐土の醫者も醒ますことの出來ぬ深き眠に就いたことを知つた。斯ういふ事實をお豊が覺つたのは電光によつて物の形が認められる樣な束の間であつた。この二つの電光の閃きの合間も、其から先きも、これぞ神々の慈悲なる一切無明の闇であつた。

その闇は過ぎて、お豊は記憶と呼ぶ仇に立ち向つた。他の者の前には、ありし日の如くに樂しく笑ましげな顏をしてゐたが、この記憶の前には堪へ得なかつた。疊の上に玩具を並べたり、小さい着物を擴げたりして、小さな聲で話しかけたり、無言で微笑んだりした。併し微笑の果てはいつも激しくわつと泣き伏しては、頭を疊にすりつけて、他愛もない問を神々にかけるのであつた

或る日のことあやしき慰めを思ひ立つた。それは世に『とりつぱなし』と呼ぶ、死んだ人の靈魂を呼びかへす事であつた。ほんの一分でもよいから、坊やを呼びかへす事は出來まいか。それは坊やの靈魂をなやますことにならうが、母親のために少時の苦痛は辛抱せぬことはあるまい。たしかにさうであらう。

「死んだ人を呼びかへすには、死靈を呼び出す呪文を知つてゐる坊樣か神主の許に往かなければならぬ。さうして故人の位牌をその人の許に持つて出ねばならぬ。

それから齋戒の式が行はれ、位牌の前に燈明を點じ燒香をなし、祈禱または經文を唱へ、花や米の供物をする。但しこの時の米は生でなくてはならぬ。

萬事整つた時に祭主は左手に弓の形をしたものを持ち、右手で手早く打ちながら、死んだ人の名を呼ぶ。其から大聲で『來たぞよ、來たぞよ、來たぞよ』と云ふ[註]。そして斯う叫んでゐる中に彼の聲音が段々に變はる。終には死んだ人の聲そつくりになる。その靈魂が彼に乘り移るからである。

註　自分の來た事を知らせようと幾度も案内するものの事を、出雲の諺で『とりつぱなしのような』とい

其から死んだ人が、口早に尋ねられることに答へるが、その間も『早く早く。歸つて來るのは辛いぞや、斯うして永くは居られぬ』と叫び續ける。そして答がすむと精靈は去つて往く。行者は氣が遠くなつて俯伏して了ふ。死んだ人を呼び戻すことは宜しくない。呼び戻されるとその人等の境遇は一段と辛くなる。冥府に歸ると前より低い所に落ちねばならぬ。

今日では斯の樣なお呪ひは法律で禁止されてゐる。昔はそれが慰めになつたものだ。併しこの禁制は良い掟て正當である。人心の中にある神性を侮蔑せんとする人もあるから」

そこで或る晩のこと、お豐も町外づれの淋しい小さなお寺に往き、子息の位牌の前に跪き、口寄せの呪文を聞いてゐた。やがて行者の唇から覺えのある樣な聲が聞こえた。誰れのよりも好きな聲であつたが、風の戰ぎの樣に微かで細かつた。

その細い聲はお豐に向つて言つた。

『母樣、早く聞いて下さい。路は暗く長いのでゆるゆるしては居られません』

お豊は慄きながら尋ねた。

『何故私は子供を亡くして悲しい思ひをしなければならないのですか。神々の思召しはどういふのでせうか』

すると共に答があつた。

『母樣、私の事をそんなに歎いて下さるな。私の死んだのは、母樣が死なないためです。年まはりが病氣のはやる悲しい年て、母樣が死ぬ事になつてゐたのが分かりました。それて、願[註]をかけて母樣の代りに死ぬことが出來たのです。

註 『身代り』といふのが宗敎的の用語である。

『母樣私の事を泣いて下さるな。死んだ者を悼むのは供養にはなりませぬ。冥府への道は淚の川を越えて往きます。母樣たちが歎くとその河の水が增して、精靈は通ることが出來ず、あちこちとさまよはねばなりませぬ。

『それゆゑ、お願ひですから、お母樣、泣かないで下さい。唯だ折ふし水を手向けて下さい』

三

その時からはお豊が泣いてゐることはなかつた。以前の通りにかひがひしく、娘としての孝養を盡くした

秋さり春來たつて、父親は新しく婿を迎へようと思つた。母親に向つて斯ういつた。

『内の娘にもまた男の子でも出來たら、それこそ、娘にも自分等一同にも、此上ない喜びであらう』

が、物の分かつた母親は答へた。

『娘は別に悲しんでは居ませぬ。苦勞も惡い事も少しも知らぬほんのねんねえになつて了ひました』

お豊が眞の苦痛を知らぬやうになつたのは事實であつた。極々小さな物を妙に好く樣になつてゐた。初には寢床が大き過ぎて來た。大方子供を亡くしたあとの空虚の感じからであらう。それからは日一日と他の物が皆大き過ぎる樣に思はれて來た。家も馴れた座敷も床も、そこらにある大きな花瓶も、終には膳椀までも。御飯も子供の使ふ樣な小さな椀か

ら、雛道具の樣な箸で、食べると言つてゐた。
斯うした事には親達は優しく娘の氣任せにして置いた。して又外の事には別に變つた注文もなかつた。老夫婦はいつも娘の事を談り合つた。たうとう女親が切り出した。
『うちの娘には餘所の人と一緒に居るのは辛からう。が、自分たちも寄る年で、その中娘を後に殘さねばなるまい。それで娘を尼にしたらば、先きの心配も入るまい。小さなお堂を建ててやつてもよいな』
翌日母親はお豐に尋ねた。
『お前尼さんになつて、小さな護摩壇や小さな佛樣のある小さい小さいお堂で暮らす氣はないかえ。私達はいつも近い所に居ますがね。若しその氣なら、お坊樣を賴んでお經を敎へて貰ふ樣に仕よう』
お豐はそれを望んだ。そして極小さな尼の衣を拵へるやうに賴んだ。が母は言つて聞かせた。
『外のものなら何でも小さく拵へさせて差支はないが、衣だけは大きいのを着なくては良い尼樣にはなれません。それがお釋迦樣の律ですよ』
それで漸くお豐は外の尼達と同じ衣を着る氣になつた。

四

兩親はお豊のために、阿彌陀寺といふ大きな寺のあつた境內に、一棟の庵寺、卽ち尼の寺を建てた。この庵寺も亦阿彌陀寺と呼んて、阿彌陀如來を本尊に、その他の佛樣をも招じた。至つて小さい護摩壇に玩具の樣な佛具を備へ、小さな經机には小さな經文を載せ、何れも小さな、衝立や鐘や掛軸があつた。お豊はここて兩親の歿後も永く暮らした。人々は彼女を阿彌陀寺の比丘尼と呼んだ。

門前から少し離れて、一體の地藏尊があつた。この地藏は子供の病氣を直すといふ變つた地藏てあつた。この地藏の前にはいつも小さな餅が上げてある。是は病氣な子供のために願をかけてゐる徵て、餅の數は子供の年齡を示してゐる。大抵は二つか三つて、稀には七つから十もあることがある。阿彌陀寺の比丘尼はこの地藏等の番をして、香を絕やさず、お寺の庭に唉いた花を上げた。庵寺の裏に小さな花園があつたのてある。

每日朝の間の托鉢を了へて歸ると、小さい機臺の前に坐つて布を織るのが例てあつた。物の役に立たぬほど狹いものてあつたが、彼女の手織りは、身の上を知つてゐた方々の店

屋に買ひ取られた。彼等は小さい茶碗だの小さい花瓶だの、庭に置く樣に飾つた盆栽などを贈つた

彼女の何よりの娯樂は子供等を相手にすることで、それに不自由はなかつた。日本の子供の幼少時代は大抵社寺の境内で過ごされる。それで阿彌陀寺の庭で樂しく遊び暮らした子供も數多かつた。同じ通に住む母親等は子供等をそこで遊ばせるのが好きであつた。唯だ比丘尼さんを莫迦にせぬ樣にと注意した。『時によると變な事をしても、それは一度可愛い坊やを有つてゐたのを亡くして、その悲みが母親の胸に耐へられなくなつたのです。それゆゑ尼さんには本當に大人しく、失禮の無い樣にしなくてはいけないよ』

子供等は皆大人しくはあつたが、崇敬の意味で敬意を表したとは謂へなかつた。彼等はよく心得てゐて、そんな堅くるしい事はしなかつた。いつも彼女をお比丘尼さんと呼んで丁寧にお辭儀をしたが、それ以外には自分等の仲間の樣に隔てなく遇（あし）らつた。彼等は彼女と遊びをし、彼女は子供に可愛い茶碗でお茶を出したり、豆の樣に小さな餅を澤山に拵へたり、子供等の人形の着物にとて、綿布や絹布を織つてやつたりした。こんな風で彼女は子供等に肉親の姉の樣になつた

子供等は、毎日毎日彼女と遊んでゐる中に、もうさうして遊んでゐられないほど成人し

て、お寺の庭に來ないで浮世の仕事をする樣になり、やがては父となり母となつて、自分等の子供を遊びによこすやうになつた。さういふ子供等が又親達と同じ樣にお比丘尼さんを好くやうになつた。斯うして比丘尼はお寺の建つた時の事を覺えてゐる人達の子や孫や曾孫達と遊ぶまで長命した。

人々も彼女が不自由をしないやうに心懸けた。いつでも自分一人で入るだけより多くの寄進があつた。それで彼女は子供達に大方仕たいだけよくしてやつたり、小さな生物などに有り餘るほど餌をやることが出來た。小鳥がお堂の中に巢を作つて、彼女の手から餌を食べた。そして佛樣の頭などに止まらぬやうになつた。

この比丘尼の葬式があつてから、幾月か經つて、大勢の子供が自分の家にやつて來た。九歲ばかりの少女が一同に代つてつぎの樣に述べた。

『をぢさん、私達は亡くなつたお比丘尼さんの事でお願ひに參りました。お比丘尼さんのお墓に大變大きなお石塔が立ちました。大さう立派なお石塔ですの。けれど、私達は小さい小さいお石塔を今一つ立てたいと思ひます。生きてゐた時に極小さいお墓が好きだとよく言つて居られましたから。石屋さんがお金さへ出せばお石塔をこさへて大變綺麗にし

て呉れると言つてゐます。それてをぢさんも何程かお出し下さるかと思ひました』
『出しますとも。だがこれからは遊ぶ所がないてせう』と自分が言つた。
娘は笑ひながら答へた。
『やつぱり阿彌陀様のお庭で遊びますよ。お比丘尼さんはそこに埋まつてゐます。私達の遊んてゐるのを聞いて喜ぶてせう』

第六章　戰後雜感

一

一八九五年（明治二十八年）五月　兵庫にて

今朝しも兵庫は、言ひ知れぬ光の澄み渡れる壯麗に浸つてゐる。霞立つ春の光は透かしみる遠景にまぼろしなどの樣な趣を與へる。形はくつきりとしてゐるが、生地の色ならぬ幽けき色調によつて殆ど理想化されてゐる。町の後ろの高き山々は、唯だ青と言はんよりは青の精と見ゆる雲なき蒼穹に屹立してゐる。

甍の屋根の紺鼠に續く斜面の上高く、異樣な形せるものの壯大なる搖らぎと閃きとがある。自分には必らずしも初めて見る光景ではないが、いつ見ても愉快である。大きなけばけばしい紙の魚が高い竹竿に繋がれ、到る處に浮いてゐて、生きてゐる樣に見えもし動きもする。多數は長さ五尺から十五尺であるが、其處此處に大きな魚の尾に結びつけられた

一尺足らずの小型のがある。中には四五尾の魚がその大きさに比例した高さに着いてゐるのもある、大きいのをいつも一番上にして。この魚の色も形も頗る巧に出來てゐることは、初めて見る外國人には必らず驚歎させる。吊つてゐる絲は口の中に着いてゐて、開いた口から入る風が體を實物の通りに脹らすばかりか、それを絶えずゆらゆらさせる。昇つたり降つたり、向きをかへたり、體をひねつたり、宛然生きた魚の樣に、尾は棚びき鰭はひらひらするさま、何の申し分もない。隣の家の庭には立派なのが二つ見える。一つは腹が樺色で背が藍鼠、今一つは全身銀色で、双つとも大きな妙な眼をしてゐる、それが風に泳ぐ時の戰ぎは黍畠を渡る風の音の通りである。少し先きの方には今一つ大きなのがあつて、其には小さい眞紅な男の子が背の處に取り附いてゐる。赤い男の子は、赤ん坊の中から熊と角力を取つたり怪鳥を捕る羂をかけたりした、日本國中に生まれた子供の中で一番強い金時である。言ふまでもなく、この紙の鯉は、五月の男子出生の祝の季節だけ揭げられるので、屋根の上にそれがあるのは男の子の生まれた事を示し、その子が、實物のコヒ、即ち大きな日本の鯉が瀧と落ちる早瀬を川上に昇る如くに、萬難を排して出世するやうに、との親達の希望の象徴である。

日本の西南地方ではこの鯉を見るのは稀である。その代りに幟と呼ぶ非常に細長い綿布

の旗が帆の様に竪長に、桁や乳て竹竿に着いてゐるのを見る。其には激流中の鯉や、鬼共の征服者なる鍾馗や、松の木や鶴やなどの何れも縁起のよい圖が彩色して描かれてゐるのである。

二

今日本建國二千五百五十五年の此輝かしき春に當つて、これらの鯉は單に親達の希望を象徵するのみでなく、更に、大なる戰勝によつて再生した國民の抱負を象徵すると觀てよからう。帝國の軍事的復興、新日本の發祥は支那の征服に初まる。戰爭は終つた、未來は幾分曇つて居らぬでもないが、好望を信してゐる樣に思はれる。更に高大な永續する偉業を爲さんがために、障碍は如何に暗澹たるものであらうとも、日本は恐怖も疑惑も有たぬ。恐らく將來の危險は此大なる自負心に存するのかも知れぬ。是は今回の戰爭によつて生まれ出てた新しい感情では無い。これは連勝の歴史がいつも强め來たつた民族的感情である。宣戰の初から終局の勝利に就いては些の疑も抱かなかつた。國民全體に行き亙つた深い熱誠はあつたが、外に表はれた感慨の兆候はなかつた。或る者は直に戰勝の歴史を書き初め

た。寫眞石版や木版の挿畫の入つた週刊月刊の分冊として購讀者に頒布せられた此種の歷史が、外國の觀戰者などが戰爭の終局について豫想を試みるにも至らぬ前から、全國に賣れ行いた。初から終まで日本國民は自國の實力と支那の無力とを信じて居た。玩具製造者は忽ち、遁げる支那兵や、日本の騎兵に斬り倒されてゐるのや、捕虜となつて豚尾で繋ぎ合はされてゐるのや、名高い日本の將軍の前に叩頭して慈悲を乞うてゐる支那兵などを現はした、無數の巧妙な新案品を賣り出した。鎧を着た舊式の武者人形などは跡を絕つて、土や木や紙や絹で作つた日本の騎兵步兵砲兵の人形、要塞や砲臺の模型、軍艦の模型などが出て來た。熊本[譯者註]の旅團が旅順の堅壘を襲擊した光景を器用な機械仕掛にした玩具があるかと思へば、今一つ同じく巧妙な松島艦と支那の鋼鐵艦幾隻かとの海戰を繰りかへすのもあつた。斯ういふ玩具が、コルクの彈丸をポンポン彈き飛ばす空氣銃や、何萬といふ玩具の劍や數知れぬ小さな喇叭などと一緒に賣り物に出てゐる。子供等がそれをしきりなしに吹いてゐるのを聽くと、ニュー・オリアンズの或る除夜のブリキの喇叭の騷音を想ひ起こさせられる。捷報の到る每に、新しい色刷の繪が幾つとなく製作されて賣り出される。それらは粗末な安つぽい手際で、大抵は畫家の想像をその儘に描いたものであるが、民衆の自負心を喚起するには適してゐた。將棋の駒の一つ一つが日本か支那の將校兵士になつて

ゐるのも出來た。

譯者註　旅順の攻撃に當つたのは熊本第六師團に屬する第十二旅團で、時の陸軍少將長谷川好道の帥ゐた小倉旅團であつた、と岡田哲藏氏の修正を附記する。著者が熊本の旅團と呼んでゐるのは第五高等學校の教師として熊本の地に特に親しみを有つてゐたため、直に然う思ひ込んだのであらう。

一方で芝居はもつと完全に戰爭を出し物にして居た。戰役中の挿話が一つ殘らず舞臺に登されたと云つても過言ではない。役者達は場面や背景の研究に戰線を見舞ひ、人工の吹雪を利用して滿洲に於ける軍隊の艱苦を寫實的に演出しようとした。あらゆる武勇の事蹟は報告の來るや否や芝居に仕組まれた。喇叭手白[註]神源次郎の最期、城壁を乘り越えて戰友のために城門を開いた原田重吉の剛勇、三百の歩兵に對抗した十四騎の武勇、武器を持たぬ人夫等の支那の大隊に對する奇襲、さういつた樣な事實やその他の事蹟が幾百の劇場で演出せられた。忠君愛國の語句を書き表はした提灯を門並に掲げて、一つには帝國軍隊の快捷を祝し、一つには汽車に乘つて戰地に赴く出征兵士の眼を喜ばせた。軍隊輸送列車の絶えず通過する神戸では、斯ういふ提灯を掲げることが毎晩々々幾週間も續いた。各町内の住民は更に醵金して旗を掲げ凱旋門を作つた。

註　成歡の戰に白神源次郎と呼ぶ日本の喇叭手が「進め」の信號を吹けと命ぜられた。彼がその喇叭を一度吹き鳴らした時、流れ彈丸が肺を貫いて彼を倒した。戰友は彼が重傷を被つたのを見てその喇叭を取りたげようとした。彼は却つてこれを奪ひかへして唇にあて、力の限り今一度進軍喇叭を吹いて、パッタリ倒れて死んだ。今日本中の軍人學生に謳はれてゐる彼を題とした軍歌の前半を試みに附ける。（上前記して彼の吹奏の喇叭事の軍歌を、昔の英吉利と蘇格蘭との戰鬪の間に生まれた俗謠の調などの様な口調に、巧みに翻案したものを紹介してゐる。譯した歌は「白神源次郎」と題し、「日本の軍歌、喇叭の響」に載ひて」と註して、最も普通なバラッドの四行を一節としたもの九節にまとまつてゐる。今之を更に和譯するのは詮なきことゆゑ、單に原歌の全文を「是亦閑田宿隨筆」へより一讀し、既に忘られんとするこの喇叭の記憶を新たにするに止める。――（著者附記）

喇叭手の最後

渡るにやすき安城の　　名はいたづらのものなるか
湧き立ちかへるくれなゐの　　血汐の外に道もなく
先鋒たりし我軍の　　苦戰のほどぞ知られける。

この時一人の喇叭手は　　取り佩く太刀の束の間も

進め、進めと吹きしきる　進軍喇叭のすさまじさ
その音忽ち打ち絶えて　再びかすかに聞こえけり。

打ち絶えたりしは何故ぞ　かすかになりしは何故ぞ
打ち絶えたりしその時は　彈丸のんどを貫けり
かすかになりしその時は　熱血氣管に溢れたり。

彈丸のんどを貫けど　熱血氣管に溢るれど
喇叭放さず握りつめ　左手に杖つく村田銃
玉とその身は碎くとも　靈魂天地かけめぐり

なほ敵軍をや破るらん　あな勇ましの喇叭手よ
雲山萬里をかけへだつ　四千餘萬の同胞も
君が喇叭の響にぞ　進むは今と勇むなる。

この外にも戰爭の光輝はこの國の種々の重要な工業によつて、今少し永續する方法で表

彰せられた。勝利や獻身的武勇の事蹟は、封筒や便箋の新しい圖案は言ふに及ばず、燒物や金物や、絹織物によつて記念せられた。絹の羽織[註一]の裏に、女子の縮緬[註二]の頭巾に、帶の刺繡に、長襦袢や子供の晴着の友禪模樣に描出されてゐる。更紗や手拭地の樣な安い形附物は言ふまでもない。種々の漆器に、彫つた器の横や蓋に、煙草入に、カフスボタンに、髮に挿すピンや笄の意匠に、插櫛や爪楊枝にまでも描出されてゐる。小さい箱に容れた楊枝の一本一本に顯微鏡で見る樣な小文字で、戰爭に因んだ和歌が一首づつ彫りつけてある。斯うして媾和の時まで、少くとも媾和談判に來た支那全權を殺さうとした壯士[註三]の暴擧のあつた時まで、萬事は國民の願望し期待した通りになつたのであつた

註一　ハオリは男も女も着る一種の上衣。裏の模樣には賞讚の辭もない程美しいのがある。

註二　チリメンは絹のクレープで、品質に差等がある。中には値も高く丈夫なのもある。

註三　壯士は現代日本の厄介物の一つである。彼等は大抵書生上がりで、無頼の張番者として雇はれて飯を食ふ徒である。政治家が選擧の折などに强制運動者として、又は反對黨の壯士に對抗して彼等を用ひる。私人が護身の爲めに壯士を雇ふこともある。近年日本の選擧騷動に於て、又度々の名士の襲擊に於ては大抵壯士連が主となつてゐる。ロシヤに虛無主義を胚胎せしめた原因には日本の現代の壯士を作り出した原因と幾多類似の點がある。

併し、媾和條件が發表せられると、日本を威嚇するために、フランス、ドイツ、の援助を得て、ロシャが干渉した。この三國の提携に對しては何の抵抗もなかつた。日本は柔術を用ゐ、意想外の讓歩によつて期待の裏をかいた。日本はその兵力について不安を感ずる時期を疾に經過してゐた。日本の餘力は恐らく從來認められてゐたよりも勝さつてゐる。且つ又、二萬六千の學校を有する教育制度は絕大なる教練の機關である。國土の中に於ては如何なる强國とも對抗出來る。唯だ海軍だけが弱點であつて、それに就いては十分承知してゐた。小さい輕裝巡洋艦から成る艦隊で操縱にはその人を得てゐた。その司令長官は二度の海戰で一隻を失ふことなく支那の艦隊を全滅させた。併し歐洲の三大强國の聯合海軍に向ふだけの噸數がない。その上日本陸軍の精銳は出征中である。干渉の最好機會が巧みに擇ばれたのだ、さうして恐らく干渉以上の事を企ててゐたらしい。大きなロシャの戰鬪艦幾隻は戰鬪準備をしてゐた、その戰鬪艦だけでも日本の艦隊を壓倒したらう、愈〻勝つまでには多大の犧牲を拂ふことにはならうが。併しロシャの行動は、英國が日本に對する同情を不氣味にも宣言したので、不意に抑へられた。三國で集める裝甲艦を短い海戰で壓伏し得るほどの艦隊を、英國は數週の中にアジャの海に回航することが出來るのであつた。この時ロシャの巡洋艦から唯だ一發でも發砲しようものなら、それこそ全世界を戰爭

の渦中に投じて了つたかも知れぬ。

日本の海軍部内には三國を敵として戰はんとする熱烈な希望もあつた。さうなつた曉には偉い戰爭であつたらう。日本の司令官には夢にも降服するなどといふ者は無く、日本の軍艦に艦旗を降ろす樣な事は決してないから。

陸軍も亦等しく戰爭を望んでゐた。從つて國民を抑制するには政府の全力を要した。自由の言論は禁遏せられ、新聞紙は嚴に緘默せしめられ、最に要求した償金の額を相當に增加する代償として、遼東半島を支那に還附する事によつて、平和は克復せられた。日本の國力發展のこの時期に當つて、國費を竭くしてロシヤと戰ふことは工業商業及び經濟上最も慘澹たる結果を生ずるに決まつてゐた。併し國民の自尊心は深く傷けられ、國民は今なほ政府を怨むことを禁じ得ない。

五月十五日　兵庫にて

三

支那から歸つた松島艦が和樂園の前に碇泊してゐる。偉大なる勳功を顯はしたに似ず巨

艦では無い。が併し、青い水面から隆起する鋼鐵城塞として澄んだ光の中に横はつてゐる有様はたしかに恐ろしく見える。この軍艦を觀覧する許可が出たので人々は大喜びて、お祭にでも往くやうに皆々晴衣を着飾つてゐる。自分もその連中と同行することを許された。港内の船といふ船が皆見物人のために雇はれて來てゐる様に見える。それほどにも自分等が着いた時この裝甲艦の周圍に群れ寄つた人數が多かつた。これ程多數の見物人が一時に艦に乘ることは出來ない。幾百人宛かが交代に乘つては降りる間待たなければならなかつた。併し冷しい海の風の中で待つのは不愉快ではない。人々の喜んでゐる光景も見てゐて惡くはない。順番が巡つて來る時に押し寄せる勢と言つたら無い。押し合ひへしあひ、しがみつく有様と言つたら、婦人が二人まで海に落ちて、水兵に引き上げられた。そして松島艦の水兵を命の親だと言へると思へば落ちても恨みはないと言つてゐる。實の處船頭連が幾人となくゐたので、溺死するなんて事は仕ようとしたつて出來はしなかつた。

國民が松島艦の乘組員に負ふ所は、二人の若い婦人の生命よりも更に重要なものがある。それで人々は當然愛を以て之に報いんとしてゐる、――幾千の人がしたいと思つてゐる金品の贈與は軍紀上許されてゐないので。士官も兵士も疲れてゐるに相違ないが、混雜も質問も、嬉しい程愛想よく辛抱してくれる。巨大な三十珊砲とその裝塡裝置から轉回機關に

至るまで、速射砲、水雷とその發射管、探照電燈とその構造など、何もかも見せて細かに說明してくれる。自分は外國人として特別の許可を要するにも拘らず、上も下も悉く案內してく〻、艦長室に在る兩陛下のお寫眞までも一目見ることを許され、黃緣江沖の大海戰の壯快な物語を聞かされる。斯うしてこの港の頭の禿げた老人も婦人も嬰兒も今日を晴れと松島艦を我が物にしてゐる。士官も候補生も、水兵も精一杯もてなしてゐる。お爺さん達に話してゐるのもあり、子供等に劍の柄を弄らせたり、兩手を擧げて『帝國萬歲』を唱へることを敎へてゐるのもある。疲れた母親たちのためには莚が布かれて、彼等は甲板の間の片陰に坐つてゐる。

是等の甲板は僅二三箇月前には勇士の血に染みて居たのだ。所々に黑い斑點が、磨石で擦つてもまだ落ちずに殘つてゐる。人々はそれを心よりの畏敬を以て視る。この旗艦松島は巨彈を受くること二回、裝甲の無い部分は小彈の亂射によつて穿孔されてゐる。艦は接戰の衝に當つて乘組員の約半數を喪つた。排水量は四千二百八十噸に過ぎない。而も直面した敵は支那の鋼鐵艦二隻で各七千四百噸であつた。外面松島の裝甲は、破碎された鋼鐵板は張り替へられて、少しも深い彈痕を示してゐぬ。併し案內者は甲板や砲塔を支へる鋼鐵檣や煙突などの數知れぬ修復の跡や、露砲塔の厚さ一呎の鋼鐵板に星形の龜裂を殘した

恐ろしい彈痕を誇り顔に指し示す。彼は又、下に降りて、艦を貫通した三十半珊の彈丸の通路を示した。彼は曰ふ『こいつにやられた時には震動で人間がこの位（と甲板から二尺程の處に手をやつて）撥ね上げられた。同時にあたりが眞暗になつて、一寸先きも見えなかつた。その中に右舷前方の大砲が一門粉碎されて、その係りの兵士は皆殺された事が分かつた。卽死四十名負傷多數で、その部分に居たものは一人も助からなかつた。搬出してあつた火藥が爆發したので甲板に火災が起こつた。そこで戰鬪を續けながら火を消し止めるために働かなければならぬ。顏や手の皮を吹き飛ばされた負傷者までが痛さを忘れて働き、死にかけてゐる人までが水を運ぶ手傳ひをした。併し味方の巨砲から更に一發を食はせて鎭遠號を沈默させてやりましたよ。支那の方には西洋人の砲術長が手傳つたのです。西洋の砲術長を向うにまはすのでなかつたら、餘り樂に勝て過ぎますさあ』彼の吐く所は事實本音である。この日本晴れの春の日、松島艦の乘組員に取つて何よりも喜ばしい事は、直に戰鬪準備を開始し、恰も沖に碇泊して居たロシヤの大裝甲巡洋艦を襲撃せよとの命令てあつたらう。

四

六月九日　神戸にて

去年下ノ關から神戸まで旅行する間に、幾つかの聯隊が、何れも白い軍服を着て、出征の途に上るのを見た。彼等兵士は自分が敎へた學生等と大層同じ様に見える。（事實幾千かは學校を出たばかりてある）それて斯ういふ若い者を出征させるのは可哀さうだと感ぜずには居られなかつた。子供らしい顏は如何にも淡白で快活て、人生の大なる悲哀などは一向知らぬげに見える。

同行の英國人て陣營て生活して來たのが言ふには『何も心配することは無い。皆立派にやつてのけるよ』『それは分かつてゐるさ。然し暑さ寒さや滿洲の冬を案じて居るのだ。その方が支那人の鐵砲よりは恐ろしいからね』[註]と自分は答へた。

註　實際戰爭で死んだ日本人の總數は、牙山の戰鬪から澎湖諸島の占領に至るまで僅に七百三十七人である。然し他の原因で死んだ者は、臺灣の占領中六月八日といふ最近までに、三千百四十人を算する。その中コレラによる者だけが千六百二人である。是は兎に角、神戸クロニクル紙に發表された公報の數字である。

喇叭の響、日沒後に點呼したり、消燈の時刻を報じたりする喇叭の響は、幾年か日本の或る師團の所在地に住む自分の夏の夕の娯樂の一つてあつた。然し戰爭の期間は最後の一節の引き伸ばした訴ふるが如き音が以前とは異つた感動を與へた。節まはしが特殊なものだとは思はない。が、折々特別な感情をこめて吹奏せられるのだとよく思つた。全一師團の喇叭から一齊に星明かりに向つて發せられる時、百千に交じるその音色に忘られ難いあはれさがある。その都度自分は眼に見えぬ喇叭手が年若く力猛き者どもを久遠の安息の暗き寂寞に招くのを夢想したものてある。

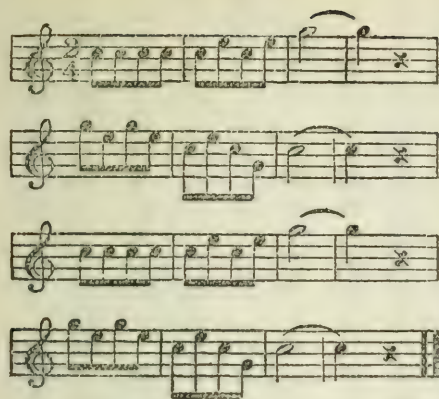
今日はどこかの聯隊が歸るのを見に往つた。神戸驛から『楠公さん』（楠正成の英靈を祀つた大きな社）まて、彼等の通る往來の上に綠門が出來てゐた。市民は軍人等の凱旋後最初の食事を饗するの光榮に對して六千圓を寄附した。是までも幾大隊か同樣に親切な歡迎を受けた。彼等が食事をした神社の庭の幄舍は旗や綠葉を以て飾られた。一同に對して寄贈品があつた。菓子や紙卷煙草や、尙武の歌を染

め拔いた手拭など。神社の門の前には本営に立派な凱旋門が立つて、前後兩面には歡迎の辭句が金文字で記され、頂上には地球の上に翼を擴げた鷹(註)が登つてゐた。

註　一八九四年九月十七日の大海戰の折、日本の巡洋艦高千穗の檣頭に一羽の鷹が止まつて、おとなしく捕まつて飼はれてゐた。艦内一同の愛撫を受けて後この瑞鳥は、天皇陛下に獻上せられた。鷹狩は日本の武家の間に盛んに行はれた遊山であつて、鷹は見事に馴らされたものであつた。不、今後は以前にも増して鷹が勝利の徵となりさうである。

自分は最初萬右衛門を連れて神社に遠からぬ停車場の前に待つて居た。列車が着いて、番兵が見物人に歩廊を立ち去らせた。外の街路では、巡査等は群集を制し、一般の通行を止めた。數分の後には大隊また大隊が、煉瓦のアーチになつた出口から、きちんと縱隊になつて行進して來た、卷煙草を燻らし乍ら少し跛を曳いて歩く半白の將校を先頭に立てて。群集は自分等の周圍に密集して來たが、喝采もしなければ談話すらもしない。通過する軍隊の歩調を取つた跫音の外にこの靜寂を破るものはない。是等が曩に出征する時に見た同じ兵士だとは思へなかつた。肩章の數字だけがその事を示した。顏は日に燒けて獰猛に見

えた。濃い髯を生やしたのも少くなかつた。紺の冬の軍服は磨れたり切れたり、靴はえたいの知れぬ恰好になつてゐた。然し、勢のよい大胯な足取りは鍊へられた兵士の足取りであつた。最早若者ではなくて、世界中のどんな兵隊にでも向ふことの出來る荒武者であつた。殺戮も襲撃もやつて來た者共、筆紙に盡くせない樣な苦勞を重ねて來た者共であつた。その顏形には喜悅も得意もない。鋭敏なその眼は歡迎の旗も裝飾も、地球を翼の陰にしてゐる武運長久の鷹を戴いた凱旋門をすらも見ない。恐らくは彼等の眼が餘りに屢ゝ人をして沈鬱ならしむる光景を目擊したためであらう。唯だ一人通りながら微笑したものがあつた。が自分は、子供の折アフリカから歸る兵隊を見てゐた時、一人のズアーヴ兵(譯者註)の顏に表はれた、刺す樣な嘲侮の微笑を想ひ起こした。見物人の中には、斯くまでに變化した理由を感じて、眼に見えて感激してゐる者も多かつた。兎にも角にも、彼等は前よりも勝れた兵士となつてゐる。而して歡迎され、慰安を與へられ、贈物を受け、人々の深く溫かい愛を受け、今後は馴れた舊の兵營に落ち附くことになつてゐる。

譯者註　ズアーヴ兵は最初(一八三〇年)佛領アルヂェリアに於て募集した土民の輕步兵で、最初はフランス本國の兵士と同一中隊に編成せられてゐたが後には別個の中隊をなして同一聯隊に屬する樣になつた。

一八四〇年以後は全然本國の兵士を以て編成することになつたが、服裝だけは依然土民服を用ゐてズアーヴの名を存して居た。一八五〇年生れの著者が（多分、佛國に於て敎育せられた）少年時代に見たといふのは、最早土民兵でなかつたに相違ない。

自分は萬右衛門に話した。『今夜彼等は大阪なり、名古屋なりに着く。彼等は喇叭の響を聞いて、歸らぬ戰友を偲ぶであらう』

老人は眞劍になつて答へた。『西洋の方は死人はもう歸らないと思ふでせうが、私共にはさうは思へません。日本人は死んだつて歸らないことはないのです。歸る途を知らぬ者はありません。支那から、朝鮮から、海の底から、死んだ人は皆歸つて來ました、え〻みんな。私共と一緒に居るのです。日の暮れる度に自分等を呼び戻した喇叭を聞きに集まり

ます。あの人達は天子様の軍隊がロシヤに向つて召集されるその時にも、亦喇叭の聲を聞くことでせう』

第七章　お　春

お春は大方は家庭で人となつた、世にも稀な優しい型の婦人を作り上げる舊式の教育によつて。この家庭の教育は、日本でなくては養はれない樣な、素直な心と自然に優美な擧止と從順と忠實な性質とを養つた。斯うして作り上げられた德性は、餘りに優しく美はしくて、昔の日本の社會以外には向かない。新しい社會のずつと激しい生活には（今尙ほその中に殘存しては居るが）最も賢明な準備ではなかつた。溫良な娘といふ者は全然良人の意の儘になるといふ條件に副ふ樣に躾けられたものである。嫉妬や悲哀や憤怒は、よしこの三つを皆共に禁じ得ない樣にする事情の下にあつても、決して表はさぬ樣に敎へられた。唯々優しさ一つを以て良人の不行跡を改めさせる樣にすることを期待せられた。一言で云へば、殆ど人間以上であることを、少くも外觀上完全なる無我の理想を實現することを要望せられてゐた。これを溫良な娘は、同じ身分で、心遣ひも細やかに、女の心持ちを察して、傷めることをしない夫に對しては完全に仕果たしたのである。

お春は夫よりもずつと良い家柄に生まれた。夫には彼女の心根が本當には分からなかつた位で、少し過ぎてゐたのであつた、若い時に夫婦になつて、初めは貧しかつたのが、夫が商賣の才があつたので、追々と裕福になつた。が、お春は暮らしの困つてゐた時の方が、夫が自分を深く愛してくれた樣に思つた。そして女の考は斯ういふ事について滅多に違はないものである。

お春は今も夫の着物を縫ひ、夫はその手際を賞めてゐた。何くれとなく傅づいて、着物を着るにも脫ぐにも世話をし、綺麗な家の中の何から何まで氣持ちよい樣にした。朝用向きで出掛ける時には愛想よく見送りをし、歸つた時には喜んで迎へた。友人が來れば落なくもてなし、家事をよくもと思ふほど經濟に切りまはした。而して金のかかる事など何一つ求めない。又實際言ひ出すことは入らなかつた。夫はいつも物惜しみせず、妻に派手な衣服を着せ、己が翅に身を飾る美しい銀色の蛾か何ぞの樣にして、芝居やその他の遊山に連れて往くのが好きであつた。春には櫻の花で名高い、夏の夜は螢火の飛び交ふので、秋はまた楓の紅葉で名高い、それぞれの行樂の場所へと、お春は夫に連れられて往つた。或る時は松の木立が舞妓の樣に搖らぐと見える舞子の濱に打連れて一日を暮らし、或る時は淸水の古い古い亭に半日を過ごした。そこでは何もかも五百年前の夢と見える、そこに

は高い鬱蒼たる樹木の陰があり、洞窟から迸る清冽な水の歌があり、古風に靜かに吹き鳴らされる見えざる笛の訴ふるが如き音色がいつも聞こえる。恰も落日の上で金色の光が藍色に交じる樣に、平和と悲哀とを交じへた楚々として人に迫る音色である。

斯うした物見遊山の外には、お春は滅多に出ることはなかつた。彼女の親兄弟も夫の身内も、他國に遠く離れて居たので、別に往く所とてもなかつた。彼女は家に居るのが好きであつた、床の間や佛壇などに供へる花を生けたり、座敷を飾つたり、泉水の馴れた錦魚に餌を遣つたりして。錦魚はお春が來るのを見ると頭を上げてやつて來る。

まだ子供がなくて今まで知らなかつた喜びや悲みを味はふ事もなかつた。それで彼女は丸髷に結つてゐても極若い娘の樣であつた。して又子供の樣に單純であつたが、細かしい事をしてのける手並には夫も常々感服して、大きな仕事に就いても度々彼女の智慧を藉りる位であつた。さういふ時には大方女の心の方がその美しい頭よりは彼の爲めに良い判斷をしたのであらう。五年の間は彼女は十分樂しく暮らした。その間夫は日本の若い商人として、自分より天性の勝れた妻に對して、これ以上にとは望めぬ程に、思ひ遣りのある盡くし方をした。

その時彼の態度が急に變つた。それが餘りに急激なので、その理由は子の無い妻が氣遣

はなければならぬ様なものではないと慥に感じた。實際の原因を悟ることが出來なかつたので、何か自分の盡くし方が足りなかつたためであると思はうとして、良心に問うて見たが効がなかつた。それてどうかして夫の氣に入らうと力の及ぶ限り努めた。然し夫は少しも感じなかつた。別に荒い言葉などは使はないが、默つてゐる陰には言ひたいのを抑へてゐるらしく思はれた。身分のよい日本人は妻に向つて口て荒い事をいふことは滅多にない。それは野鄙な粗暴な事と考へられてゐる。氣の荒くない教育のある夫は妻の小言にすらも優しい言葉て答へる。日本の作法によれば、一遍の禮儀からでも、男らしい男はさういふ態度を取らなければならぬ。又これが唯一の安全な態度である。嗜みのある敏感な婦人はおめおめと粗暴な扱ひに服してはゐない。氣丈な女は、夫が何か腹立ちまぎれに言つた事のために自害もし兼ねない。そんな自殺をされると夫に取つては一生の名折れてある。所が口て言ふよりもつと遠まはしな、もつと安全な虐め方がある。例へば嫉妬を起こさせる様な餘所々々しさや無頓着てある。日本の妻はどんな事があつても嫉妬を表はさぬ様に躾けられて來た。が、この感情は如何なる訓練よりも古い。愛と共に生じ、愛の存する限り存するてあらう。何の感じもない様な顔をしてゐても、日本の妻女は西洋の妻女と同じ感情を有つてゐる。恰も華美を盡くした夜會の客をもてなす間にも、役目が濟んで獨り苦衷

をやる時の來るのを心に祈り求むる、さうした西洋の妻女をその儘の感情を持つてゐる。

お春には嫉妬すべき原因があつたが、餘りに子供の樣な心持ちで直ぐには其原因を推察しなかつた。召使たちもそれを覺らせるのを餘りに氣の毒に思つた。夫は以前、家に居ても外へ出ても、晩にはいつも彼女と一緒に過ごすのが例であつた。が、今は毎晩一人で出て往つた。初めての時は彼女に何か商用上の口實を言ひ置いたが、後には何の斷わりもせず、いつ歸る積りだとも言はなくなつた。此頃は無言の裏に彼女を虐待した。夫は今までとは變つて來た。『魔がさした樣に』と召使共は言つてゐた。事實彼は巧みにわなにかけられたのである。或る藝者のかけた一言が彼の意志を鈍らせ、一度の笑顏が彼の眼を眩ましたのであつた。其藝者といふのは彼の妻よりは遙かに不器量な女であつたが、やくざ男を綾なして破滅をさせては振り棄てる最後の際まで、いや引き締まる手管の網を張る事には至極老練な者であつた。お春はさうと知る由もない。夫の解せぬ振る舞ひが度重なつて來るまでは、徒事(ただごと)でないとすらも思はなかつた。其時とても夫の金の行衞が分からぬのに氣づいただけであつた。毎晩何處に往つて居るか夫は一度も知らせた事がなかつた。自分の心持ちを口に出して言ふ代りに、お春は夫に對して殊更優しく、もつと分かつた夫なら何もかも察す彼女は嫉妬がましく思はれはせぬかと、それを聞かうとはしなかつた。

る様に過らつた。併し彼は商賣の事以外には頭の鈍い男であつた。彼は相變はらず晩に家を空け、良心が鈍るにつれて歸りが段々と遲くなつた。お春は妻たる者は夜いつも起きてゐて主人の歸りを待つべき事を敎へられてゐた。それが爲めに彼女は神經過敏になり、睡眠不足に伴なふ發熱の氣味やら、召使たちを定刻に臥せらせて後思ひに沈みながら獨り待つ間の淋しさに惱んだ。唯だ一度夫が大變遲く歸つた時、『こんなに遲くまで起きて居らせて濟まなかつた。これからこんなに待たないてくれ』と言つた。すると彼女は夫が自分のために本當に心を痛めたかと氣遣つて、氣持ちよく笑つて『いゝえ、ねむくはありませんん。疲れはしませんよ。どうぞお氣に懸けないて』と言つた。そこで彼はその上氣にかけなかつた、——妻がさう言つたのを良い事にして。間もなく彼は夜通し家を空けた。其つぎの晩もさうした。又其つぎの晩も。三晩目に家を空けてからは、彼は朝飯に歸る事すらしなかつた。玆に至つてお春は妻として何とか言はなければならぬ時が來た事を知つた。

お春は夫の上を案じ我が身の上を案じながら朝の間を過ごした、女の心に此上ない深手を負はせる不行跡を初めて覺つて。忠實な召使共が彼女に何か話したので、後は察することが出來た。彼女は大分體がわるかつたが、自分では氣づいて居なかつた。彼女は自分が受けたこの傷ましい、刺す樣な、胸わるき苦痛の爲めに腹立たしく——それも我儘ゆゑに

腹立たしく――感じてゐるのだとばかり思つてゐた。今は言はずには居られぬ事を――自分の口から洩れる初めての非難の言葉を、どうしたら一番身勝手からでない様に言へるかと考へこんでゐる時に正午となつた。その時車輪の音が聞こえて、召使が『お歸りです』と呼ぶ聲に、彼女の心臟は一つの激動を以て躍つた。何もかも眩暈の渦をなして眼の前に朦朧と游動した。

彼女は夫を出迎へに上がり口まで漸く歩いて來た、纖弱い全身は熱と苦しさと、更にその苦しさを見られはせぬかとの恐怖とに慄きながら。夫は驚いた。常の通りの笑顏を以て迎へることをせず、打震ふ片手で夫の絹の着物の胸元に取り縋つて、夫の胸の中に唯だ一片の性根があるかを見極めようとする樣な眼つきて、ぢつと見入つた。そして物を言はうとしたがそれは『あなた』と唯だ一言だけてあつた。殆ど同時に力の無い手は緩み、眼は異樣な笑みを見せて閉ぢ、夫が手を出して支へる間もなく彼女は倒れた。夫は彼女を起こさうとした。が、彼女の一縷の命脈は絕えたのてあつた。お春は死んて了つた。

一同が驚愕し、泣き悲み、かへらぬ名を呼び立て、醫者を迎へたことは言ふまでもない。が、彼女は色白く靜かに美しく臥してゐた。苦痛も怒りも顏から去つて、嫁入つた日の笑顏を見せながら。

公立病院から醫師が二人まで見えた。日本の軍醫たちである。彼等は直截な露骨な質問をした。夫の本性を眞髓まで截ち割る樣な質問をした。而して燒刄の樣な冷たく鋭い事實を告げて、粹ぎれた人と共に彼を殘して去つた。

彼の良心が目醒めたのは僅て、彼が出家せぬのが不思議くらゐに思はれた。晝は京の絹織物や大阪の形染物の反物を積んだ店に、熱心に而かも無言に坐つてゐる。店員等は優しい主人と思つて居る。決して荒い小言など言はぬ。夜更けるまで働いてゐる事も度々てある。彼は住居を變へた。お春の住んでゐたあの綺麗な家には餘所の人が居て、持主はつひぞ其處へは來ることが無い。今も尙ほ花を生けたり、池の錦魚を花あやめの風情てさしのぞくなよやかな影をそこに見はせぬかと思ふからてあらう。併し何處に息はうとも、人々の寢鎭まつた折ふし、彼は同じ物言はぬ人の姿を己が枕邊に見ない譯には往かぬ。彼が着飾つて妻を裏切つたその晴着を、縫つたり火熨斗したり、心を盡くして仕上げようとしてゐるその姿を。又或る時は商賣の忙しい中に、大きな店の喧噪は絶え、帳簿の文字は薄らいて消え去り、訴ふるが如きささやかな聲が——神明に祈つても消すことの出來ぬ聲が——彼の淋しき心の底へと、問ふが如くに唯だ一言「あなた」と囁く。

第八章　趨勢一瞥

一

開港場の外人居留地は、其極東的な周圍に著しい對照を呈して居る。其街路の整然たる醜惡さの中に、人は世界の此方側(こつちがは)には無い筈の場處を想ひ出させられる——恰も西洋の斷片が魔術的に海を超えて運び來られたかの如く。——リバープールや、マルセールや、ニューヨークや、ニユーオルレアンスや、さては一萬二千乃至五千哩彼方の熱帶植民地の市街の一部分が。商館の建物——日本の低く輕い商店に比較すれば巨大な——は財力の脅威を語る如くに見える。種々雜多の樣式の住宅——印度人の平屋建(バンガロー)から、小塔(ターレット)や張出窓(ボーウヰンドウ)を具へた英佛式の山莊風に至る迄の——は平凡な刈り込んだ灌木の庭園に圍繞せられ、白い道路は固く卓子の樣に平らで、立ち込んだ樹木で劃(かぎ)られて居る。殆ど英米に於ける傳統的な凡ての物が此處に移植されてある。教會の塔も見える、工場の煙突も見える、電信柱も見

える、街燈も見える。鐵扉の附いた舶來煉瓦の倉庫、板ガラスの窓のある商店の店前(みせさき)、歩道、鑄鐵の欄干(てすり)なども見える。朝刊夕刊又は週刊の新聞がある、倶樂部がある、圖書館がある。球廊(たまころがしば)がある、撞球場がある、酒場がある、學校がある、海員禮拜堂がある。電燈會社もある、電話會社もある。病院も法廷も監獄も外人警察署もある。外人の辯護士も醫者も藥劑師も、又外人の食品店、菓子舖、麪包屋、牛乳屋、男女服裁縫師もある。外人の學校教師、音樂教師もある。役場の事務と各種の公會に充(あ)てる公會堂もある——これは又素人演劇や講演や音樂會にも使用する。又偶(たま)には世界巡遊の劇團が暫し此處に逗留して、本國で爲(す)る樣に男を笑はせ女を泣かす事もある。クリケット場(グラウンド)もある、競馬場もある、公園——或は英國で所謂スクエーアもある、——快走船會(ヨット)、競技會、又は水泳場もある。又耳馴れた音樂の中には、ピアノ練習の果てしもなき絃聲、市中音樂隊(タウンバンド)の破るゝ樣な響き、又折々は手風琴の喘ぐ樣な音が聞こゆる——聞こえないのは實際ただ手廻はしオルガンの響きのみてある。住民はといふと、英國人、佛國人、獨逸人、米國人、丁抹人、瑞典人、瑞西人、魯國人と、それに伊太利人及びレバント人[譯者註]が瀰く撒き散らされてある。それから支

譯者註　伊太利の東方地中海沿岸一帶の諸國諸島嶼の住人。

那人を忘れようとしたが、彼等も大勢居て、彼等だけで一隅を占領して居る。併し優勢な分子は英米人である——中でも英人が最多數を占めて居る。此等有力な人種のあらゆる缺點も長所の幾分も海外で研究するよりも此處では一層明瞭に見られる——其故はこんな小さい社會では、各人が他の各人に就て凡てを知つて居るからである——全くここは極東といふ茫漠たる不知の沙漠中のオアシスである。書くに堪へぬ醜い噂もあれば、叉貴く情深い美談もある——それは己れは利慾一點張りだと稱し、傳統の假面で美しい心を世間から隱して居る人々が爲した、立派な行動に就てである。

併し外人の領域は、苦もなく横斷し得る程の範圍を超えては居らぬ。そして久しからぬ中に再び消滅して了ふであらう——その理由は今に述べる。一體居留地の發展は早熟に過ぎた——殆ど米國西部諸州の『蕈の市』の如くに——そして出來上がると間もなく發展の極限に達したのである。

居留地の周圍及びその先きには、本國人の市——眞の日本の市——が判然分からぬ方面にまで延びて居る。普通の居留人には、此本土人の市は祕密の世界である。彼は十年も居る中に、一度も其處へ行つて見る價値がないと思つて居るらしい。彼は單に一商人で、土俗の研究者ではないから、それに何の興味も持たず、それがどんなに變つた物であるかと

考へる暇もない。併し實は居留地を横ぎるだけて、太平洋を横ぎるのと同じなのてある——共太平洋も兩人種の間の間隔より廣くはない。日本人市街の長い狹い迷路の中へ一人て入り込むと、犬には吠えられる、子供等にはたつた一人の外國人てもあるやうに、ぢろぢろ見られるてあらう。そして多分『異人』、『唐人』若しくは『毛唐人』と後ろから呼ばれるてあらう——此最後の語は『毛深い外國人』といふ事て、決して讃辭として用ゐられるのてはない。

二

長い間居留地の商人は萬事に我が儘に擧動うた、そして日本人の商會に、西洋の商人ならば迚も承諾しようとも思はれぬ取引法を强要した——それは日本人は悉く詐僞漢だといふ外人の信念を表はす取引法てあつた。外人は日本人から現品を受け取つて、久しく留め置いて調査に調査を重ね、手を盡くした後てないと、何物をも買はぬ——又は輸入の注文が來ても『手附金の多分な拂込』が伴なはぬと、之に應ずることをせぬ。日本の賣手買手がいくら反對しても遂に無效て、いやいやながら屈服せしめられた。併し彼等は時機を待

つたのである――ただ遂には打勝たうといふ決心を以て屈服しつつ。外人町の急激な發展と、其處に投(おろ)されて成功した巨額な資本とを見て、彼等は先づ自ら成功する前に、大いに外人に學ぶべき所あるを知つた。彼等は敬服せぬが驚嘆した、そして心中では密かに外人を厭ひつつも、外人と取引きもし外人の爲めに働きもした。舊日本にあつては、商人は平百姓の下に位して居たのである。然るに此等の侵入外商は、王侯の氣位と征服者の傲慢とを冐して居る。雇主としては大抵苛酷で、時には殘忍である。それにも拘らず、彼等は營利の事に就ては驚く程怜悧で、帝王の如き生活をし、高い給金を拂つて居る。日本の若者に取つては、國家を外人の支配に移さざらんが爲めに、學ばざる可からざる事を學ぶには、彼等に使用せられて難儀をするも願はしい事であつた。いつかは日本も自分の商船と海外銀行と外國取引の信用とを得て、此等傲慢な外商を驅逐する日が來るであらう。先づ當分は教師として彼等を恕し置くべきであるとした。

註　一八九五年七月二十一日の『ジャパン・メール』を見よ。

そこで輸出輸入とも、貿易は全然外人の手に在つて生長し、無一物から數億の巨額に上つた。かくて日本はよく利用せられた。併し日本は學ぶ爲めに拂ひつつあるのを承知して

居た。そして其忍耐は、侮辱の忘却と思ひ取られる程長く忍ぶといふ風の忍耐であつた。天運循環して日本の機會は來た。利を漁る外人の殺到が最初の好機を與へた。日本人との貿易の競爭が舊習を打破した。新しい商館は喜んで敢て手附金なしの注文を取つたので、巨額な前金を强奪することは出來ぬやうになつた。外人と日本人との關係も同時に改善された――それは日本人が虐遇さるれば突然團結するといふ危險な性能を現はし、短銃で嚇されなくなり、どんな罵詈をも許さず、そして尤も危險な惡漢(ごろつき)をでも、數分間で片附けて了ふ事を知つたからである。人民の屑なる開港場の亂暴な日本人に至つては、疾くから少し氣に入らぬ事があると、直ぐ攻勢を取るやうになつて居たのである。

居留地の建設後二十年ならざるに、甞ては此國を擧げて彼等の有に歸するのも、ただ時の問題と思つて居た外人等は、此人種を餘りに見縊り過ぎて居た事に氣が附き始めた。日本人は如何にもよく學びつつあつたのであつた――『殆ど支那人と同樣に』。彼等は外人の小商人に取つて替はつた、そして樣々の商館は、日本人の競爭の爲めに閉店の止むなきに至つた。大商館にさへ、樂々と金儲けの出來る時代は過ぎ去つて、勉强の時代が始まりつつあつた。初めの頃は、外人の凡ての日用品は是非共外人に依つて供給されねばならなかつた――そこで卸商の保護の下に大きな小賣商が發達したのであつた。處が居留地の小

賣業は明らかに前途を塞がれた。其の或る商賣は消滅した、消滅せざるものも目に見えて減少しつつあつた。

今日では商館の安手代や雇人は、居留地のホテル生活には堪へられぬ。併し小額の月給て日本人の料理人(クック)を雇ひ、若しくは日本人の飲食店から、一皿五錢乃至七錢で食事を仕出して貰ふ事が出來る。そして日本人の所有する『半洋風』の家に住んで居る。床に敷く絨毯や花莚は日本製である。家具は日本の家具商が供給する。衣服、襯衣、靴、ステッキ、洋傘、何れも日本製で、手水臺の石鹸にさへ日本字が打込んである。喫烟家なら、馬尼刺葉卷を日本人の烟草屋から、洋商が同種のものを賣る代價よりも一箱半弗安く買ひ取る。書物が入用なら、外人の書籍商よりも大分安く、日本人から買ふ事が出來る——そして、より多く、よりよく精選した仕入品(ストック)の中から買ひ取るのである。寫眞を撮らせたければ、日本人の寫眞店に行く——外人の寫眞屋は日本では生活が出來ぬのである。骨董が欲しければ、これも日本人の店へ行く——外商は百パーセントも高く請求するのが常である。

又一方若し子供の多い者なら、日常の買物は、日本の肉屋、魚屋、牛乳屋、薬物屋、八百屋に依つて供給される。暫くの間は英米のハムやベイコンや鑵詰物を、外人の食料商から買ひ續けるかも知れぬ。併し日本人の店は、同じ品質の物を安價に提供する事を發見す

る 醇良な麥酒を飮むなら、それも多分日本の釀造所から來る。普通の葡萄酒や、其他の酒類の上等が入用なら、それも日本人の店は、外人の輸入商よりも安價に供給する。實際日本人の店から買ふ事の出來ぬ唯一のものは、どうせ買ふ力のないもの――卽ち富豪のみが買ふらしい高價な品物ばかりてある。そして最後に、若し家族に病人が出來たら、日本人の醫者に診て貰へば、素と外醫に診て貰つた時、拂ひ拂ひした額よりも一割方安い謝禮て濟む。外人の醫者は今は生活が困難てある――醫術以外に何か手緣るものがない限りは。外人の醫者が謝禮を一往診一弗に引き下げても、日本の醫者は二弗取つて、それて見事競爭に勝つ事が出來る。――それは日本醫は、醫者自身が藥劑を、外人の藥劑師を破產せしむる程の代價て賣るからてある。勿論何處の國にも醫師は澤山ある。併し公立の病院若しくは陸軍の病院に院長たり得る腕前を有し、獨逸語を話す日本醫師は、其技術に於て容易に他の追隨を許さない。外人の醫師は多分之と拮抗することは出來まい。日本醫は藥品店へ持つて行く爲めの處方箋は吳れぬ。藥品店は彼の家にか、或は彼が司宰する病院の一室にあるのてある。

此等の事實は、澤山の中から手當たり次第に搔き集めたのてあるが、外人の商店卽ち米

國人の所謂『ストーアス』は、間もなく消滅するであらうといふことを示すものである。中には日本人中の小商人の不必要な、英廻らしい欺瞞の爲めに却つて沒落を延ばしたものもある。――日本人の欺瞞といふのは、外國の貼紙のある外國の壜に詰めて、怪しげな液體を賣らうとしたり、輸入品を僞造したり、或は商標を模造したりなどである。併し全體としての日本商人の常識は、こんな不德義には甚だしく反對して居るから、こんな惡弊は自然に止むであらう。日本商人は正直に外國人よりも安く賣る事が出來るのである。それは外國人よりも安價に生活し得るのみならず、競爭しながら金を儲け得るからである。

これは居留地內でも少し前から認められるやうになつた。併しつぎの樣な妄想が行はれて居た。卽ち輸入及び輸出の大商館は難攻不落である、彼等は西洋との貿易の大勢を尙ほ支配し得る、日本の商會は外資の壓迫に對抗する資本を有せぬ、或は資本を用ふる商業上の方式(メソド)を習得し得ぬであらう。小賣業は如何にも滅亡するであらう、併しそれは大(たい)した事でない。大商館は依然として殘り、增加し、而して其資本を益々增大するであらうと。

三

こんな外形的變化の行はれる中(うち)ぢゆう人種間の實際感情――東洋、西洋兩人種相互の嫌惡――は増大し續けた。開港場で發行される九若しくは十種の英字新聞の多數は、毎日嘲弄輕蔑の辭で、此嫌惡の一側面を表現した。そして有力な日本の新聞紙は、賣り言葉に買ひ言葉で之に答へ、危險な反應を起こした。此等『反日本的』新聞紙が、實際居留民の絕對多數の感情を代表せぬとしても――自分は代表すると信ずるのであるが――少くとも彼等は外資の壓力と、居留地の優越な勢力を代表して居る。日本最負の英字新聞は達識の人に依つて司宰せられ、非凡の新聞記者的能力を發揮しても、彼等の同業者の言說に依つて挑發せられた強い惡感を緩和するに足らない。英字新聞に揭げられた野蠻不道德の非難は、直に日本の日刊新聞紙上で、開港場の醜聞摘發で答へられた――そして幾百かの本土人の知る所となつた。此人種問題は強大な排外團に依つて、日本の政治上の問題とされた。居留地は惡德の溫室として公然攻擊された。そして國民の憤激は其極に達し、政府が斷乎たる處置を取つたので辛うじて大事に至らずして止んだ程であつた。それにも拘らず、外人

記者に依つて、油は又火焔の上に注がれた。彼等は日支戰爭の初期に當つて、公然支那側に味方したのである。此政策は戰爭中繼續された。日本敗北の虚僞の噂が臆面もなく記載された。爭ふべからざる捷報まで不當にも過小視された。そして戰爭が濟むと「甘やかし過ぎたので、日本は危險な國になつた」といふ叫び聲を揚げた。間もなく三國の干渉が喚起され、英國の同情が英國人の血を有つた者共に依つて表はれた。かかる時、かかる言辭を弄するの結果は、決してこんな事を覺悟せざる國民に、覺悟せられざる侮辱を與へた事になる。それは憎惡の辭であると同時に警告——凡ての外人を日本の司法權の下に置くあ條約の調印に依つて惹起された憂慮と、此特權に各國民を有するといふ、新たな恐ろしい意味の排外運動が又起こりはせぬかといふ、全く根據のなくもない恐怖との辭であつた。實際そんな運動の徵候は、外人を侮辱嘲弄せんとする一般の傾向と、或る稀な併し有意義な暴行に、判然と表はれて居たのである。政府は再び布告を發し、此等國民的憤怒の示威的行動を戒むるの必要を見出した。そこでそれも治まるや否や鎮熄した。併し此鎮熄は重に海軍國としての英國の友好的態度と、一朝世界の平和が危險を感ずる時、日本に及ぼす英國の政策の價値を認めたが故なることは疑ひない。英國は又日本の條約改正を可能ならしめた最初の國である——極東在住の臣民の熱烈な反抗の聲にも拘らず。日本の先覺達は

それに感謝の意を有して居る。若し此事が無かつたら、居留民と日本人との間の憎惡は、恐れられた通りの結果を招來したかも分からない。

勿論初めには相互の敵意は人種的であり、從つて自然であつた。併し後に發展した莫迦莫迦しい猛烈な偏見、惡意は、次第に增加する利害の衝突から來る避くべからざるものであつた。此情勢を眞に會得し得る外人ならば、眞面目に和解の希望を懷き得るものではない。人種感、情緒的差別、言語、風習、信仰の牆壁は、數世紀間超ゆべからざるまゝに遺るであらう。たまには直覺的に相互の意中を推察し得る、除外例的の人物の相互接近より起こる暖かき友愛關係の例もあるが、概して外人は日本人を了解せぬ事、日本人が外人を了解せぬと同樣である。外人に取つて誤解よりも更に惡るき事は、外人は侵入者の地位に在るといふ簡單な事實である。普通の場合、外人は日本人同樣の待遇を豫期するは無理である。これは只だ外人は餘計金を持つて居るから許りではない。人種的相違の故からでもある。外人に賣る値段と、日本人に賣る値段とに差違のあるのは通則である——殆ど全く外人相手の商店を除くの外は。若し外人が日本の劇場、見世物、其外何でも娛樂場、若しくは宿屋にでも入らうとすれば、事實上の國籍税を課せられる。日本の職工、勞働者、手代は外人の爲めに日本の相場では働かぬ——給金以外の或る目的を有する場合の外は、日

本のホテルは――特に英米の旅客の爲めに經營されるホテルの外は――我々の勘定書を作るのに普通の値段ではせぬのである。此通則を維持する爲めに、大きな宿屋組合が作られた――國中の幾十百の宿屋業者を指揮し、地方の商人や小宿屋業者に命令し得る組合が作られた。外人は餘分の面倒を懸ける故に日本人よりも餘分の宿泊料を頂戴するといふ事が立派に告白された。そして其擧げた理由は事實である。併しこんな事實の下にも、人種感は明瞭てある。大中心地に日本の旅客のみを目的に立つてる旅館は、外人客を念頭に置かぬ、外人客に泊まられて損失を招く事が往々ある――それは、一には金のある日本の客は外國人を泊める旅館を好まぬのと、一には西洋の客は、日本人なら一行五人乃至八人の旅客に、有益に貸し得る室を獨占せんとするからてある。尙ほ此事に關して一般に了解されて居ぬ事實が今一つある。それは舊日本に於ては、勞力に對する報酬の問題は、客の意志に委せてある事てある。日本の旅館は食物を殆ど實費で提供するのが常てあつた(今でも田舍の宿屋はさうてある)。そして眞の利益は、全く客の良心に手繰つて居た。旅館に茶代を置くといふ要件はそこから出たのてある。貧しい客からは、志計り、富める客からは多分の金額が豫期された――懸けた勞力に準じて。同様に雇人も爲した仕事の價値よりも雇主の懐中(ふところ)に相應する報酬を豫期した。職工は好い且那の仕事をする時には、賃錢を指定

するを好まなかつた。ただ商人のみが懸け引きをして顧客を搾らうとした――それが商人といふ階級の不道德な特權であつた。仕拂ひを客の意志に委せる習慣が、西洋人を相手にして好結果を得なかつた事は、容易に想像せられる。我々は賣買の事は凡て事務(ビジネス)と考へる。西洋に於ては、事務が純抽象的の道義心で行はれる事は無い。精々比較的部分的の道義心で行はれるに過ぎぬ。寛厚の人は買はうと思ふ品物の代價を良心の決定に委せられるのを極力厭ふ。それは原料の價値と勞力の價値とを精確に知らぬと、出し過ぎたと思ふ程餘分に拂はねばならぬやうに、强ひられる氣がするからである。之に反して卑劣の徒は、好い事にして出來るだけ無に近い代金を拂はうとする。かういふ譯で西洋人との取引には特別の定價が日本人に依つて定められるに至つたのである。併し人種的反感の故に取引共者が、場合次第で多少攻擊的になる。外人は啻に各種の熟練工の勞働に高價を拂はせられるのみならず、高い借地證に調印し、高い家賃に服從せしめられる。外人の家庭に在つては、高い給金を拂ひながら、最低級の日本人婢僕だけを雇ひ入れることが出來る。それでも彼等は長く留まらぬ、それは彼等に要求せられる仕事を嫌ふからである。敎育ある日本人が、外人の雇傭を冀ふ明白な熱心さも、普通誤解されるのであるが、これは彼等の眞の目的は、多くの場合只だ日本の商術、商店、ホテル等に於ける同種の業務を見習はうといふのであ

る。普通の日本人は外人の爲めに高い給金で一日八時間働くよりも、日本人の家で、低い給金で、一日十五時間働く方を好むのである。自分は大學卒業生が使用人として働くのを見た事があるが、それはただ或る特殊の事を學ばんが爲めに、働いて居たのであつた。

四

實際尤も鈍感な外國人でも、國家の絕對獨立を確立せんとして、全力を注ぐに一致して居る四千萬の人民が、一國の輸出入貿易を外人の手に委ねて、安閑とし居ようとは信じ得なかつたであらう――特に開港場に於ける空氣を目擊してはてある。領事裁判の下に、外人の居留地が日本の地に存在するといふ事其事が、國民の自負心に對して絕えざる憤激の種である――國民の無力の指示である。印刷物にも、排外團員の演說にも、議會に於ける演說にも、其通り聲明されてある。併し日本の全貿易を日本の手に收めたいといふ此國民的要望や、居留民としての外人に對する週期的挑戰の聲も、只だ一時の不安を惹起したるに過ぎない。日本人が相談相手たる外人を排斥せんとするのは、自らを傷けるに過ぎない

と、自信ありげに主張された。彼等が日本の法律の下に移されんとする形勢に驚きながらも、居留地の商人は其法律の侵害に依つての外は、大資本に對する攻撃が成功しようとは決して想像しなかつた。日本郵船會社が戰爭中に、世界最大の汽船會社の一になつた事も、日本が直接に印度や支那と交易しつつあつた事も、日本の銀行代理店が世界到る處の工業の大中心地に設けられた事も、日本商人が其子息を歐米に派遣し、健全な商業教育を受けしめつつあつた事なども、蔭張り念頭に置かなかつた。日本人の辯護士が、次第に多くの依頼人を有するに至り、日本の造船技師建築技師其他の技師が、政府傭聘の外人に替はりつつあるも、尙ほ歐米との輸出入貿易を統制しつつある外人代理店主は、驅逐せられるの日があらうとは考へなかつた。商業といふ機關は日本人の手にては用を爲さぬであらう、他の職業に於ける能力で、決して商業に於ける潛在能力をトする事は出來ぬ。日本に投おろされた外國の資本は、之に對抗すべく作られた聯合に依つて、見事に脅かされる事はあり得ない。或る日本人の商店は、小規模の輸入業は爲し得よう、併し輸出業は歐米に於ける商業情態の完全なる知識と、日本人にどうしても得られぬ底の連絡と信用とを要すると豪語した。それにも拘らず、輸出入貿易の自信は、一八九五年七月に手もなく破られた。それは英國の一商館が日本の一商會を相手取り、注文の貨物引取方を拒絶したといふに對し、

日本の法廷に告訴し、そして裁判には勝つて約三千弗を贏ち得たが、突然今迄思ひもかけなかつた有力な組合が現はれ出て脅かされたのである。敗けた日本の商會は判決に對し控訴はしなかつた、そして欲しいなら全額を直に支拂はうと表明した。併し其商會の屬して居る組合は、勝つた原告に和解を勸め、それが畢竟彼等の利益であらうと告げた。英國の商館は其時長く續けば全く破産させられる程の不買同盟で脅かされて居るのであつた——全國のあらゆる商工業中心地に亙る不買同盟で。和解は直に成立したが、商館は大損失を蒙つた、そして居留地は靑くなつた。此方法の不德義を非難する聲も可なり聞こえた。註

註　經驗に富んだ神戸の一商人は一八九三年八月七日の「神戸クロニクル」に寄書してつぎの如く云つた——「私はボイコットを擁護する譯ではないが、私の知つて居る限りでは、あらゆる場合に日本人を焦ら立たせ、彼等の感情を昂奮せしめ、正義の感を喚起させ、そして彼等を驅つて防禦の爲めに聯合せしめるに至つた挑戰的行動があつた」と。

併しそれは法律も如何ともし難い方法であつた。不買同盟は法律では滿足に解決し得ざるものであるからである。そして之れは日本人は、外國商館を否應なしに彼等の口授に服從せしめ得る——公正な手段でなくば、卑劣な手段でなりと——實力を有するといふ確證

を提供したものである。巨大な組合が大商工業者に依つて組織された――其組合の命令は、電信に依つて完全に統一されて、反對者を破碎し、法廷の判決をも無視し得るのであつた。前にも日本人は度々ボイコットを企てたのであるが、いつも失敗したので、彼等の合同は不可能だと考へられて居た。併し此度の新しい成り行きは、彼等が失敗に依つて學ぶ所多かつた事を、又此聯合を一層改良すれば、外國貿易をたとひ彼等の手中に收めずとも――彼等の意思のまゝに統制し得るとの期待も決して無理ならぬ事を示した。つぎに來る大飛躍は、國民の希望――日本は日本人のみへ――の實現であるであらう。彼等の國は外國居留民へ開かれてあらうとも、外國の資本は、常に日本人組合の、意志のまゝに委ねられるであらう。

五

以上の簡單な現況の記述は、日本に於ける大いに有意義な社會現象の發展を證するに足りよう。勿論新條約の下に豫期せられる、國土の開放、工業の急激な發展、歐米との貿易額の年々の大增加は、多分外人渡來の增加を幾分か來たすであらう。そして此一時的の結

果に欺かれて、避く可からざる大勢を誤算する者も多いであらう。併し經驗ある老商人は、今でも開港場の將來の發展は、日本人の競爭的商業の發達を意味するもので、遂に之が爲めに外商は驅逐せらるゝだらうと云つて居る。別社會としての外人居留地は消滅し、ただ文明國の凡ての重なる港に存する樣な、少數の大きな代理店のみが殘るであらう。そして居留地の棄てられた街と、高地にある贅澤な洋館は、日本人に依つて占有せらるるであらう。大きな本國の投資は內地には許されぬであらう。そして基督教の傳道事業も、日本人宣教師に委ねねばなるまい。丁度佛教が全く日本の僧侶に、其教義の教化を委ねた迄は、日本に根を張らなかつた樣に、その如く基督教も日本民族の情緒的並に社會的生活と調和する樣に改造される迄は、決して物にならぬであらう。さう改造された處で、二三の小さい宗派の形に於てしか存在する見込みはない。

　此社會的現象は、比喩に依つて說明するが一番よい。多くの點に於て、人間の社會は、生物學的に一個の有機體と比較され得る。何れにしても、其組織の中に無理やりに異物を押し込んで、それが同化されぬと、刺戟と分解とを惹起し、遂には自然に剝脫するか、或は人工的に切り取らねばならなくなる。日本は此異分子の剝脫に依つて、强健になりつつあるのだ。そして此自然的な經過は、凡ての居留地を取り戻し、領事裁判を廢止し、帝國

内の何物をも外人の支配下に殘すまいといふ決心に依つて表はされて居る。此事は又外人雇傭者の解雇、外人宣教師の横柄に對して日本信者團の提起した抗議、及び外商に對する斷乎たる不買同盟等にも現はれて居る。又此の凡ての人種的運動の背後には、人種的反感以上のものが潜んで居る。即ち外國の援助を受けるのは、國民の無力を證するものだ、其輸出入貿易が外人の手にある間は、帝國は世界の商業界の眼前に恥を曝すものだと云ふ確信が存して居る。日本の大商會の多くは、既に悉く外國仲買人の支配を脱して居る。印度及び支那との大貿易は、日本の汽船會社に依つて行はれる、南米諸國との交通も、綿の直輸入の爲めに、日本郵船會社に依つて間もなく開かるゝ筈である。併し外人居留地は、常に刺戟の源である、偉大なる國民的勢力に依る商業的征服のみが國民を滿足せしめるだらう、そしてそれが支那との戰爭よりも、一層よく日本の世界に於ける眞の地位を證明するであらう。そしてその勝利も確に成就せられるだらうと自分は考へる。

六

日本の將來はどうなるか。誰れても現在の趨勢が將來迄繼續するだらうといふ假定の上

に、積極的の豫言を爲すことは敢てし能はぬ。併し恐ろしい戰爭の有無などは暫く論ぜず、又内亂の結果、憲法は無期限に拋棄せられ、軍政の昔に還ること——近代的軍服を着けた將軍職の復活——などの有無は暫く論ぜず、善かれ惡かれ大變化があるべきは確實であらう。其變化は當然として、さて我々は此人種は急激な有爲轉變の時代を通じ、新たに得たる西來の知識を尤も有效に同化し續けるだらうといふ無理ならぬ假定に基づいて、或る狹い範圍内の豫言は爲し得ると思ふ。

體格に於ては、日本人はつぎの世紀の終末に達せぬ中に、現在よりも大分優れたものとなるだらう。さう信ずるには三つの確な理由がある。第一は、帝國内の強壯な青年の組織立つた教練體育の兩訓練は、數代の中に獨逸の軍事教練が爲した如き著しき結果——身長、胸圍、筋骨發達の增加を來たすに相違ないと云ふ事である。第二は、都市の日本人は、滋養多き食物——肉を食ひ初めた事、從つて滋養分に富める食物が、生長發育を增進する生理的結果を齎すに相違ない事である。日本食と同樣に安價に西洋料理を賣る飲食店は、到る處無數に出現しつつあるのである。第三は、教育と兵役義務の必然の結果たる結婚の遲延は、益々良好なる子孫を產出するに至るべき事である。早婚は今や通則でなく除外例と

なつたから、弱い體格の小兒は從つて數に於て減少するであらう。今日本人の群集を見渡すと、體格に非常な大小の差ある事が目に附くが、これは此人種は嚴格な社會訓練の下に置けば、體格の大なる發展の可能な事を證するやうに思はれる。

德義の進歩は餘り期待されない――寧ろ其反對である。日本の昔の道義の理想は、少くとも我々の理想と同程度に高いものであつた。そして家長政治の靜かな溫かな時代には、實際其理想通りに生活する事も出來たのである。不信、不正直其他個人の罪過は、今よりも稀であつた事は、政府の統計の示す迄で、犯罪の百分率は此數年確實に增す許りである――これは勿論種々の原因もあるが、就中生活難の強烈と云つた證據である。昔の男女の貞操の標準は、我々の輿論に現はれた所に依ると、我々の社會よりも發展せぬ社會に屬するものであつたといふ。併し其方の道德が、我々に於けるよりも、低かつたと主張することの、當たれるや否やを自分は疑ふ。或る一點に於ては却つて高かつたのである。といふのは日本の妻女の貞節[註]は、何の時代に於ても、一般に疑ふ可からざるものであるからである。

註　日本語には貞操といふ事を表現する言葉がないといふ陳述をなした者があつた。これは英語にも貞操を表はす語がなかつたと云ひ得ると同じ意味に於て眞である――名譽とか德とか純潔とか貞操とかいふ語は、皆佛蘭西語から英語に借用されたものであるから。試に日英辭書を開いて見よ、貞操といふ事を表はす

多くの語を見出すであらう。貞操(チャスチチ)といふ語は、ラテン語から佛語を通して、英語になつたのであるから、それは近代英語でないといふことの愚なると同樣に、千餘年前に日本語となつた漢字の道德に關する語は、日本語でないと云ふのは愚の極みであらう。此陳述は、此種の題目に於ける宣教師の陳述の大部分の如く、此上にも人を誤らしむるものである。といふのは讀者は名詞がなければ、形容詞もなからうと推論させられるからである――然るに貞操を意味する純粹の日本語の形容詞は數多くあるのである。尤も普通に用ゐられる形容詞は、兩性に適用される――そして貞烈、嚴格、不動、眞實等の日本的意義を有する。或る國語に抽象的の語を缺くことは、決して具體的な道德の缺乏を意味するものでない――此事實は屢々宣教師に指摘したのだが彼等は悟らない。

男子の道德は之に比して非難すべき處が多かつたが、レッキー(譯者註)を引用するまでもなく、西洋でも之に優る情況にあつたとは云ひ得ない。青年を放蕩への誘惑から保護する爲めに早婚が奬勵された。そして大抵の場合は其目的が達せられたと想像するのが至當である。蓄妾は富者の特權であつたが、之には弊害もあるが、又妻女を追つかけ引つかけ子を生む生理的過勞から救ふといふ効果もあつた。社會情態は西洋の宗教が最善と臆定する所のものとは非常な懸隔があつたのだから、それの公平な判斷は、基督教の僭僞に任せる譯に行

譯者註　英國の歷史家、歐羅巴の道德史の著あり。

かぬ。少くとも一の事實は爭ふ可からざるものであつた——卽ち蓄妾制度は賣色業を制限した、大なる城市——大名の居住地——の多くに於ては娼家の存在が許されなかつたのである。凡てを公平に考慮して見ると、舊日本は、其家長制度にも拘らず、性道德に於てさへ、西洋諸國より非議すべき點の少かつた事が見出されるであらう。人民は彼等の法律の要求する所よりも一層善良であつた。然るに今兩性の關係が新法典に依つて規定さるるに至り——實際新法典が必要となつたのである——之に依つて起こるべき變化は願はしいが、直に良好な結果を現はすことは出來まい。突飛な改革は法律では成就されぬ。法律は直接に情操を作ることは出來ぬ。そして眞の社會的進步は、永い間の訓練教誡に依つて發展した道義的情操の變化に依つてのみ爲される。當分の間は增加する人口過多と次第に激しくなる競爭とが知力の發達を促しつつも、性情を荒ましめ、自利心を發達せしむるに相違ない。

知的には大いに進步することに疑はない。併し日本は三十年間に眞に變形したと考へる人々が、我々に說く程急激な進步はあるまい。科學教育は、何れ程民間に普及しようとも、直に實際の知力を西洋の標準迄高めることは出來ぬ。一般の能力は尙ほ數代の間低く留ま

るに相違ない。著しい除外例も可なりあるにはあるだらう。新たな知力上の優秀階級が現はれつつあるのは事實である。併し國民の眞の將來は、少數者の異常な能力よりも寧ろ多數者の一般能力に依るものである。特に恐らく今到る處に熱心に開拓せられつつある、數學の能力の發展に依るものであらう。現今にては數學が弱點である。年々多數の學生は、數學の試驗を通過し得ぬ爲めに、高等教育の學府に入ることを阻止されて居る。併し陸海軍士官學校では、此弱點も遂には矯正さるべきことを示すに足る樣な結果が得られて居る。科學的研究中の至難な學科も、そんな學科に頭角を顯はすことを得た者の子孫には段々至難でなくなるであらう。

他の點に於ては或る一時的の後退は豫期せねばならぬ。丁度日本が其力の普通限度以上のものを企圖しただけそれだけ其限度迄——或は寧ろ限度以下まで落下するに相違ない。こんな後退は自然にして又必然的なもので、それは捲土重來の恢復的準備以外の何者をも意味しないであらう。兆候は今或る官省の仕事に見えて居る——特に文部省の仕事に著しい。東洋の學生に西洋の學生の平均能力以上の學科を課さうとする考へ、英語を國語若しくは少くとも國語の一となさうとする考へ、又こんな教練に依つて先祖傳來の考へ方感じ

方を改良しようといふ考へは、亂暴な計畫であつた。日本は自己の靈を發展せしめねばならぬ、他の靈を藉るべきでない。一生を言語學に捧げた一人の親友が、日本の學生間の行儀の墮落に就て話して居た時かう云つた『いや、英語其者が墮落に與つて力があつた』其詞は意味深長である。全日本國民に英語（彼等の權利に就ては永久に說法を聽いて居るが、義務に就ては決して聽く事なき民族の國語）を學ばせる事は殆ど無謀であつた。此政策は餘りに急激で又餘りに大規模に過ぎた。金と時との大浪費を惹起し、其上道義的感情の崩潰を助成した。將來に於ては、英語を學ぶ事、英國が獨逸語を學ぶ如くになるであらう。

併し此英語の學修は、或る方面には徒勞であつたとしても、他の方面に於ては決して徒勞でなかつた。英語の影響は國語の變革を來たし、それをして豐富ならしめ、融通自在ならしめ、近代科學の發見に依つて起こされた、新式の思想を表現する事を得せしめた。此影響は永續するに相違ない。英語の日本語に吸收せられるのも多からう――佛語や獨語も同樣であらう。此吸收は旣に教育ある階級の詞遣ひの變化に於て顯著である事は、外國商業語の珍妙に變形せるものが混合せる、開港場の日用語に於けると同樣である。加之、日本語の文法的組立も影響を受けた。自分は最近或る宣教師が述べた如く、東京の街上を徘徊する小兒が『旅順港が陷落された』と叫んで、受動態（パッシブ・ヴァイス）を用ふるのは、これも『神意（ディヴワイン・プロビデンス）』の致

す所を示すものだとの説には賛成せぬが、日本語は國民の天稟の如く同化的て、新しい境遇の凡ての要求に適應し得る能力を示す證據だとは考へる。

多分日本は二十世紀になつてから、外國の教師を今よりは感銘的に追懐するであらう。併し明治以前、支那に對して感じた樣に西洋に對しては國風通りに恩師に對する尊敬の念を感ずることはあるまい。其故は支那の學問は自發的に求めたのであるが、西洋の學問は暴力を以て日本に強ひつけられたものであるからである。日本には日本流の基督教の宗派は殘るであらう。併し日本は英米の宣教師を記憶すること、嘗て日本の青年を訓育した支那の傑僧を今日でも記憶するが如くにはないであらう。そして我々が滯在の紀念物を七重八重の絹に鄭重に包み、美しい白木の箱に納めて保存するやうな事はせぬであらう。我々は何等新しい美の教訓を日本に教へなかつた――何等彼等の情緒に訴へる物も與へなかつたからである。

第九章　業の力

『愛人の顔と朝日の顔は見上げる事が出來ぬ』　――日本俚諺

一

近代科學の教ふる所に依ると、初戀の熱情は、當該個人に取つては『全く凡ての之に關する經驗に先きだつものである』[註]。語を替へて云ふと、凡ての感情中、尤も嚴密に個人的なるべく思はるゝものが、實は全く一個人の事件ではないのである。哲學も又久しい以前に同じ事實を發見して居る、そして戀情の神祕を說明する理窟は非常に面白い。科學は今迄の處、此題目に就ては嚴密に僅少の推察を提供するに留めてある。これは誠に遺憾である。といふのは、形而上學者は何時の時にも適當に細述した說明を與へる事が出來ぬから

註　先天的であるの意。ハアバアト・スペンサー『心理學原理』中戀情論の一節。

である――或は戀人の初めての一瞥は、戀する者の靈魂に、神聖な眞理の或る眠れる先天的な記憶を喚起すと敎ふるか、或は戀の幻影は、體現を求むる未生の靈魂に依つて作らると敎ふるか、何れにしてもである。併し科學も哲學も極重要な一の事實――戀する者自身は自由選擇を爲るのでない、彼等は只だ或る外力に動かさるゝのであるといふ事に就ては一致する。科學は此點には更に一歩を進めて居る、初戀の責任は死せる祖先に在る、生ける當該者にはないと述べて居る。て初戀には或る種の幽玄な記憶があるやうに思はれる。尤も科學は宗教とは異つて、我々は特殊の狀況の下に、前生を思ひ出し得るとは斷言せぬ。生理學に基礎を置く心理學は、此個人的の意味に於ける記憶の遺傳を不可能と斷ずる。併しより多く漠然とはして居るが、より强い記憶――無算數の祖先の記憶の總額――幾億兆京とも知らぬ經驗の總額――は遺傳するものなることを認めて居る。かくして心理學は我我の尤も不可解な感應――矛盾する衝動――不思議な本能又凡ての不合理に見ゆる愛情、憎惡の念、――あらゆる漠然たる毒性、若しくは悲哀の感等を說明することが出來る――これ等はただ個人の經驗だけでは說明の出來ぬものである。併し其心理學も未だ初戀に就ては、我々の爲めに多くを解釋するの餘裕を有たぬ――目に見えぬ過去の世界との關係に於ては、初戀こそ、凡ての人間の情緒中で、尤も幽玄にして尤も神祕なものであるが。

我が西洋では此謎はから云ふ風に現はれる。順當に强健に發達する青年には、女性に對して、自己の肉體の優越感より生ずる、原始的の輕蔑を感ずる、一種の退化的時期が來る。併し丁度かうして少女等との交際が少しも面白くなくなつた時に、彼は突然戀の狂熱に罹るのである。彼の生涯の通路を、今迄見た事のない一人の乙女――併し他の人間の女子と異らない――普通人の眼には少しも驚嘆するに足らぬ――が横斷する。其瞬間に大浪の押し寄する樣に、血が彼の心臟に吶喊する。そして彼の感覺は攪亂される。それから後狂熱の終はる迄、彼の生は全く其新發見の乙女に把捕される。併し彼は其女に就いては何事も知らぬのである。ただ日光も彼女に觸るゝと一層美しく見えるといふ事を知るだけである。其蠱惑から彼を引き離すことは人間の知識では出來ぬ。併し一體其蠱惑力は誰れ人が有するのであらう。其生ける偶像が有する力であらうか。否、心理學は我々に告げる、それは偶像崇拜者の心の中に潜む、死せる祖先の力である。死せる祖先が魔術を施すのである。愛する者の心の激動は祖先の激動である。一少女の手の最初の觸感で、彼の血管中を驅け廻る電氣の樣な戰慄も、同じく祖先の戰慄であると。

併し何故に死せる祖先は他の女を排して其少女だけを欲するかが、此謎の意味深い點である。獨逸の大厭世家が提供した解決法は、科學的な心理學とは調和せぬ。死せる祖先の

選擇は、進化學的に考へると、豫知よりは寧ろ記憶に基づいた選擇であるであらう。そして此謎は愉快ではない。

實に或る合成寫眞に於けるが如く、過去世に彼等（死せる祖先達）を愛した凡ての女の面影が、彼女に復活して居るが故に、彼女を欲するのだといふ、ロマンチックな可能性はある。併し同樣に彼等が酬いられずに愛した、凡ての女の合併せる魅力が、幾分彼女に現はれて居るが故に、彼女を欲するのだといふ可能性もある。

假りに此不氣味な後說を取ると、情熱といふものは幾囘埋められても、死滅もせず休止もせぬものだと信ぜざるを得ぬ。酬いられずに愛した者が死ぬるのは、ただ見掛けだけで、實は其願望を叶へる爲めに、幾世代も他の人の心の中に生きて居るのである。彼等は多分幾世紀でも、愛した形態の再現を待つのであらう——永久に青春の夢の中に、漠然たる記憶の綾を織り込みつつ。さればこそ、到達されぬ理想の——惱める靈魂が、誰れとしも分からぬ女に憑依せられるなどといふ事實が存在するのである。

處が極東では考へ方が違つて居る。自分がこれから書かうとして居ることは、佛陀の解釋法に關するものである。

二

最近甚だ特殊な事情の下に死んだ僧侶がある。彼は大阪附近の一村落の、古い淨土宗の一派に屬する寺院の僧侶であつた。（其寺院は關西線で京都へ行くとき、汽車の中から見える）

彼は若く、眞面目で、そして非常に美しかつた——僧侶にしては美し過ぎたと女達は評した程である。彼は昔の佛師が作つた阿彌陀佛の美しい尊像の一體の樣に見えた。

村の男達は彼を純潔な博識な僧と思つて居たが、それに間違ひはなかつた。併し女達は彼の道德と學問のみを考へなかつた。彼は彼の意志とは關係なく、ただの男として女を惹き附ける不運な魅力を有つて居た。彼は村の女達計りではなく、他村の女達にも、宗教的でなく讃美された。それで彼等の讃美は彼の研究を妨害し、彼の默想を擾亂した。彼等は立派な口實を見附けては、全く彼を見、彼に話しかける爲めばかりに、常住寺へ出入した。そして僧として答へる義務がある疑問を發したり、僧として拒むことの出來ぬ奉納物を贈つたりした。中には宗教上の法問でなく、彼を赤面せしめる樣な問を懸ける者もあつた。

性來彼は溫順なので、町の蓮葉娘が、田舍娘には云ひ切らぬ樣なこと——そんなことを云ふなら歸れと命ぜざるを得ぬ樣なことを云つた時でも、辭を嚴にして威嚴を保つことは出來なかつた。それで内氣娘の無言の讃美から、若しくは阿婆擦れの諂諛から、畏縮すればする程、迫害は增大し來たつて、遂に彼が一身の苦艱となるに至つた。

註　日本では俳優が下級の多情な女達に同樣な魅力を及ぼし、其魅力を發情に利用することは往々あるが、僧侶がこんな蠱惑を振るふ例は滅多にない。

彼は兩親を久しい前に失つて、浮世の羈絆(ほだし)はない。それで彼の職務とそれに伴なふ研究にのみ沒頭し、禁制の情事を念頭に置くことは欲しなかつた。異常の美貌——生ける偶像の美貌——が只だ彼の不運であつた。彼が取り上げる事の出來ぬ條件で富を提供する者もあつた。娘達は彼の脚下に身を投じ彼の愛を哀願してはねられた。艶書は絶えず送られたが、いつも返事はない。或は『岩が根松』だの『面影に寄る浪』だの『別(わか)れても末に逢はんとぞ思ふ小川』だのと云ふ古典的な謎の樣な文句を書いたのもあり、又或は技巧を弄せずに、只だ打附けにしめやかて、初戀の告白の切なる情の溢れて居るのもあつた。

こんな手紙にも初めの中は、若僧の心動かざること彼が似て居る佛像の樣に、人目には

見えた。併し實の處彼は佛ではない、弱い人間に過ぎなかつた。そして彼の境遇は辛いものであつた。

或る一人の少年が寺へ來て、一封の手紙を渡し、送り主(ぬし)の名を囁くが否や闇の中へ逃げて往つた。後で寺の納所坊主の證言に依ると、僧は其手紙を一誦し、再び封筒に入れて、疊の上の座布團の傍へ置いたといふ。それから久しい間、默想に耽るかの様にぢつとして居たが、やがて硯箱を出して、宗門の上長宛てに一書を草し、それを机の上に置いた。つぎに時計と汽車の時間表を見た。時間は少し早かつた。夜は眞暗で風が吹いて居る。暫く佛壇の前に平伏して祈禱を捧げた。さて闇を衝いて寺を出て、丁度時間に汽車の線路へ着いた。そして神戸發の急行列車が轟々と進み來る影を見ながら、線路の中央に跪づいた。つぎの瞬間には、鐵軌(レール)を血みどろにして横たはつた彼の殘骸は、提灯の光で見ただけでも、疇昔の不思議な美貌の讃美者を絶叫せしめるに十分であつた。

上長に宛てた手紙は發見された。それにはただ彼は精神の力を失つたのを感じて、罪を犯さぬ爲めに自殺と決心した旨を述べてあつた。

も一つの手紙が置いたまゝに、床の上に横たはつて居た――其手紙は女言葉で書かれて

あつて、片言隻語も悉く謙譲な愛の詞てないものはなかつた。凡ての艶書の如く（艶書は決して郵便には託されぬ）日附もなく、名もなく、頭字もなく、封筒にも宿處が書いてない。我々の佶屈な英語に譯すと、不完全ながらつぎの樣なものである。——

かやうな事を申し上げるのは、大それた事てせうが、申し上げずに居られませんので此手紙を差し上げます。賤しい私は、過ぐる彼岸會の折にお姿を拜見してから物思ひを始めました。そしてそれからといふもの一瞬時も忘れる事が出來ません。のみならず日増しに思ひの淵に沈む計りて、眠ればお姿を夢に見、覺めてお姿の見えぬ時は、心は闇て空虛て、ただ泣いて計り居ります。此世に女と生まれて來ましたからには、身分の高いお方にも、嫌はれまいといふ大それた願を起こしました、不屆をお許し下さいませ。及ばぬお方と知りつつ此樣に心を惱ますとは何といふ愚かな心なしの仕業で御座いませう。でも此心を押へ附ける事は迚も出來ぬと諦めましたので、其心の奥から出て來る不束な詞を、不束な筆に寫して御覽に入れるので御座います。何卒哀れのものと思召して下さい。お願ひて御座いますから、すげない御返事をお遣はし下さいますな。これもただただ卑しい胸から溢れ出たものと、不憫の者に思召し、只だ切なさ遣る瀬なさの餘り

に、厚かましくも、此文を差し上げる心の程を――お慈悲を以て――御推察の上御判斷下さいませ。お情深い御返事を、一日千秋の思ひてお待ち申し上げます。めでたく可祝。
御存じの者より戀し懷かしの方樣まゐる。

三

自分は佛敎に精通せる日本の友人を訪ねて、此出來事の宗敎的觀察に就て質問した。自分には、其自殺は人間の弱さの告白としても、壯烈な行爲と思はれたのであつた。

然るに友人はさう思はなかつた。却つてそれを非難した。聞いて見ると、罪を遁れる爲めに、自殺を考へるだけでも、佛陀は之を精神的に――聖者と伍する資格なしとて――勸當したものだと云ふ。彼の自殺せる僧はといふと、釋尊が愚者と名づけた者の一に該當する。己れの肉體を破毀して、罪の源泉を破毀したと想像し得るのは愚者のみであるといふのである。

『併し』自分は抗議した。『此人の生活は純潔でした――彼は、意識せずに、他人に罪を犯させない爲めに、自ら死を求めたと假定すれば如何でせう』

友人は皮肉に微笑した、そして云つた。

『昔、家柄のよい容貌も美しい日本の女で、尼にならうと思つた者がありました。或る寺へ往つて、望の程を述べた處が、住持の上人は彼女に云ひました。「御身はまだ若い。今迄殿中の生活をなされたさうな。俗人の眼には甚だお美しい。其お顔故に、俗界の快樂に還らうといふ誘惑が、何れ參るでござらう。且つ又御身の願ひは一時の悲嘆から起こつたものぢや。お望みを叶へる事は出來申さぬ」併し彼女は尚ほ餘り熱心に懇願したので、上人は寧ろ打棄るがよいと考へて往つて了つた。彼女は一人取り殘されて、見廻はすと室には大きな火鉢――眞赤におこつた炭火の――がありました。彼女は其處にあつた火箸を眞赤になる迄燒いて、それで恐ろしくも顔を突き刺して傷つけ、其美しさを永久に破壞して了ひました。其時上人は肉の燒ける臭氣に驚かされて、急いで來て見ると、此有樣を見附けて嘆きました。併し彼女は、聲さへ震るはさずに、再び懇願しました。「私が美しいからとて、お弟子には取らぬと仰せられましたが、今はお取り下されませうか」其處で彼女は入道を許されて尼となりました……さて何方が優れて居りませう、此女の方でせうか、それとも貴君が感服しておいての若僧の方でせうか」

『併し顔を傷つけて醜くするのが、あの際、彼の僧の取るべき義務でしたらうか』と自

分は問うた。

『そんな事はありません。此女の行爲でも、誘惑の防禦としてのみ爲したのなら、取るに足らぬものでしたらう。自己毀損はどんなのでも佛法では禁じてあります。彼女は其禁を犯したのです。併し彼女は直に道に入り得る爲めに顏を燒いたので、罪に抵抗する意志の弱さを恐れて燒いたのではありませんから、彼女の過失は小さい過失でした。之に反して自殺した僧は大罪を犯したのです。彼は彼を誘惑した女共を改心させ、道に導くべきであつたのです。彼は弱くてそれが出來なかつた。若し又僧として罪を避ける事が出來ぬと感じたら、屑よく還俗して、俗人としての戒律を持せんと試みる方がよかつたでせう』

『すると佛敎に從ふと、彼は何の善果をも得なかつたのですな』と自分は尋ねた。

『どうも得たと想像することは出來ません。ただ佛法を知らぬ者に依つてのみ、彼の行爲は賞讃されるのです』

『して佛法を知る人に依つては、其結果はどうなると考へられるのでせう――彼の行爲の業果は』

友人は一寸默つて居たが、やがて考へ深さうに云つた。――

『其自殺の一伍一什は十分に分かりませんが、多分それは初めてではありますまい』

『前生でも自害をして、罪を遁れようと試みた事があらうと仰しやるのですか』

『さうです。或は幾つもの前生で』

『彼の未來はどうなるでせう』

『佛でないと其間には正確に答へることが出來ません』

『併し佛の教へにはどう書いてあります』

『我々には彼の僧の心の中を、精確に知る事が出來ません、といふ事をお忘れになりましたな』

『假りに罪を犯すことを遁れる爲めにのみ、死を求めたと致しますれば』

『其時には、彼が完全に自分の意志を統御し得る迄、幾千萬回でも同樣な誘惑に會ひ、それに伴なふあらゆる悲み、あらゆる苦しみを反復すでせう。幾度死んでも克己といふ最高の任務を遁れることは出來ません』

友人と別かれた後までも、彼の言葉は自分にこびりついて退かなかつた。そして今でもこびりついて居る。其言葉は、此章の始めに擧げた學說に就て、新たな考へを自分に起こさせた。自分には戀愛上の不可思議に關する、彼の凄壯な解釋は、我が西洋風の解釋よりも、寧ろより多く一考を價する樣に思はれてならぬ。自分は思ふ、死に導く戀愛は、幾回

となく埋められた情熱の飢餓といふだけよりも、もつと意味の深いものではないか。井上に長く忘れられた（前世の）罪過の避くべからざる應報（むくい）を意味するものではないだらうか。

第十章　保守主義者

あまさかる日の入る國に來てはあれと
やまと錦の色はかはらし

一

彼は內地の或る市に生まれた。其處は三十萬石の大名の城下で、外國人の來た事のない處であつた。高祿の武士であつた彼の父の屋敷は、城主の城を繞る濠の外にあつた。屋敷は大分廣く、後ろの方と周圍には、自然の風景を模した庭園があつて、其中に軍神の小さい祠があつた。今から四十年前には、かういふ屋敷が澤山あつたのである。藝術家の眼には、今でも殘つて居る少數のかういふ家屋は、仙女（フエーリー）の宮殿の樣で、其庭園は佛教の極樂の夢のやうに見ゆる。

併し武士（サムラヒ）の子は當時は嚴酷に訓練された。自分の書かうとする彼にも空想に耽る時間な

どはなかつた。父母の愛撫を受ける期間は痛ましくも短かつた。袴着の式――當時の大禮――もせぬ中から、出來るだけ乳臭い恩愛の手から引き離し、子供氣の自然な衝動を制へる樣に教養された。家庭で母の傍に居られる間だけは、好きな乳母に甘へようとも、母に連れられて戸外を歩んで居るのを見附けられると、「まだ乳を飲むか」などと、遊び仲間からからかはれるのが常であつた。しかも母の傍に居られる時間は決して長くはなかつた。凡て優長な娛樂は教養上嚴禁されて居た、そして病氣の時の外、衣食の滿足すら許されなかつた。殆ど口が利けだすと直ぐ、義務を生存の指針と考へ、自制を行爲の第一要件と考へ、苦と死とを、一身に取つては輕いものと考へる樣に指導された。

　家庭内の眼につかぬ安居に於ての外、青年期の間中、決して弛まない冷やかな沈着を養成しようといふ、此スパルタ的訓練には、更に一層凄い方面があつた。男の子は血を見ることにならされたのである。彼等は死刑の執行を見る爲めに連れ行かれ、そして何等の感動を表はさぬやうに仕込まれた。又歸宅すると、梅干の汁を混ぜて血の色に染めた飯を十分に喫して、潜んで居る恐怖の念を消すやうに仕向けられた。それよりももつとむつかしい事さへ、幼い男兒に要求せられる事があつた。――例へば、深夜刑場に獨りで行つて、勇氣の證據として、生首を持ち還ることなどである。武士の間では、死者を恐れることは、

生ける人を恐れると同様に、輕蔑すべきものと考へられたのである。武士の子は何物をも恐れぬと證明されねばならなかつた。その證明に強要される態度は、完全なる冷靜さであつた。空威張も臆病の態度と同様に擯斥された。

男の子が生長すると、快樂は重に、武士が不斷の戰爭準備である體力の練習——弓術、乘馬、相撲、劍術等に求めねばならない。遊び相手が僕人か其の爲めに選ばるる。併しそれは彼よりも年嵩な家來の子で、武術の練習を補助する能力を有せねばならぬ。彼等は又水泳、小舟の漕法をも教へて、彼の筋力を發達せしめねばならない。彼は毎日の大部分をこんな體育と、支那古典の研究とに費やさしめらるるのである。食物は潤澤であつても美味ではない。衣服は儀式の時の外は、薄くて質素である。そして暖を取る爲めに、火を用ふる事は許されぬ。冬の朝稽古に筆が握れぬ程手が冷えると、氷の様な水に手を突込んで、血行を恢復するやうに命ぜられる。足が寒氣で凍えると、雪の中を走り廻はつて、暖める様にと命ぜられる。武家特殊の儀禮の訓練は、更に一層嚴であつた。そして彼の帯に挾める小さい刀は、伊達や玩具でない事を早くから教へられる。又其用ひ方や、武家の掟が命ずる時には、びくともせずに、何時でも、直に我が命を斷つ術を教へられる。

註　「それは眞實其方の父の首か」と或る領主が七歳になる或る武士の子に問うた。其子は直に事情を推察して仕舞つた。彼の前に据ゑられた斬り立ての首は、實は父の首ではなかつた。領主は騙されて居たのだつた。併し更に騙すのが必要であつた。それで小兒は死せる父に對する樣な悲嘆を表はして、生首を拜した後、直に自分の腹を切つた。其殘酷な孝心の表現で領主の疑は消えた。其間に勘氣を蒙つた父は、首尾克く逃げおほせた。此子供の話は日本の劇や歌に今でも仕組まれてある。

又宗教に關しても、武士(サムラヒ)の子の教育は特殊なものであつた。彼は先づ古神道の神々と、祖先の靈を崇(あが)めることを教へられ、つぎに支那の經書を讀ませられ、つぎに又佛教の哲理と教義の幾分を教へられた。併し同時に極樂地獄は、ただ無智の者への寓話で、優越の士は、ただ正道の爲めの正道の愛と、普通の法則としての義務の會得とに依つてのみ、行ひを正し、卑吝の心を抱くべからざる旨を教へられた。

少年期から青年期に移ると、段々彼の行爲は監督を受けなくなる。自己の判斷で行動するの自由が次第に與へられる——併し過失は決して看過されず、重き犯罪は決して恕せられる事はなく、理由(いはれ)ある非難は死よりも恐れねばならぬ、といふことを十分承知の上でである。他の一方に於て、青年の武士が大いに警戒すべき樣な、道德上の危險は甚だ少かつた。娼妓は多くの地方の城下には嚴禁されて居た。そして小說や劇に反映されて居た樣な、

道義に關係のない俗界の俗事にさへ、若い武士は通じて居なかつた。彼は柔弱な情愛とか戀情とかに訴へる小說稗史を、全く男らしからぬ讀物として排斥する樣に敎へられた。それから觀劇も彼の階級[註]には禁ぜられて居た。

註　武家でも女子は、少くとも多くの地方では、芝居に行くことが出來た。たゞ男子は出來なかつた――行けば武士の作法を破ることになる。併し武士の家庭では、或は屋敷內では、特殊の私的興行が演ぜられることもあつた。其場合には旅稼ぎの役者を雇ふのである。自分は、今迄芝居へ行つた事がないと云つて、觀劇の招待に決して應じない溫良な老士族を多く知つて居る。彼等は今でも武士作法を守つてゐるのである。

かう云ふ譯で、舊日本の善良な地方的生活では、若い武士は類稀なる純心純情の人となる事が出來た。

自分が描き出さうとする若い青年武士も、此の如くに生ひ立つたのである――勇敢にして禮儀正しく、克己心に富み、悅樂を排し、そして、愛の爲め忠義の爲め名譽の爲めには、卽座に一命を捨つるを辭せざる男となつたのである。併し體格と精神に於ては、既に一角

の武士ではあつたが、まだ年齡に於ては殆ど子供に過ぎなかつた。其頃の事である、初めての黑船の來舶で國を擧げて驚倒する椿事が起つたのは。

二

海外に航する者は死に處すといふ家光の政策は、二百年の間、日本國民をして外國の事に全く無智ならしめた。海の彼方に發展しつつあつた巨大な强國に就ては、何も知られてなかつた。長崎には蘭人の居留地が永らく存在して居たが、日本の眞の地位——十六世紀式の東洋の封建制度が、三百年の先輩なる西の世界に壓迫されて居る狀態——に就ては何等啓發せしめる處がなかつた。其西の世界の驚くべき實況は、話して聞かせても日本人の耳には小兒を喜ばせる爲めの作り話の樣に聞こえたであらう、若しくは蓬萊宮の昔噺と一緒に考へられたであらう。『黑船』と呼ばれた米國艦隊の來舶に至つて、初めて政府は白國の防備の手薄さと、外患の切迫とに目を覺ましたのであつた。

やがて第二次の黑船來航の報道に依る國民の興奮は、間もなく幕府の外國と戰ふの力なきことの暴露に依る驚愕に伴なはれた。これは北條時宗の時の蒙古來襲よりも、更に大な

る危險の迫つた事を意味するに外ならない。蒙古の時は國民は神助を神に祈り、天子も親ら伊勢の大廟て、祖先の靈に擁護を乞うたのてあつたが、其祈りは聽き屆けられ、天地晦蒙、雷鳴電閃、神風吹き起こつて、忽必烈の艦隊は沈沒せしめられた。此度とても、神助を乞ふ祈禱の捧げられぬ筈はなかつた。事實無數の家庭、幾千の神社で祈禱が行はれた。併し此度は神々も應じない、神風は起こらなかつた。我が主人公の少年武士も、父の庭内にある八幡の小さい祠に祈つたが、しるしがないので、神々も力を失つたか、或は黑船の異人は、より强い神々の擁護の下にあるかと疑つた。

三

間もなく、夷狄は驅逐されぬに決定した事が明らかになつた。彼等は西からも東からも、幾百人となく入り込んて來た。そして彼等を保護するあらゆる手段が講ぜられた。彼等は日本の土地に、彼等自身の珍妙な市街を建てた。[註]政府は更に、凡ての學藝に於ては、西洋

註　德川幕府。

の學問を學ぶべきこと、英語の講習は公教育の重要な課程たるべきこと、公教育其者も、西洋流に改造せらるべきことを命令した。政府は尚ほ國家の將來は、懸かつて外國の國語と科學との、研究練達にあるべきことを宣言した。卽ち此等の研究が良好な結果を生み出す迄の間は、日本は實際上外人の支配に委ねらるるといふ譯である。尤も事實はかう宣言せられた譯ではないが、此政策の歸着する所は明らかであつた。此事情が分かつた爲めに起こつた猛烈な反動の後に――民衆の大混亂、武士の制へ附けた憤激の後に――強い好奇心が起こつた。それは優勢な武力を見せただけで欲するものを得ることの出來た、無禮な外人の外觀性格に就てであつた。此一般的な好奇心は、夷狄の風習と居留地の異樣な市街を圖にした、安價な彩色版の大量な刊行と配付とに依つて、幾分か滿足せしめられた。外人の眼には其のけばけばしい木版畫は、諷刺畫(カリカチュア)としか見えなかつた。併し畫工の目的は、決して諷刺畫の積りではなかつたのである。彼は實際彼の眼に映つた通りに描かうと試みたのであるが、眼に映つた處は、猩々の樣な赤い毛の生えた、天狗の樣に鼻の高い、變痴奇な形と色の衣服を着、倉庫か牢屋の樣な建物に住んで居る、綠眼の怪物であつたのである。國內に幾百千と賣られた此等の版畫は、色々の不思議な觀念を與へたに相違ない。併し見馴れぬものを描き出さうとする試みとして、決して惡意あるものではなかつた。我々

が其頃の日本人の目にどういふ風に映つたかといふ事――いかに醜惡に、怪奇に、滑稽に見えたかといふのを了解する爲めには、此等の古版畫を研究するがよい。

城下の若武士達は、間もなく西洋人を見る機會を得た。それは藩侯に依つて、彼等の爲めに召し抱へられた教師で英國人であつた。彼は護衛せられて來た。そして名士として彼を厚遇せよとの命が下つた。彼は木版畫の外國人の樣に、全く醜くはなかつた。尤も毛は赤く眼の色は變つて居た。併し顏はさういやな顏ではなかつた。彼は直に倦まざる觀察の目標となり、又永くさうであつた。どれ程彼の一擧一動が注視せられたかは、西洋人に關する明治以前の珍妙な迷信を知らぬ者には推察されない。西洋人は知的で恐ろしい動物とは考へられたが、一般に普通の人間とは思はれなかつた。彼等は人間よりも、寧ろ動物に近いものと考へられた。彼等の身體は毛深く珍奇な形態を有し、齒は人間の齒とは異り、内臓は特殊なもので、道念は魔物の道念であると考へられた。武士はさうでもないが、民衆が外人を見て畏懼したのは、形態上からではなく、迷信からの恐怖であつた。日本人は農民でも決して臆病ではなかつたのである。併し彼が當時の外人に對する感情を知るには、日支兩國に共通であつた、超自然力を備へて、人間の形態を裝ひ得る動物に就て、

又は半人半神の動物の存在、又は古い繪本にある荒唐な動物――脚の長い、手の長い、そして髯のある怪物（足長手長）で、怪談の挿畫に描かれたり、或は北齋の筆で滑稽に描かれたりして居るものに就ての、古い信念を若干知悉することを要する。實際新來の異人等の容貌は、支那のヘロドタスに依つて語られた架空談に確證を與ふる樣に見え、彼等が着けた衣服は、人間ならぬ部分を隱蔽する爲めに、考案された樣に思はれたのである――それで新來の英國人教師は、幸にも、自分は其事實を知らずに居たが、珍獸を觀察する樣な態度で內々觀察されて居た。それにも拘らず、學生からはただ鄭重に禮遇されて居た。彼等は「師に對しては影を踏むこともならぬ」と敎ふる支那の經典に從つて彼を遇した。兎に角武士の學生には、師が苟くも敎へ能ふ限りは、其完否に人間たると否とは問題でなかつた。義經は天狗から劍法を授けられたのである。其外、人間ならぬ者が學者であり、詩人であつた例がある。註

註　かういふ話がある。菅原道眞（今天神として祀らるゝ）の師であつた、大詩人都良香が、京都の御所の羅生門を通る時、丁度其時浮かんだ詩の一句を高らかに誦した――氣霽れて風新柳の髮を梳る――すると直に門內から重い嗄る樣な聲が唱和して云つた――氷消けて波舊苔の鬚を洗ふ――都良香は見廻はしたが誰れも居ない、家に歸つて弟子達に顛末を告げて、二句を反復唱へて聞かした。すると菅原道眞は答

二句を讃めて曰つた――『實に第一句は人語である、併し第二句は鬼語である』と。

併し禮節の假面を少しも外づさずに、外人教師の習性は精細に視察された。そして其視察を比較しあつて、出來た最終の判斷は全く喜ばしいものではなかつた。教師自身は兩刀手挾んだ弟子達から、己れにどんな評釋が下されたかは夢想だも爲し得なかつた。又教室て作文を監督して居る中に、つぎのやうな會話の行はれて居るのを了解し得たとて、彼が心の平和は增進される事はなかつたらう――『彼の肉の色を見給へ、柔らかさうてはないか。造作もなく一擊て首は落ちるだらう』

或る時彼は、彼等の相撲の取り方を試みさせられた。それはただ慰みの爲めと彼は想像した。併し實は彼等が彼の體力を測る企てであつた。そして彼は力士として高い評價を贏ち得なかつた。『腕は確に强い』一人が云つた。『併し腕を使ふ時、身體の使ひ方を知らぬ。そして腰が甚だ弱い。片附けるのに骨は折れぬ』

『外國人と』他の一人が云つた。『戰ふのは樂だと僕は思ふ』

『劍て戰ふのは樂だらう』も一人が答へた。『併し彼等は鐵砲や大砲の使用法は、我々よりも上手だよ』

『我々だつて上手になれるさ』最初の一人が云つた。『西洋の戰法を習つて仕舞へば洋兵は恐るゝに足らん』

『外人は』も一人が云つた。『我々の樣に丈夫でない。直ぐ疲れる、そして寒氣に弱い。我々の先生も冬中室にどつさり火をおこして置くぢやないか。我々は五分間も其處に居ると頭痛がして來る』

こんな事があるにも拘らず、若者等は敎師に對しては親切であつたので、敎師も彼等を愛した。

四

大地震の樣に、豫告なしに大變事が起こつた。大名制度は郡縣制に變更される、武士階級は廢止される。全社會組織が改造される事になつた。我が靑年武士は、敢て忠勤を領主から天子に移すを困難とも思はず、又彼の一家の富は、此瓦解の爲めに損はれることもなかつたが、此出來事は彼の心を悲痛に滿たしめた。彼は此改變に依つて國家の危機の大な

ることを知り、又古來の高い理想と、あらゆる大切と考へた物の消滅を感じた。併し徒に懊惱することの無益な事をも知つた。今は自己改造に依つてのみ國民は其獨立を救ひ得る。國家を愛する者の明瞭な義務は、此必要を認め、將來の舞臺に男らしい演出を見せる爲めに、己れを適當に訓練するに在る。

武士の學校で、彼は大いに英語を學び、どうやら英人と話し得る自信を得た。そして長い髪を切り、兩刀を棄て、英語の稽古を、有利な狀況の下に繼續する爲めに、横濱に出た。横濱では凡てが見馴れ聞き馴れぬ物だらけで、初めは不快の感を懷いた。日本人さへ其處では外人との接觸で變つて居た。皆が皆野鄙で粗豪で、彼の故鄕では平民もせぬ樣な言動を平氣でして居た。外國人に至つては、更に不愉快な感を與へた。折しも新居留民は、彼を征服者に對する征服者の態度を取り得た時で、開港場の生活は、今日よりもずつと放慢であつた。煉瓦や漆喰塗りの木造建築物は、例の彩色版の異國風習圖の、不愉快な思ひ出を新たにした。そして西洋人に關する少年時代の空想を、容易く拂ひ退ける事が出來なかつた。廣い知識と經驗に基礎を置いた理性は、十分に彼等の何者たるかを理解したが、感情の上からは、彼等も同じく人類であるといふ感がしつくりと起こらなかつた。人種的感情は知力の發展よりも古い、そして人種感に伴なふ迷信は容易に取り除き難い。其上彼の武

士魂も、時に見るものの聞くものの醜悪さに掻き立てられる——強きを挫き弱きを助けようといふ、父祖傳來の熱血を湧き立たせる出來事が多かつた。併し彼は知識の妨害物として、こんな反感を征服しようと努めた、國家の敵の眞相を靜かに攻究するのは、愛國者の義務であつたから。彼は遂に偏見なしに周圍の新生活を觀察するやうに自己を訓練した——其缺點と同樣に其美點をも、其短處と同樣に其長處をも。すると、彼は其處に仁愛を發見した、理想への憧憬をも發見した——其理想は、彼自身の理想とは異つて居るが、彼の祖先の宗教と同樣に、幾多の戒律を要求するので、尊重すべきものであることを知つた

此了解から、彼は教育と教化の事に沒頭して居る、一人の老牧師を愛し且つ信ずるに至つた。其老宣教師は此若き武士には非凡な適合性があるのを見拔いたので、特に彼を改宗せしめたいと思つた。そして彼の信賴を得る爲めの勞を惜しまなかつた。彼は何くれと彼を助け、佛蘭西語、獨逸語、希臘語、拉典語までも少しづつ教へた上に、可なり大量の書籍を悉く彼の自由閲讀に提供した。歷史、哲學、旅行記、小說を含む外國の書籍を渉獵することは、日本の學生に取つて容易に得られぬ特權であつた。彼は感謝を以て之に酬いた。それで書籍の所有主は後に苦もなく此祕藏弟子に、『新約全書』の一部を讀ませることに成功した。若者は『邪宗』の教義の中に、孔子の說に似たる道義を發見し、驚嘆した。彼

は老宣教師に向つて云つた。『これは我々には新しい事でありません、確に善い教です。私はこれから此本を讀んで、そして熟考しませう』

五

研究と熟考とは、青年を、初め彼が思つたよりも、深入りさせた。偉大な宗教としての基督教の承認の後から、又別種の承認と、基督教を奉ずる民族の文明に就ての色々の想像が起こつて來る。當時多くの省察に富む日本人には、否、恐らく國政を指導する敏感の人人にさへ、日本は全く外人の支配の下に移らんとする運命にあるやうに思はれたのである。併尤も絶望ではなかつた。そして一縷の望だに殘る限り、國民の義務は明らかであつた。併し帝國に對して用ゐらるべき敵の力は抵抗すべくもない。そして其敵の力の强大さを研究しながら、若き日本人は、抑も其力は如何にして何處より得來たつたかと、恐怖に近き驚嘆を以て怪しまざるを得なかつた。それは老牧師の斷言する樣に高級な宗教に或る神祕的な關係を有するのであらうか。國家の繁榮は、天道の遵守と聖賢の敎に從ふ事の多少に依ると說く支那の古哲學は、確に此說を裏書きする。若し西歐文明の優れたる力は、實際西

歐倫常の優秀さを示すとせば、其高級な宗教を採用し、全國民の改宗に努力すべきは、苟くも國を愛する者の明らかなる義務ではなからうか。其頃の青年は支那の學問で教育せられ、西洋の社會發達の歴史に通ぜざるは必然の理で、最高の物質的進歩は、基督教の理想とは相容れざる、又凡ての大なる道德と相反する、酷薄なる競爭に依つて重に發展したものだとは知るよしもなかつた。西洋に於てさへ今日無數の愚民は、兵力と基督教の信仰との間に、或る神聖な關係があると想像して居る。そして我々の教會の壇上から、政治的强奪を神意と認めたり、强力な爆藥の發明を神託と稱したりする說教が爲されるのである。今でも我々の中には、基督教を信ずる民族は、他教を奉ずる民族を掠奪し絕滅せしめる天命を帶びてるといふ迷信が殘つて居る。尤も偶には、我々は今でもトールとオヂン[譯者註]を信奉するものだといふ、確信を發表する人がある――此人達の說に依るとただ昔と異る所は、オヂンは今は數學者となり、トールの槌ムジョルナーは、今は蒸氣で運轉せられるといふに過ぎない。併しこんな人は宣教師からは、無神論者、恥知らぬ生を送る人と罵られる。

譯者註　何れも北歐神話中の神、トールは雷神にて、ムジョルナーと云ふ槌を持つ、オヂンは學問敎化の神。

それはさておき、やがて若き武士は、親戚の反對あるにも拘らず、基督教徒たらんと決心した。これは隨分大膽な行爲であつた。併し幼年時代の教育の結果として、彼は堅い意志を有つて居たから、兩親の悲みに依つてすら、決心を曲げられる事はなかつた。祖先の宗旨を棄つることは、一時の苦痛を意味するばかりでない。親戚、舊友の輕蔑、身分の喪失、及び赤貧から來るあらゆる難儀を意味するのである。併し彼は武士教育に依つて、己れに克つことを教へられて居た。彼は憂國の士として、眞理の探求者として、己れの義務だと思ふものを見た、そして恐れ悔まずに之に突進した。

六

近代科學から借り來たつた知識の助力て、破壞した信仰の跡へ、西洋の信仰をはめ込まうと望む者は、舊信仰破壞に用ゐた議論は、新信仰に對しても同樣の破壞力を有するといふ事に氣が附かぬ。一般の宣教師は、彼自身近代思想の最高標準に達しもせず、元來彼等自身よりも、より强き東洋人に少許の科學を教へた結果が、どうならうと豫見する事も出來ぬ。そこて彼の弟子が聰明てあればある程、其弟子の基督教徒たる期間が短いのを發見

して、驚き遽てて居る。科學を知らぬ爲めにのみ、佛敎の宇宙說で滿足して居た、優秀な頭腦の舊信仰を打破するのは、非常に困難ではない。併し其頭腦の中へ、東洋の宗敎的情緒の代りに西洋のを、儒敎及び佛敎の倫理の代りに、長老敎會(プレスビテリアン)若しくは浸禮敎會(バプチスト)の敎條(ドグマ)を置き代へようとするのは不可能である。我々の近代の福音布敎師は、此心理學的難關が道に橫はつて居る事に氣が附かぬ。ジェスイット派や托鉢派(フライアー)の信仰が、其打破せんと力めた他宗敎と同樣に、迷信的であつた昔時に在つても、同樣な障害は存在して居た。されば其偉大な眞摯さと火の樣な熱心さで、驚くべき業績を舉げた西班牙僧も、彼の空想を十分に實現するには、西班牙兵士の劍を必要と感じたに相違ない。改宗の事業に取つては、今日の情態は十六世紀に於けるよりも更に不利である。敎育は宗敎を離れ科學を基礎として改造された。我々の宗敎は倫理上の必要事項として、社會が承認する一形式となりつつある。我々の僧侶の職務は、道德の警官と徐々に變更されつつある。そして我々の敎會の尖塔の林立は、信仰の增進を證するのでない、ただ傳統に對する尊敬の增進を意味するばかりである。西洋の傳統が極東の傳統となる筈はない。そして外國宣敎師が、日本に於て、道德警官の役目を演ぜさせられる筈もない。既に我々の敎會中の尤も開化せるもの、尤も廣濶な敎養あるものは、宣敎師の無用なることを認め始めたのである。併し眞理を見る爲めに、

は必らずしも舊い獨斷主義を棄てるにも及ばぬ、完全な教育は之を示すに十分である。それて最も教育ある國民獨逸は、日本の內地に一人の宣教師をも送つて居らぬ。宣教師努力の結果として、肝腎な改宗者の年々の報告よりも一層著しきは、日本の宗教の改革と、日本僧侶の教育程度を向上せよと勸誘する、日本政府の布告であつた。尤も此の布告の出る久しい以前から、富める宗派は、西洋式の佛教學校を建設した。眞宗の如きは、既に巴里(パリ)や牛津(オックスフォード)で教育を受けた學者——其名は世界中の梵語學者に知られて居る——を有して居た。日本は確に其中世紀式の宗教より一層高き形式の宗教を要するであらう、併しそれは、古來の形式から發展したものであらねばならぬ——外からでなく內から發展したものであらねばならぬ。西洋の科學といふ堅甲を着けた佛教こそ、日本人の將來の需要に應ずるものであらう。

横濱に於ける我が若き改宗者は、宣教師の失敗の著しい一例となつた。あらゆる物を犧牲に供して、一基督教徒——或は寧ろ一外國宗派の一員——となつて、一年も經たぬ中に、彼は公然それ程高價に購つた信仰を拋棄した。彼は宣教師等よりも遙かによく當代の大思想家の著述を研究し了解した。其宣教師等は、彼の提出する問に答へる事も出來ず、ただ

最初に其一部分を研究すべく彼に勸めた書籍は、全體としては信仰に害あることを斷言するに過ぎなかつた。併し彼等は、其の書籍に存在すると稱する誤謬を證明すること能はざるが故に、彼等の警告は何の役にも立たなかつた。彼は初め不完全な理論に依つて、獨斷的教條に引き入れられたのであつたが、廣く深い理論に依つて、其教條を超越して仕舞つた。彼は公然と、其教義は眞の理義、若しくは事實に基づいたものでないといふことを、又彼自身は、宣教師が基督教の敵と呼ぶ人々の、意見に從はざるを得ぬといふことを表明して、教會を去つた。宣教師等は之を墮落と稱し、それに就いて色々の惡評を立てた。

併し眞の墮落はまだ遙か遠くにあつた。彼は同樣の經驗を有する多くの人と違つて、宗教上の問題は、一時彼から退却しただけであつて、彼が今迄學んだ處は、これから學ぶべきもののいろはに過ぎないと承知して居た。彼は宗教といふものの比較的の價値――保守抑制の力としての宗教の價値には、全く信を失はなかつた。或る眞理――文明と宗教との關係に就ての眞理――の曲解が、初めに彼を誤らせて、改宗せしめたのであつた。支那の哲學は、僧侶なき社會は、決して發達せぬといふ、近代の社會學が認むる所の法則を彼に教へた。又佛教は、虛說――事實として衆生に示さるゝ寓話、形式、記號――も善行の發達を助ける方便として、價値と存在の理由を有することを教へた。此見解からは基督教も

彼には少しも興味を失はなかつた。そして基督教民族は、道徳優秀だといふ——開港場の生活には少しも實現されて居ない事實——宣教師の教は疑ひながらも、彼は自ら西洋に於ける、宗教の道德に對する影響を目撃せんと望んだ。卽ち歐羅巴諸國へ行き、彼等の發展の原因と、彼等の强大な理由を研究せんと望んだ。

彼はかう思ふと直に實行に取り掛かつた。彼をして宗教上の懷疑家たらしめた知的活動は、同時に政治上に於ても彼を自由思想家たらしめた。彼は之が爲め、當時の政策に反對な意見を公表して、政府の怒を買つた。それで彼は新思想の刺激の下に、不謹愼な言行を敢てする凡ての者と同樣に、國外退去の止むを得ざるに至つた。かくして彼には、遂に世界中を彷徨するに至るべき放浪生活が始つた。初めには朝鮮に隱れ家を求め、つぎに支那に往つて教師生活をしたが、最後にマルセール行の汽船に搭乘する自分を見出した。彼は無一文であつたが、歐羅巴でどうして生活するといふことは考へなかつた。若くもあるし、身長は高し、力業には長けて居るし、儉約で貧乏には馴れて居るし、自分といふものに十分な自信を有つて居た。それに彼を助けて與れる樣な、外國人に宛てた紹介狀も有つて居た。

併し故鄕の地を再び踏む迄には、長い年月を經過せねばならなかつた。

七

其長い年月の間、彼が見た様に西洋文明を見た日本人は他にない。彼は歐米二洲を跨にかけ、多くの都市に住み、色々の職業に働いた――或る時は頭腦で、併し多くは手で――そして彼の周圍の生活の、最高最低、最善最惡を研究することが出來た。併し彼は極東の眼を以て見たので、其判斷の仕方も我々の仕方ではなかつた。西洋が東洋を觀るのも、東洋が西洋を見るのも同じ事である――ただ異る處は、各自が尤も尊重する處のものは、他に尊重されぬがちであるといふことである。そして雙方とも半分は正しく、半分は間違つて居る。又完全なる相互の了解は嘗てなかつたが、今後とてもある筈はない。

西洋は彼には凡ての豫期よりも大きく見えた――巨人の世界の樣に。そして錢もなく友もなく、大きな都會に一人ぼつちで立つ時に、いかな大膽な西洋人をさへ、弱らせる所のものが、此東洋の一浪客を弱らせたに相違ない。それは幾百萬の忙しげに往來する市民には振り返つても見られぬといふ感に依つて、話し聲も聞こえぬやうな小止みなき車馬の轟きに依つて、巨大な建築物といふ生命のない怪物に依つて、心も手も安價な道具として、

出來る限りの極度迄虐使する、富の力の偉大なる表現に依つて、喚起される漠然たる不安の感である。恐らく彼はドレイ[註]がロンドンを見た様に歐洲の都市を見たのであらう――薄暗いアーチの重なり合つた陰氣な莊嚴さ、見渡されぬ迄つぎからつぎへと續く花剛岩の洞窟、麓には勞働の海が逆卷く石造建築の山、さては數世紀に跨がつて、徐々に集大成される力の凄さを展開する洪大な場所――かういふ風に見たのであらう。併し日出をも日沒をも、又天（そら）をも風をも斷絶（たち）つて見せぬ、無限に續く石崖と石崖との間に、彼に訴ふる美といふものは少しもなかつた。大都市に我々を惹き附ける所のものは、悉く彼を厭がらせ若しくは抑壓した。明かるい巴里ですら、間もなく彼を倦き倦きさせた。それでも巴里は、彼が長く逗留した初めての外國都市であつた。佛國の藝術は、歐洲民族中の尤も天才的な國民の、審美的思想を反映するものとして、大いに彼を驚かした、併し少しも彼を樂ませなかつた。尤も彼を驚かしたのは、裸體の習作であつたが、其處に彼は只だ、彼が受けた禁慾主義的の教育が、不忠不義に次いで、尤も廢棄すべく教へた、人間の弱點の公然な告白を認むるに過ぎなかつた。近代の佛國文學も又彼を驚かした。彼は小說家の驚くべき藝術を了解し得なかつた。描寫の技巧の價値は、彼には見えなかつた。若し歐羅巴人がそれを了解する如く、彼をして了解せしめ得たとしても、彼はただ、才能をこんな製作に用ふる

ことは、社會的腐敗を意味するものとの確信を棄てなかつたであらう。そして段々巴里の豪奢な實生活中に、當時の文藝に依つて與へられた信念の實證を見出した。彼は娯樂場、劇場、オペラなどへも往き、禁慾主義者と武士の眼を以て之を見た。そして西洋の價値ある生活といふ觀念は、何故に極東の放蕩懦弱といふ觀念と異る所なきかを怪しんだ。彼は流行社會の舞蹈場へ行つて、極東の淑德感には容すべからざる、肉體露出の女禮裝を見た——これは巧みに、日本婦人をして愧死せしむるに足る所のものを、暗示するやうに出來て居る。そして嘗て日本に在つて、日本人が夏日炎天の下に、自然な、愼ましやかな、健康的な、半裸體で勞働して居るのを、西洋人が非難した言葉を思ひ出して、奇怪の感に打たれた。彼は又多數の大教會(カシドラル)や教會を見た。そして其の直ぐ側(そば)に、惡の殿堂や、怪しげな美術品の密賣に依つて繁榮する商舗を見た。彼は偉い說教師の說教も聞いた、僧侶嫌ひの人々が、信仰と愛とを蔑視する暴言にも耳傾けた。富豪社會をも見た、貧民窟をも見た、兩者の裏面に潜む魔窟をも見た。併し宗教の『抑制力』に至つては、更に見る處がなかつた。西洋の世界には信仰といふものはなかつた。ただ虚僞、假面と快樂追求の自己主義の世界で、宗教の支配は受けずに警察の支配を受けるのみであつた。要するに人間としてそんな處に生まれたくない世界であつた。

註　佛國の畫家。

佛國よりも陰氣な、堂々たる力强い英國は、又別種な問題を考へさせた。彼は永久に增長する英國の富と、其陰に永久に增殖する醜汚の堆積を研究した。彼は大きな港が諸國の貴重品――大部分は掠奪品――で塞つて居るのを見た。そして英人は今も祖先の如く海賊の國民なることを知つた。そして若し此國が只だ一箇月でも、他國をして食糧を供給せしむることが出來ぬとなつたら、數千萬の住民の運命はどうなるだらうと考へた。彼は又世界最大の都市の夜を醜惡ならしむる賣色、强飲の風を見た。そして見ぬ振りをする傳統的の僞善と、現狀に感謝を述べる宗教と、必要のない國に宣教師を送る無智と、病氣と惡德とを傳播せしむるに終はる、莫大な慈善事業とに唖然とした。彼は又諸國を旅行した英國の一癈人[註]が、英國人の一割は常習的罪人か、或は貧民であるとの陳述書を見た。

註　「我々は知的修養に於ては野蠻の狀態を遙かに超越したが、道德に於てはそれ程の進歩を見ない……我が國民の大多數は全く野蠻人の道德律の上に出でず、多くの場合には却つて其下に下つた。道德不足は近代文明の大汚點である……我々の社會的及び道德的の文明は今も野蠻の狀態にある……我々は世界で尤も富める國である。それに我が人口の約二十分一は貧民であり、三十分一は明白な罪人である」と之に寄せ

されざる罪人と、全然若しくは幾分か個人の慈善（ドクトル・ホークスリーの調査に據ると、ロンドンのみでも、年々七百萬磅の金が此目的に消費される）に依つて生活する貧民を加へて見ると、我が人口の十分一以上は常に實際上の貧民と罪人とであると信ぜられる」――アルフレッド・ラッセル・ウォレース

無數の敎會と、無數の法律があるのに此有樣である。確に英國の文明は、彼が進步の源泉だと信ずべく敎へられた基督敎の力（實際はありもせぬ）を示すこと、他の國々の文明よりも少い。英國の市街は又彼に別種の事實を語つた。佛敎都市にはそんな光景は見られない。此文明は、正直者と狡猾漢との間の、又弱者と强者との間の、不斷の醜い爭鬪を示して居る。暴力と奸智とが結託して、弱者を此世の地獄に突き落として居る。日本にはこんな情況は夢にもなかつた。けれどもこんな狀況の全く物質的な結果及び智力的な結果は、ただ驚くべきものであると白狀せざるを得なかつた。そして彼は想像を絕する惡を見たけれども、又貧富兩者の中に多くの善をも見た。之が提供する大きな謎、無數の矛盾は、彼の力には解釋することが出來なかつた。

彼は彼が足を蹈み入れたどの國の人間よりも英國人を好んだ、そして英國紳士社會の風習は、日本の武士（サムラヒ）、にどこか似て居るといふ感を與へた。彼は彼等の四角張つた冷やかさ

の後ろに、友愛や永續性の親切——彼が一度ならず經驗した親切——の大なる可能性を、滅多に使用されぬ情の深さを、又世界の半ばを支配し得た大なる勇氣を見透す事が出來た。併し人間の功績の現はれて居るもつと大きい世界を見る爲めに、米國へ向け英國を去る前に、單なる國籍の相違といふ事は彼に何の興味をも與へなくなつた。西洋の文明を次第に驚くべき全體として見る樣になつた爲め、國籍の相違は朦朧として見えなくなつて仕舞つた。ただ到る處に——帝國、王國、共和國の何れを問はず——同樣な無慈悲な必要の活躍と同樣に驚くべき結果とが展開され、又到る處に全く極東の思想とは正反對な思想が基礎とされて居るのを見た。こんな文明は、それと唱和する一の情緒をも起こし得ぬもの——其中に住む間は愛すべき何者をも見出し得ず、永久に去らんとしても、悲むべき何者をも見出し得ぬものと考へざるを得なかつた。それは彼の魂と離るゝこと、丁度他の太陽の下にある他の遊星に於ける生物界の如くであつた。併し彼はその文明がどれ程人間の勞力を費やしたかを理解もし、どれ程の强い脅威であるかと感じもし、又其智力がどれ程廣く擴がつて居るかと推察もした。而かも彼はそれを憎んだ——その恐ろしい全く計算的な機械作用を憎んだ、其功利的な頑固さを憎んだ、其習性、其貪欲、其盲目的な殘忍、其の途方もない僞善、其欲望の不正、其富の橫着さを憎んだ。道義的には此文明は言語道斷なもの

である、常識的には殘忍酷薄なものである。測る可からざる程深い墮落を其中に認めたが、彼が青年時代の理想に匹敵する理想は少しも認められぬ。要するにそれは大きな饑狼的爭鬪であつた——然るに其中にも、實際善と認めざるを得ぬものがあるのは何故か、それは彼にはただ不可思議であつた。西洋の眞の偉大さは只だ知的である。單純な知識の高い高い冷たい山の樣なもので、其永久の雪線の下では、情的理想は死滅する。日本の仁と義との文明は其幸福の會得に於て、其道義的憧憬に於て、其大なる信念に於て、其歡喜的な勇氣に於て、其素朴さと其謙讓さに於て、其眞面目な事と、足る事を知る事とに於て、確に西洋の文明よりも比較にならぬ程優つて居る。西洋の優越は倫理的でない。其優越の點は數へ切れぬ苦艱を經て發達し、そして弱肉强食の道具に用ゐられた知力に存する。

それにも拘らず、西洋科學の論理は、爭ふ可からざるものと彼も承知して居るのであるが、其科學は彼に其文明の益々擴大すべきことと、苦惱は抵抗すべくも避くべくも測るべくもなく世界中に氾濫すべきことを告げた。日本は新しい形式の行動を學び、新しい形式の考へ方に熟達するか、然らざれば全然滅亡するか、他に取るべき方法はない。かう考へてる中に疑問中の疑問が湧いて來た。それは凡ての聖賢が一度は考へねばならなかつた疑問て、『宇宙は道義的であるか』といふ疑問であつた。此疑問に佛教は尤も深遠な解答を

與へて居る。

併し道義的であらうと非道義的であらうと、それは人間の微小な感情で宇宙の進行を測つたもの、彼には論理で破る事の出來ない一の確信が殘つて居た――たとひ日月星辰から抗議を持ち込まれようとも、人間は未知の終點に向つて、全力を盡くして最高の道義的理想を追ふべきものであるといふ確信が殘つて居た。日本は必要上外國の科學を習得し、敵の物質文明を、多分に採用するの止むを得ざるに至るであらう。併し如何に必要があつても、日本は其正邪の觀念、義務と名譽の理想を、そつくり棄てる譯には行かぬ。彼の心中には、やがて徐々に一の成算が形成された――其成算は、後日彼を一國の指導者たらしめ、一世の師たらしめたのであるが、それは極力あらゆる國粹を保存し、何物にても國民の自衞に必要ならぬもの、若しくは國民の自己發展に益なきものの輸入には、大膽に反對しようといふのであつた。失敗しても恥にはならぬ上に、少くともそれで價値あるものの幾分かを、崩壞の渦から救ふ事が出來よう。西洋の生活の浪費的なる事は、其快樂慾と苦悶過多よりも一層感銘を彼に與へた。彼は自國の赤貧に其強味を認めた。其非利己的な勤儉に、西洋と競爭し得る唯一の希望を懸けた。外國の文明は、それを見るにあらざれば了解し能はざる、自國文明の價値と美點とを了解せしめた。そして彼は故國歸參の恩命の來る日を

待ち焦れた。

八

日出の少し前、曇りなき四月の朝の透明る暗さの中をすかして、彼は再び故國の山を見た――眞黒な周圍の海から紫がかつた黒色に聳え立つ、遠くの高いきつかりとした山嶺を見た。彼を永の流浪から連れ歸りつつあつた汽船の後の方は、地平線が徐々に薔薇色の光で充たされつつあつた。甲板の上には、もう若干の外人が太平洋上の富士の、最も美はしい初姿を見んものと待ち構へて居た――曉の富士の初姿は、此世で、或はつぎの世までも、忘られぬ物の一であつたから。彼等は山脈の長い行列を凝視した、そして其の朧げな、ぎざぎざした輪廓の向うの暗がりには、星がまだ微かに光つて居るのを見た――併し富士は見えない。『アー！』と一人の船員は問はれて答へた。『貴君方は眼の附け處が低過ぎます。もつと上を御覽なさい、もつと高い處を』それて彼等は空の眞中近くまで眼を上げた。すると曉の色で不思議な幻の蓮華の樣に、薄赤くなつた偉大なる頂上が見えた。其壯觀に打たれて彼等は沈默して仕舞つた。忽ち萬年の雪は金色に變はり、やがて白色になつた。其

時は太陽が地平線の弓形を飛び越し、暗い山脈を飛び越し、一寸見には星の上までも飛び越して、其光線を富士の頂上に投げつけて居たのであるが、巨大な裾野はまだ眞暗であつた。やがて夜は全く明けはなれた。軟らかい青い光は天空に漲つて、凡ての色彩は眠りから覺めた。――そして來客の眼前には、横濱の明かるい港が開いて居た。そして麓は見えぬ神聖な峯が、無窮の穹窿に雪の精の如くに凡てを壓して居た。

　我が流浪者の耳には、尚ほ『アー眼の附け處が低過ぎる。もつと上を御覧なさい、もつと上を』が響いて居た――そして彼の胸に脹れ上がる、大きな抑へ難き情緒と漠然たる節奏を作してゐた。間もなく凡ての物が朦朧となつた。上空の富士も、其下の霞がかつた青から、緑に變はり行く小山嶺も、さては灣内に群がる船舶も、其外近代日本を形成する何物も見えなくなつた。ただ舊日本だけが見え出した。春の香りを微かに湛へた陸地の風が、彼の面を吹き、彼の血に觸れると、長く閉ぢて居た記憶の室から、彼が一旦抛棄して忘れんと努めた凡ての物の面影が飛び出した。彼は亡き人々の顔を見、年經りたる彼等の聲を思ひ浮かべた。彼は再び父の屋敷に居た時の小兒に歸つた。明かるい室から室へと彷徨き廻はり、疊の上に樹影の顫るへる日向で遊んだり、自然の風景を模した庭園の淺緑の夢の様な平和さに眺め入つたりした。彼は再び邸内の祠へ、又は祖先の位牌の前へと、朝の禮

拜に、彼の小さき歩みを導く、母の手の肌觸りを感じた。そして、今思ひついた新たな意味を以て、大人の唇て小兒の單純な祈誓をつぶやいた。

第十一章　薄暗がりの神佛

一

『ジョスを御存じですか』

『ジョスッ』

『さうです偶像です、日本の偶像です――ジョスです』

『幾らか知つて居ます』自分は答へた、『併し澤山は知りません』

『先づ私の集めたのを見て下さいませんか。私は二十年間ジョスを集めました。見るに足るものが幾らかあります。併し賣るのではありません――大英博物館の外へは』

自分は此骨董商の後に尾いて、古道具の雑然たる店を通り拔け、石疊の空地を横ぎつて、並外づれて大きい土藏(ゴーダウン)へ往つて見た。凡ての土藏の様に暗いので、自分には闇の中を上る階段をやつと見分ける事が出來た。商人は階段の下で停まつて、

註　これは極東の開港場にある耐火性の倉庫、語原は馬來語の godong

『直ぐ見える樣になります』彼は云つた。『私はジョスを入れるばかりに之を建てました。併し今では小さ過ぎます。ジョスはみんな二階にあります。さあお登りなさい、ただ御用心なさい――梯子が惡るいです』

自分は登つた。甚だ高い天井の下は、丸で黃昏（たそがれ）の樣であつた。そしてその中で自分は澤山な神佛と面と向かひあつた。

大きな土藏の薄暗がりて見ると、凄いばかりではない、幽靈の世界へでも往つた感じがする。羅漢や菩薩や佛達や、又それ等よりも古い神達が、薄暗い空間に滿ちて居る。それも寺院内に於ける樣に、秩序整然とでなく、驚愕に打たれて啞然とした如き狀態で、雜然と陳べられて居る。初めは幾つもある首や、破壞した背光や、威嚇の爲めに、或は祈禱の爲めに、擧げた手などの立ち込んだ中――蜘蛛の巢のかかつた隙間から來る光線に半ば照らされた、汚れた金箔の雜然とほのめく中から、何者をも判然と見別ける事は出來なかつた。併し段々眼が馴れて來ると、何の像といふ見別けがついて來た。種々の形式の觀音がある、色々の名のついた地藏がある、釋迦がある、藥師がある、阿彌陀がある、佛と其弟子がある。何れも甚だ古い。其作も皆日本のではない、又何れの國何れの時代のとも限つ

てない。朝鮮のもあり、支那のもあり、印度のもある――これ等は初期佛教渡來の全盛時代に舶來されたものである。或る者は蓮華――靈界の蓮華の上に坐して居る。或る者は豹、獅子、虎、其他の奇獸――電光や死を象徴する――に乘つて居る。群集に支へられた黃金の玉座に坐して、闇の中を動く樣に見ゆる、三頭多手の凄い莊嚴な像があつた。火炎にくるまれて鎭座する不動もあつた。神祕な孔雀に乘つた摩耶夫人もあつた。又此等の佛像の中に、大名の甲冑姿や支那の聖賢の像が雜じつて居るのは時代錯誤的な六道の辻ともいふべき奇觀であつた。雷電を挿んで屋根まで伸び上がつた憤怒の形相凄まじい大きな像――暴風の權化の樣な四天王、廢寺の山門の守護神仁王の像などもあつた。それから又妖艶な女體像もあつた。蓮華の上に坐つた四肢のなよやかさ、妙法の數を數へる指のしなやかさ、これは恐らく或る忘れられた昔に、印度の舞姬の美貌から得來たつた理想であらう。上の方の、煉瓦のままの壁に沿うた棚の上には、小形の像が澤山あつた。黑猫の眼の樣に暗中に輝く眼のある鬼の像、半人半鳥で翼があり鷲の樣な嘴のある像――日本人の空想が生み出した天狗などがあつた。

『いかがです』と骨董商は自分の驚いてる樣子に滿足の笑を以て尋ねた。

『大したものです』と自分は答へた。

彼は自分の肩に手を懸け、耳へ口を寄せて誇りかに云つた。『五萬弗費やしましたよ』

併し此等の彫像は、東洋に於ける美術の工賃が如何に安からうとも、忘れられた信仰に拂はれた代價は、そんなものではない事を語つて居る。又彼等は彼等を安置せる祠堂の石段を、信心の足て窪く摺り減らした、幾百萬の死せる信徒のあつたことを、彼等の祭壇の前に、小さい赤兒の衣服を掛け掛けした、幾多の母親のあつたことを、彼等に祈禱を籠める樣に敎へられた、幾代もの子供があつたことを、さては彼等の前に打明けられた、無限の悲哀と希望とに就て語つて居る。幾百年の崇拜の名殘は、彼等の流浪の後を追うてか、微かな床しげな香の移り香が、此塵(ごみ)だらけの場處にも漂うて居る。

『あれは何と思召します』骨董商の聲が問うた。『あれが此中でも、一番傑作ださうてす』

と彼は、三重の蓮華に坐した佛像を指差した――阿嚩盧吉帝濕伐羅(アバロキテスバラ)――『稱名の音聲を觀る』といふ女菩薩。……彼女の名を稱ふれば、嵐も憎みも鎭まり、火も彼女の名にて消え、惡鬼も彼女の名を聞けば退散す。彼女の名を稱ふれば、人も日輪の如く空中に佇立するを得……五體の優美さ微笑の濕雅さ、方に是れ印度樂園の夢である。

『觀音です』自分は答へた。『甚だ美しい』

『随分高い代價を拂つても欲しいといふ者がありませう』彼は賢しげな目配せをして云つた。『私も可なり出しました。併し概して私は安く買ひます。こんな物は買手が少いし、それに內證で賣るのですからね、そこが私の附け目です。あの隅にあるジョスを御覧なさい――大きな眞黑な奴、これは何でせう』

『延命地藏です』自分は答へた。『長命を授ける地藏です。大變古いやうです』

『ねえ、貴君』と彼は又自分の肩に手を置いて云つた。『それを賣つた男は、私に賣つた爲めに、牢屋へ入れられましたよ』

と彼は心から笑ひこけた――彼自身の取引の巧妙さを思ひ出してか、國法を侵して佛像を賣つた男の不運な魯鈍を笑つたのか、自分には分からなかつた。

『後になつて』彼は又云つた。『それを買ひ戾したいと云つて、私が拂つた金よりも餘計を提供して來ましたが、私は應じませんでした。私は偶像の事を精しくは知りません、併しどれ程の値打があるかは知つて居ます。全國を探してもそんな偶像は又とありません。大英博物館は、それを手に入れたら喜びませう』

『大英博物館へは何時送るお積りですか』自分は聞いて見た。

『サア、先づ私は展覽會を開く積りです』彼は答へた。『ロンドンで偶像の展覽會をなす

れば金が儲かりますよ。ロンドン人は生まれてこんなものを見た事はありませんからね。そして教會の人達は、うまく持ち込めば此種の展覽會を後援しますよ。傳道の廣告になりますからね「日本の偶像崇拜」とか何とか……其の小兒は如何です』

自分は此時、片手は上を指し、片手は下を指して立つてる、裸體の孩兒の金色の像――誕生の佛陀――を見て居たのである。旭日が東天に昇る樣に、彼は光明を放ちつつ胎内から出て來た。……彼は直立して悠然と七歩歩いた、其足跡は七つの星の樣にいつまでも光つて居た。そして彼は明瞭な語調でかう云つた。「佛陀は生まれた。予に再生はない。予は天上天下凡ての者を濟度せんが爲めに此度を限りに生まれ出た」

『それは所謂誕生釋迦です。青銅のやうですね』

『青銅です』彼は指の節で件の像を叩いて鳴らしながら答へた。『銅の地金だけでも買ひ値よりは高いです』

自分は、頭が殆ど天井に觸れて居る四天王を見上げて、『摩訶跋渠』に書いてある彼等が出現の噺を思ひ出した。美しい夜であつた、四人の大王は四邊を光明に充たしつつ崇き森に入つた。そして鄭重に佛陀を禮拜した後、東西南北に分かれて四大炬火の樣に立つた。

『こんな大きな像をどうして二階に持ち上げましたか』自分が問うた。

『引き上げました、床へ大穴を明けて入れたのです。實際困つたのは汽車で持つて來る事でした。彼等には初めての汽車旅行でした……併しこれを見て下さい、展覽會に出したら大評判になりませうよ』

見ると高さ三尺許りの小さい木像が二つあつた。

『何故これが大評判になるとお考へですか』自分は何げなく聞いた。

『何だか分かりませんか。これは基教迫害の時に作られたもので、日本の惡魔が十字架を踏み附けて居るところです』

其木像といふのは、小さい寺の守護神に過ぎぬ。そしてX形の支柱に脚を載せて居るのである。

『誰れかこれは惡魔が十字架を踏み附けて居るところだと云ひましたか』と自分は踏み込んで聞いた。

『外に取り樣がないぢやありませんか』と彼は云ひぬける樣に答へた。『脚の下の十字架を御覽なさい』

『併し惡魔ではありませんよ』自分は主張した。『そして此十字架の樣な物も、ただ平衡を與へる爲めに、脚の下へ突つかへたに過ぎませんよ』

彼は默して失望の樣子を見せたので、自分は少し氣の毒に感じた。『十字架を蹈み附けて居る惡魔』は、日本の偶像の到着を報道するロンドンの廣告びらの客呼文句としては、公衆の眼を引くこと請合であらう。

『これはそれよりもずつとよい物です』と自分は美しい組合像を指して云つた。これは傳說に依る摩耶夫人の横腹から、赤兒の佛陀が出懸かつて居る所であつた。彼女の横腹から苦痛もなく菩薩が生まれ出た。それは四月の八日であつた。

『それも青銅です』彼はそれを叩きながら云つた。『銅製の偶像は段々少くなります。もとは銅像を買ひ上げて古金として賣つたものです。少し取つて置けば宜かつたのに。其當時寺から來る青銅をお目に懸けたかつた――鐘だの、花瓶だの、偶像だの。鎌倉の大佛を買ひ取らうとしたのも其頃の事でした』

『古金としてですか』自分は問うた。

『さうです。私共は金の量目を計算して、組合を組織しました。最初の附値は三萬弗でした。それで大儲けが出來る筈でした、あれには金や銀が澤山入つて居りますから。僧侶達は賣りたかつたのですが、檀家が承知しませんでした』

『あれは世界の寶の一つです』自分は云つた。『君達はほんとにあれを潰す積りでした

か』

『さうですとも。勿論です。外に仕様がないぢやありませんか。彼處(あそこ)にあるのは處女(ヴワージン)メーリーに似て居ますね』

彼は小兒を抱きしめて居る女の、金箔を塗つた像を指した。

『似て居ます』自分は答へた。『併しあれは鬼子母神といふ、子供を可愛がる、女神です』

『人は偶像々々と云ひますが』彼は考へながら續けた。『羅馬舊教(ローマンカソリック)の寺院にはこんなものが澤山ありますね。私には宗教は世界中何處でも同じ様に見えます』

『君のいふ通りです』

『佛陀の物語(はなし)も基督の物語に似て居ますね』

『或る度まではね』

『ただ佛陀は磔刑にならなかつただけです』

自分は答へなかつた。そしてつぎの經文を思ひ出した『世界中に芥子粒程の地といへども、彼が衆生の爲めに身命を捨てざりし地は殘つて居ない』其時突然自分にはこれが絶對に眞である様な氣がした。大乘の佛陀はゴタマでない、如來でもない。人の心中にある佛

性である。我々は凡て無窮の蛹である。各人は佛陀を含有する。千萬人も皆同一である。あらゆる人間は潜在的に佛陀であるが、幾代も幾代も色相の迷夢に耽つて居る。我慾の亡びる時こそ、釋尊の微笑は世界を再び美しからしむるであらう。貴い犠牲を拂ふ毎に、人は覺醒の時機に近づき行く。そして幾代もの人間の無量數を思へば、今でも愛の爲めに、若しくは義務の爲めに、身命の捨てられなかつた土地が、地球上に一個處でも殘つて居らぬことを、誰れが疑ひ得るであらう。

自分は再び骨董商の手を肩の上に感じた。

『兎に角』彼は愉快さうな語調で叫んだ。『大英博物館では皆、尊重されるでせうね』

『だらうと思ひます。さうさるべきです』

其時自分は此等の佛像が大英博物館といふ、死せる神々の洪大な墓所の何處かに押し込められ、豆肉汁の様な霧の下に、エヂプトやバビロンの忘られた神々と同居して、倫敦の喧囂に微かに戰慄して居る樣を想像した――併しそれは何の爲めにであらう。第二のアルマ・タデマ（畫家）をして、亡びたる文明の美を描かしむる爲めか、英語の佛教辭典の挿畫を豐富ならしむる爲めか、未來の月桂詩人を刺戟して、テニズンの『脂ぎつて、縮毛をし

たアッシリアの猛牛』といふ形容にも劣らぬ、名文句を吐かしむる爲めか。確に其處に保存せられる事が無駄にはならぬ。因習的ならぬ我慾的ならぬ時代の思想家ならば、彼等に對する新たな尊敬を教ふるであらう。人間の信仰が作り出した凡ての影像は、永久に貴い眞理の殼である。其殼でさへ貴い力を持つて居よう。佛の顏の和らかい靜かさと、冷やかな優しさは西洋人に靈魂の平和を與へ得るかも知れぬ。彼等は慣習に墮した信仰に倦き、賢師の來たつて、我は高きも低きも、有德なる者も不德なる者も、正しき者も正しからざる者も、異端邪說に醉ふ者も、善にして眞なる信念を抱く者も、一視同仁の眼を以て見る。と叫ぶのを待ち焦れて居るのである。

譯者註　ジヨスの原語は Joss 素と deos 即ち神といふ語を支那人が轉訛して Joss と發音せしより支那の神像の事を凡てかくいふに至り、更に擴張して日本の神佛像をもかく云ふ。

第十二章　前世の觀念

『若し一比丘あつて過去世に於ける――一世、二世、三世、四世、五世、十世、二十世、五十世、百世、千世乃至幾百千世の過去に於ける――己が雜多の身境を細大想起せんとせば、須らく心を靜寂の境に安置すべし――須らく事物を洞觀すべし。須らく獨坐專念すべし』

『アカンケーヤ經』

一

佛教の生ける現實な雰圍氣中に、數年を過ごした思慮ある西洋人に、東洋人の物の考へ方を、特に我々と異らしむる根本的の思想は何であるかと尋ねたら、乾度「前世といふ思想」と答へるであらう。極東の心的生活の全體に沁み込んで居るのは、何物よりも此思想である。此思想は空氣の通ふが如くに普遍的で、あらゆる情緒を色づけ、直接にか間接にか、殆どあらゆる行動に影響して居る。其象徴は美術的裝飾の細部にすら始終現はれて居

る。そして晝となく夜となく、時々刻々に其意味の語は、求めざる我等の耳に響くのである。住民の言葉は——家庭の用語、俚諺、宗教上若しくは俗事上の嘆聲、悲哀、希望、喜悦、若しくは失望の表白等——悉く此思想を含まざるはない。憎悪の表現も愛情の言語も等しく影響せられて居る。それで『因果』或は『因縁』といふ語——避く可からざる應報なる業を意味する——は凡ての人の口に解釋なり、慰藉なり、罵詈なりに、自然に出て來るのである。百姓が或る嶮しい坂道で荷車の重みに筋肉の苦痛を感ずると、『これも因果だから仕方がない』と痩我慢をいふ。婢僕達が喧嘩をすると、『何の因果で、己れは貴樣の樣な奴と一緒に居るのか』といふ。無能者若しくは惡人も因果で罵られる。賢人や善人の不幸も同じく因果で說明される。罪人は其罪惡を自狀して、『私の爲た事が惡るいといふ事は、爲る時に知つて居たのですが、因果だから自分の思ふ樣になりません』といふ。戀仲を裂かれた男女は、前世の罪の結果で、此世で添はれぬといふ信念で死を求める。非道な迫害を受ける者は、これも忘れられた前世の過失を償ふので、永遠の天則として償はねばならぬものを償ふのだといふ自信で、憤りを慰めやうとする。……同樣に靈魂の未來(後世)に云ひ及ぶ極平凡な場合でも、靈魂の過去(前世)といふ一般的の信念を包含する。母親が遊んで居る子供を誡むる時にも、惡るい事をすると、來世に外の親の子として生まれる時に

差障ると云つて聞かせる。巡禮や乞食が施物を受ける時には、どうか旦那の來世が幸福なやうにと祈る 目も耳も衰へ始めた年老いた隱居は、若い身體に生まれ變はらんとする變化の、差し迫つた事を樂しさうに語る。それから必然といふ佛教上の觀念を意味する『約束』といふ詞、又は『前の世』、『諦め』などといふ語は、日本人の普通の會話に始終出て來ること、丁度、『正しい』、『間違つてる』といふ語が英國人の會話に出て來る樣である。

かういふ心理的空氣の中に永年住んで居ると、いつかそれが自分の思想へも侵入して、其處に樣々の變化が起こるのを發見する、前世といふ觀念に包含されてるあらゆる考——如何に同情的に研究しても、初めは只だ奇怪にばかり見えた、あらゆる信念——これ等が其の珍らしかつた時に有して居た不思議性、怪奇性を失つて、全く當然らしい外觀を呈して來る、色々の事物は此思想に依つて合理的と思はれる樣な非常によい說明を與へられる。そして或る說明は、十九世紀の科學的思想で測つて見ると、確に全然合理的なのである。併し此思想を精確に判斷する爲めには、先づ泰西の靈魂の輪廻に關する、あらゆる觀念を拋棄して、心を白紙の狀況に置くことが必要である。といふのは泰西の靈魂に關する概念——例へばピタゴラス派のでも、プラトン派のでも——と佛教の概念との間には、少しの近似もないからである。そして日本人の信念が合理的だといふことになるのは、正しく此

無近似からである。之に關する古來の西洋の思想と、東洋の思想との間の大なる相違は、佛教には我等の傳統的な靈魂——一つ一つの、薄い、戰慄（おのの）する、透明（すきとほ）る內在人、卽ち幽靈——が存在せぬ事である。東洋の『我（エゴー）』は個體ではない。又神靈派（グノスティックス）の靈魂の樣な、數の極まつた複體でもない。想像し難い複雜さの統計若しくは合成——計へ切れぬ前世代の創造的思索の集中した合算なのである。

二

佛教の解釋力と其學說が、不思議に近代科學の事實と一致する事は、心理學に於て、ハアバアト・スペンサアを其最大の探究者とする部門に、特によく現はれて居る。我々の心理的生活の少からぬ部分は、西洋の神學では說明の出來ぬ感情から成り立つて居る。未だ口のきけぬ小兒に或る顏を見ては泣かせ、或る顏を見ては微笑ましむる感情もそれである。未知の人に遇ふ時直に經驗する『好き』、『嫌ひ』もそれである。第一印象と呼ばるゝ此好惡の感は、怜悧な小兒は正直に告白せんとする。『人は外觀で判斷してはならぬ』と敎へられても、小兒は心の中では決してその敎を信ぜぬのである。こんな感情を神學上の本能、

直觀の意味て本能的とか直觀的とか呼んて見ても、それは何の說明にもならぬ——丁度特殊な開闢說の樣に、只だ疑問を生の神祕中に切り落とすだけてある。吾人の衝動若しくは感動は、惡魔の憑依に依る外、一個人的以上てあるといふ說は、今ても古風の正統論者には厭ふべき異端と思はれて居る。併し我々の深い感情の大部分は、超個人的てあるのは今や確てある——我々が愛情的感情と稱するものも、又、壯美的感情と名づくるものも皆さうてある　戀情の個性は科學に依つて全く否定される。初對面の戀(譯註)に就ての解釋は憎惡にも適用せられる。雙方共超個人的てある。彼の春と共に來去する漠然たる遊歷の衝動、秋に經驗する漠然たる鬱悒の感の如きも同樣てある。——これは多分人類が季節に從つて移住した時代の、若しくは人間出現前からの遺物てあらう。一生の大半を平野若しくは草原て過ごした後、初めて雪を戴いた山嶺を望む者に感ぜられる情緒、さては大陸の奧地に住む者が初めて大洋を見、其永久の雷の如き浪の音を聞く時の感の如きも、又超個人的てある。偉大な風景を見た時に起こる、必らず畏怖の念の雜じる喜び、若しくは熱帶の日沒の壯麗さが惹起す、云ふに云はれぬ憂鬱の混じる啞然たる讚嘆——此等も個人の經驗だけては說明は出來ぬ。尤も精神分析は此等の感情が非常に複雜て、個人樣々な經驗と錯綜して居る事を證明した。併し何れの場合ても深い感情の浪は、決して個人的てない、我々の出

て來た祖先傳來の生の海から打寄せたものである。シセロ時代よりもずつと古い昔から人の心を惱まし、現代に於ては更に一層惱ます所の特殊の感情——實際は初めて見た土地を既に前にも見た樣に感ずる感情の如きも、同じ心理的範疇に屬するものであらう。外國の都市の市街、若しくは外國の風景の模樣を見て或る不思議な親密の感が心に起こると、一種の柔らかい氣味惡るい激動を覺えて、其解釋に有りもせぬ記憶を掻き立てさせられる。時には疑もなく、心裏に嘗て存在した記憶の復活、若しくは建て直しに依つて、之に似寄つた感情が發生せられる事も實際ある。併しただ個人的の經驗で說明せんと試みると、全然不可思議といふより外なきものも澤山ある樣に思はれる。

譯者註　本篇中の「一葉の力」を參照せられよ。

我々の尤も平凡な感情の中にも、凡ての感情思想は個人の經驗より來る、從つて生まれたばかりの小兒の心は白紙であるといふ愚說では、決して解き得ざる謎がある。或る花の香、或る色合、或る音調に依つて刺激される快感、危險な或は有毒な生物を一見して、我れ知らず起こる嫌惡或は危懼、さては夢の中の名狀し難い恐怖——これ等は古來の靈魂說ては凡て說明し得ぬ。香氣及び色彩に於ける快感の如き感情の或る者は、種族の生命に深

き根柢を有して居る事は、グラント・アレン（譯者注）が共著『心理的美學』及び色彩感（カラーセンス）に就ての興味ある論文で、尤も有力に指示して居る。併し其久しい以前、彼の師で心理學者中の尤なるスペンサーは、經驗論では多くの種類の心理現象を說明する事全く不可能なる事を明らかに證明して居る。『可能としても』スペンサーは云ふ、『經驗論は情緒に關しては知覺に關してよりも一層說明に困難を感ずる。凡ての願望、凡ての情緒は、個人の經驗より生ずるといふ說は、甚だしく事實と相違する。予はいかにしてかかる說を抱く者あるかを怪しまざるを得ぬ程である』。『本能』、『直覺』といふ樣な語は、舊來の使用法では眞の意味を有たぬ、今後は異つた使用法を取らねばならぬ事を、我々に示したのも亦スペンサーであつた。近代心理學の用語としては、本能は『組織化された記憶』を意味する、そして記憶共者も『初期の本能』である――卽ち本能とは、生の連鎖に於て、つぎの時代の個人に遺傳せられる印象の總計である。かく科學は記憶の遺傳を承認する、前世の出來事を一一記憶するといふ神祕的な意味ではなく、遺傳される神經系統の構成の、微細な變化に伴なつて、微細な追加が心に與へられるといふ意味でである。『人間の腦髓は、生の進化中に、或は寧ろ人間といふ有機體に達する迄の、幾つもの有機體の進化中に、受けた無限數の經驗の、組織化された記錄である。此等の經驗中の尤も普遍的で、尤も屢〻繰り返さ

れるものの結果は、元利共立派に遺傳された。そして徐々に高尙な知力となつて、孩兒の腦髓中に潜在する——それを孩兒は長ずるに從つて活用し發達せしめ、而して更に複雜化する——そしてそれは細微な追加を附して、更に其子孫に遺傳される[註]かくして我々は、前世といふ觀念及び合成的『我』といふ觀念の、確實な生理的根據を得た譯である。各個人の腦髓には、其祖先てある凡ての腦髓が受けた、想像を絶する程の無數の經驗の遺傳された記憶が、封入されてある事は爭ふの餘地がない。併し此過去に於ける自己に就ての科學的證明も、物質的に證明された譯てはない。科學は物質論の破壞者てある。科學は物質の不可解なことを示した。そして情緒の終極的單位を憶定しながらも、心の祕密は矢張り不可解なることを白狀する。併し我々よりも幾百萬年も古い簡單な情緒の單位から、人間の凡ての情操、凡ての能力が建設された事は疑ひがない。ここに科學は佛教と共に『我』なるものが合成體なることを認める。又佛教の如く、現代の心の謎を、過去の心の經驗て說明する。

註二　スペンサー『心理學原理』中『感情論』の一節。

譯者註　カナダ生れの英人、十九世紀の著述家。

三

靈魂は無限數の合成體であるといふ觀念は、西洋流の意味での宗教といふ觀念を、全く不可能ならしむるだらうと、考へる人も多いに相違ない。又舊來の神學上の概念を棄つる事の出來ぬ人は、疑ひもなく、佛教國に於てさへ、又佛典の證明あるにも拘らず、普通民の信仰は、靈魂は一個體であるといふ觀念を基礎として居ると想像するに相違ない。併し日本には、其反對の著しい證據がある。無教育の民衆、佛教哲學を研究した事のない、尤も憐れむべき田舍漢でも、自己の複體なることを信じて居る。更に驚くべきは、原始的の宗教なる神道にも、同樣の教義が存在する事である。それから支那人、朝鮮人の思想にも、變つた形の同じ信念が存在する。極東の住民は凡て、佛教の意味でか、或は神道が代表する原始的の意味でか（一種の分裂繁殖說）、或は支那の九星學で作り上げられた怪奇な意味でか、靈魂を複體と考へる樣である。日本では此信念は一般的に行はれて居る事を、自分は十分に見屆けて居る。ここに佛典を引用するの必要はない。何となれば佛教哲學をいふ迄もなく普通一般人の信念だけで、宗教的禁誡は、複體靈魂の觀念と兩立して相悖らぬ

といふ證明を供給し得るからである。日本の百姓は自分の心を、佛教哲學が考へる程、若しくは西洋の科學が證明する程、複雜なものと考へて居ぬのは確である。併し彼は彼自身を複體と考へるのである。彼が心中に起こる善なる衝動と惡なる衝動との間の衝突は、彼の『我』を構成する樣々の祕密な意志の間の爭鬪と解釋する。そして彼は此善なる自己を惡なる自己から引き離すことを精神的な希望として居る——涅槃即ち最高の幸福は、ただ最善の自己の遺留によつてのみ到達し得るものと信じて居るから。かくして彼の宗教は、科學の思想から餘り離れてない所の——我々の故國の民衆が抱く傳習的の靈魂觀程離れてない所の心靈の進化といふ、自然な見解に基づいて居る樣に思はれる。勿論此等の抽象的な題目に就ての彼の考へは、漠然として何等の組織を有せぬものではある。併し其考への一般性質と傾向とは明らかである。そして彼の信仰の誠實なること、又は其信仰が彼の德性に及ぼす感化に就ては何等の疑もない。信仰が教育ある階級の間に殘存する場合には、其思想は定義と理論とを附與せられるが常である。自分は其例として、二十三歲と二十六歲とになる學生が書いた作文中から各一節を引用する。引用する例は幾らでもある。併し自分の意味する所を示すにはつぎの二例だけて十分であらう。——

「靈魂の不死を云ふより愚なるはなし。靈魂は合成物なり、其要素は永久不滅ならんも、二度と同一なる割合に組み合はせらるゝことなし。凡ての合成物は其性質と樣式とを變ぜざるなし」

『人間の生命は集成物なり。勢力(エネルギー)の結合に依つて靈魂は成る。人死すれば彼の靈魂は、其結合せるものの性質に依り、或は變じ或は變ぜず。或る哲學者は靈魂は不滅なりと云ひ、或る者は然らずといふ。何れも眞なり。靈魂は之を構成する組み合はせの變化に依つて、或は滅び或は滅びず。靈魂を構成する要素たる勢力は實に不滅なり、然れども靈魂の性質は、之が構成に要せらるゝ勢力の、結合の性質に依つて決せらる』

さて此二篇の作文に表明された思想は、西洋の讀者には一見疑もなく非宗教的と見ゆるであらう。併し實は尤も眞摯な尤も深厚な信仰と相悖らぬのである。さういふ誤つた印象を與へるのは『靈魂(ソール)』といふ英語が、我々の了解するものとは、全く違つた意味に用ゐられてあるからである。右の若き文章家に依つて用ゐられた意味の『靈魂(ソール)』は、善き幷に惡るき傾向の殆ど無限の組み合はせを意味する——卽ち靈魂は一種の合成物で、合成物であるといふ事實其者に依つて、のみならず又精神進化の永久の法則に依つて、崩潰の運命を有するものである。

四

東洋の思想生活に於て、數千年間かくも重大な要素であつた此觀念が、西洋に於ては今日に至る迄發展し得なかつた理由は、西洋の神學に依つて十分說明せられる。併し神學が前世といふ概念を、西洋人の心に全く浸透せしめざらしめたと云ふのは、正鵠を得たものでない。靈魂は一々新しく生まれた身體に賦與する爲めに、特に新たに作られたものであると信ずる基督敎の敎義は、公然前世を信ずることを許さなかつたが、一般の常識は遺傳の現象に於て此敎條（ドグマ）の矛盾を認めた。同樣に、神學は動物は本能と呼ばるゝ一種不可解の機關で動かさるゝ、自動木偶に過ぎずと論じて居るのに、人民は一般に動物も理性を有することを認めた。三四十年前に流行した、本能及び直觀の說も、今日は全く不合理に思はれる。此等の說は、解釋としては用を爲さぬ樣に感ぜられたが、敎條（ドグマ）としては思索を中止せしめ、異說を禁ずる用を爲した。ウワーズウァースの『忠實（フイデリチー）』及び不思議にも買被（かひかぶ）られた『不死の暗示（インチメーシヨン・オブ・インモタリチー）』は、十九世紀の初期に於てさへ、かかる題目に就ては、西洋の思想の極度の因循と幼稚さとを證して居る。犬の主人に對する愛は、實際人間の臆測を超越する程

大てある。併しそれはウワーズウワースの夢想だもしなかつた理由てである。それから小兒の新鮮な情緒は、確にウワーズウワースが與へた不死の觀念よりもより驚くべき或る者の暗示であるけれども、それを歌つた彼の有名な句が、ジョン・モーレー氏に依つて無意味として斥けられたのは尤もてある。神學の衰亡せぬ中は、心的遺傳、本能の眞の性質、生の統一等に關する合理的な觀念が、一般の承認を贏ち得る筈はないのであつた

併し進化論の承認と共に、舊式の思想は崩潰した。擦り切れた教條に代はるべく、到る處に新思想が現出した。そして東洋の哲學と妙に並行した方角に、一般の知的運動が始まるの觀を呈した。最近五十年間の科學の進歩の未曾有の速さと複雜さとは、非科學者の間にも等しく未曾有の知的發展を促した。尤も高尚な尤も複雜な有機體も、尤も低級な尤も簡單なものから發達したといふ事、唯一の物質的基本が全生物界の基本なる事、動植物の間には限界線を劃する事を得ざる事。生物と無生物との差は、唯だ程度の差にして、種類の差にはあらざる事。物質も心靈と同じく不可解で、未知の同一な實在の、形を異にせる表現に過ぎざる事――こんな事は既に新哲學の常套語となつて了つた。神學が一度物質的進化を承認した以上、心靈的進化の承認も、無期限に延期することは能はざるは、豫見するに難からずである。人間をして後ろを顧ることを得ざらしむる古教義の牆壁は、既に毀た

れたのである。そして今日科學的心理學の研究者には、前世といふ觀念は、學說の域を脫して事實の境に入り、自ら佛教の解說は、合理的であることを證して居る。『遂てた思想家の外は』故ハックスリー教授は書いて居る、『本來の不合理といふ理由で、之を排斥する者はないであらう。進化論共者の如く、輪廻の說は實在界に根柢を有する、從つて類推論が與へ能うだけの擁護を受け得るであらう』註

註　『進化と倫理』六十一頁――一八九四年版。

譯者註　原形質の意味か。

さてハックスリー教授に依つて述べられた此擁護は甚だ强大である。それに依つて我々は幾億萬年を通じて、闇から光へ、死から生へと飛ぶ魂を見る譯でもなければ、前世といふ主なる觀念は、殆ど佛陀自身が說明した形に確立されるのである。東洋の教理では、心理的人格は、個體の如く崩壞の運命を有する集合體なのである。ここに心理的人格と云つたのは、心と心とを――『我』と『汝』とを區別する所のもの、我々が自己と呼ぶ所のものを意味する。佛教ではこれは一時的の幻影の集合とされて居る。そして之を成立せしむるものは業である。業で再生する所のものは無數の前世に於ける行爲と思想の總計である

――そして其の各個は此總計を取る爲めに加へたり減じたりする神祕な計算法に於ける整數として、自餘のものに影響する。業は磁氣の樣に體から體へ、現象から現象へと傳達され、組み合はせ次第て狀態を決めるのである。併し業が集成し創造する結果は、結局神祕にして測る可からずと佛教信者は認めて居る。併し結果を維持する結合力は、ショウペンハワーの所謂生きんとする『意志』に相當する『渴愛(タンヘイ)』といふ、生の欲望に依つて生ずると稱せられる。我々はハアバアト・スペンサーの『生物學』に於て、此思想と不思議と近似する思想を認める。彼は性向と其變態(ヴァリエーション)との遺傳を兩極性(ポラリチー)に依つて說明する――生理學的單位の兩極性に依つて。此兩極性說と佛教のタンヘイ說との間には、相違よりも相似が著しい。業或は遺傳、タンヘイ或は兩極性は何れも其終極の性質に至つては說明すべからざるものである、此點は佛教も科學も一である。注意を値する事實は、兩者とも異つた名の下に同じ現象を認めて居る事である。

五

驚くべく複雜な方法に依つて、科學は東洋の古い思想と奇妙に調和する結論に達したの

てあるが、其事はやがて其結論は西洋の大衆の心に明瞭に理解せしめ得べきかといふ疑問を提起する。佛教の實際の教理が、只だ形式に依つて信者の大多數に教へ得られる如く、科學の哲理も、只だ提示（サヂエツシヨン）に依つて——性來理智的の頭腦を刺激するに足る樣な事實、若しくは事實の配合の提示に依つて——大衆に教へ得られるだらうとも思はれる。科學の進步の歴史は此方法の有効な事を保證する。そして高尚な科學の論議は非科學的民衆の理解を超越するが故に、其科學の結論も亦一般に了解せられぬだらうといふ推論には、決して强い理由はない。遊星の大いさと重さ、恒星の距離と構造、引力の法則、光、熱、色の意義、音響の性質、其外科學が發見した無數の事實は、此等の知識に到達した過程の詳細には全く無知な民衆にも、熟知されて居るのである。又我々は十九世紀中に於て、科學の大進步があつた毎に、續いて民衆の信念も、大變化が起こつたと云ふ證據を有して居る。教會も既に、尙ほ靈魂は一々殊別に作られるといふ舊說に縋りながらも、物質的進化論の大綱を認め、且つ將來とても、舊信仰の墨守、若しくは知的退步は當分豫想せられない。却つて更に宗教的觀念に變化を生ずべきことが期待される。そしてそれも徐々にといふよりも、寧ろ急激に成就されるらしく思はれる。勿論其變化が如何なる性質のものであるかは豫言されぬ。併し現今の知的傾向より察すれば、心靈上の進化說も認められるに相違ない——

たとひ直に神學學的思索に最終の限界を劃する程ではないにしても。そして『我』といふ概念も、遂には此結果として發展した前世の觀念に依つて、變更されるに相違ない。

六

此等の蓋然性（プロバビリチー）は、もつと精しく考察する事も出來る。ただ科學を以て改造者に非らずして破壞者なりと考ふる人には、此蓋然性も蓋然性と認められぬてあらう。併しかかる思索家は、宗教的感情が教條（ドグマ）よりも遙かに深いものであることを、又それはあらゆる形式の宗教が死滅しても、後に遺るものであることを、又それは知力の擴張と共に、擴まり深まり强まるものであることを忘れて居る、ただ教理としては、宗教は遂に死滅すべきことは、進化論の研究が到達する結論である。併し感情としての宗教、或は人間をも星辰をも等しく造り上げる未知の力の信仰としての宗教が、全く死滅すべしとは、今の處想像する事が出來ぬ。科學はただ現象の誤れる解釋を破壞するので、寧ろ宇宙の神祕を擴大し、萬物は如何に微小のものでも、限りなく驚くべく、又不可解のものであることを證する計りてある。そして此信仰を擴大し宇宙情緒を擴張するといふ、科學の疑ふ可からざる傾向こそ、

西洋の宗教的觀念が、過去に前例なかりし程の變更を受け、西洋の自己といふ概念が、東洋の自己觀に似寄つたものに固まり、そして現在の人格とか個人とかは、それだけで存在する實體だといふ憐むべき心理學的觀念は消滅するだらうといふ推察を許すのである。既に科學の教ふる通りに、遺傳の事實を一般が了解し始めた事は、少くとも此等の變化の幾分かが行はるべき道を指示するものである。心靈進化の大問題に就ての將來の論議に於ては、一般人は科學に導かれて、尤も抵抗の少い道を進むであらう。そして其道は疑もなく遺傳の研究であらう、其故は此現象は夫れ自身は難解だが、一般人の親しく經驗する所であるからである。そしてこれが無數の古い謎に、幾分の解答を與へるであらう。かくして將來の西洋の宗教の形式は、綜合的哲學の全力を擧げて擁護せられ、佛教と異る所は、主として概念の非常に精確なる所に存するのみにて、靈魂を合成體として認め、そして業の說に似た、新しい精神的法則を說くならんと想像するを得るのである。

併しかういふと直に首肯し難いと考へる人が多數あるであらう。それ等の人はつぎの樣に云ふであらう、かういふ信仰の變更があるとすれば、それは思想が感情を咄嗟の間に征服し變更するものであらねばならぬ。然るにハアバアト・スペンサーも『世間は思想に依つては支配されぬ、感情に依つて支配せられるのである、思想は感情の案内役に過ぎぬ』

と云つて居るてはないか。論者の云ふやうな變化は、西洋に現存する宗教心と宗教的情操の力とを考ふれば、迚も有り得べきこととは思はれぬと。

前世及び複體としての靈魂の觀念が、眞に西洋の宗教心に背反するならば、滿足なる解答は爲し能はぬ。併し果たして背反して居るだらうか。前世の觀念は確に背反して居らぬ。西洋人の心には既に其準備が出來て居る。尤も崩潰の運命を有する合成體としての我といふ概念は、物質的な絶滅といふ觀念にいくらも優らぬやうに見ゆる――少くとも舊式の考へ方を棄つること能はざる者には。併し公明に反省して見ると、『我』の崩潰を恐るゝべき情的の理由がない事が分かるてあらう。實際は無意識的にてはあるが、基督教徒も佛教徒も、永久に祈禱をするのは此崩潰があればこそてある。己が性質の惡るき部分を、己が恐と過失との傾向を、不親切な言動を爲さんとする衝動を――凡て己の高尚な部分に絡まり、最上の抱負を低下せしむる下劣な性能を拋棄したしと願ゝ願はぬ者があらうか。けれども我々がしかく熱心に分離、除却、廢滅を願ふ所のものは、貴い理想の實現を助ける後天的な大なる能力よりも、寧ろ父母より傳承した心靈、我其者の一部分てあるのてある。我の崩潰といふことは、恐ろしい滅亡てはなく、我々の努力を注ぐべき目的物の一なのてある。如何なる新しい哲學も、我中の最善の要素は、一層高尚な聯合を求め、益々偉大な

組み合はせに入り、遂に最高の啓示に接し、而して我々は無限の幻影を透して——凡ての自我を滅却して——絶對實在を見るに至るを、欣求するものであると、思ふことを抑止する譯に行かぬ。

我々は所謂原素なるものでさへ進化しつつあることは知つてるが、どんなものでも全く死滅するといふことの證據を有せぬのである。我々が現在在るといふことは嘗て在つたこと、及び將來も在るであらうといふことの保證である。我々は無數の進化にも、無數の宇宙の興亡にも堪へて生存したのである。我々は全宇宙を通じて凡てが法則に支配せられることを知つて居る。如何なる原子が遊星の核心を構成するか、如何なる物が太陽の恩德を受くべきか、如何なる物が花崗岩や玄武岩中に入り、如何なる物が植物に入り、さては動物に入つて繁殖すべきかは、決して偶然が決するのではない。理性が類推法に依つて推論し得る限りでは、心理的にも物理的にも、凡ての最終の單位の宇宙に於ける歷史は、佛教の業の說に於けるが如くに、確實に精密に決せらるべきものであらう。

七

科學の影響が西洋の宗教的信念の變更に與る唯一の要素ではない。東洋哲學もたしかに之に與るであらう。サンスクリット、支那語、パリー語の研究、其他東洋各地に於ける言語學者の倦まざる勞力は、急激な勢で東洋思想のあらゆる顯著なものを歐米に紹介しつつある。佛教は西洋中に興味を以て研究されつつあり、そして此等研究の結果は、最高文化の心的產物となつて、年々益々明確に現はれつつある。哲學の諸派は、時代の文學に於ける程眼に見えて影響を受けて居ない。「我」の問題の建て直しが到る處西洋人の心に侵入しつつある證據は、啻に當代の思想的散文のみならず、詩歌小說の上にも見出され得る。一時代前には有り得なかつた觀念が時代思潮を變更し、舊趣味を破壞し、より高尙な感情を發展せしめつつある。より大なる靈感の下に動きつつある創作的藝術は、前世の觀念の承認て、如何に全く新しい優れた感情が、又如何に從來想像し得なかつた熱情が、又如何に驚くべき情緖の力の深まりが、文學に於て其地步を進めつつあるかを語つて居る。小說に於てさへ、我々は從來只だ一半球上にのみ生活しつつあつたことを、又我々は半分の思

想だけを考へつつあつたことを、又我々は現在といふ此半球截斷面上に過去と將來とを結び附け、かくして我々の情緒世界は初めて完全な球體に完成されるといふ、新しい信念を要することを學ぶのである。我は複體であるといふ明確な信念は、如何に珍奇な說に見えようとも、衆(メニー)は一(ワン)なり、生(ライフ)は統一(ユニチー)なり、有限なるものなし、ただ無限あるのみといふ、より大なる信念に達する、絕對必要な徑路である。「我」を唯一無二と想像する盲目的な驕慢心が瓦解し、自己及び我執の念が全く破壞される迄は、無窮としての——大宇宙と同樣に——自我の知識は決して到達されぬ。

疑ひもなく、我は一であるといふ考は我執の見であるといふ、知的信念が到達せられる前に、先づ我々は過去にも生活したといふ情感的信念が發展するであらう。併し更に角逐には、我の複合的性質は認められるに相違ない、——尤も神祕は神祕として遺るであらう。科學は生理的單位を假定すると同樣に、心理的單位をも假定する。併し何れの假定された單位も、數學的計量の極度の力を以てして、尙ほ計算する事が出來ない、——全く微眇の境に入つて了(しま)ふやうに見ゆる。化學者は研究の目的の爲めに、極微の原子を想像せねばならぬ。併し其想像したる原子が象徵する事實は、ただ力の中心であるかも知れない——否

佛教の思想に於けるが如く、無、渦、空であるかも知れない。『形は空である、空は形である。形なるものは空である、空なるものは形である。知覺と思想、名と知識——凡てこれ等は空である』科學にも佛教にも同樣に宇宙は一大幻影と化する——ただ知る可からず測る可からざる力の假の現はれと化する。とはいへ佛教は『何處から』及び『何處へ』の問に佛教一流の答を與へる——そして進化の大週期毎に、前世の記憶が蘇生り、あらゆる未來が同時に眼前に展開せられ——天上の天迄も見渡さるゝ程の精神的膨脹の時期の來るべきを豫言して居る。科學は此點に就ては沈默して居る。併し其沈默はグノスチック教徒の祕密な沈默である——奈落の女、靈鬼の母なるシゲーである。

科學の十分なる承認を得て、我々が信じ得べきことは、驚くべき啓示が未來に我々を待つて居るといふ事である。近代になつて發達した新しき感覺と力とがある——音樂の感覺と數學者の生長して止まぬ能力とである。尙ほ一層高尙な、今想像し得ざる能力が我々の子孫に進展するであらうと豫期するのは不道理でない。又疑もなく遺傳した或る心的能力は老年に及んで初めて發達するといふ事も知られて居る。然るに人類の平均年齡は確實に高まりつつあるのである。長壽の增進と共に、より大なる未來の腦髓の出現に依つて、前世を記憶する能力に劣らぬ能力が、突然發生する事があるかも知れぬ。佛教の夢想は深遠に

して容易に凌駕することが出來ぬ、何となればそれは無窮に觸るゝからである。併し誰れが其夢想は實現されぬと斷言し得るであらうか。

備考

右の一文を通讀せられた諸君に、御注意致し置く必要を感じた事は、自分に靈魂(ソール)、自己(セルフ)、我(エゴー)、輪迴(トランスミグレーション)、遺傳(ヘレヂチー)などいふ語を遠慮なく使用したが、此等の英語には佛教哲學には全く不通の意味を有するといふ事である。英語の意味での靈魂(ソール)は佛教にない。自己(セルフ)は幻影若しくは幻影の束(たば)である。或る身體から他の身體へ轉移するものとしての輪迴は、明らかに出處明確なる佛典の中で否定されて居る。故に業(ごふ)の說と科學上の遺傳の事實との間に存する類似は、迚も完全なものとは云はれぬ。業は同一の複體我の生存を意味するのでなく、其傾向性(テンデンシー)の生存を意味するのである。そして此傾向性が新たな組み合はせをして新複我を形成するのである。かくして形成された新しい存在は必らずしも人間の形を取らぬ、卽ち業は親から子に行くものではない。生の形態は業に因るものであるが、遺傳の系統とは關係がない。乞食の業體は國王の肉體に生まれ替はるかも知れない、又國王のそれが乞食の肉體に生まれ替はるかも知れない。併し生まれ替はつた者の狀態は何れにしても業の力で決せられるのである。

といふとかう云ふ疑問が發せられるであらう――「そんなら變はらずに繼續する各人の精神的要素――云

はば業と云ふ殼の中にある精神的の仁――正道に精進する力――は何であらう。靈魂も肉體も同樣に此世だけの組み合はせで、業（それも此世だけのものなる）が人格を作る唯一の原因であるとすると、佛教の教義の價値は何に在るか又何の意義があるか。業に依つて苦しむものは何か。幻影の中に在るもの――進歩するもの――涅槃に到達するもの――は何か。それは自己ではないか」否、英語の意味の自己ではない。我々が自己と呼ぶものは佛教では實在でないとしてある。業を結んだり解いたりするもの、正道に精進するもの、涅槃に到達するものは、我が西洋語の意味の我ではない。そんなら何かといふに、それは各人の佛性である。日本語では「無我の大我」――我欲なき大なる自己――と呼ばるる。此外に眞の自己はない。此自己が幻影に包まれてゐる狀態を如來藏――胎内に在るが如くに未だ生まれざる佛陀――と云ふ。各人には永遠なる者が潛在して居る。それが實在である。も一つの自己は虚僞である――詐僞である――蜃氣樓である。死滅說はたゞ幻影の死滅を意味する。肉體的生活にのみ屬する所の情緒、感覺、思想等も、此複雜な幻影的自己を作る幻影に過ぎない。此虚僞なる自己の完全なる分解に依つて――恰も被膜を引きちぎりたる如くに、無窮の洞觀力が現はれる。所謂靈魂なるものはない。無窮の全大靈が凡ての生物の唯一無窮の要素である。其他のものは皆夢である。

涅槃に達した時、其處に殘るものは何か。佛教の或る宗派の說に依ると永遠に於ける潛在性の同一自己である――それ故に佛陀となつたものも又此世へ歸る事が出來ると。又他の宗派の說に依ると、潛在性以上の同一自己である、併し我々の意味する肉體的の同一自己ではない、或る日本の大人は云ふ――「ここに一塊の金を取つてこれを一個と云ふ。併し、これは眼に一つの印象を生ずると云ふ意味である。實際は之を構

成する原子の群であつて、各原子は皆別々のものであり、各他の原子から獨立して居る。佛陀の境地に達したる者に在つても無數の心靈的原子が共通りに結合されてゐる。其無數の原子が一個の狀態を爲してゐる――けれども各原子は各獨立の存在を有する」と。

併し日本では原始的の宗教（神道）が、平民級の佛教の信仰に影響して多少の變化を生じて居るから、特別に日本人の「自己觀念」と云つても間違ひではない、たゞ一般の神道の思想を併せ考ふることが必要である。神道の靈魂の概念に就ては極めて明瞭な證跡がある。併し神道の靈魂も複體である――業體の樣に、單なる情緒、知覺及び意志の束ではなく、一人格を作る爲めに幾つもの靈魂が結合したものである。死人の靈は唯一として現はるゝこともある、數個として現はるゝこともある。靈は其單位を分離させることが出來る、そして單位の各個は特殊の獨立した行動を取る事が出來る。とはいへ此分離は一時的で複體を構成する種々の靈魂は死後でも當然聯結するし、自發的に一時分離した後も又結合する。日本人民の大多數は佛教信者であり同時に神道信者である、併し自己に關しては原始的の信仰（神道）の方が有力で、二信仰の混合せる中にもそれを明瞭に識別する事が出來る。多分これは業の說のむつかしさを民衆の心に判かりよく簡易に說明する役目を爲したのであらう――どの程度迄とは自分は云ひ兼ねるが。要するに佛教に於ても神道に於ても、自己は親から子に傳へらるゝ要素でない――常に生理的血統に依る遺產でない。

此等の事實は、右の一文の題目に就て、東洋の觀念と我々のそれとの間の差が如何に大なるかを示すであらう。又此等の事實は、極東の二つの信仰の不思議な結合を成せるものと、十九世紀の科學的思想との間に眞の類似が存在するといふ概念も、自己といふ觀念に關する用語に於て嚴密な哲學的精確さで會得せし

むる事は殆ど出來ぬ事を示すであらう。實際佛教哲學に關する佛教用語の精確な意味を翻譯し得べき歐洲語は一つもない。

ヘックスリー教授が「感覺及び感覺傳達器關」に就てなせる論文中にて簡明に陳べられたるつぎの言旨から遠ざかるのは不當と思はれるかも知れない――「論じ詰めると感覺は、感覺中樞の物質の運動の樣式に對する意識上の等價物(エクイバレント)であるらしい。併し若し研究を更に一歩進めて、物質及び運動とは何ぞやと云へば、之に對する答は唯だ一つしかない。我々の知る限りでは運動とは我々の視覺、觸覺、筋覺に於ける關係の或る變化を指す名である。そして物質とは物理的現象の實定的實質で、此實定は心の實質の實定と同じく全く形而上學的思索である」併し形而上學的思索は、終極の眞理が人間の知識の極限外にあるといふ科學的認定があつたからとて決して止むものではない。寧ろ其理由で、却つて永續するであらう。全く止むやうな事は決してあるまい。形而上學的思索が無かつたら宗教上の信念の修正が起らない、修正がなかつたら、科學的思想と調和を保つ宗教的進歩が起こり得ない。であるから自分には、形而上學的思索に至當であるのではない、必要であるやうに思はれる。

我々は心の實質を肯定するとも或は否定するとも、或は思想とは、風が琴の糸に當たつて音樂が生ずる樣に、腦髓の細胞に或る不明の要素が作用して生ずるものであると想像するとも、或は運動とは腦細胞に固有にして特殊なる振動の或る特殊な樣式であると考ふるとも――神祕は尚ほ無限に神祕である、そして佛教は尚ほ人類の價値に適(かた)ひ、道德的進歩と調和する貴い道德上の有効な假說(ワーキング ハイポセシス)である。我々は物質的宇宙と

呼ばるゝものゝ實在を信ずるとも信ぜぬとも、尚ほ說明し得ざる遺傳の法則の――特殊化せざる生殖細胞に於て種族並に個人の性向の傳達せられる事實の――倫理的意義は、業の實の存在を肯定する。意識を構成するものは何であらうとも、之が凡ての過去及び凡ての未來への關係は疑ふ可くもない。又涅槃の說が公平な思索家の深厚な尊敬を失ふことはあり得ない。科學は既知の物質は心と同じく進化の產物である――我々の謂はゆる四行（地水火風）は「未だ分化せざる原始的の形の實質」から進展したといふ證明を發見した。而して此證明は佛敎の分出(エヴォリューション)及び幻影(イリュージョン)の敎義に含まるゝ或る眞理を猛烈に暗示して居る――乃ち凡ての形態は無形から、凡ての物質的現像は非物質的の統一體から進化せるものなる事――凡ての者は結局「欲情も惡意も倦怠もない狀態――個性の刺戟が最早存在せず、從つて本虛と呼ばれ得る狀態」に復歸することを暗示して居る。

第十三章　コレラ流行時に

一

最近の戰爭に於ける支那の重なる味方は、聾耳て、盲目て、條約の事も和平の事も少しも知らずに過ごし、今も尙ほ知らずに居る。併し日本軍の歸國を追うて戰勝帝國に侵入し、暑期中に約三萬人を殺戮した。殺戮は今も行はれつゝあり、茶毘の烟は尙ほ絕えぬ。時とすると烟と臭氣とが、此市の背後の丘から、自分の家の庭園までも風に漂うて來る。そして自分に自分と等大の大人を燒く費用は八十錢――現今の爲替相場て米貨約半弗――てあることを想ひ出させる。

自分の家の二階の縁側から、兩側に小さい商家の並んて居る、一筋の日本町がどん底まて見える。其町の方々の家から、コレラ患者が病院に運ばれて行くのを自分は見た――最後の患者は（遂今朝）道の向う側に住む隣人て、陶器店の主人てあつた。彼は家族の零す

涙と泣き叫びにも拘らず、無理やりに連れて行かれた。衛生法はコレラ患者の私宅療養を許さぬ。けれども住民は科料及び其他の刑罰に觸れても、患者を隱匿しようと試みる。其故は避病院は入院患者夥多で、取扱ひが粗暴である上に、患者は全く親近者から隔離されるからである。併し警官は容易に欺かれぬ、彼等は直ぐ無報告の患者を發見し、擔架と人夫を伴なうて來る。殘酷の様だが衞生法は殘酷てなければならぬ。隣人の妻は、泣いて擔架の後を追うたが、警官が遂に彼女を淋しい小さい陶器店に歸らしめた。店は今閉ぢられて居るが、店主に依つて再び開かるゝ事は恐らくあるまい。

かういふ悲劇は、始つたと思ふと直ぐ終結を告げる。遺族は法律が許すや否や、思ひ出多き所持品を取り片附けて姿を消す。そして町の普通の生活は、夜も晝も、何も變つた事がなかつた様に進行する。行商人は竹の棒と籠、若しくは桶、若しくは箱を携へて空屋の前を過ぎ、いつもの賣り聲をどなる。托鉢僧の行列は經典の文句を唱へながら通る。盲人の按摩は悲げな笛を吹く。夜廻りは溝板（どぶいた）の上に金棒を鳴らす、菓子賣りの子供は尚ほ太鼓を叩いて、女の子の様な哀れつぽい優しい聲で、戀歌を歌ふ（譯者註）——

譯者註　此流行唄の原文見當たらず、止むを得ず英譯の意味だけを更に重譯す。

『お前と私は……長居をしたが、今來たばかりで歸る樣な思ひ。
『お前と私は……忘られぬは茶、宇治の古茶とも、新茶とも人は云はうが私には、美しい山吹色の玉露。
『お前と私は……私は電信技手、お前は電信受取人、私の送るのは心、お前の受け取るのも心、電柱が倒れうと、電線が切れうとこちや構はぬ。

そして小兒等は常の樣に遊んで居る。彼等は叫んだり笑つたりして、相互に追ひあつたり、合唱して躍つたり、蜻蛉を捕へて長い糸に結び附けたり、或は支那人の首を斬るといふ、軍歌の疊句を歌つたりする――

ちやん〳〵坊主の首をはね

時とすると其中の子供が一人消え失せる。併し殘つた者達が遊びを續ける。そしてそれは賢い仕方である。

小兒を燒く費用はたつた四十錢である。自分の隣人の中の一人は、數日前に其子を燒い

た。其子が翫ぶのを常として居た小さい石は、もとのまま日向に横たはつて居る……小兒が石を愛するといふことは、思へば不思議である。貧民の子と限らず、凡ての子供が或る年齢には石を翫弄物にする、何れ程外に翫具があつても、日本の子供は時に石を翫ぶ。子供の心には、石は驚くべき物であるので、そしてそれは然あるべき筈である。數學者の理解力を以てしても、平凡な石に無限の不可解があるからである。小さい頑童は、石に見懸けよりも深いものがあることを推察する、そしてその推察は實際天晴れてある。若し愚かな大人が不實にも、其翫具は珍らしくも何ともないと告げなかつたら、彼はいつまでも石に倦きる事なく、絶えず其中に新しきもの、驚くべきものを發見しつつあるであらう。石に就ての小兒のあらゆる疑問に答へ得るのは、只だ大學者ばかりである。

民間の信仰に依ると、隣人の愛兒は、今賽の河原で、小さい不思議の石を積み立てて居るのだといふ――多分其處では陰の差さぬのを不審りつつ。賽の河原の物語に含まれて居る眞の詩は、其主なる觀念の、全然自然的なる事である――凡ての日本の小兒が石を弄ぶといふ、其遊戯を幻の世界で繼續するといふ點である。

二

兩端に大きな箱を下げた、竹の天秤棒を肩に擔いで、廻はつて來る羅宇屋があつた。一方の箱には、樣々の直徑、長さ、色合の竹と、それを金屬の煙管にはめ込む道具とを入れ、他の一方の箱には赤兒――彼自身の子供――が入れてあつた。時とすると其赤兒は箱の緣に伸び上がつて、通行人に笑ひかけるのを自分は見た。又時には箱の底に暖かさうに纏つて熟睡して居るのを見た。又時には翫具を弄んで居るのを見た。此兒に翫具を與へる者も多數あると聞いた。其翫具の一つに、妙に死人の名札（位牌）に似たものがあつて、それは寢ても覺めても、屹度小兒の傍にあつた。

ところが、過日自分は其羅宇屋が天秤棒と、ぶら下げた箱を棄てて、手車を押して來るのを見た。其手車は、やつと彼の商賣道具と赤兒を入れるだけの大きさで、其積りで特に二室に仕切つて作られたものであつた。多分赤兒は重くなり過ぎて、原始的な運搬法では不適當になつたのであらう。車の上には、小さい白旗が樹てられて、それには『煙管羅宇替』及び『お助けを願ひます』といふ短い文句が走り書きに書いてあつた。赤兒は丈夫さ

うに又樂しさうに見えた。そして前にも自分の注意を惹いた位牌樣の玩具があつた。併し此度は赤兒の寢床と向かひあつた、高い箱の上に、眞直ぐにしつかりと立ててあつた。此車が近づいて來るのを見て居る中に、自分には突然其札は眞實位牌であるといふ確信が浮かんだ。日光が眞向に其上を照らしてお定まりの佛典の文句が明らかに讀まれた。自分の好奇心は動かされた。それで萬右衞門に命じて羅宇屋を呼び留めて、羅宇のすげ替へが幾つもあると告げさせた――それは實際の事であつた。間もなく車は自分方の門前に停まつて、自分はそれを見に出懸けた。

小兒は外國人の顏でも、少しも恐がらなかつた――愛らしい男の兒であつた。彼は片言を云つて、笑つて手を差し出したが、明らかに物を貰ひつけて居たのである。そして彼と戲れてる中に、自分は位牌を熟視した。それは眞宗の位牌で、婦人の戒名卽ち死後の名が書いてあつた。萬右衞門が漢字を翻譯して吳れたのに依ると、つぎのやうな意味が書いてあつた。――『優越の淨境て厚遇せられ高位に置かるゝ者、明治二十八年三月三十一日』其時一人の婢がすげかへを要する煙管を持つて來たので、仕事に取り掛かる此職人の顏を管見した。それは中年を越した男の顏て、昔は微笑を湛へたが、今は乾からびた古池といふ樣な口の周圍に、疲れた、同情をそそる樣な皺を寄せて居た。此皺は多くの日本人の顏

に、云ふに云はれぬ靜寂の表情を與ふるものである。間もなく萬右衞門が質問を始めた。此男に物を問はれて答へぬのは惡人でなくては出來ぬ事である。どうかすると彼の懷かしい罪のない老いたる頭の後に、後光が——菩薩の後光——が射し始めるかと思ふ事がある。

羅宇屋は之に答へて身の上話を話した。それに依ると此子供が誕生後二箇月で、彼の妻は死亡したのである。臨終の時彼女は云つた。『私が死んだなら、それから丸三年は、此兒を私の魂と一緒に居さして下さい。私の位牌から離れないやうにして下さい。さうすると、私が世話をして乳を飮ませますから——お前も知る通り、子供は三年乳を飮む筈のものですからね。此最後のお願ひをどうぞ忘れないで下さい』併し母親が死んで見ると、父親は今迄通りに働いて、其上夜も晝も世話の燒ける、小さい子供の世話をすることは出來ない、乳母を抱へる程の資力もない。それで彼は羅宇屋を始めた。それだと一寸も小兒を打棄らずに、少しの金を儲ける事も出來る。併し牛乳を買ふことも出來ないので、重湯と水飴で一年以上小兒を養つて居る。

それを聞いて自分は、小兒は至つて丈夫らしい、乳がなくて困る樣子は少しも見えないと云ふと、

『それは』萬右衞門が咎める樣な確信の口調で云ひ切つた、『死んだ母親が乳を飮ませ

るからです。小兒は乳に不自由なんぞするものですか」
すると小兒は穩かに笑つた、恰も亡母の愛撫を感ずるかの樣に。

第十四章　祖先崇拜に就て

「阿難聞け、沙羅樹林周廻十二里の間、一毛頭の尖端を以て衝きたる程の地と雖も、强剛なる靈鬼の普及遍在せざるはなし」

——「大般涅槃經」

一

祖先崇拜は、今も種々な目立たぬ形で、歐羅巴の最高文明國の或る者に、殘存して居るといふ事實は、餘り廣く知られてないので、現在そんな原始的な禮拜を實行しつつある非アリアン民族は、必然的に原始的な宗教心に停まつて居るものだと考へる者がある。日本を批評する者も、此輕率な判斷を下して居る。そして日本の科學的進歩の事實や、高等な教育制度の成功と、祖先崇拜の繼續とを、合はせて説明し能はざることを白狀して居る。神道の信仰と近代科學の知識が、如何にして並立するであらうか。科學上の專門家として名を博した人間が、尙ほ家庭の祠を拜し、鎭守の明神の前に額づくのはどうしてであらう。

これは信仰の滅後に、形式のみが保留せられるといふに過ぎぬであらうか。も少し教育が進歩したなら、神道は形骸としてさへ、存在せざるに至る事は確實であるのではあるまいか。

かういふ問を發する人達は、西洋の宗教の繼續に就ても同様の問が發せられ、つぎの世紀まで、それが殘存するや否やに就ても、同様の疑が述べられる事を忘却したと見える。實際、神道の教義は、正教基督教よりも、より多く近代科學と不調和なものでは決してない。極めて公平に研究して見ると、神道の教義は却つて不調和の點が少いと云ふを憚らない。其教義は、我々の正義の觀念と衝突することが少い。そして佛教の業の觀念の様に、科學上の遺傳の事實と著しい相似の點がある――其相似の點は、世界の何の大宗教の眞理の一分子にも劣らざる、深い眞理の一分子を、神道が含有することを證明して居る。出來るだけ簡單に云ふと、神道に於ける眞理の特殊な分子は、生者の世界は死者の世界に依つて、直接に支配せられるといふ信念である。

人の凡ての衝動或は行動は、神の業であるといふ事、及び凡ての死人は神となるといふ事が、此宗教の基礎觀念である。とはいへ、カミといふ語はディチー、ディビニティ、或はゴッドといふ語で譯されるが、實は此等の英語にある様な意味は有せず、又此等の英語

か、希臘、羅馬の古信仰に用ゐられる時程の意味をも有せぬといふ事は忘れてはならぬ。カミは宗教外の意味で上に在る者(アバブ)、優れたる者(スーペリヤー)、上級なる者(アッパー)、高き者(エミネント)を意味し、宗教上の意味では、死後超自然力を得たる人間の靈を意味するのである。死者は『上に在る力』であり、『上級な者』——即ちカミである。此思想は近代の神靈學の幽靈といふ概念に酷似して居る——ただ神道の觀念は、眞の意味に於て民衆的(デモクラチック)でない。神は其格式と力に於て相互に大いに異れる幽靈である——昔の日本社會の階級制度の樣な、靈的階級制度に屬して居る幽靈である。神は或る點に於ては、本質的に生者に優れて居るが、それにも拘らず、生者は神を喜ばし或は怒らし、滿足させ或は侮辱を感ぜしむる事が出來る——時には神の靈界に於ける境遇を改善することさへ出來る。そこで日本人の心には、死後の祭典は、眞劍事で決して遊戯ではないのである。例せば今年になつてからも（これは一八九九年九月に書いたのである）有名な政治家や軍人が、死後直に位階を進められて居る。遂此間も自分は官報で『陛下は最近臺灣で薨去した男爵山根少將に、勳二等旭日章を追賜せらるゝ』旨を讀んだ。かういふ恩澤は、ただ勇敢な愛國者の記憶を尊重する爲めの形式と考へらるべきでない、又は遺族を表彰する爲めのみのものと考へてはならぬ。これは本質的に神道なので、凡ての文明國中、日本獨得の宗教的特質である所の、現界靈界の密接なる關係を例證するものである。日本

人の考では、死者も生者と同じく現存するのである。死者も人民の日常生活に參與し、どんな詰まらぬ喜びでも悲みでも、生者と共に分かつのである。家族の食事に侍し、家庭の幸福を監視し、子孫の繁榮を助け且つ喜ぶのである。或は練物行列に、或は凡ての神道の祭事に、或は武術の競技に、或は死者の爲めに、特に奉納したあらゆる興行物に、來會するのである。そして一般に獻納の供物、下賜の尊稱を喜ぶものと思はれて居る。

此小論文の目的には、神(カミ)は死者の靈として考へれば十分である――國土を創り出したと信ぜられて居る最初の神と、此神(カミ)とを區別することなどはせずとも。カミといふ語の總括的な解釋はこれだけにして、再び、凡ての死者は此世界に住み世界を司宰し、人の思想行爲に感化を及ぼすのみならず、自然界の狀態にも影響を及ぼすといふ、神道の大觀念に還らう。本居翁は書いてる、『神は季節の變更、風、雨、國家及び個人の幸不幸をも司る』手短に云ふと、彼等は凡ての現象の背後に在る見えざる力である。

二

此の古代的心靈學から引き出さるゝ、尤も興味ある學說は、人間の衝動、行爲を死者の

影響に原由するものとして說明する事である。此假說を、近代の思索家は、不合理のものと斷言する譯に行かぬ。何となれば、それは心靈進化の科學的學理が承認せざるを得ぬものであるからである。此學理に依ると、生者の腦髓は各無數の死せる生命が構成した作品を示すものである――各性格は無數の死せる善惡の經驗が多少不完全ながら相殺された總計である。我々が心靈の遺傳を拒否しない以上、我々の衝動と感情及び感情に依つて發展した高尙な能力は、字義通りに死者に依つて作られ、死者に依つて我々に讓られたといふことを、又我々の心的活動の一般方針も、我々に讓られた特殊の性向に依つて定められたものであるといふ事を、正直に拒否することは出來ぬ。かういふ意味では、死人はいかにも我々のカミであり、我々の凡ての行爲は、眞にカミに依つて影響せられる。形容して云ふと、凡ての心は幽靈の住家である――神道が認める八百萬のカミよりも、ずつと多い幽靈の住家である。そして腦髓實質の一グレーンに住む幽靈の數は、針の尖端に立ち得る天使の數に就て、中世の煩瑣學者が考へた、取り留めもない空想を實現して餘りあるものと云ひ得る。科學的には、我々は小さな生ける細胞の中には、一種族の全生活が――幾百萬年の過去に、そして幾百萬の亡びた世界で感受した感情の總額が、貯藏せられることを知つて居る。

併し針の尖端に集まるといふ點に於ては、惡魔も天使に劣らぬであらう。神道の右の説では、惡人と惡行を何と解釋するか。本居翁は之に答へて居る。『世の中に何にても間違つた事が行はれるのは、禍津神（まがつみ）の神と云はれる惡神達の所爲である。此神の力は大にして、日の神も天地創造の神も、時には制へる事が出來ぬ。まして人力にては、彼等の影響に抵抗すべくもない。惡人の榮華、善人の不運は、普通の正義の觀念に抵觸する樣に見ゆるが、これで解釋することが出來る』あらゆる惡行は惡神の影響に依る、そして惡人は惡カミとなる。此極めて簡單[註]な信仰には何等の矛盾がない——何等了解し難い點がない。

註　自分は神道學者に依つて説明せられる、純粹な神道のみを論じて居るのである。併し日本では佛教と神道とが相互に混淆して居るのみならず、支那の各種の思想とも交じつて居ることを讀者に告げ置くの必要がある。純粹の神道の思想が、其昔ながらの姿で、民間の信仰に存在して居るかどうかは疑はしい。又我々は神道に於ける靈魂複體の説に關しては——心靈の組織は本來死に依つて崩潰するものと考へられたかどうかに關しては明確でない。日本各地に於ける調査の結果、自分の意見では、複體靈魂は昔は死後も複體として遺ると信ぜられたらしい。

凡て惡行を犯した者が、必然的にまがつみの神となるといふ事は確實でない、其理由は

後に判かる。併し凡ての人は、善かれ惡かれカミ即ち感化力となるのである。そして凡ての惡行は惡感化の結果である。

さて此の教は遺傳の或る事實と一致する。我々の最善の能力は確に我々の最善の祖先の讓り物である。我々の惡性能は、惡、若しくは今、我々が惡と呼ぶ所のものが、嘗て優勢であつた人間からの遺傳である。文明に依つて我々の心に發展した倫理的知識は、我々の死せる祖先の最善の經驗から讓り受けた高尚な能力を增進せしめ、又承け繼いだ劣惡の性向を滅殺せしめることを要求する。我々は我々の善きカミに叩頭し、服從し、我々のまがつみの神に反對するの義務がある。此の善惡兩神の存在の知識は、人間の理性出現と同時に發達したものである。凡ての人間には善神惡神が伴なうて居るといふ說は、形式こそ異れ、大抵の大宗教には附隨して居る。我々の中世の信仰も、我々の國語に永久の痕跡を殘す程度迄、此の觀念を發展せしめた。けれども保護神、誘惑鬼の信念は其進化の跡をたどると、カミの信仰の如く、嘗ては簡素であつた信仰の發達したものである。而して中世の信仰の此思想も、同樣に眞理に富んで居る。右の耳に善事を囁く白翼の天使、左の耳に惡を讒(つぶや)く黑鬼は十九世紀の人間の傍に隨行しては居ないが、彼の腦髓の中には潜んで居る。そして彼は屢〻彼等の聲を聞き分け、彼等の慫慂を感ずること、中世の彼が祖先と同樣で

ある。

近代の倫理觀よりすれば、神道では惡神も善神と同じく尊崇さるゝといふ事が面白くない。「帝が天地の神祇を崇拜する如く、人民は幸福を得る爲めに善神に祈り、其怒りを避くる爲めに惡神をも祀る……善神の外に惡神もある以上、美味を供へ、管絃を奏し、歌舞を爲し、其外凡て神意を娛まする事を行つて、惡神を和めるの必要がある」（サトウ氏譯、本居翁の言）事實上近代の日本では、惡神も和めねばならぬといふ、此明瞭な議論があるにも拘らず、惡のカミに供物を供へ敬稱を奉るといふ事は殆どない樣である。併し初期の宣敎師が、此信仰を惡魔崇拜と斷じた理由はここに在る――尤も神道では、西洋の意味の惡魔といふ觀念は決して現はれなかつたのであるが。神道の弱點と見ゆる所は、惡靈は之と戰ふべきでないと云ふ敎にある――この敎が特に羅馬加特力的感情に厭はしく感ぜられる。併し基督敎の惡魔と、神道の惡靈との間には大なる相違がある。惡しきカミは死人の靈に過ぎぬので徹頭徹尾惡ではない――和める事が出來るのであるから。絕對の純粹な惡といふ思想は極東にはない。絕對惡は確に人間にはない、從つて人間の靈にもない。惡しきカミは惡魔でない。彼等は單に人間の情慾に影響を及ぼす幽靈なのである、そして此意味に於てのみ情慾の神なのである。乃ち神道は、凡ての宗敎中の尤も自然的なもの、從つて或る點に於

ては、尤も合理的なものである。神道は情慾其者を必らずしも惡とは考へぬ。ただ之に耽溺する度合、原因、事情に依つて惡となると考へる。幽靈であるから、神々は全く人間的である――人間の善なる性、惡なる性を、種々の割合に混合して所有する。併し大多數は善であるから、凡ての神の感化の總計は惡よりも善に近い。此見解の合理性を了解するには、可なり樂天的な人間觀を要する――日本の古代社會の情況が是認する樣な人間觀を要する。厭世家は純粹の神道家たる事は出來ぬ。此教義は樂天的である。人間を大體善なりと信ずる者ならば、神道の教に、和む可からざる惡がないのを咎めはせぬであらう。

さて神道の倫理的に合理的な特質が現はれて居るのは、此惡靈を和める必要を承認する點にある。古代の經驗も近代の知識も、人間の或る性向を根絶しよう、若しくは麻痺せしめようとする事の、大なる誤謬であることを警告するに一致して居る――性向といふのはそれを病的に助長し、若しくは或る制御を加へぬと、人を放縱、罪過、其他無數の社會上の害惡に導くものをいふのである　動物慾や猿や虎の樣な衝動は人間の社會を作る前から存して居て、それが社會を毒する殆ど凡ての犯行を助くるのである。併し之を絶滅することは出來ぬ、之を安全に餓死せしむる事は出來ぬ。之を根絶せしめようとする企圖は、之と分離し難く混淆して居る高尚な情緒的性能の幾分を破壞する努力となる。原始的な衝

動を痲痺せしめようとすると、人生に美と優し味とを與ふる所の、併しそれにも拘らず情慾といふ古い土地に根を深く張つて居る所の、知的幷に情的の力を失はせる事になる。我我の有する最高のものは、其起原を最低のものの中に發して居る。禁慾主義は自然な感情と戰つて、却つて怪物を產出して居る。神學上の法規を、不合理に人間の弱點に適用すると、社會の紊亂を助長する。快樂の禁制はただ淫蕩を挑發する。我々の惡なるカミは或る和慰を要することは、道德の歷史が明らかに敎へて居る所である。人間にはまだ理性よりも情熱の方が強い、その理由は情熱は理性よりも比較にならぬ程古いからである――又情熱は嘗て自己保存に極めて必要であつたからである――又情熱は自覺の第一層を爲し、それから高等な情操が、徐々に發生したものであるからである。情熱に支配せられてはならぬ、併し情熱の太古以來の由緒ある權利を否定するのは危險である。

三

死者に就て、こんな原始的な、併し――今は會得せられるであらうが――不合理ならざる信仰から、西洋の文明には知られてない道德的情操が發展した。此等の情操には考究の

價値がある、それは尤も進歩した倫理的思想と、そして進化論の會得の結果たる、義務感の異常な（まだ判明せざる）擴張と、此等の情操がよく合致するからである。自分は我々の生活にこんな情操がないのを、喜ぶべき理由があるとは思はない――自分は寧ろ、此種の情操を修養するの必要が、道德上に感ぜられる時がありはせぬかと思ひたい。我々の前途の驚異の一は、確に久しい以前、何等の眞理を含まぬといふ臆定の上に、拋棄した信仰や觀念に復歸する事であらう――こんな事を考へるのは傳統的の習性から妄りに排斥を事とする人々に依つて、今尚ほ野蠻だ、異教的だ、中世的だと呼ばるゝであらうが。科學の研究の結果は野蠻人や、半開人や、偶像崇拜者や、修道僧やは、悉く別々の途を辿つて永遠の眞理の或る一點に到着せしこと、十九世紀の思索家に異らぬといふ證據を年々供給して居る。又我々は昔の占星學者や錬金術者の說も、ただ部分的に誤つて居たので全然誤つて居たのでない事を今學びつつある。我々は如何なる目に見えぬ世界の夢も――如何なる神祕境の假說も、眞理の或る萠芽を含まぬものはなかつたと將來の科學が立證し得ぬはないと、想像すべき理由をさへ有つて居る。

神道の道德的情操中第一位を占むるものは、過去に對する感謝の念――我々の情緒的生

活に於て、眞に之に相當するもののない情操である。我々は我々の過去を知ること、日本人が彼等の過去を知るよりも優つて居る――我々は過去の凡ての事物狀態を記錄し、若しくは考察する無數の書籍を有する。併し我々は如何なる意味に於ても、過去を愛し過去に感謝の念を有するとは云ふを得ぬ。過去の功罪の批判的な承認――稀に過去の美によつてそそられる熱狂、多くは過去の誤謬の强烈な痛責、此等が過去に關する我々の思想感情の總計を表して居る。過去を顧みるに當つて、我々の學者の取る態度は必然的に冷かである。我々の藝術の態度は往々非常に寬大であるが、宗敎の態度は大抵辛辣を極める。如何なる見地より硏究するも、我々の注意は主として死者の爲した事業――或は見て居る間に、我我の心臟を常よりも少しく早く鼓動せしむる樣な、目に見ゆる造營物だとか、或は昔時の社會に及ぼした死者の思想行爲の結果だとか――に傾注される。併し過去の一般人間に就ては――血族としての永く地中に在る無數人に就ては――全く考へぬか、若し考へれば、絕滅した種族に對する樣な好奇心を以て考へるのである。尤も我々も歷史に大なる痕跡を遺した或る個人の傳記に興味を見出す事はある――我々の情緖は偉大なる軍人、政治家、發見者、改革家等の記念に依つて動かされる――併しそれはただ彼等が爲した事業の偉大さが、我々自身の野心、願望、自尊心をそそるからで、百中の九十九は全く我々の我執を

離れた愛他的の情操ではない。我々が尤も恩を受けて居る名もなき死人に對しては我々は一顧をだも拂はぬ――我々は彼等に何の感謝をも愛情をも感ぜぬのである。我々は祖先の愛といふ様な事が、如何なる形の人間社會に於てでも、眞實な、有力な、徹底的な、指導的な宗教的情緒であり得る事を信ずるに困しむ程である――併し日本ではそれが僅に事實なのである。祖先崇拜といふ様な事は、其觀念だけでも我々の思考、感情、行爲とは全く風馬牛である。勿論其一部の理由は、我々と我々の祖先との間に、切實な精神的關係があるといふ信念を一般に我々が有たないからである。我々が非宗教的である場合は、全く幽靈を信ぜず、若し又大いに宗教的である場合は、死人は神の裁判で我々から引き離されたもの――我々の生存中は、全然我々から引き離されたものと考へる。尤も羅馬加特力教國の農民中には、未だ死者は一年に一度――萬靈節（十一月二日）の夜――地上に歸ることを許されるといふ信念が存して居る。併し此信仰に於てさへ、死者は記憶以上の羈絆で、生者に繫がれてゐるとは考へられて居ない、そして彼等は愛よりも寧ろ恐怖を以て見られて居る――民間の傳説集を讀んでも分かる通りに。

日本では、死者に對する感情は、之と全く異つて居る。それは感銘的な恭謙な愛の感情である。それは民族の情緒中、尤も深く強いものであるらしい――特に國民的生活を指導

し、國民的性格を形成する情緒であるらしい――愛國心も之に屬する、孝道も之に賴る、家族愛も之に根ざす、忠義も之に基づく。戰場で戰友に道を開く爲めに、『帝國萬歲』を叫んで、わざわざ生命を投げ出す兵士――不甲斐なき、若しくは殘酷ともいふべき親の爲めに、默つて浮世の幸福を悉く犧牲に供する子女、今貧窮に陷つた親分に、昔て爲した口約束を果たす爲めには、友達も家族も財產も棄てて省みぬ子分、良人が他人に蒙らした損害を償ふ爲めに、白無垢の禮服で、南無阿彌陀佛を唱へながら、懷劍を咽喉に突き刺す人妻――此等は何れも目に見えぬ祖先の靈の意志を忖度し、其嘉納の聲を聞いて爲すのである。新時代の懷疑的な學生の中にすら、多くの破壞された信念の中に、此感情だけは遺つて居て、古い情緒が今でも時に、『我々は祖先を辱しめてはならぬ』『祖先に敬意を拂ふは我々の義務である』等の文句で現はされる。自分が以前英語の敎師として雇はれて居た頃、かう云ふ詞の裏にある眞の意味を知らざりし爲め、作文の中でそれを訂正しようと思つた事がある。例せば『祖先の記憶に敬意を拂ふ』とする方が『祖先に敬意を拂ふ』といふよりも正しいと敎へた事がある。或る日自分は、死んだ祖先を生きた兩親であるかの樣に云ふは當たらないと、其理由を說明せんと試みた事を記憶して居る。多分學生等は自分が彼等の信仰を妨げんとすると疑つたであらう。日本人は決して祖先が『ただの記憶』と

なつたとは思はない、彼等の死者は生きて居るのである。

若し我々の心に我々の死せる祖先は尙ほ我々の身邊にあり、我々の凡ての思想を知り、我々が云ふ凡ての詞を聞き、或は我々に同情し、或は我々を怒り、或は我々を助け、又我我の助を受くるを喜び、或は我々を愛し、又我々の愛を大いに要求するといふ確信が突然起こつたとすれば、我々の人生觀、義務觀も大いに變化するであらう。我々は過去に對する我々の義務を、尤も嚴肅に承認せねばならぬであらう。然るに極東人には、死者が常に身邊に居るといふ考は、數千年間の確信であつて、彼は每日死者に物云ひ、幸福を祈つて居る。不治の大惡人にあらぬ限り、死者に對する義務を忝く忘れる事はない。平田篤胤は云ふ、其義務を怠らぬ者は、決して神に對し、又は生ける兩親に對して不敬である事はない。『こんな人は友人にも忠實であり、妻子にも柔和親切であらう、何となれば此種の情愛の精髓は、眞實祖先に對する孝道であるのであるから』。日本人の性格中にある、不可解な感情の隱れた原由は、此情緒の中に求めねばならぬ。死に面する時の天晴れの勇氣、尤も苦しき獻身的の行爲が爲さるゝ時の悠揚たる態度なども、我々の情操の世界には緣遠いものであるが、それよりも更に緣遠い事は、日本の少年が初めて詣でた神道の祠前で、

突然涙が眼に滂沱として浮かぶのを感ずる程、深い感動を受ける事である。其瞬間に彼は我々が決して、情緒的に認めぬものを自覺するのである、――現在が過去に負ふ洪大な負債と死者に對する敬愛の義務とを。

四

我々が若し我々の地位を負債者として考へ、又我々は其地位に、如何に處するかと考へるなら、西洋の道徳的情操と、極東のそれとの間の著しき相違は明瞭となるであらう。

生といふ事實が初めて十分に我々の自覺に入つた時、不可思議な其生の事實程、我々をして肅然たらしむるものはない、我々は知られざる暗黒の中から、一寸日光の中へ出現する、四邊を見廻はす、喜んだり苦しんだりする。我々の存在の震動を他の存在へ移す、そして再び暗黒の中へ歸還する。浪が此通りてある。現はれ出る日光を捉へる、其運動を傳へる、そして再び海中に沒入する。植物も其通りに土から現はれ出て、其葉を日光と空氣との中に開き、花咲き、實のり、そして再び土と成る。ただ浪は知識を有たぬ、植物は知

覺を有たぬ。人間の生も皆、地から出て地へ還る抛物線的の運動に外ならぬ様に見ゆる、が人間の生は其短い變化の中間に宇宙を覺知する。此現象の嚴粛味は誰れもそれに就て何事をも知らぬといふ點に在る。凡ての事實中で此尤も平凡な、併し尤も不可解な事實——生其者は、如何なる人も説明し得ない。それにも拘らず苟くも考へ得る凡ての人間は、自己に關して、早くから之を考へざるを得なかつた。

　自分は神秘の中から現はれ出る——自分は空と陸と、男と女と、それから彼等の事業を見る、そして自分は神秘の中へ還らねばならぬことを知る——併しこれが何を意味するかは、最大の哲學者も——ハアバアト・スペンサー氏すらも——自分に告げる事が出來ない。我々は悉く我々自身に謎であり、又相互に謎である。空間や、運動や、時間や皆謎である、物質も謎である。以前及び以後に就ては、新たに生まれた孩兒も、死人も、我々に何等の消息を齎さぬ。孩兒は默し、髑髏はただ笑ふ（齒をむき出して）のみである。自然は我我に何の慰藉をも與へぬ。自然の無形の中から有形が現はれ、それが又無形に還る——それだけである。植物は土となり、土は植物となる。植物が土に還る時、其生命であつた震動はどうなるのであらう。それは窓玻璃に結ぶ霜に、齒朶の葉形を作る力の様に、目には見えずに存在を續けるのであらうか。

無窮の謎の地平線内に、世界と共に生まれた無數の小さい謎が、人間の來るのを待つて居た。エヂパスは一匹のスフヰンクス[譯者註]に出遇つた。人類の出遇つたのは幾千萬匹であつたらう——何れも時の通路に沿う枯骨の中に蹲まつて、順繰りに前よりも深いむつかしい謎を提供しつつ。凡てのスフヰンクスの謎は悉く解かれてはなかつた。尚ほ未來の路には幾億萬のスフヰンクスが並列して、まだ生まれぬ生命を呑まんとして居る。併し今迄に解かれたのが數百萬ある。我々は我々を導く若干の知識——破滅の顋から獲來たつた知識の故に、今は不斷の恐怖なしに生存する事が出來るのである。

譯者註　希臘神話中の物語。スフヰンクスは人面獅身の怪物、辻に立つて通行人に謎をかけ、解けぬ時は之を喰ひ殺す、偶々エヂパス此謎を解くと怪物は自殺したと云ふ。

我々の知識は、凡て讓り受けた知識である。死者は彼等自身及び周圍の世界に就て——生死の法則に就て——求めらるべきもの、避けらるべきものに就て——生活と自然が欲するよりも痛ましからぬ様にする方法に就て——正と不正、悲みと樂みとに就て——我欲の誤謬、親切の賢明、献身の義務に就て——凡て此等に就て學び得たる物の記錄を、我々に遺したのである。彼等は氣候風土季節に就て——日月星辰に就て——宇宙の運行と構成に

就て、彼等の發見し得た凡ての物の知識を我々に遺したのである。彼等は又我々に彼等の謬想を遺して、我々をしてより大なる謬想に陷る事を免れしめた。彼等は彼等の過誤と努力、彼等の成功と失敗、彼等の苦しみと喜び、彼等の愛と憎みの歴史を我々に遺して、我我の警告とし若しくは範例とした。彼等は我々の同情を期待した、其故は彼等は我々へ最大の好意と希望とを以て努力したからである。そして又彼等は我々の世界を作つたのであるからである。彼等は國を切り開いた、彼等は怪物を退治した、彼等は我々に尤も有用な動物を馴致し訓練した。『クレルボの母は墓の中で目覺めた。そして深い土の中から彼に叫んだ、「妾は其方が獵に連れて行く樣に、犬を木に繋いで其方に遺して置いたぞや」』(フィンランド民謠集「カレバラ」第三十六章)彼等は同樣に有用な樹木草木を養殖した、又金屬の所在地と効用とを發見した。後年に至つて彼等は我々の所謂文明を造り出した――彼等が止むを得ず爲した誤謬の訂正を、我々の爲すに任せて。彼等か努力の總計は無算數である。彼等が我々に與へた凡ての物は、之が爲めに費やした無限の勞苦と考慮とを思ひやつたのみでも、確に非常に神聖であり非常に貴重である。けれども果たして西洋人の何人か、神道信者の如く毎日つぎの樣な感謝の辭を述べやうと思ふ者があらう――『我々後裔の先祖、我が家族の先祖、我が血緣の先祖達よ――卿達に我々の家庭の始祖として我

我はここに感謝の喜びを申し述ぶる＝

そんな者は一人もない。それはただ我々が死人に耳なしと考へるからばかりではない、我々は代々甚だ狹い範圍内に於ての外――家族といふ範圍内に於ての外、同情的に心て其人を想像する力を揮ふ樣に訓練されて居なかつたからである。西洋の家族といふも東洋の家族と比較して甚だ狹いものである。此十九世紀に在つては、西洋の家族は殆ど崩壞して居る――實際上、それは夫婦と丁年に達する事遠き子供等を意味するに外ならぬ。東洋の家族といふは、啻に兩親と其血を分けたもののみならず、尙ほ祖父母と其血緣、曾祖父母及び其背後のあらゆる祖先を意味するのである。此家族の概念が、同情的想像力を發達せしめ、遂に想像力に伴なふ情愛の及ぶ範圍は生ける家族の多くの群、及び亞群に迄も擴がり、國家危急の際には、一大家族としての全國民に迄も及ぶのである、これは我々が愛國心と呼ぶものよりも、遙かに深い感情である。更に宗教的情緖としては、此感情は、あらゆる過去に限りなく擴げられる。愛や忠義や感謝やの混合した感情は、生ける血緣に對する感情に比すれば、漠然として居るのは止むを得ぬが、それと同樣に實在的な感情である。

西洋に於ては古代社會の破滅後は、こんな感情は存在し得なかつた。古代人を地獄に落とし、彼等の事業の嘆美を禁じたる信仰――凡ての物に對する感謝をヘブライの神に捧げ

る様に我々を訓練した教義――は過去へのあらゆる感謝の念を抑制する思考の習慣并びに思考せざる習慣を作り上げた。つぎに神學の衰頽と科學の勃興と共に、死せる者は自ら擇んで彼等の事業を爲したのでない――彼等は必然に從つたので、我々はただ彼等から必然の結果を、必然的に承け繼いだのであるといふ教へが現はれた。そして今日も我々は尚ほ、必然其者も、必然に從つた古人に對する我々の同情を促すことを、又其承け繼いだ結果は、貴重であると同樣に、感銘すべきものであることを、認めやうとはせぬ。そんな考は、我我の爲めに働く生ける人々の事業に關してさへ、我々には起こらぬのである。我々は購求した物、若しくは我々自身の有となした物の代價を考へる――がそれが生産者に費やさしめた努力に就ては、我々は考へる事を決してせぬ。否、そんな事に就て良心の表白めいた事を云つたなら笑はれるであらう。そして我々が過去の仕事の感銘的な意義にも、及び現在の仕事のそれにも、同樣に無感覺な事が、我々の文明の浪費を常とする所以を大略說明する――一時間の快樂に、數年の勞働を無造作に消費する贅澤――心なしの富豪が幾千人となく、各々全く不必要の欲望を滿足せしむる爲めに、幾百の生命の代價を蕩盡する不人情等は、之に依つて說明せられる。文明の食人鬼は、無意識的ながら野蠻民の食人鬼よりも一層殘酷で、そして餘計の肉を要する。大なる人道――廣汎な人間愛――は根本的に無

用な奢侈の敵である、そして肉感の滿足、若しくは自己主義の快樂に、制限を設けぬ樣な社會には根本的に反對する。

振り返つて極東を見ると、簡易生活といふ道德的義務は、遠い古から敎へられて居る。祖先崇拜は、此廣汎な人間愛を發展させ培養したからである。我々には此愛がない、併し我々は單に我々を滅亡から濟ふ爲めにも、いつかは之を求めざるを得ざるの日が來るであらう。つぎに擧げる家康の二箇條の言は、極東の情操の例證である。此最大の日本の軍將兼政治家は、事實上帝國の主腦であつた時代に、親ら絹の古袴の塵を拂ひ、皺を延しつつ侍臣の一人に云つた、『予は袴が大切故、こんな事をするのではない。ただ此袴を作り出すのに、要せられた勞苦を思ふからするのである。これは一婦人の辛勞の結果で、それを予は大切に思ふ。物を使用しながら、其物を作り出すに要した時間と勞苦とを思はぬならば――それ程の想ひ遣りがなければ我々は禽獸と異らぬではないか』又彼が最も富める時代に、彼の御臺所が、餘り屢〻新衣を彼の爲めに新調するのを叱責して云つた詞がある。『予は周圍の大勢の國民と、子孫の事を思ふと、彼等の爲めに、予が所持品に就ても儉約を守るが予の義務であると思ふ』此簡單の精神は、未だ日本から棄てられてない。天皇皇后でさへ日常の居室では臣民と同じく質素な生活を續けられ、そして皇室費の大部分を災

五

極東に於て、祖先崇拜が生み出した樣な、過去への義務の道德的承認は、西洋にも遂には進化論の敎へに依つて發達するてあらう。今日てさへ新哲學（進化論を意味す）の第一の原理に通曉して居る者は、尤も普通な手工品をても、其進化の歴史の幾分かを認めずに見ることは出來ない。かういふ人には最も普通な手道具ても、木工若しくは陶工、鍛冶工若しくは刄物師の、個人能力の生產物とばかりは見えず、作法、材料、形態などに就て、數千年間繼續した經驗の造り出したものと見えるてあらう。又如何なる器具ても、其の進化に要せられた莫大な年處と勞苦とを考へ、しかも感謝の念を經驗せざることは不可能であるてあらう。將來の同胞は過去の物質的遺產を、死せる祖先と聯關して考へるに相違ない。

併し廣汎な人間愛の發展に在つて、過去に負ふ物質的の恩義よりも有力なる要素は心靈的恩義の承認てなければならない。我々は我々の非物質的の世界をも――我々の內部に生きて居る世界をも――美しい衝動や情緒や思想やの世界をも――死者から讓り受けたので

ある。苟くも人間美が何であるかを科學的に了解する者は、尤も平凡な狀態に於てさへ、神々しい美を見出し、そして或る意味に於て、我々の死者は眞に神々しくある事を感ずるであらう。

我々が婦人の靈魂はそれだけで完全なもの——或る特殊な肉體に適合せしむる爲めに特に作られた物——と想像する限り、母性愛の美と驚異とは、十分に我々に知られないであらう。併し深く悟れば、幾萬億の死せる母から傳承した愛が、一人に詰め籠まれたのだと悟るに相違ない——又これでこそ、孩兒が聞かさるゝ母の詞の無限の優し味も——又孩兒の眼と出合ふ母の眼の無限の情味も、說明されると悟るに相違ない。こんなことを知らざりし人間こそあはれである。けれども如何なる人間か遺憾なく此情愛に就て語り得よう。眞に母愛は神聖である。人間が認めて神聖と呼ぶ凡てのものは、此母愛に綜合されて居るのである。そして其最高の表明を叶露し傳達する凡ての婦人は、ただ人間の母たるに留まらない、彼女は神の母である。

ここに性愛である初戀といふ幻覺の玄妙は說くを要しない、——何となればそれは死者の情熱と美とが復活して眩惑し欺瞞し蠱惑するのであるから。それは實に實に驚くべきも

のである、併しそれは悉く善ではない、何となればそれは悉く眞でないから。婦人の眞の美は後に現はれる――凡ての幻影が消失して、其まぼろしの幕の後ろに發展しつゝあつた、いかなる幻影よりも美しい實體を現はす時に。かくして曝露された婦人の貴い魅力は何であらう。それは外でもない、死して埋められた幾百萬の心臟の愛情、情味、信義、無欲、直覺等である。それ等が凡て蘇生するのである――それ等が彼女自身の心臟の鮮やかに、暖かい鼓動の中に新たに鼓動するのである。

最高の社會的生活に現はれる、或る驚くべき性能も、又別種の筋道で、死者に依つて建設される靈魂の構造を語つて居る、驚くべきは、眞に『凡ての人に凡ての物であり』得る男、或は一身を二十、五十或は百の別の女となし――凡ての人を了解し、洞察し、推量を誤らず――個性的の自己を有せず、其代り無數の自己を有するが如くに見え――相手の心の調子にきちんと合はせた心で、それぞれに異つた人に接するを得る女である。こんな性格は珍らしいに相違ない　併し何處の教養ある社會ででも研究して見ると、さういふ人間の一人か二人には必らず出遇ふものである。彼等は本質的には複合體の人間なのである――『我』といふものを單體と考ふる人でさへ、彼等を『非常に複雜』と評する程、明らかに複合的なのである、それにも拘らず、同一人間にかく四十五十の性格が現はるゝ事は顯

著な現象て（一身の經驗が積んて、其原因となる前の、青年に普通現はるゝが故に特に顯著てある）其意義を正直に認める人のないのを、自分はたゞ怪しむばかりてある。

或る種の天才の『直觀』と名づけられるものに於けるも、又此通りてある——取り分け情緒の描寫に關する直觀に於て。沙翁の如き天才は古來の靈魂說ては、永久に不可解と殘るてあらう。テイ　は『完全なる想像力』と云ふ語て彼を說明せんと試みた——そして其語は眞理を穿つて居る。併し完全なる想像力とは何を意味するか。靈魂の無數世代——無數の過去生活が一身に復活したるもの。これを外にして何者ともそれを說明する事は出來ぬ……とはいへ、心靈複體說て尤も顯著なのは純知の世界に於てゞはない、愛、名譽、同情、任俠等の、尤も質朴な情緒に訴へる世界に於てゞある。

『併し此學說ては』或る批評家は云ふかも知れない、『任俠への衝動の源泉は、又犯罪の衝動の源泉ともなり得る。雙方共死せる祖先に屬する』。それは其通りてある。我々は善と同樣に惡をも承繼した。複合體——尙ほ進化し、尙ほ發展しつゝある——てあるから、我々は不完全なものを承繼して居る。併し衝動の適者生存は、確に人類の押しならした道德狀態に依つて證明されて居る——ここに『適者』といふ語は倫理的意義て用ゐたのてあ

る。我々の所謂基督教文明の下に、比類なく發展した、あらゆる不幸惡德罪惡にも拘らず、多く生活の經驗を有し多く旅行し多く考へた人には、過去の人類から我々が承繼した衝動の大部分は、善であるといふ事實は、明瞭であるに相違ない。尙ほ又社會の狀況が順當であればある程、人間も善良である事も確實である。過去を通じて善なるカミは惡なるカミが世界を統御することを常に妨げて來た。此眞理を承認すれば、我々の將來の正邪の觀念は非常に擴張せられるに相違ない。任俠の行爲若しくは凡て立派な目的の爲めの純善の行爲は、從來考へられなかつた程尊重されると同時に――眞の罪惡は現存の個人若しくは社會に對するよりも、寧ろ人類經驗の總額、及び過去の倫理的向上のあらゆる努力に對する犯罪として、見られる樣になるに相違ない。乃ち眞の善は一層尊重せられ、眞の惡は一層嚴酷に判斷せられるであらう。そこで『倫理的法則は必要でない――人間行爲の正しい規約は常に良心に尋ねて知らるべし』といふ初期の神道の教へは、現在の人間よりも、もつと完全な將來の人間に、承認せられること疑のない教へてある。

六

讀者は云ふかも知れぬ、『進化論は如何にも其遺傳の說に依つて生者は或る意味て死者に支配せられることを示して居る。併し又死者は我々の內部にあるので、外部にあるのでない事を示して居る。彼等（死者）は我々の一部分である――彼等は我々以外に別に存在を有して居るといふ證據はない。故に過去への感謝は、卽ち我々自身への感謝である。死者に對する愛は、卽ち自己愛であるてあらう。乃ち貴下の類推論は不合理に終はるものである』と。

否。其原始的な形式の祖先崇拜は、ただ眞理の象徵であるかも知れぬ。擴張された知識が、我々に强請するに相違ない新しい道德的義務――人類の倫理的經驗の獻身的な過去への崇敬服從の義務――の指示若しくは前兆に過ぎぬかも知れぬ。併し又それ以上てもあり得る。遺傳の事實は、心理的事實の半分しか說明して居ない。一莖の草木は十、二十、乃至百莖の草木を生じ、しかも之に依つて自己の生命を失はぬ。一匹の動物は多數の兒を生み、しかも其あらゆる肉體の能力と、少許の思考力を少しも減少せずに生活を續け得る。

子供は生まれても兩親は生存する。心的生活は確に肉的生活と同樣に遺傳される。けれども植物に於ても動物に於ても、凡ての細胞中の尤も特殊化せざる生殖細胞は、決して兩親の存在を奪はぬ、唯だそれを繰り返すだけである。絶えず繁殖しつゝ各細胞は一種族の全經驗を運び傳へる、けれども其の種族の全經驗を後に殘して置く。ここに說明すべからざる驚異がある――肉的並びに心的存在の自己繁殖――兩親の生命から續々と放出される生命が、各々完全體となり繁殖的となる事實是である。兩親の凡ての生命が、其子に與へられるならば、遺傳は唯物論を贊助するとも云ふことが出來る。併し印度傳說の神々の樣に『自己』は繁殖し、しかも十分な繁殖力を保留して舊態を維持する。神道は分裂に依つて靈魂が繁殖すると說く、併し心靈分出の事實は、如何なる說よりも限りなく驚くべきものである。

大宗教は皆遺傳ては自己の全問題を說明し得ぬことを――本源の殘留せる自己の運命を說明し得ぬことを認めて居る。そこで彼等は一般に內的存在は、外的存在に關係せぬと考へる事に一致して居る。科學も實在の性質を決定し能はぬと同樣に、宗教が提起し　疑問を決定する事が出來ない。又『死せる植物の生活力を構成して居た力はどうなるか』とい

ふ疑問にも解決を得る事は出來ない。『死せる人間の心的生活を構成して居た感情はどうなるか』といふ問は更に一層難問である――尤も簡單な感情と雖も說明し得る人はないのてあるから。我々はただ生存中は植物の體內若しくは人間の體內に於ける或る活潑な力が、絕えず外界の力と自ら調節して居た事を、そして內部の力が外部の力の壓迫に最早應じ得なくなつた後は――其時は內部の力が貯藏せられて居た體は、それを構成して居た幾多の原素に分解されたといふ事を知るに過ぎない。我々は其原素の終極の性質に就ては、幾多の原素を結合させる傾向の終極の性質に就てと同樣に全く無知である。併しながら我々は生の究極的要素は、それが造つた形體の分解後も生存すると信ずる方が、滅亡すると信ずるよりも至當であると考へる。自然發生說（スポンタネノス、ジエネレシヨン）（此名は命名を誤つたものである、何となれば、限られたる意味に於てのみ『自然（スポンタネアス）』といふ語は生の起原說に適用せられるものであるから）は進化論者の承認せざるを得ぬ學說であり、又物質それ自身も進化しつつあるといふ化學の證明を知悉して居る人を驚かし得ぬ學說である。眞の自然發生說は（有機體が壜の中へ浸（つ）けた草木から發生すると云ふ說ではなく、遊星の表面に發生する原始的の生命に就ての學說）非常な――否無限な――精神的な意義を有する。それは生命、思想、情緒のあらゆる潛在性は、星雲から宇宙へ、系統から系統へ、恒星から遊星若しくは衛星へ、そして再び

逆に原子の旋風的混沌へ、轉々するといふ信念を要請する。又それは傾向性（テンデンシー）は太陽の酷熱にも殘存し――あらゆる宇宙的進展にも崩潰にも、殘存する事を意味する。原素はただ進化の產物に過ぎぬ、そして一の宇宙と他の宇宙との相違は、傾向性の作爲でなければならぬ――而して此傾向性は巨大複雜想像を絕する一種の遺傳に外ならぬ。其處に偶然はない、法則あるのみである。凡ての新しい進化は、其前代の進化に依つて影響せられる――丁度各個の人間の生が代々の祖先の生の經驗に依つて影響せられる樣に。舊形式の物質の傾向は、將來の新形式の物質に依つて承繼せられるのではなからうか、そして現在人間の行爲思想は、未來の世界の特質を作爲するに與りつつあるのではなからうか。錬金術者の夢は最早痴人の夢であつたと云ふ事は出來ぬ。同樣に最早我々は古東洋の思想に於ける如く、凡ての物質的現象は、靈魂の傾向に依つて決せられるのでないと主張することは出來ない。

　我々の死者は我々の內部に於けると同樣に外部にも生存するにしてもせぬにしても――これは我々の比較的盲目な未開の現狀では決せられぬ問題である――宇宙の事實の證明は、神道の幽玄な信仰と一致することは確である、卽ち凡ての物は亡びたる物に依つて――人間の幽靈に依つてか、或は世界の幽靈に依つてか――決せられるといふ信仰と一致する。我々自身の生命が、今眼には見えぬ過去の生命に支配せられる樣に、疑もなく我が地球の

生命及び地球の屬する太陽系統の生命も、無數の天體の幽靈に依つて支配されて居る。亡びたる幾多の宇宙——亡びたる幾多の太陽や遊星や衞星や——は、形式としては久しく暗闇の中に溶解し去つたが、力としては不死不朽で、永久に活動して居るのである。

實に神道信者の樣に、我々は、我々の系圖を太陽まで遡ることが出來る。けれども我々は、我々の起原は其處にもなかつた事を知る。其起原は時間に於て、百萬の太陽の生命よりも、遙かに遙かに遠いのであつた——若し起原があつたといふのが、眞理に背かぬとすれば。

進化論は、我々は物質も人間の心も其の常に變はりつつある表現に過ぎない所の、未知の究極と同一物であることを敎へる。進化論は又我々の各個は多くの者てあることを、けれども我々の凡ては他の各個及び宇宙と同一物である事を——我々はあらゆる過去の人類を啻に我々自身の中に認めねばならぬのみならず、尙ほ又凡ての同胞の生命の普さ美しさの中にも認めねばならぬことを——我々は他人に於て我々自身を尤もよく愛し能ふことを——形體は遊絲や幻に過ぎぬことを——そして生者死者を問はず、凡ての人間の情緒は眞實はただ無形の無窮にのみ屬するといふことを敎へる。

第十五章　きみ子

忘らるゝ身ならんと思ふ心こそ
忘れぬよりもおもひなりけれ

君　子

一

これは藝者町の或る家の入口の提灯に書いてある名である。

夜見ると、此町は世界中の尤も珍妙な町の一である。船の甲板上の通路の様に狹く、そして何れもきちんと閉めた店先きの暗くぴかぴかする木造普請――何れも霜のかかつた玻璃の様に見ゆる小さい紙障子が附いて居る――は一等船室を想起させる。實際は何の建物も二階三階てあるのだが、それが直ぐには分からない――特に月がないと――といふのは、一番下の室だけに燈火が點いて居て、そこは庇迄明かるいが、それから上は眞暗であるからてある。燈火といふのは、狹い障子の後の燈火と、外に釣つてある提灯てある――此提

灯は各戸に一個づつある。町を見渡すのは此等の提灯の二行に並んで居る間からて——遠くの方は二行が合して、一本の黄色な光の棒になつて見える。提灯の或る者は卵形或る者は筒形て、中には四角又は六角のもある。そして何れも日本文字が其上に美しく書いてある。町は非常に靜かてある——或る大きな展覽會の家具陳列室の閉鎖後といふ靜かさてある。これは住人の大部分が不在てあるからてある——何れも宴會や他の酒席に侍して。彼等の生活は夜の生活てある。

南に向つて左側にある最初の提灯に書いてある文字は『きんのやうちおかた』てある。それは『おかたが住んて居る金の家』といふことを意味する。右側の提灯は西村といふ家て、みよつるといふ娘が居ることを告げて居る——みよつるといふ名は、立派に生活して居る鶴といふ意味てある。左側の二軒目には梶田といふ家がある——そして其家には、花の蕾といふ意味の小花と、人形の樣に美しい顏の雛子が居る。其向ひは長江家て、其處には君香と君子が居る……そして此二行の明かるい名の行列は、半哩も長く續いて居る。

此最後の家の提灯の文字は、君香と君子の姉妹關係と——それからそれ以上の事實を示して居る、と云ふのは君子は二代目としてあるからてある。二代目といふ語は飜譯すべからざる敬稱て、君子は君子第二號てあるといふことを意味する。君香は君子の師匠て且つ

主人である。彼女は二人の藝妓を養成したが、二人共君子といふ名であつた、或は寧ろ彼女が同じ名を二人に附けた。此同じ名を二度用ふるといふ事は、第一の君子——一代目——が有名であつたといふ事の證據である。不運な、或は不成功であつた藝者の藝名は、決して其後繼者に附けられない。

若し然るべき理由があつて其家へ入るとすると——其障子を開けて、訪問者のあることを告げる鈴の音を鳴らしながら——君香を見ることが出來よう——若し此小一座の藝人が其夜の招聘に出て居なかつたなら。そして彼女は甚だ怜悧で語るに足る女であることを見出すてあらう。彼女は氣が向けば最も興味ある話——肉も血もある話——人間性の眞實を語る話——を語つて聞かすてあらう。といふのは藝者町には傳說が——悲劇的、喜劇的、或は準樂劇的な——澤山あり、そして何の家にも話が遺つて居て、君香はそれを皆知つて居るからである。或る話は非常に恐ろしく、或る話は人を笑はせ、又或る話は人を考へさせる。初代の君子の話は此最後の部に屬する。それは最も珍らしいものの一つではないが、西洋人にも了解するに尤も困難ならぬものの一つである。

二

一代目君子はもうここに居ない。彼女はただ記憶に遺つて居るばかりである。君香が君子を職業上の妹とした時は、君香も極若かつた。

『ほんとにすばらしい娘です』とは君香が君子を評した詞である。藝者商賣で評判を取るには綺麗であるか、甚だ怜悧でなければならない。有名な藝者は普通兩者を兼ねて居る――極若い時に才色兼備の見込みを附けて、仕込役に依つて選ばるゝのであるから。平凡級の唄女ですら、年頃には相應の魅力を持つに相違ない――たとひ鬼も十八といふ日本の俚諺を作らせた『惡魔の美』なりとも。併し君子は綺麗以上であつた。彼女は日本人の美の理想に叶つて居た。そして其れは十萬人中の一人と雖も、容易に達せられぬ標準であつた。其上彼女は怜悧なばかりではない、萬藝に通じて居た。優雅な歌も詠むし、花も巧みに生ける、茶の湯も申し分なく出來る、刺繍もする、押繪もする。一言で云ふと、彼女は淑女であつた。彼女が初めて突き出された時は、京都の花柳界は色めき立つた。彼女は思ふまゝの勝利を得べく、玉の輿が彼女の前にあることは明らかであつた。

註　此俚諺を精しく云ふと、鬼も十八、薊の花である。又龍に就ても同樣の俚諺がある——龍も二十といふ。

併し間もなく、彼女は又其職業にも完全に訓練されて居る事が明らかになつた。彼女は殆ど何んな事態の下にも、善處する事を教へられて居た。といふのは、彼女に分からなかつた事は、君香が悉く精通して居たからである——美の強さと情の弱さ、約束の手管と無頓着の價値、其外男心のあらゆる愚痴と邪惡、こんな事は君香から教へられたので、君子は餘り失策もせず涙も流さなかつた。次第に彼女は君香の願ひ通りになつた——少し許り危險な者になつた。夜飛ぶ鳥に於ける燈火もさうである、さうでないと鳥は衝き當たつてそれを消すであらう。燈火の義務は愉快なものを見える樣にするにある、惡意はない、君子にも惡意はなかつた、そして餘り危險ではなかつた。案じ顏の兩親は彼女が堅氣の家に入らうともせず、又戀物語に身をやつさうともせぬ事を發見した。併し彼女は、血で誓書に署名したり、變はらぬ情のしるしに、左の小指の端を切れと女に迫つたりする樣な若者には、特に情深くしなかつた。こんな男には、思ひ返させる樣に皮肉な療治もしてやつた。彼女を身も心も獨占するといふ條件で、家屋敷を提供した二三の金持ちには、一層すげない

目を見せられた。或る一人は、君香に莫大な代償を提供して、無條件に彼女を受け出さうと鷹揚な態度に出た。君子は感謝した――併し藝者を止めなかつた。彼女は肱鐵砲を食はすにも、憎みを買はぬ樣に巧妙にあしらつた、そして多くの場合、失望を燃やして遣る術を知つて居た。勿論除外例もあつた。君子を我がものとせぬ限り、生き甲斐なしと考へた或る老人は、或る夜彼女を宴席に招いて、一緒に酒を飲ませた。併し人の顔を讀むに馴れてる君香は、巧みに君子の杯へ茶を（全く同じ色の）入れ換へた、そして直覺的に君子の貴重な命を救つた――其遂十分後に此愚かしい老人の魂は、唯だ一人で、そして疑もなく大失望の狀態で、冥途に急ぎつつあつたのである。……其夜以後、君香は野良猫が小猫の番をする樣に君子を監視した。

此小猫は熱狂的な流行妓（はやりっこ）となつた――當時の名物の一となり、評判の種となつた。彼女の名を記憶する外國の皇子もあつた。其皇子からダイヤモンドを贈られたが、彼女は身にも著けなかつた。其外苟くも彼女の機嫌を取るの贅澤に堪へ得る者から、莫大の贈物を受けた。一日でも彼女の恩惠に浴するを得んとは、凡ての貴公子原の野心であつた。それにも拘らず、彼女は誰れにも我れこそはと思はせる樣な事はせず、又末懸けての約束を結ぶことを拒んだ。その事を云ひ出る者に對しては、彼女は自分の身分を辨（わきま）へて居る由を答へ

た。堅氣の女さへ彼女を惡るく云はなかつた――それは何處の家庭不和の話の中にも、彼女の名が出る事はなかつたからである。彼女は眞に自分の地位を守つたのであつた。歳月は益〻彼女を美化する樣に見えた。他の藝者にも評判になる者はある。併し誰れ一人彼女の壘を摩する者はなかつた。或る製造業者は彼女の寫眞を貼紙（レツテル）に使用する獨占權を得た、そして其貼紙で財產を作つた。

併し或る日君子の心も遂に軟化したと云ふ、驚くべき報道が擴がつた。彼女は實際君香に別かれを告げた、そして彼女に望み次第の美服を買ひ與へ得る或る人と共に去つた――其或る人は彼女に社會的地位を與へ、彼女の香ばしからぬ前身を、人の口の端に上せまいと切望する人であつた――又彼女の爲めには十度死んでもよいといふ位で、既に戀の爲めに半分死んで居る人であつた。君香の言に依ると、其莫迦者は君子故に自殺しかかつたので、君子も氣の毒に感じ、介抱して舊態に復せしめたのだといふ。太閤秀吉は天下に恐ろしいものが二つある――それは莫迦と暗夜とだと云つた。君香は常に莫迦者を恐れて居たのであるが、たうとう莫迦が君子を連れて往つて了つた。君香は又全く利己的でなくもない心配顏で、君子は最早戾つて來ぬだらうと云つた、それは七生迄もといふ相惚れであつ

たからである。

併し君香の言は全く當つては居なかつた。彼女は實際明敏であつたが、君子の魂の或る秘密な抽斗を見拔く事が出來なかつた。若し出來たなら彼女は驚きの叫びを擧げたであらう。

三

君子が他の藝者と異る所は血統の高い事であつた。藝名を附ける前の本名はあいであつた　此名は或る漢字で書けば愛を意味する。同音の他の漢字で書けば哀を意味する。あいの歴史は愛と哀との歴史であつた。

彼女は可なりの教育を受けて居た。幼かつた時先づ或る老武士の私塾に遣られた。――そこでは少女達は、高さ一尺の小机を前にして座布團の上に坐つた、そして教師は皆無給で教へた。教師は一般官吏よりも高給を得る今日では、却つて昔程正直でもなく又愉快でもなくなつた。彼女の學校の往復には、一人の下女が書物、硯箱、座布團及び小机を携へて送迎した。

其後、公立の小學校に通つた。其れは丁度最初の近代的教科書が發兌された時であつた――其中には名譽、義務、善行等に就ての英佛獨の物語の日本譯が含まれて居た。何れも撰擇は妥當で、此世界には迚もない服裝をした西洋人の、罪のない挿畫が入つて居た。其懐かしいしほらしい教科書は、今は既に稀覯書となつて、久しい以前から左程面白くも巧妙でもない、物々しい教科書が使用されて居る。あい子は物覺えが善かつた。一年に一度の試驗の時には、或る大官が臨場して、生徒は皆自分の子でもある樣な口調で話して聞かせ、賞與を與へる時には銘々の柔らかい頭髮を撫でて遣つた。其大官も今は退隱せる政治家で、疑もなくあい子を忘れて居るだらう――今日の小學校では、誰れも少女等を撫でて遣つて賞與を與へる者はない。

其時あの廢藩置縣の改革が起こつて、高い階級に居た家族は、引き倒されて無位無祿となつた、そしてあい子は學校を去るやうになつた。色々の大悲劇が引き續き起こつて、遂に彼女には母と幼い妹のみが遺された。母とあい子とは、機織りの外何も出來なかつた。併し機織りだけでは生活の資に不足であつた。先づ家屋敷が――つぎに生活に必要でない品物がつぎからつぎへと――家寶、裝飾品、高價な式服、定紋入りの漆器などが――二束三文で、人の不幸で富み、所謂「涙の金」で成り上がつた連中の手へ渡された。同族の武

士の大部分は、皆同様な難儀をして居たので、生きて居る人からの助力は得られなかつた。併し賣る物が無くなつた時――あい子の教科書さへ賣り盡くした――助力は死人から求められた。

あい子の父を葬る時、或る大名から拜領の太刀を棺の中に納めたが、それは黄金作りであつたと云ふ事を想ひ出したので、墓を撥いて精巧な細工の柄を平凡な安物と取り換へ、塗鞘の裝飾をも取り外づした。ただ中身だけは武士たる父に入用があるかも知れぬといふので其儘にした。あい子は古式に依つて埋葬する時、高級の武士の棺として用ゐられる赤土燒の大きな甕の中に跪坐して居る父の顏を見た。彼の顏立は墓の中に年月を經ても尙ほ崩れて居なかつた。そしてあい子が中身を戾した時凄い顏でよしよしと點頭く樣に見えた。

到頭あい子の母は病みついて機も織れなくなる、亡者の黄金も消費されて了つた。あい子は云つた――『お母さん外に最早方法もありません、私を藝者に賣つて下さい』母は泣いて返事をしなかつた。あい子は泣かなかつた、併し一人で出て往つて了つた。

彼女は昔、父の家で人を饗應する時、酌に雇はれる藝者の中に、君香といふ一本立の藝者が、屢〻彼女を可愛がつた事を想ひ出した。それで彼女は直に君香の家へ往つて云つた、『私を買つて下さい、お金が澤山入るのですから』君香は笑つて、いたはりながら食事を

薦めつつ、彼女の話を聞いた――あい子は涙一滴こぼさずに思ひ切つて話した。君香は云つた『澤山なお金を上げる事は出來ません、私も少ししか持つて居ないのですから。併しこれなら出來ます――お母さんに仕送りをするといふ約束です。其方が貴女を大金で買ふより宜いでせう――貴女のお母さんは大家の奥さんでしたから、大金を巧く扱ふことは御存じないでせう。ですから貴女が二十四迄、でなければいつでも私にお金を返せるまで、私の家に貴女が居るといふ證文を書いて、お母さんの印判を戴いてお出なさい。さうすると私が溜まつただけのお金をただ上げますから、貴女がそれをお母さんの處へ持つてつてお上げなさい』

かうしてあい子は藝者となつた。そして君香は彼女に『君子』を襲名させ、そして母と妹を養ふといふ約束を守つた。母は君子が有名にならぬ中に死んだ、妹は學校へ通はせられた。前に話した事は皆これから後の事であつた。

藝者の愛の爲めに死なうとした若者は、そんな事をするのは惜しむべき境遇に居た。彼は一人子息であつた。そして富もあり爵位もある彼の兩親は、彼の爲めには如何なる犧牲をも拂はうとして居たのである――藝者を嫁に取ることさへ。其上彼等は我が子の爲めに、

彼女が同情を寄せたと云ふので、全く君子を嫌つては居なかつた。

君子は行く前に、其頃學校を卒業したばかりの妹梅子の結婚式に列した。梅子は溫良で綺麗な娘であつた。其結婚は君子が取り持つたので、それには彼女が男に關する日頃の知識を利用した。彼女は醜男で、正直で、舊式な商人――惡黨にはならうと思つてもなれぬ男――を選定したのであつた。梅子は姉の選定の賢明さを疑はなかつたが、果たして時が幸福な配合であることを證明した。

四

君子が連れて行かれたのは四月の節であつた。連れ行かれた先きは、豫め彼女の爲めに準備された家で、凡て浮世の不快な現實を忘れる樣に出來て居た――高塀を繞らした、大きな植ゑ込みのある庭の、靜寂の中に迷ひ込んだ一仙宮といふ觀があつた。君子は其處で、日頃の善行のお蔭で、蓬萊國に生まれ替はつた樣な感を起こしたのであらう。併し春は過ぎて夏が來た――しかし君子は單に君子で居た。彼女は理由は謂はぬが婚禮の日を三度も延ばしたのであつた。

八月の節になつて、君子は眞面目(まじめ)になつて、溫和に併し毅然として、結婚拒絕の理由を告げた、――「今迄永らく申し上げ兼ねて居りましたが、愈々申し上げる時が參りました、私は生みの母の爲めと妹の爲めに、今迄地獄の住居を致して居りました。それは今過去の夢となりましたが、私の胸の火傷(やけど)は治りません、それを治す力は此の世の中に御座いません。此樣な者が名家に入(はひ)る資格が御座いませうか――貴君の子を生んだり、貴君の家を立てる資格は全く御座いません……どうぞも少し喋らせて下さいませ、惡るい事に懸けては私の方が貴君よりずつと色々存じて居りますから…… 又貴君の奥樣となつて、貴君の恥辱を曝したく御座いません。私はただ貴君のお相手、遊び友達、一時のお客――それも頂戴物を致さう爲めでは御座いません。私がお側に居られなくなる時――いえ、そんな時が屹度參ります――貴君はお目の覺める時が御座います。それは私を全くお忘れにもなりますまい、併し今の樣では御座いますまい――今のは迷ひてす。私の心からの詞をよくお心にお留め下さい。何誰(どなた)か眞實(ほんと)によい奥樣が出來て、貴君のお子樣をお生みになるてせう。私は其お子樣を拜見致しませう、併し私は奥樣にはなりません、又母たる喜びを知つてはなりません。私はただ貴君の迷ひてす――幻てす、夢てす、貴君の浮世の旅路に、ちらと差

した影で御座います。たとひ後には少し善いものになると致しても、貴君の奥様には決してなりません——此世でも彼世でも。も一度結婚せいと仰しやいませ——そしたら私はお暇を戴きます」

十月の節になつて、何等推測すべき理由もないのに、君子は姿を隱した——消え失せた——全く何處にも居なくなつた。

五

彼女が何時、どうして、何處へ往つたか知る者はなかつた。近處の者も、彼女の通る姿を見た者はないといふ。初めは直ぐ歸つて來るだらうと思はれた。彼女のあらゆる美しい貴重な所持品——衣服、裝飾品、貰ひ物など、それだけで一財産であるのだが、そんなものは一つも持つて行かない。併し何の便りも何のしるしもなく數週間が過ぎた。何か不測な事でも、彼女の身の上に起こつたのではないかとも思はれた。それで方々の河を漾つたり、井戸を替へたりした。郵便や電報の問ひ合はせもした。信賴の出來る仲僕を捜索に走

らせもした。懸賞も出した――特に君香は君子を愛して居たから、謝禮はなくとも喜んで手掛かりを尋ねたであらうが、それにも謝禮を提供して報告を依賴した。併し官權へは依賴しても無效であつたらう。逃亡者は惡るい事をしたでもなく法律を破つたでもない。若大な國家の警察機關は、一青年の氣紛れな戀愛沙汰で運轉せらるべきでない。數月は數年となつた。併し君香も、京都の妹も、さては此美しい藝者の讃美者數千人中に、一人も君子を再び見た者はなかつた。

併し君子が豫言した事は事實となつた――時はどんな淚をも乾かしどんな憧憬をも治す、いくら日本でも同一の失望の爲めに、二度と死なうとする者はない。君子の崇拜者は遂に思ひ返した。美しい新妻が選定されて、一人の男子さへ生まれた。そして又數年を經過した、君子が嘗て住んだ仙宮には幸福が漂うた。

或る朝其家へ、施物を求むる樣な風て、一人の旅の尼が來た。子供は尼の讀經の聲を聞いて門口に奔り出た。間もなく女中が例の白米の施物を持つて出て來て見ると、尼は子供を撫でさすつて、何か囁いて居るのを見て驚いた。其時子供は女中に云つた、『僕が遣る』――すると尼は大きな編笠の陰の下から、『どうぞ此のお子樣の手から、お遣はし下さいませ』と乞うた。それて子供は米を尼が持つ鉢の內へ明けた。すると尼は小兒に一禮して、

問うた――『もう一度、坊ちやん、貴君のお父樣へ申し上げる樣に今お願ひした文句を、仰しやつて下さいませんか』小兒は片言交りに云つた――「お父樣此世で再びお目にかかれぬ者が、貴君のお子樣を拜見したので喜ばしう存じますと申します」

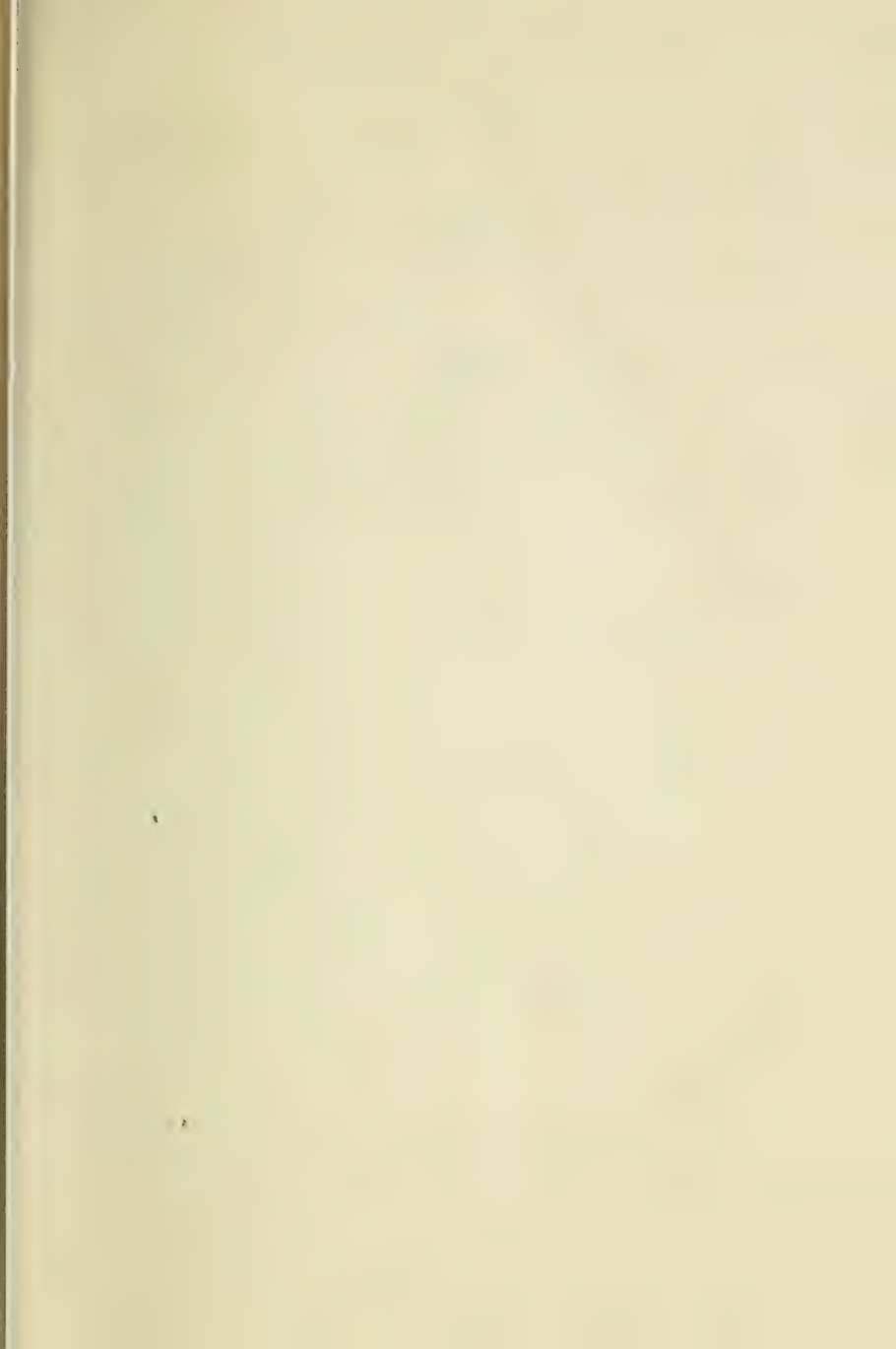
尼は輕く笑つて再び彼を撫で、そして急いで往つて了つた。女中は愈々きよろきよろして居る中に、子供は父に尼僧の傳言を云ふべく走り込んだ。

併し此傳言を聞いた父の眼は霞んだ、そして子供を抱いて泣いた。門に來たのは誰れてあつたといふことを彼は悟つた、そしてそれは彼のみが悟り得る事であつた――隱されて居た凡ての獻身的な意味も了解された。

彼は思ひに耽つた、併し誰れにも洩らさない。

彼と、彼が昔愛した女との距離は、今や太陽と太陽との距離よりも大であると思つた。彼女はどんな遠い市の、どんな狹い、名もない通路のうねりくねつた隅の、貧民中の貧民にのみ知られて居るどんな見すぼらしい小さい庵室で、此世を行ひ濟まして居るのやら、尋ねても無益だと彼は思つた。恐らく彼女は其處に、無窮の光の差し來る前の、暗闇を待つて居るのであらう。其光に接する時こそ、大恩教主の慈顏は彼女を見て微笑するであらう――其時こそ佛陀の聲は、人間の戀人の唇より出るよりも、遙かに深い慈愛の調子てか

ういふてあらう――「おゝ我が法の娘、汝は圓滿の道を行うた。汝は最高の眞理を信仰會得した――それ故我は來たつて汝を迎へ汝を拯ひ取る」

附錄

俗唄三つ

千八百九十四年十月十七日　日本亞細亞協會に於て讀まれしもの。

千八百九十一年の春、私は出雲の松江に在る部落、『山の者』として知られてゐる特殊階級の人達の部落に行つて見た。行つて見て得る所のあつたものの幾分かは其の後『ジャパン・メイル』に手紙の形式で通信され、千八百九十一年六月十三日に出版されたのであるが、其の手紙から幾らか拔萃して、近頃の新聞種に提供の爲め、此處に引用するのも無駄な事ではなからうと思ふ。

「部落は松江の南端に位して、ちつぽけな谷に、といふより寧ろ市の後ろの半圓形を成してゐる丘の中の窪地に在る。上流社會の日本人なら殆ど誰れもこんな村に行つた驗しは無いし、普通の人達で貧乏此の上なしといつた者までが傳染病の中心地を嫌ふやうな調子で此の場所を忌み嫌つてゐる、といふのは道德的にも肉體的にも、汚らはしいといふ觀念が、其の住民達の名にさへ常に附き纏つてゐるからで

ある。かかる次第であるから、其の部落は市の中心から歩いて三十分以内で行ける所に在るけれども、松江に居を構へる者三萬六千人中其處を訪れた者は恐らく五六人もゐないであらう。

松江及び其の附近には特殊民の四つの異つた階級がある。即ち『はつちや』、『小屋の者』、『山の者』、及び菅田の『穢多』である。

『はつちや』の部落は二つある。之等は元死刑執行人であつて、其筋の役所に勤め種々な地位を得てゐた。彼等は昔の掟によつては穢多非人中最下級の者であつたけれども、役所勤めをしたり上長者に接觸したりして智識は充分に磨かれてゐたので世間の評判では他の特殊民より人間が高尙だといふ事になつてゐた。彼等は今では竹籠や竹行李の製造人である。彼等は平將門、平親王の一族郎黨の末裔であると言はれて居る。將門とは兵力を以て天皇の御位を奪ふ爲め由々しき謀叛を企てたといふ日本では今まで類のない事をして、有名な平貞盛卿に討ち取られた男である。

『小屋の者』は獸を屠殺したり、其の皮を賣つたりする事を商賣にして居る人達である。彼等は、下駄履物商人の店以外、松江中何處の家にも入る事を許されない。元は浮浪人だつたが、或る有名な大名に運河の堤の上に小さい家——小屋——を建てて貰つて、松江で永住させられる事になつたのである。『小屋の者』と言ふ名は其の爲めである。本當の『穢多』に至つては、其の身分や職業が頗るよく知れ渡つてゐるから、此の點は說明するには及ぶまい。

『山の者』は松江の南の外づれの山に住んでゐるからさう呼ばれるのである。彼等は襤褸紙屑業の一

手販賣權を持つてゐて、古鐵から毀れた機械類に至るまで、有りとあらゆる廢物の買手である。彼等の或る者は富んでゐる。實際、他の特殊階級に較べて、總體が榮えてゐるのだ。それにも拘らず、彼等に向けられる一般の偏見は、彼等に關する特別の法律が撤廢される以前の年と殆ど同じやうに相も變はらず强烈である。想像も附かないやうな事情が無い限り彼等の中誰れ一人奉公人として雇つて貰へる譯には行かなかつた。昔は最も綺麗な娘達がよく『女郎』に成つた。然しいつの時代にも其の娘達は、自分等の町内はもとより、隣町の『女郎屋』にも入る事が出來なかつた、だから遠い土地の遊廓に身を賣られたのである。『山の者』は今日では『車屋』に成る事さへも出來ない。どんな職業にしろ普通の勞働者として雇つては貰へない、尤も自分の素性を隱しおほせる見込みのあるどこか遠くの町へ行けば別だが。然しそんな狀態に在る事が暴露たら最後、彼は勞働者仲間に殺されようといふ容易ならぬ危險を冒す事になる。どんな事情の下にあつても『山の者』に取つては自分を一個の『平民』として通す事はむつかしい。何百年もの孤立と偏見が彼等の社會の風習を、それと見別けの附くやうに固めて仕舞ひ、型に嵌めて仕舞つたのである。其の言葉までが一種特別な奇妙な方言に成つて仕舞つて居る。

　私はかくも風變りな境遇に在り、特徴づけられて居る社會の事物を何か見たくてたまらなかつた。所が私は運よくも或る日本紳士に出會つた、其の紳士は松江の最も上流社會の人物でありながら、自分でも行つた事のない彼等の村へ私を連れて行く事を親切にも承諾して呉れたのである。其處へ行く途々彼は『山の者』に就いて種々珍らしい事を澤山、私に話して聞かせた。封建時代にはかういふ人達は『侍』

に親切に取扱はれた。彼等は屢〻『侍』の邸の庭先きに入る事を許され、或は招かれて唄つたり踊つたりして、其の演技に對する纏頭を貰つた。彼等がかういふ貴族的な家庭までも樂ませる事の出來た其の唄や踊は他の人達には知られてゐなかつたもので、『大黒舞』と呼ばれてゐた。『大黒舞』の歌は、實に、『山の者』の先祖傳來の取つて置きの藝であつて、美的な情緒的な事柄に對する彼等の最高の理解力を表はしてゐたのである。前の時代には彼等は立派な芝居小屋に入る權利を得る事は出來なかつた。そこで『はつちや』のやうに、自分達だけの芝居小屋を造つたのだ。私の連は更に言つた、彼等の唄や踊の出處を知つたら面白からう、彼等の唄は彼等特有の方言ではなく、純粹な日本語で述べるのだから。彼等は此の口で述べる文學を惡化せずに保存する事が出來たのであらうが、それも、『山の者』が讀み書きを決して敎へられなかつたといふ事實から推して考へると殊更奇妙である。彼等は自分等の集團に與へられた好機會に乘ずるといふ事さへ出來なかつた。僻み根性は頗る根强くて、自分達の子供を公立の學校に入れて幸福にさせるなどといふ事は未だ及びも附かぬ事である。小さい特別な學校は出來ぬ事もなからう、けれども甘んじて敎師になる人達を得る事は恐らく少小の困難ではあるまい。

註　『メイル』に宛てた此の手紙が書かれた時以來、寛大にして偏見を抱かぬ松江市民の恩惠によつて、『山の者』の爲めに小學校が一つ建てられた。此の計畫は縣下の激しい非難を免れなかつたが、うまい具合に實際行つたらしい。

其の村は窪地に立つてゐるが、それは洞光寺の墓地の直ぐ後ろに在る。部落は其の部落だけの神道の社を持つてゐる。私は其の場所の光景に甚く驚かされた。自分は醜いものや汚いものを可なり多く目撃するだらうと思つてゐたからである。それとは反對に私は幾多の小綺麗な住宅を見た、家々の廻はりには立派な庭が附いて居るし、部屋部屋の壁には畫が懸かつてゐる。其處には澤山樹木が在つた。村は灌木や植木で青々としてゐて、全く繪に描いたやうであつた。といふのは、ちつほけな街路が地面の高低につれ、種々様々な角度で山を攀ぢ上つたり下つたり——一番高い街路は一番低いのより五六十尺高い——してゐたからである。大きな湯屋や洗濯屋のあるのは、『山の者』が、山の向う側にゐる隣りの『平民』のやうに清潔な布を好むといふ事を證據立てて居た。

直きに一群(ひとむれ)集つて、自分達の村に入つて來た見慣れぬ人達——彼等に取つては滅多にない出來事——をじろじろ眺めた。私の眼に映つた幾つもの顏は『平民』の顏に頗るよく似てゐたが、只だ違ふのは、醜いのになると一層醜かつたので、綺麗なのが對照上益々綺麗に見えるやうに思はれた事だつた。私がいつか見た漂浪者(ヂプシース)共の顏を思ひ出させるやうな、人相の惡るい顏附も一つ二つあつたが、一方幾人かの小娘達は、それに反して、驚くばかり感じの良い目鼻立を具へてゐた。其處では『平民』同志が出會つた時にするやうな挨拶の交換といふ事が無かつた、上流社會の日本人だつたら、西印度の移住民が土着の黑ん坊にお辭儀するやうに帽子を脫(と)らうと寧ろ考へる事であらう。『山の者』共は自分達が禮をして貰はうとは思つてゐない事を態度で示すのが普通である。男は一人も私達に挨拶しなかつたが、幾人か

の女は、優しく話し掛けて、會釋した。他の女共は、粗末な草鞋を編んでゐたが、物を尋ねても『えゝ』とか『いえ』とか答へるばかりで、私達を疑つてゐるらしかつた。私の連は、女共が普通の日本の女とは違つた身なりをしてゐる事柄に私の注意を促した。例へば、極めて貧しい『平民』の間にでも服装の一般法則はある。年齢に應じて、これは着ても良い、或は着てはよくないといふ一定の色合がある。所がかういふ人達の間では、可也年取つた女共までが眞赤な『帶』や種々な色の取り交じつた『帶』を締め、派手な柄の『着物』を着てゐるのであつた。

町の通りで見られる女は、物を賣つたり買つたりしてゐるが、それは年嵩の者ばかりである。若いのは家に引込んでゐる。年嵩の女共はいつも妙な恰好をした大きな籠を携へて市に出て行くので、『山の者』だといふ事がそれで直ぐに解る。かういふ籠が幾つも幾つも、主もに小さい家の戸口に置いてあるのか眼に附いた。籠は背負つて行かれ、『山の者』の買ふ物は全部——古新聞、擦り切れた古着、空瓶、硝子の毀れ、古金屬等——すつかり其の中に容れられる事になつてゐる。

一人の女が到頭思ひ切つて私等を家に招き入れた、自分達の賣りたく思つてゐる何枚かの昔の繪双紙を見せやうといふのだ。私達は其處へ入つて、『平民』の家で受けるやうな丁寧な取扱ひを受けた。其の何枚かの繪は——廣重の畫も大分入つてゐたが——買ふだけの値打のあるものだといふ事が解つた。次いで私の連は『大黒舞』を聞かせて貰ふ事は願へまいかと尋ねた。大いに我が意を得た事には其の申し出は快く受け容れられたのである。それで私達が唄ひ手の一人一人に少々纏頭をやるのを承諾すると、

前に見掛けなかつた連中だつたが、綺麗な顔をした若い娘達の小さな一隊が現はれて、唄ふ支度をした、片方では一人の婆さんが踊る用意を整へた。婆さんも娘達も藝を演ずる爲めに共に妙な道具を携へてゐる。三人の娘は紙と竹で造られた木槌のやうな形の道具を持つてゐる、これは大黑の槌を表はさうとしたものだが、それを左の手に摑み、右に一本の扇を打ち振つてゐる。

註　大黑は、通俗の信仰に於ては福の神。惠比壽は、勞働の守本尊である。かういふ神々の沿革に就いては『亞細亞協會々誌』第三卷にカルロ・プュイニの書いた『七福神』と題された一章（英譯）を見よ。又神道崇拜に於けるかかる神々の地位を記錄したものに就いては『知られぬ日本の面影』上卷を參照せよ。

他の娘達はカスタネットのやうなもの――一本の紐で結び附けられた、二つの平べつたい堅く黑い木片――を用意してゐた。六人の娘は家の前に一列を作つた。婆さんは二本の小さい棒を手に取つて、娘達の方を向いて座を占めた、一本の棒には縱の一部分に刻み目が附けてある。もう一本の棒で其の上を擦ると、奇妙なカラカラいふ音がするのであつた。

私の連は、唄ひ手が三人づつ二通り別々の組になつてゐるのを私に指し示した。槌と扇を手にしてゐる連中は大黑組で、彼等は唄を唄ふ事になつてゐた。四竹（カスタネット）を持つてる連中は惠比壽黨で、囃子方になつた。

婆さんは小さい棒を擦り合はせた、すると大黑組の咽喉からは朗々たる美音が歌となつて勢よく鳴つ

て出た、私がこれまで日本で聞いたどんな歌とも全く異つたものであつた、一方四竹(カスタネット)のカラカラ鳴る音は、極て口早に繰り出される言葉の句切り句切りにピッタリ拍子を合はせてゐた。

初めの娘三人が何條(くだり)か或る數だけ歌つて仕舞ふと、他の三人の聲がそれに和して、不揃ひではあるが非常に面白い調子を產み出した、そして皆は囃子唄を一緒に唄つた。それから大黒組は別な唄を始めたが、少し經つてから、又合唱をやつた。やがて婆さんは時々可笑(をかし)な文句を二言三言口誦みながら、頗る奇妙な踊りを踊つて群衆を大笑ひさせた。

其のくせ、唄は滑稽なものではないのだ。『八百屋お七』と言ふ非常に哀れつぽい小唄である。八百屋お七は綺麗な娘であつたが、或る寺の所化なる、想ふ男と又の會ふ瀨を得んが爲めに附け火をしたのである、燒けたら自分の家の者は其の寺に避難しなければならなくなるだらうと考へて。所が露見して放火罪に問はれ、其の時代の嚴しい掟によつて生きながらの火炙りを言ひ渡された。宣告は實行された。然し犧牲の若さと美しさ、それと罪の動機が、世人の心に同情を呼び起こし、後になつて唄や芝居に仕組まれるやうになつたのである。

役者達は、婆さんの外、誰れも歌つてゐる間に地面から足を持ち上げる者は居なかつた——然し皆自分の身體を唄に合はせてあちこちに搖り動かした。唄は一時間以上も續いたが、其の間聲の調子は決して惡るくはならなかつた。それで、言つてる言葉は一つも解らなかつたけれども、聞いてゐて疲れるどころか、それがすつかり終はつた時には非常に惜しいやうな氣がしたのである。そして此の外國人の聽

き手は、愉快さも覺えると共に、原の起こりがもう解らない程舊くからの偏見の犧牲にされた年若い唄ひ手に對する强い同情の念も起こつたのであつた」

以上『メイル』へ宛てた私の手紙からの拔萃は『大黑舞』に對する私の興味の沿革を物語つてゐるのだ。其後私は松江の友人、西田千太郎の好意によつて、『山の者』に歌はれるやうな唄を三つ筆記したものを手に入れる事が出來た、そしてそれらの譯文も後で私の爲めに作られたのであつた。私は、面白味の無いでもない民謠の例として、今思ひ切つて此の三つの唄の散文譯を――上述の譯文に基づいて――試みる事にする。出來るだけ念を入れ、且つ充分註解を加へて、全然文字通りに譯したら、勿論、有識階級の注意を惹くだけの事は尙ほ更あるだらう。とはいへ、かかる飜譯には、多くの時間及び根氣强い勞力と共に、私の持ち合はせてゐない日本語の知識が必要である。原文其のものが學者式な飜譯を正當とするに足る價値のあるものなら、私は決して飜譯などを企てはしなかつたらう。然し自由に平易に取扱つても原文の興味は大して薄らぐ事のないやうな種類のものだと私は確信した。原文は、純粹の文學的立場からはどう見てもつまらないものであつて、何等雄大な想像力も示しては居らず、詩歌藝術と眞に稱せらるべきものは何一つ無いのである。私等は、かういふ韻文を讀むと、實のところ日本の本當の詩歌からは、――僅二三句選つて見ても、讀む人の心に、申し分のない色彩畫を創り上げる事も出來るし、身に沁み渡るやうな驚くべき妙味を以て種々な事を想像させ、此の上なく優美な興奮を喚る事も

出來るやうな、さうした作物からは——實際、餘程懸け離れたものだといふ事が解る。『大黑舞』は至つてがさつなものである。それが長らく人氣のあるのは、古代の英國民謠に較べてもいいやうな何等かの特質に據るといふよりも寧ろ其の非常に面白い唄ひ方に據るのだ、と私は思ふ。

かういふ唄の基たる背譚は尙は多くの異つた形式で存在してゐる、芝居に仕組んだものも中に在る。之等の背譚が提供した藝術的な暗示は頗る數多いが、それに言ひ及ぶ必要はあるまい。然し數多い點に於て之等の背譚の及ぼす勢力は今以て無くなつてはゐないといふ事を認め得るのである。ほんの一二箇月前に、私は工場から來たての、綺麗な更紗を何枚か見たが、それには小栗判官が鬼鹿毛といふ馬を基盤の上に立たせてゐる繪が附いてゐた。私が出雲で手に入れた三つの唄は其處で作られたのか、それとも餘所でかはつきり解らない、けれども『俊德丸』、『小栗判官』、『八百屋お七』の物語は確に日本中到る所でよく知られてゐる。

之等の散文譯と共に、私は協會に原文を提出する、それには『大黑舞』の唄に關する地方の風習や、演技中の合間合間に唱へる滑稽な文句——下卑た剽輕な文句は時には飜譯を差し控へたが、——に就いての面白い說明書きを附け添へて置く。

どの唄も皆同じ字數で書いてあるが、其の例を『八百屋お七』の最初の四行に取つて見る。

こゑによるねの、あきのしか

つまよりみなばこがすなり
どにんむすめのさんのうで
いろもかはらぬえどざくら

囃子は一節一節の定つた數の終りにではなく、寧ろ吟誦句の或る句切り、句切りに歌はれるらしい。唄ひ手の數もどちらの組にしろ定つた制限はない、隨分大勢でもいいし、ほんの少人數でもいい。私は出雲式の珍らしい折り返しの唄ひ方――一方の組の掛け聲『イヤ』といふ母音の響きと、他方で掛ける『ソレイ』といふ言葉の響とが交じり合ふやうにする仕方――は日本の民衆音樂に興味を持つ人が注意するだけの價値はあるだらうと思ふ。實際、私は確信してゐる、民衆音樂や俗謠研究者に對して頗る愉快な全く手を着けてない研究範圍が日本では提供されてゐると。妙な囃子の附いた『豐年踊』の歌や地方毎に違ふ『盆踊』の歌、遠い鄕々の稻田や山の斜面からひよつくりひよつくり聞こえて來る、大抵は調子が好くて微妙な、あの風變りな歌の一段、それらは日本音樂といへば聯想し勝ちなものとは全然違つた特質を持つてゐる、――西洋人の耳さへも、うつとりさせずには措かぬ一種の魅力を持つてゐる、といふのは鳥の囀りや蟬の鳴き聲と同樣に、魅力を感得してゐる自然性に合致してゐるからである。かかる旋律を、特別に纖細な其の音調と共に描き出すのは容易な仕事ではないだらうが、仕遂せたら骨折りだけの報いは充分あるだらうと私は信じない譯には行かない。之等は大昔の、恐らくは原始的の音樂

精神を表はしてゐるのみならず、其の民族の或る本質的な特色をも表はしてゐる。乃ち其處には民衆音樂の比較研究により民族情緒に關して知り得る事が乾度澤山あるに違ひない。

然し、昔の百姓唄に頗る風變りな情趣を與へてゐる之等の特質が、『大黑舞』の出雲式な唄ひ方の中には殆ど目に附かないといふ事實は、恐らく後者が比較的近代的のものだといふ事を示してゐるのであらう。

『俊德丸』の唄

コリヤコリヤ！――面白さうに若い大黑と惠比壽が踊りながら出て來る。

お話をお聞かせ申さうか、それともお祝ひの口上を述べやうか。お話となゝ然らば何をお話したら一番よろしかろ。此の結構なお宅で一つ物語をしろとの仰せに與つたる以上、吾々共は俊德の物語を語ると致さう。

昔、河内の國に、信吉と言ふ大金持ちが確に住んで居た。信吉の總領息子は俊德丸と言つた。
其の總領の俊德丸が僅三歳の時に母親が死んだ。五歳の時に繼母を授かつた。
七歳の時に、繼母は乙若丸と言ふ男の子を產んだ。そして二人の兄弟は大きく成つた。
俊德が十六歳になつた時、彼は京都に出掛けて、天神樣の御社にお供物を供へに行つた。
其處で彼は社に參詣する人達千人と、歸つて行く千人と、殘つて居る千人を見た。三千人の人が集つてゐたのだ。

註　かういふ數は日本語では單に大群集を示したものに過ぎないので、正確な意味は持つてゐない。

其の群集の間を萩山と言ふ金持ちの末娘が御社指して駕籠に乘つて行つた。俊德も駕籠で行つた、そして二つの駕籠は道を並んで通つたのである。
其の娘を見詰めて、俊德は想ひを寄せた。そして二人は眼を見交はし戀文を取り交はした。
此の事を俊德の繼母に阿諛者の召使がすつかり告げ口した。
そこで繼母はこんな事を考へ始めた、若しあの若者が此の儘父親の家にゐたならば、東と西の物置倉も、南と北の穀倉も、中に建つてゐる家も、決して乙若丸の物にはなるまいと。
それ故彼女は或る惡るい事を企んで、夫にかう言つて話し掛けた、『ねえ、旦那樣、家事上の務めを私に七日間は爲なくてもよいといふお許しが願へませんでせうか』

夫は答へた、『あゝ、いいとも。だが一體七日間に何がしたいといふのだ』彼女は言つた。『旦那樣と婚禮致します前に、私は淸水の觀音樣へ願を懸けました、それで今お寺に參つて願ほどきがしたいので御座います』

主人は言つた、『よろしい。だがお前の連れて行きたいのは下男か下女かどつちだ』

すると彼女はかう答へた、『下男も下女も要りません。獨りぎりで參り度う御座います』

そして旅の事に就いて種々注意されても氣にも留めず、彼女は家を立つて、大急ぎで京都に向つた。

京都の三條邊に着いた時、彼女は鍛冶屋町通に行く道を訊いた。そして其處を探し當てたが、見ると鍛冶屋が三軒並んでゐた。

彼女は眞中の店に入つて、鍛冶屋に挨拶し、かう言つて尋ねた、『鍛冶屋さん、ちよつとした細かい鍛の仕事をして貰へませんか』彼は答へた、『えゝ、奥さん、致しませう』

そこで彼女は言つた、『頭の先きの無い釘を四十九本どうか拵へて下さい』すると彼は答へた、『家では代々鍛冶屋をやつて私は七代目ですが、頭の無い釘なんて今迄一度も聞いた事はありません、さういふ御注文は請合ひ兼ねます。どこか他でお求めになつたらいいでせう』

『いゝえ』と女は言つた、『お前さんの店へ最初に來たのだから、他へ行かうとは思ひません。どうかお賴みだから、ねえ鍛冶屋さん、拵へて下さい』彼は答へた、『ぶちまけた話が、そんな釘を拵へる

んなら、千兩戴かなくてはなりませんぜ』

彼女は答へた、『若しすつかり拵へて吳れるのなら、お前さんの欲しいのが千兩だらうと二千兩だらうとそんな事はちつとも構やしません。拵へて下さい。ほんとにお願ひだから、ねえ鍛冶屋さん』さう言はれると鍛冶屋も釘を造る事を、きつぱり斷わる譯には行かなかつた。

彼は鞴の神樣に禮を正しくする爲め、諸道具を全部きちんと取り並べた。それから、第一の槌を取り上げて、『金剛經』を誦へ、第二の槌を取り上げて『觀音經』を誦へ、第三の槌を取り上げて『阿彌陀經』を誦へた、――さうした釘は或る惡るい目的に使はれるのかも知れないと氣遣つたからである。かくして思ひ煩ひながら彼は釘を造り上げた。釘が出來上がると彼女は非常に喜んだ。そして左手で釘を受け取り、右手で錢を鍛冶屋に拂つて、別かれを告げて出て行つた。

彼女が行つて仕舞つてから、鍛冶屋は考へた。『此の通り私は金の小判(註一)で千兩だけ持つてゐる。だが吾々の一生は旅人の休み場所と言つたやうなものに過ぎない、だから私は是非他人に何か憐れみを掛けてやり親切を盡くしてやらなければならない。寒がつてゐる者には着る物を與へてやらう、空腹がつてゐる者には食べる物を惠んでやらう』

そして地方地方の境や村々の果てに書札(註二)を立てて自分の趣旨を告げたので、彼は大勢の人達に慈悲を施す事が出來たのである。

註一　小判は一つの金貨である。珍らしい形や模様の小判が澤山に在つたものだ。最もありふれた形は楕圓形の平盤で、漢字の印されたものであつた。小判の或るものはたつぷり五吋の長さがあり、厚さは四吋あつた。

註二　世間一般に告げ知らせるものは通例木の札を柱に掛けてそれに書き記されるのである。田舍では丁度此の唄に示されたやうな告示板が今でも立てられる。

彼女は途中で畫工の家に足を止めて、一つ繪を畫いて呉れと頼んだ。

畫工は彼女にかう言つて訊いた、『古い梅の木の繪を畫いて上げませうか、それとも年經た松を描きませうか』

彼女は言つた、『いゝえ、古い梅の木の繪も、年經た松の繪も要りません。十六歳の男の子の繪姿が欲しいのです、脊は五尺有つて、顏に二つ黑子の有る子のが』

『そんなもの畫くのはお易い事ですよ』と畫工は言つた。そしてほんの僅な時間で其の繪姿を畫き上げた。それは俊德丸によく似てゐたので、彼女は喜んで其處を立ち去つた。

俊德丸の繪姿を携へて彼女は淸水へと急いだ。そして寺の後ろに在る柱の一つに其の繪を貼り附けた。

それから四十九本の釘の中、四十七本を以て繪姿を柱に打ち附け、殘る二本で兩眼を釘附けにした。

そこで俊德丸を呪ひ終せたとはつきり思ひ込んで惡るい女は家へ歸つた。そして愼ましげに『只だ今

歸りました』と言つて、自分がさも貞實であり、正直であるやうに取り繕つた。

さて繼母が俊德の身の上にかうして禍を祈願してから三四箇月經つて彼は重い病氣に罹つた。そこで其の繼母は祕かに喜んだ。

彼女は夫の信吉に巧みに話し掛けた、『ねえ、旦那樣、俊德の此の病氣は大層惡るい病氣のやうに思はれます、こんな病氣に罹つて居る者を金持ちの家に置く譯には參り兼ねます』

之を聞いて信吉は非常に驚き、且つ甚く悲しんだ、然しよく考へて見て之はどうにも仕樣のない事だと考へたので、自分の所へ俊德を呼んで、かう言つた――

『倅や、お前の罹つてゐる病氣はどうも癩病らしいのだ。かういふ病氣に罹つてゐる者は此の家で此の儘ずつと暮らして行くといふ譯にはいかないのだ。

『だからお前の爲めに一番良いのは、佛樣の御利益で身體が癒るかも知れないといふ望みを以て、國國を殘らず巡禮して歩く事だ。

『物置倉や穀倉は乙若丸にやりはしない、只だお前に、俊德にだけやる、だから乾度私等の所へ歸つて來なければいけないよ』

哀れな俊德は、繼母がどんなに腹黑い女であるかも知らず、傷ましい姿で彼女に懇願した、『お母さん、私は家を出て巡禮になつてさまよはなければならないと言ひ附けられました。

『けれども今私は眼が見えないのです、難儀せずに旅する事は出來ません。私は御飯を三度戴かなくても一日一度で滿足します、そして物置か納屋の隅にでも住まはして下されば嬉しいのです。けれども何處か此の家の近くに置いて戴き度う御座います。
『どうかほんの暫くの間でも私を置いて下さいませんか。ねえお母さん、お願ひです、置かして下さいませ』
然し彼女は答へた、『お前の今患つてゐるのは惡るい病氣のほんの起こり始めだから、私はお前を置いてやるといふ譯には行きません。さつさと家を出て行きなさい』
それから俊德は、奉公人達に引立てられて、無理やりに家から庭に追ひ出され、激しく悲み嘆いて居た。
すると獄道な繼母は、後から隨いて來て呶鳴つた、『お父さんのお言ひ附けだ、直ぐに出て行かなきやいけないよ、俊德』
俊德は答へた、『御覽なさい、私は旅着もありません。巡禮の上着や脚絆が要ります、施しを受ける巡禮の頭陀袋も』
かういふ言葉を聞いて惡るい繼母は喜んだ、そして彼が呉れといふ物全部を直に與へた。
俊德は其の品々を受け取つて、彼女にお禮を述べ、痛ましい有樣にありながらも、出立の用意をした。

彼は上着を着て木で出來たお護符(まもり)を胸に下げ、頭陀袋を頸に引掛けた。
彼は草鞋を穿いて堅く締め、竹の杖を手に取り、菅笠を頭に乘せた。
そして『御機嫌よう、お父さん。御機嫌よう、お母さん』と言ひながら、哀れな俊德は旅立ちした。

註　巡禮及び巡禮者の詳細に就いては、『人類學協會雜誌』（一八九三年）に記載されたるチャムバレーン教授著『日本宗教小行事註解』を見よ。其の論說には立派に圖解が施されてゐる。

信吉は悲嘆に暮れて途中まで子息を送つて來て、かう言つた、『どうにも仕方がないのだよ、俊德。けれどもな、此のお護符に籠もつて居る有難い佛樣の御利益で、もしもお前の病氣が癒るやうな事があつたら、其の時は直ぐ私等の所へ歸つておいで、なあ』
父親の此の優しい別かれの言葉を聞いて、俊德は心が非常に和らいだやうな氣がした、そして近所の人達に知られないやうに、大きな菅笠で顏を蔽つて、獨り歩いて行つた。
然し間もなく、自分の足が大層弱い事が解つて遠くへは行けるかどうか氣遣はれて來たし、又始終自分の家の方へ後髮を引かれる思ひがするので其の爲め度々立ち止まつてそちらの方へ振り向かずにはゐられなかつたやうな始末で、彼は又悲くなつたのであつた。
何處にしろ人の住家に入つて行くなどといふ事は彼にとつてはむつかしい事なので、度々松の木の下

や森の中で眠らなければならなかつた、けれども時としては運よくも、佛像の置いてある路傍の御堂などに宿を見つける事もあつた。

或る時夜明け前の、朝も暗い中、一番鴉が飛び廻はつて啼き出す頃だつたが、亡くなつた母親が俊德の夢枕に立つた。

そして彼女は彼に言つた、『倅や、お前の苦勞するのは獄道な繼おつかさんが悪るいお呪ひをしたからだよ。これから清水樣にお參りして、身體の癒るやうに觀音樣にお願ひ申しなさい』

俊德は不思議に思ひながら起き上がつた、そして京都へ向つて清水へ向つて、路を辿つて行つた。

或る日、旅の途中、彼は萩山と言ふ金持ちの家の門に立つて大聲で、『御報謝!御報謝!』と叫んだ。するとその家の下女が、聲を聞いて出て來て食物をやつたが、大聲で笑つて言つた、『こんなをかしな巡禮に何か施しをしてやらうと思つたら誰れだつて笑はずにはゐられやしない』

俊德は尋ねた、『あなたは何故笑ふんです。私は河内の信吉と言ふ、金もあるし、よく人に知られた人の子息なのです。けれども悪るい繼おつかさんに呪はれて、御覧の通りの姿に成つたのです』『どうしてお前笑つたのだい』

其の時、二人の聲を聞き附けて、乙姫と言ふ其の家の娘が出て來て、下女に尋ねた。

下女は答へた、『あの、お孃樣、河内から來た盲者で、二十歳ばかりに見える男なんですが、御門の柱の所で鉦を鳴らして、大きな聲で、「御報謝!御報謝!」と言ふんで御座いますよ。

『だから私は綺麗なお米を少々お盆に載せてやらうとしたのです、所が私がお盆を右の手の方に差し出すと、向うぢや左を出すのです、それから私がお盆を左の手の方に差し出すと向うぢや右を出すんですもの。そんな譯で私は我慢が出來なくて笑つたんで御座いますよ』

下女が年若い姫にかう言つて說明して居るのを聞いて、其の盲者は腹を立てて言つた、『あなたはよその人を莫迦にするなんて權利は有りませんよ、私は河内に居る、金が有つてよく知られてゐる　の子息なのです、俊德丸と言ふのです』

其の時其の家の娘、乙姫は、不圖彼を思ひ出して、自分も大變に怒つて召使に言つた、『無暗に笑ふものぢやない。他を笑ふ者は今に他から笑はれるよ』

けれども乙姫は全く度膽を拔かれて暫くは堪へ切れずにぶるるぶ震るへた、そして、自分の部屋に引き下がると、不意に氣を失つて仕舞つた。

さあ家中大騷ぎになり、大急ぎで醫者が迎へられた。然し娘は、どんな藥もちつとも受け付ける事が出來ず、只だ段々弱つて行くばかりであつた。

そこで名の有る醫者が大勢遣はされた、彼等は一緒に立ち合つて乙姫を診察した、終ひに皆は姫の病氣は單に何か突然の悲みが原因になつたのだといふ事に診斷を下した。

そこで母親は病んだ娘に言つた、『若しお前に何か人知れず悲しんでゐる事が有るのなら、隱さずに、

私に話してお呉れ。それで何か願ひが有つたら、どんな事であらうと、それがお前に叶ふやうに骨折つて上げるから』

乙姫は答へた、『ほんたうにお恥づかしう御座いますが、私の願つて居る事をお話し致しませう。

『いつぞや此處へ參りました眼の見えぬ男は河内の方で信吉と言ふ金の有つて、よく人に知られた人の子息さんです。

『京都の北野天神のお祭の時、私は御社に參る道で、其の若いお方にお會ひ致しました、其の折私共は戀文を取り交はして、お互にお約束をしたので御座います。

『ですから私は、あの方が何處に居られやうと、探し當てるまでお尋ねするつもりで旅をしたいのですが、それが許して戴き度くてたまらないので御座います』

母親は優しく答へた、『それは成る程いいだらう。若し駕籠が欲しかつたら駕籠でもいいし、馬がお好みなら馬で行けるやうにするからね。

『誰れでもお前の好きな召使を選んで供をさせても構はない、それから欲しいだけの小判を持たして上げるよ』

乙姫は答へた、『馬も駕籠も要りません、それから召使も。私は只だ巡禮着——脚絆や上着——と施しを貰ふ頭陀袋が有れば結構で御座います』

乙姫がこんな事を言ふのは、俊德のした通りに全く獨りぎりで出掛けるのが自分の義務だと思つたか

らである。

そこで彼女は兩親に別かれを告げ、眼に一杯涙を溜めて、家を後にした、『さようなら』といふ言葉も口の内で。

あの山を越え此の山を越え、又山越えて彼女は進んで行つた、聞こゆるものとては野鹿の啼き聲と溪の流れの水音ばかり。

或る時は路に迷つた。或る時は險しい崖を攀ぢ、進み難い小徑を辿つて行つた、いつも彼女は悲みに沈みつつ旅を續けたのである。

やがて、彼女は自分の前方に——遙か、遙かのかなたに——『余松』と言ふ一本の松の木と、『會うた』と言はれる二つの岩を眼に留めた。此の二つの岩を見た時に、彼女は俊德の事を考へて戀しくも思ひ、又望を繋いだのでもあつた。

急いで先きへ行くと、熊野に行く五六人の人達に出會つたので、彼女は尋ねた、『あなた方は此方へおいでになる路で十六歳位の眼の見えぬ若者にお會ひになりはしませんでしたか』

彼等は答へた、『いゝえ、未だ會ひません、けれども何處かで會つたら、何なりとあなたのお望みの事をお言傳(ことづて)しませう』

此の答へを聞いて姫は大いに落膽した、そして戀人を探さうとしていくら骨を折つた所で何の甲斐も

ないだらうと考へ始めて、すつかり鬱ぎ込んで仕舞つた。
終ひには餘り鬱ぎ込んだ結果、もうこれ以上彼を此の世で探さうとはすまい、だが來世ではあの人に會へようから、ぐづぐづせずに狹山池に身を投げようと心を決めた。
彼女は其處へ出來るだけ急いで行つた。池に着くと、巡禮の杖をしつかりと地面に立てて、上着を松の木に引懸け、袋を投げ捨て、髮を解いて島田[註]に結つた。

註　死んだ女の結ふ簡單な髮型である。「知られぬ日本の面影」の下卷「女の髮に就いて」の章參照。

それから、二つの袂に石を一杯詰めて、あはや水中に飛び込まうとした、其の時不意に彼女の前に立派なお爺さんが現はれた、年は見た所八十より少くはなく、白づくめの着物を着て、手には笏を持つてゐた。
其の老人は彼女に言つた、『そんなに死ぬのを急ぐな、乙姫。お前の尋ねる俊徳は清水さんに居る。其處へ行つて會ひなさい』
此の言葉は、實に、彼女がこれ以上望めない何より嬉しい報せだつたので、彼女は忽ち嬉しくてたまらなくなつて來た。自分は守護神樣の御利益でかやうに救はれたのだ、そしてあゝいふお言葉を掛けて下さつたのは神樣御自らであつたのだと彼女は悟つた。
そこで袂に入れた石を取り捨て、脱いだ上着を又着込み、髮を結び直して、大急ぎで清水寺指して路

を進んで行つた。

到頭寺に着いた。三つの低い段々を昇つて、廊下の下にちらと眼をやると、戀人の俊徳が蓑を被つて、其處に横になつて眠つてゐるのを認めた。で彼女は、『もし、もし』と彼を呼んだ。

俊徳は其の爲めパッと眼を覺まして、側に置いてある杖を摑んで、呶鳴つた、『私が盲者だもんだから、近所の餓鬼共奴毎日毎日やつて來て嬲りをる』

乙姫は此の言葉を聞いて、大層情なく思ひ、近寄つて哀れな戀人に手を掛けて言つた。

『私はそんな惡るい、いたづらな子供ぢやありません、金持ちの萩山の娘です。京都の北野天神のお祭の時お約束しましたから、あなたにお目に懸かりに參つたのです』

自分の戀人の聲を聞いたので俊徳は喫驚して、すばやく起き上がつて叫んだ、『おゝ、あなたは本當に乙姫ですか。久し振りでした――だがあんまり不思議だな。全くうそぢやないんですか』

それからは、互に撫り合ひながら、物も言はずに只だ潸々と泣くばかりであつた。

俊徳は身も世もあらず悲しんでゐたが、然し程なく氣を取り直して、乙姫に向つて聲を強めて言つた、『繼おつかさんのお蔭で私の身體には呪ひが掛けられてゐます、それで見られる通り、私の姿は變はり果てて仕舞つたのです。

『さういふ次第ですから、私は夫としてあなたと一緒になる事は迚も出來ません。此の儘でゐるとしても、腐れて死ぬまでかうやつてゐなければならないのです。

『だからあなたは直ぐ家に歸つて、そして幸福に華やかに暮らさなければいけません』

然し乙姫は深い悲みに沈みながら答へた、『どうしてそんな事が出來ませう。あなたは全く眞面目でいらつしやるのですか。本當に正氣でいらつしやるのですか。

『どうして、どうしてそんな事が。私はあなたの爲めなら命でも捨てようと思ふ程、あなたが戀しいばつかりにこんなに姿を扮(やつ)してゐるのです。

『これから先きどんな事が起こらうと、今となつては決してあなたを離しません』

俊德は此の言葉を聞いて喜んだ、喜びもしたが又女の不敏さに胸が一杯になつて、一言も物が言へずに、泣いたのであつた。

それから姫は彼に言つた、『あなたの惡るい繼おつかさんはあなたがお金持ちなばつかりにあなたを呪つたのですから、私だつて其の人を呪つてあなたの仇を討つてやる位恐れやしません、私も金持ちの子ですもの』

さう言つてから、彼女は一心籠めて、寺の中の佛樣に申し立てた――

『七日七晩の間私は此のお寺にお籠もりして、願を掛けて見ます。若しあなた樣に誠が有り、お慈悲が有りましたならば、どうか私共をお助け下さいまし。

『藁葺きの屋根なんかはこんな大きな御普請にとつて適はしい屋根ではありません。私は小鳥の羽毛で屋根を附け換へませう、それから屋根の棟には鷹の腿の羽毛を被せませう。

『此の鳥居にしても此等の石燈籠にしても不細工なもので御座います、私は金の鳥居を建てませう、それから金の燈籠を千個、銀の燈籠を千個拵へませう、そしてそれに毎晩明かりを附けませう。

『こんな廣いお庭に木が無くてはいけません。私は檜を千本、杉を千本、唐松を千本植ゑ附けませう。

『けれども若しこんなにお願ひしても俊德を癒して下さらなかつたら、さうしたら二人は向うの蓮池に一緒に身を投げます。

『そして私共は死んだ後で、二匹の大蛇に化けて、此のお寺にお詣りに來る人を皆苦しめてやります、それから巡禮の通るのを路で邪魔してやります』

所が、不思議な事には、こんな願を立ててから七日目の晩、彼女の夢枕に觀音樣がお現はれなさつて、『汝が祈願の筋は叶へて遣はす』と仰しやつたのである。

忽ち乙姫は眼が覺めた、それで自分の見た夢を俊德に話して、二人で不思議がつた。二人は起きて、一緒に川へ降りて身體を淨め、觀音樣を拜んだ。

すると、不思議な事には、盲ひた俊德の兩眼はパッと開いて、元のやうにはつきり見えるやうになり、病氣も失くなつて仕舞つた。餘りの嬉しさに二人共潸々と泣いたのである。彼等は共に宿屋を探して、其處で巡禮着を脫いで、さつぱりした着物を着た、それから駕籠と駕籠舁きを雇つてそれに乘つて家に

歸る事にした。

父親の家に着くと、俊徳は大聲で叫んだ、『お父さんお母さん、私歸つて參りましたよ。有難いお札に書いてあるお呪ひの功德で、御覽になれば解る通り、私の病氣は癒りました。あなた方は御無事ですか、お父さんお母さん』

すると俊德の父親は、之を聞いて、馳け出て來て叫んだ、『おゝ、私はどれ程お前の身を案じて居た事か。

『一寸の暇にもお前の事を思はない時はなかつたのだ。所が今は――お前に會つたり、一緒に連れて來た花嫁御に會つたりするとは、まあ何といふ嬉しい事だ』そして皆共に喜び合つた。

所が、これに引き換へ、不思議極る事には獄道な繼母がそれと同時に眼が見えなくなり、手足の指が腐れ始めたのであつた、爲めに彼女は大變苦しんだ。

其の時、花嫁と花婿は其の惡い繼母に向つて言つた、『それ御覽なさい。業病があなたに取り憑いたのですよ。

『癩ん坊は金持ちの家に置いとく譯に行きません。どうぞ直ぐに出て行つて下さい。

『巡禮の上着と脚絆、菅笠と杖は差し上げます、さういふ品は殘らず、此處に用意がして御座いますから』

其の時繼母は、前に大變非道い事を自分でもしたのだから、死なずに助かる事さへ出來ないと悟つた。俊德と妻は大變に喜んだ、どれ程二人は嬉しがつた事だらう。

一日にたつた一度少しばかりの食事をさせて吳れと繼母は彼等に賴んだ、――丁度俊德の賴んだやうに。然し乙姬は憂き目に會つてる女に言つた、『此處に置いて上げる事は出來ません、――納屋の隅でもいけません。さつさと出て行つて下さい』

信吉も自分の惡るい女房に言つた、『どういふつもりで此處に尻を据ゑて居るんだ。行くのにどれだけ暇が掛かるんだ』

そして彼は女を追ひ出した、彼女はどうする事も出來ず、泣く泣く出て行つた、近所隣りの者に見られないやうに顏を隱さう隱さうとしながら。

乙若は眼の見えぬ母親の手引きをして、共に京都に行き淸水寺に行つた。

二人は其處に着くと寺の段々を三つ昇り、跪いて、觀音樣にお祈りして言つた、『もう一つ呪ひが掛けられますやう私共に力をお授け下さい』

所が觀音樣は不意に二人の前に姿をお現はしになつて、かう言はれた、『汝の願ひが善い事ならば、叶へても取らさうが、邪また事とあつては最早一切構ひは致さぬ。

『汝若し死ぬならば、其處に死に居らう。身罷つたる後は地獄に逆り、黑金の大釜の底に落として、

喋でてくれうぞ』

俊徳の物語は之でお終ひ。扇をポッと一つ陽氣に叩いて止める事に致さう。

目出度し、——目出度し、——目出度し。

『小栗判官』の唄

一語も落とさず申すなら、——之は小栗判官の物語。

一 誕生

名高い高倉大納言、又の名兼家は大層金持ちで諸方判る町に貴の鑛を所有してゐた。

彼は火を支配する力を具へた貴い石を一つ、それからもう一つ水を支配する力を具へた石も持つてゐた。

彼は生きてる獣の足から抜き取つた、虎の爪も持つてゐたし、小馬の角も持つてゐたし、更に亦麝香[註]

猫さへ所有してゐたのである。

註　或る辭書には『靈音鼠』といふ語が掲げられてゐる。私に飜譯して呉れた人は『鼾音鼠』といふ意味をほのめかした。然し或る神話的な動物である事は明らかだから、私は文字通り譯した方が良いと考へた。

凡そ人間が此の世で手に入れることの出來る物なら、別に何も不足した物は無かつたが、只だ後嗣だけが無かつたのである。彼はそれ以外望みの種になる物は何も無かつた。

彼の家に居る池ノ庄司と言ふ忠僕が、遂に彼に向つてかういふ事を言つた。――

「鞍馬の靈山に祀つてある多聞天の守護神が、御神德あらたかだといふので遠くでも近くでも評判で御座いますが、それを見るに附けましても、何卒我が君が其の社に籠り遊され祈禱なされますやう謹んでお願ひ致します、さうしますればお望みは必らず叶ふ事で御座いませうから」

此の言葉を主人は受け容れて、早速其の社へ旅立つ用意を始めた。

彼は大急ぎで旅をしたので直きに社に着いた、そして其處で、水を浴びて身を淨め、後嗣を授かるやうに全心を籠めて祈願したのであつた。

三日三晩の間彼は食物といふ食物を一切斷つた。然し總ては其の甲斐がないやうに思はれた。

それ故兼家卿は、神が知らぬ顏をしてゐるのに自棄腹を立て、社の中でハラキリを爲でかして神殿を汚さうと決心した。

おまけに、死んだ後で幽靈になつて鞍馬山に出沒し、九哩の山路を登つて來る巡禮を片つぱしから邪魔してやる、脅かしてやるぞと覺悟を決めたのである。

もうほんの一時でも遲かつたら生命は危かつたらう。然し危機一髮といふ刹那、其の場へ忠義な池ノ庄司が馳け附けてセップクを押し止めた。

註　セップクとはハラキリといふ意味の漢語である。ハラキリよりもつと上品な言葉のやうに思はれる。

『おゝ、殿樣』と其の家來は叫んだ、『死なうなどとは餘りに早まつたお覺悟で御座いますぞ。

『先づ何より先き、私に運を試させて下さいませ、私は殿樣の爲めに御祈禱を捧げますが、今までよりもつと上首尾になるかならぬか御覽になつて下さいませ』

それから彼は二十一回沐浴した後、――七回は熱湯で、七回は冷水で、尙ほ其の七殘る七回に寬衣で以て自分の身體を洗ひ淨めた、――彼はかう言つて神に祈つた、――

『若し神樣の御利益に據つて私の殿樣に御後嗣が授けられましたならば、其の時私は御社の庭に鋪く唐金の鋪板を奉納致しませう、それをお誓ひ申します。

『又御社の外に立て並べる唐金の燈籠も、それから御社の柱全部に被せる金無垢と銀無垢の延金も』

神前に祈禱したまゝ三晩を過ごしたが其の三晩目に、多門天は信心深い池ノ庄司の前に姿をお現はしになつて彼に仰せられた、――

『吾は汝の祈願を叶へて取らさうと只管願うて、然るべき後嗣を遠く近く、――天竺までも唐までも、――探し求めた。

『然し人間は天津御空の星の如く、或は數へ盡くせぬ濱邊の礫の如く數限りなく居るものであるけれども、悲しい哉これならば汝の主人に授けてもよからうといふ後嗣は人間の種の中からは見出す事は出來なかつたのだ。

『そこで遂に、他に爲すべきやうも無いと悟つて、遙か檀特山中に住む四天王の一人を父とする八人の中の一人〔の魂？〕を竊み取つて參つたのである。其の子を汝の主人の後嗣に取り立てて遣はさう』

註　四天王――世の四方を守護する、佛道の四人の提婆王。

かく言ひ終はると、神は社殿の奥深く入つて行つた。そこで池ノ庄司は己れの夢ならぬ夢からハッと眼覺めて、神前に身を平れ伏して拜する事九度、それより主人の家へと急いだのである。

間もなく高倉大納言の奥方は懐姙した、そして目出度き十月が過ぎると安々と男の子を產んだ。不思議にも赤兒の額の上には、極てはつきりと而もわざとらしくなく、『米』といふ漢字が記してあつた。

更に一層不思議な事には彼の兩眼に四體の御佛（みほとけ）が映つてゐたのである。

註　眼の中の映像は佛と呼ばれる、卽ち此處に言ひ表はされた思想は子供の兩眼に像が二つ映る代りに四つ映つたといふ事らしい。超自然の者の子供は瞳孔が二つ有ると俗に言はれてゐたのだ。然し私は此の言葉の一般的説明をするだけに留めて置く。

池ノ庄司や兩親は喜んだ、そして子供には有若といふ名が――「有り有り」山の名に因んで――生まれてから三日目に附けられた。

二　追放

大層早く子供は成長した、そして十五歳になつた折、時の帝は彼に小栗判官兼氏といふ姓名と尊稱を贈り給うた。

一人前の男に成つた時、彼の父は花嫁を娶つてやらうと決心した。

そこで大納言は高位高官の娘一人殘らずに眼を著けたが、これといつて子息の嫁に成るだけの値打のあると思つた者は見當たらなかつた。

然し若き判官は、自分は多門天から兩親に授けられた者であると知つて、其の神に配偶者の事を祈らうと決心した、そして池ノ庄司を連れ、多門天を祀つた社に急いだのである。

其處で彼等は手を淨め口を漱ぎ、三晩も眠らずお籠もりして、其の間ずうつと勤行に時を過ごしたのであつた。

然し彼等には仲間がゐないので、若い殿樣は淋しくてたまらなくなり、竹の根で拵へた、自分の笛を吹き始めた。

其の美しい音に引き附けられたのであらう、社の池に住む大蛇が社殿の入口にやつて來て、——持ち前の恐ろしい形相を、可愛らしい宮仕への侍女のやうな姿に變へて、——其の妙音に聽き惚れてゐた。すると粂氏は自分の眼の前に、妻にと望む當の婦人が居るのだと思つた。又これは神樣が自分に選んで下さつた女だとも思つたので、彼は其の美人を轎に乘せて家に歸つた。

然しかういふ事があつて間もなく恐ろしい嵐が突然都を襲ひ、續いて大洪水が起こつた。洪水も嵐も共に七日七晩引き續いたのであつた。

天皇は此の徴候に甚く御心痛遊ばされ、これの原因を説明せしめやうとて、陰陽師共をお召しになつた。

彼等はお尋ねに答へて、此の恐ろしい天候の原因は、連れ合ひを失くして其の腹癒せをしようとしてゐる雄蛇の怒りに過ぎない、——蛇の連れ合ひといふのは外でもない、粂氏の連れ歸つた美しい女である、と申し述べた。

そこで天皇は粂氏を常陸の國に追放するやうに、且つ妻を變へてゐる雌蛇を直ぐに鞍馬山の上の池に

連れ戻すやうにお命じになつた。
かく天皇の御命によつてどうしても立ち退かねばならなくなつたので、兼氏は忠臣池ノ庄司唯だ一人を隨へ、常陸の國へ向けて出て行つた。

三　文のやりとり

兼氏がお國拂ひになつてからほんの僅はかり經つてから、一人の旅商人が商品を賣る目的で、常陸に遷(うつ)された殿の家を訪れた。
お前は何處に住んでゐるかと判官に聞かれて、商人は答へて言つた、――
『私は京都の室町と言ふ通に住んで居ります、名は後藤左衛門と申します。
『持荷は支那へ仕出すのが色々變つたのが千と八種、印度へ仕出すのが千と八種、それからもう一つ日本だけで賣り捌くのが千と八種あります。
『ですから私の持荷全部と申しますと三千と二十四種の變つた商品から成り立つて居る譯です。
『私の今迄出掛けた國々の事を聞かれれば、もう印度に三度、支那に三度も渡つて來たとお答へしますよ。日本でも此地(ここら)へは今度で七遍目の旅です』
かういふ事を聞いたので、小栗判官は其の商人に尋ねた、妻とする値打のあるやうな若い娘を誰れか

お前は知つてやしないか、自分は大名であるが、未た結婚しないでゐるので、さういふ娘を探し當てたいのだから、と。

すると左衞門は言つた、『此處から西の方にある相模の國に、横山長者と呼ばれ、八人の子息を有つてゐる金持ちが住んで居ります。

『長い間彼は娘の無い事を嘆いて、長い間お天道様に娘の出來るやうにと祈つたのです。

『娘は授けられました。そしてそれが產まれた後、兩親は、彼女に自分達よりもつと高い身分を授けるのが當たり前だ、天照大神様の有難いお蔭を蒙つて產まれ出たのだから、と考へました、そこで娘の爲めに一軒別な家を建てたのです。

『あの方なら、本當に全く、他に有りつたけの日本の女より優れてゐますよ。外の女ならちつともあなたに適はしいとは思へませんね』

此の話は頗る兼氏を喜ばした、そして彼は早速、左衞門に自分の仲人役を勤めて吳れるやうに賴んだ。左衞門も自分の力で出來る事なら判官の望みを叶へる爲めにどんな事でもしてやらうと約束した。

そこで兼氏は硯と筆を取り寄せて、戀文を認め、そして戀文を結はく時のやうな結び目を拵へてそれを結はいた。

彼は姫に手渡して吳れるやうにとそれを商人にやつた、尙ほ役目の禮として、金百兩をも與へたのであつた。

左衛門は何遍も何遍も平伏してお禮を述べ、いつも持つて歩く箱の中に其の手紙を入れた。それから箱を背中に負つて、殿樣に別かれを告げた。

さて、常陸から相模までの旅程は普通七日かかるのであるが、商人は夜も晝も一緒にして、休みもせずに大急ぎで行つたので、三日目の晝其處に辿り着いた。

彼は乾の御所と呼ばれた家に入つて行つた、それは金持ちの横山が一人娘、照手姫の爲めに建てたもので、相模國の『ソバ』郡にある。彼は其處に入る許しをこうた。

所が嚴めしい門番は、此のお屋敷は名高い横山長者の娘御、照手姫のお住ひで、男ならどんな人物だらうと入らせる事は出來ない、それどころか、番人共が――夜十人晝十人――極て用心深く且つ嚴重に此の御殿を護つてゐるのだと知らせて置いて、彼にあつちへ行けと命令した。

然し商人は自分が京都の室町の後藤左衛門である事、自分は其處でよく知られた商人であつて、人々からは栴檀屋と呼ばれてゐる事、三遍印度に三遍支那に行つて來たが、今は『日の出』の大帝國に歸る七遍目の旅をしてゐる所である事などを門番達に話した。

それからかうも言つた、『此處だけを除いたら、日本の宮殿なら何處も殘らず私を自由に入れて呉れるのだ。だから若しお前方が私を入らして呉れたら本當に有難く思ふよ』

かう言ひ乍ら彼は銀の卷いたのを澤山取り出して、門番共に呉れてやつた。すると彼等は慾で目が眩んだ、そこで商人は、何の苦もなく、喜びながら入つて行つた。

大きな外側の門を通り過ぎ、一つの橋を越すと、彼は身分の高い侍女達の部屋部屋の前に出た。

彼は大聲を張り擧げて呼び掛けた、『えゝお局樣方、何なりと皆樣の御入用な物は私が此處に持つて居りますよ。

一「上﨟方の召道具」も殘らず持つて居ります、解櫛も縫針も鋏子も御座います、「頂髪」から、銀の櫛から、長崎產の「髢」から、さては有りつたけの種類の支那鏡まで持參致して居ります』

するとお局共は、さういふ品物を見たいと思つて喜んで商人を部屋に入らせたが、彼は忽ち其處を一見女の化粧品の賣店のやうにして仕舞つた。

然し頗る手早く取引きしたり賣り拂いたりしてゐる間にも、左衞門は自分の摑んだ好機を逸しはしなかつた。賴まれた戀文を箱から取り出して女共に言つた、——

『此の文はね、確さう覺えて居りますが、私が常陸の或る町で拾つたものです、それでこれをあなた方がお納め下されば、非常に嬉しく存じます、——美事に書いてあればお手本にお使ひになればよし、下手に書いてあつたらお笑ひ草になさればよし』

すると女中頭が、其の文を受け取つて、封筒の上書を讀み解かうとした、「月に星——雨に霰が——氷哉」

けれども彼女は此の不思議な言葉の謎が解けなかつた。

他の女共は、矢張り其の言葉の意味を中てる事が出來ず、只だ笑ふより外仕樣がなかつた、それで餘りキヤアキヤア笑ふものだから姫君の照手が聞き附けて、皆の居る所へ出て來た、すつかり着飾つて、烏羽玉の黑髪には被衣を懸けて。

自分の前の簾が卷き上げられると、姫は尋ねた、『どうしてみんなそんなに笑ふの。何か面白い事があつたら私にも樂ませておくれな』

侍女共は其時答へて言つた、『別に何でも御座いませんが、都から參つた此の商人が何處かの町で拾つて來たと申す文が私共に解らないものですから、只だそれで笑つて居るので御座います。これが其の文ですが、上書からして私共には謎なので御座います』

そして其の文は、開いた眞赤な扇の上に載せられて、姫君に恭しく捧げられた、姫君はそれを受け取つたが、其の筆蹟の美しさに感心して、かう言つた、——

『これ程見事な手蹟を今まで私は見た事がない、これは弘法大師の御親筆か、文珠菩薩のお書きになつたもののやうだ。

『一條家、二條家、三條家の殿樣は皆書のお手並で名高い方々だが、多分これを書かれた方は其の中のどなたかであらう。

『それとも、此の考へが間違つてるのだつたら、確に此の文字は、今常陸の國で名の高い小栗判官兼氏の書いたものだと言はなければなるまい……此の文をお前達に讀んで聽かせませう』

そこで封は開かれた、眞先きに讀んだ文句は『富士の山』であつたが、それを姫は身分の高い事を表はしてゐるのだと解釋した。それからつぎにかういふやうな種々な文句に出會つたのである、——

『清水小坂、霞に小笹、板屋に霰、袂に氷、野中に清水、小池に眞菰、芋葉に露、尺永帶、鹿に紅葉、二叉川、細谿川に丸木橋、弦無し弓に羽抜け鳥』

すると姫は文字の表はしてゐるのはつぎのやうな事だといふ事が解つた、——

『參れば會ふ。離れない。轉び會ふ』

それから其の殘りの文句の意味はかやうである、——

『此の手紙は、他人に何事も知られぬやうに、袂の中で開かなければいけません。祕密はあなたの胸だけに藏つて置いて下さい。

『あなたは葦が風に靡くやうに、私に從はなければならないのです。私は何事にも一生懸命になつてあなたに盡くします。

『始めの內どんな思ひ掛けない事で私共の間が割かれようとも、終ひにはきつと二人は一緒になるでせう。秋牡鹿が妻を戀ふやうに、それ程までに私はあなたを慕ひ求めてゐるのです。

『たとひ長い間離れ離れになつてゐても、丁度上流で二筋に分かれてゐる川の水が出會ふやうに、私共は會ふでせう。

どうか、此の手紙の意味を判じ當てて、それを守つて下さい。私は仕合はせよきお返事をと望んで居ります。照手姫の事を思ふと私は飛んででも行けるやうな氣がします」

尙ほ照手姫は手紙の終りに、それを書いた人の名——小栗判官兼氏其の人——と共に、姫自身の名が宛名として書かれてあるのを見出した。

さあ彼女は全く當惑した、まさか自分に宛てて書いてあらうとは始めは思はなかつたし、何の考へもなく、侍女共に大聲で讀んで聞かせて仕舞つたからである。

何故かといふと頑固一徹な長者が、若しさういふ事實を知るやうな事になつたら、忽ち殘酷極る遣り口で以て自分を殺すだらうといふ事を彼女はよく知つてゐたからである。

註　長者といふのは本名ではない、佛蘭西語の「アン・リシャール」、「アン・リーシュ」と同じく、實は單に富める人といふ意味である。蓋し此の言葉は田舍では今も尙殆ど本名と同じやうに使はれてゐる。其地方で一番金持ちで、通常權勢有る人は屢々「あの長者」と名指されてゐる。

それ故『ウハ』野ケ原といふ荒野——怒り猛つて居る父親が自分の娘を殺すのに恰好な場所——の土に埋け込まれるのが恐くて、彼女は手紙の端を齒に當てがひ、片々に嚙み裂いて、奥の間へ引き下がつた。

所が商人は、何の返事も齎さずに常陸の國へ歸る譯には行かないと思つたので、ずるい事をして返事を受け取る事に決めた。

そこで彼は、草鞋を脱ぐ間も遲しとばかり、急いで姫の後を一番奥の部屋の中にまで追駈けて行つて、大きな聲で叫んだ、――

『おゝ、姫君樣。文字といふものは印度では文珠菩薩、日本では弘法大師が工夫されたものだと私は教はつて居ります。

『文字で書いた手紙をそんな風に引きちぎるといふのは、弘法大師の御手を引きちぎるやうなものぢや御座いませんか。

『女といふものは男より汚れて居るものだといふ事をあなた樣は御存じないのですか。御存じがないから、それだから、女に生まれたあなた樣はこんなに手紙を引きちぎるなんて大それた眞似をなさるんですか。

『さあ、若しあなた樣が御返事を書くのがいやだと仰しやるなら、私は有りとあらゆる神々に御祈禱します、此の女らしくもない行を神々に告げ參らせて、あなた樣に罰を當てて下さるやうにお祈りしますぞ』

すると照手姫は、驚き悲しんで、彼に祈禱は止めて吳れと懇願し、直ぐに返事を書くからと約束した。

そこで彼女の返事は早速認められて、商人に渡された、商人はうまい工合に行つたので大いに喜び、

箱を背負ひながら、急いで常陸に向けて出發した。

四　兼氏が舅の同意なくして花婿となつた顚末

大急ぎで旅をして、仲人は忽ち判官の家に着いた、そして主人に手紙を渡した、主人は嬉しさに兩手を揉はせ乍ら、封を切つた。

返事は實に頗る簡單であつた、――只だかういふ文句たけ、『神中舟』

然し兼氏は其の意味をつぎのやうに推量した、『運不運は何にでも附き物ですから、恐れてはいけません、人に見附からぬやうに來て御覽なさい』

そこで彼は池ノ庄司を呼んで、急ぎの旅に必要な支度を洩れなく整へるやうに言ひ附けた。後藤左衞門は案内者として仕へる事を承諾した。

兼氏は彼等と同道した。皆が『ソバ』郡に着いて姫の家に近附いた時、案内者は殿様に言つた。――『私等の前にある、黑い門の附いた家は、遠く名を知られた横山長者の屋敷です。それから別に其の北の方にある、赤い門の附いた家は花のやうに美しい照手のお住ひです。

『萬事拔け目のないやうに、さうすりやうまい具合に行きますよ』こんな言葉を殘して、案内者は見えなくなつた。

忠義な家來に伴なはれて、判官は赤門に近づいた

二人が入らうとした時、門番等は邪魔しに掛かつた、名高い横山長者の獨り娘、――お天道樣のお惠みによつてお產まれ遊ばした貴い御子――照手姫のお住ひに入らうとするとはあんまり圖々しいぞと言ひ立てながら。

『お前達がさう言ふのはいかにも尤もだ』と家來は言つた、『たが私達は落人を探しに都から參つた役人だといふ事を頭に入れて置かねばならんぞ。

『此處は男子禁制の家だからこそ、中を調べて見ねばならんのだ』

そこで番人共は膽を潰して、二人を通らせたが、見ると奉行所のお役人と思つた人達は庭に入つて行き、それから侍女共が大勢出て來て二人を客人としてお迎へした。

照手姫は、あの戀文を書いた人が來たといふので甚かとばかり喜んで、晴着を着、肩に被衣を懸けて、戀人の前に立ち現はれた。

兼氏も美しい人にこんなにして歡迎される事を大變に喜んだ。そして婚禮の儀式が、双方共喜に滿ちて、取り行はれ、續いて盛大な酒宴が催されたのである。

宴は頗る盛大であるし、皆も愉快でたまらないので、殿の從者共は姫の腰元達と一緒に踊つたり、一に音樂をやつたりした。

當の小栗判官も、竹の根で造つた笛を取り出して、調べ床しく吹き始めた。

すると照手の父親が、自分の娘の家でやつてる此の愉快さうなドンチャン騷ぎを殘らず聞きつけて、どういふ譯かと頗る驚き怪しんだ。

然しどうして判官が彼の許しを受けずに娘の婿に成りすましたか其の次第を聞かされた時、長者は正氣と思はれぬ程に腹を立てて、ひそかに復讐の計畫を廻らしたのである。

五　毒害

翌日横山は彙氏卿の許へ使をやつて、お互に舅として婿として挨拶の盃を取り交はす儀式を行ふから、自分の家に來るやうにと招待した。

すると照手姫は、自分が夜、緣起の悪るい夢を見たので、判官に說き勸めて其處へ行くのを止めさせやうとした。

然し判官は、姫の心配を氣にも留めず、若い從者を連れて、大膽に長者の住家へと出掛けて行つた。

そこで横山長者は喜んで、あらゆる山海の珍味を盛り立てた御馳走を幾皿も幾皿も拵へさせ、充分判官を饗應した。

やがて、酒盛もそろそろ下火になりかけた時、横山はお客様の彙氏卿も何か御馳走して下さるやうにと所望した。

註　「御馳走」といふ言葉は本當は「肴」となつてゐる。酒に肴を添へるのはいつも定まりになつてゐた。それで「肴」といふ言葉は、酒宴の間に客に與へられる饗應なら、どんなものに對しても用ゐられるやうに段々なつて來た、例へば歌とか踊りとかいふやうに。

「御馳走つて何です」と判官は尋ねた。

「正直な所」と長者は答へた、「私はあなたの、素晴らしい乘馬のお手並を拜見させて戴きたいのです」

「それなら乘りませう」と卿は答へた。そこで直ぐ鬼鹿毛と言ふ馬が引き出された。

此の馬は極て兇猛で本當の馬とは思はれぬ、寧ろ鬼か龍かとばかりの代物なので、敢て近づかうとする者さへ殆ど無かつた位であつた。

所が判官兼氏卿は直ぐ其馬の繋がれてゐた鎖を解いて、驚くばかり輕々と其の上に乘つたのである。

荒つぽい馬なのにも拘らず、鬼鹿毛は何でも乘手の仕たい放題の事をしない譯には行かなかつた。横山も他の人達も、並み居る者は皆、驚きのあまり口も利けなかつた。

然し間も無く長者は、六曲屏風を取り出してそれを立て、其の屏風の上の縁に兼氏が馬に乘つて上がつた所を見せて吳れと賴んだ。

小栗卿は、引き受けて、屏風の上端に乘り上がつた。それからつぎに眞直ぐ立つて居る障子の枠の上

を通つて乘り進んだ。
今度は碁盤が取り出されたが、彼は其の碁盤格の目の上に自分は乘り乍ら馬の蹄をキチンと揃へさせた。
最後に、彼は行燈の枠の上で馬に中心を取らせたのである。
さあ横山はどうして良いのか途方に暮れてしまつて、丁寧にお辭儀をしながら、やつとこれだけ物が言へたばかりであつた、『御馳走樣、誠に有難う存じます、大層面白う御座いました』
小栗判は、鬼鹿毛を庭の櫻の木に繋いで座に還つた。
所が三郎といふ其の家の三男が、判官を毒殺しようと父に說き付け、青百足や青蜥蜴の毒液や、竹の筐んだ節の中に長らく溜つて居た汚水やの混つてゐる酒を寒氏に勸めた。
判官や彼の從者共は、まさか毒の入つた酒だとは思はず、すつかり呑み盡くした。
悲慘な事には、彼等の腹や腸に毒が沁み込んで、骨といふ骨は殘らず其の激しい毒の爲めにバラバラに碎けてしまつたのであつた。
彼等の命は、朝露が草から消え去るやうに忽ち消え去つた。
三郎と其の父は彼等の屍體を『ウハ』野ヶ原に埋めた。

残忍な横山はかく娘の夫を殺した以上、彼女も生かしては置けないと考へた。それ故彼は自分の忠僕で鬼王鬼次といふ兄弟に、相模の海の沖遙かに姫を連れて行くやうに、そして其處で溺らして仕舞ふやうに是非共命じなければならないと思つた。

二人の兄弟は、自分等の主人は石のやうな心の人間だから別に說き伏せる方法は無いといふ事を知つてゐたので、只だ命令に從ふより外どうする事も出來なかつた。そこで二人は不運な姫の許に出かけて、自分等の遣はされた目的を話して聞かせた。

照手姫は父の殘酷な決心に全く驚いて始めは何もかも夢だと思ひ、其の夢が覺めて吳れるやうにと熱心に祈つた程であつた。

暫くして姫は言つた、『私は今迄の生涯中、承知の上で罪を犯した事は決して無い。……然し自分の身にどんな事が振りかからうと構はぬが、夫が父の家を訪ねてからどうなつたか、それが言葉で言へない程知り度くてたまらないのだ』

二人の兄弟は答へた、『御主人樣は、あなた方お二人が正當な許しもなく御結婚なさつた事を知られて大變御立腹になり、あなたの御兄上三郎樣の考へられた企みをお取り上げになつて、若殿樣を毒害遊

ばされまして御座います』
これを聞いて照手は益々驚き、無慈悲な事をする父親に罰が當たるやうにと祈願したが、それは尤もな次第である。
然し姫は我が身の不幸をかこつ暇さへ與へられなかつた。鬼王と其の弟がすぐさま姫の着物を剝いで、彼女の裸身を莚に入れて簀巻きにしたからである。
此の痛ましい包みが夜分家から運び出された時に、姫と其の腰元共は、悲しがつて喚び泣いたり泣き喚いたりしながら、互に最後の別かれを告げた。

鬼王鬼次の兄弟はやがて其の哀れな荷物を積んで遙か沖合に漕ぎ出した。けれども自分達ぎりになつた時、鬼次は鬼王に向つて、俺達は若奥様を助けて上げる事にしよう、其の方がいいぜと言つた。
これに對して兄は異議も唱へず直ぐ賛成した、そして二人は助ける工夫を廻らし始めた。
丁度其の時主のない丸木舟が潮に流されてこちらへ近寄つて來た。
早速姫は其處に移された。兄弟は、『これや全く仕合はせな事だつた』と叫びながら、奥様に別かれを告げて、主人の許へ漕ぎ戻つた。

七　賴姬

哀れな照手を乘せた丸木舟は七日七晩あちこち波に搖られたが、其の間激しい雨風が起こつたのである。そして遂に直江附近で魚釣りをして居た漁夫達に見附けられた。

所が漁夫達は此の美しい女はきつと妖魔に違ひない、此奴の仕業で幾日も永らく暴風雨たのだと考へた。それで若し直江に住む一人の男が庇つて呉れなかつたら、照手は皆の橈で打ち殺される所だつた。

さて此の男は、村上太夫といふ名であつたが、後を嗣ぐべき實の子が居なかつたので、姫を自分の娘として養ふ事に決めた。

そこで家に連れ歸つて、賴姬と名づけ、隨分親切に扱つたが、其の爲め彼の女房は養女に嫉妬を起こして、亭主の留守の時は度々彼女に辛く當たつた。

然し賴姬が自分から勝手に出て行かうとはしないのを見て、腹黑い女は彼女を永久に追ひ拂つてしまふ工夫を廻らし始めた。

丁度其の折、端なくも人買ひの船が港に錨を下してゐた。言ふ迄もなく賴姬は其の人肉商人にひそか賣られたのである。

こんな災難に遭つてから後、不運な姫は親方から親方へと七十五遍も轉々した。最後に彼女を買ひ取つたは萬屋長兵衛と言つて、美濃の國の大きな『女郎屋』の持主としてよく知られた男であつた。

照手姫は始めて新しい親方の前に連れて來られた時、穩かに口を開いて、自分は何一つ行儀や作法を辨へてゐないが許して呉れるやうにと頼んだ。すると長兵衛は身の上や生國や家柄などを殘らず話して聞かせろと言ひ渡した。

然し照手姫は、自分の生國の名にしろ喋るのは智惠のない話だ、うつかりすると自分の夫が自分の父たる人に毒害された事を無理やりに白状させられるかも知れないから、と考へたのである。

そこで彼女は唯だ自分が常陸で生まれたといふ事だけ答へようと決心した。自分が、戀人たる判官殿の住んで居た國と同國の者だと言ふ事に或る悲い愉悦を覺えながら。

『私は常陸の國で生まれました』と彼女は言つた、『けれども私は大層賤しい生まれですから苗字がありません。ですからどうぞ何か良い名を附けて下さい』

そこで照手姫は常陸の小萩と名乘らされた、そして樓主に仕へて彼の商賣に精出して勤めるやうに言ひ渡された。

けれども此の言ひ附けには彼女は從ふのを拒んだ、そしてどんなに卑しい事だらうが辛い事だらうが、

當てがはれた仕事なら何なりとやりおほせますが、『女郎』の勤めは致し兼ねますと言つた。

『そんなら』と長兵衛は腹を立てて呶鳴つた、『お前の毎日の仕事はこれだけだ――

『庭に繋いである馬にな、數なら百匹も居るわ、そいつら有りたけに飼葉をやるんだ、それから家にゐる此の連中残らずに飯の時給仕をするんだ。

『此の家に抱へてる三十六人の女郎共に、一番映りのいいやうな恰好に髪を結つてやつてよ、おまけに麻を撚つて緒にしたやつを七つの箱に一杯にするんだ。

『來たあるわい、七つの竈に火を焚いてよ、此處から半道もある山の泉から水を汲んで來るんだぞ』

照手は自分にしろ他のどんな生物にしろ無慈悲な親方が自分に負はしたこんな仕事を全部やりおほせる事は迚も出來ないといふ事を知つたので、我が身の不幸を泣き悲しんだのである。

然し泣いたつて何の足しにもならない事を直ぐに氣附いた。そこで涙を押し拭つて、自分のやれる事をやつて見ようと雄々しくも決心した、それから前掛を締め、袂を後ろで結んで、馬に飼葉をやる仕事に取り掛かつた。

神々の深いお恵みは理解する事は出來ない、然し此の事は確だ、彼女が始めの馬に食はせると、他の馬全部も、靈驗によつて、養ひ盡くされたのである。

更に同じやうな不思議な事が、彼女が飯時に家の人達に給仕をした時にも、遊女共の髪を結つた時にも、麻緒を撚つた時にも、竈に火を焚いた時にも、偶然に起こつたのである。

けれども何よりかより一番悲惨な事は水桶を肩に擔いで、遠くの泉に水を汲みに出て行く[illegible]を見る事であつた。

桶に滿々と湛へた水に變はり果てた自分の顔が映つてゐるのを見た時、其の時に彼女は全く絶え入るばかりに泣き悲しんだのである。

けれども不圖むごたらしい長兵衛の事を思ひ出したところ、彼女は非常な恐怖を全身に覺えて、急いで自分の恐ろしい住家へと取つて返した。

然し間もなく『ケ郎屋』の亭主は彼の新しい奉公人が並々の女ではないと見て取つて、大變親切な態度で彼女をあしらひ始めた。

九　輾車

さてこれから象氏がどうなつたかをお話ししよう。

加賀美の藤澤寺の、遠く名を知られた遊行上人は、絶えず日本中を行脚して全國に佛法を説いて廻つた人たが、偶々『ウハ』野ケ原に差し掛かつた。

其處で彼は多くの鴉や鳶が一つの塚の附近をヒヨイヒヨイ飛び歩いて居るのを眼に留めた。惹かれるやうに尚ほも近寄ると、見た所腕や足の無い何とも言はれぬ物が、毀れた墓石の碎片の間に動いてゐる

のを目撃したので、甚く驚いた。

其の時彼は古い傳說を思ひ浮かべた、此の世で定められた壽命が未だすつかり終はらない內に殺される者は『餓鬼阿彌』と言ふ姿になつて再現したり生き返つたりするといふ事である。

自分の眼の前の物はさういふ不幸な亡魂に違ひないと彼は思つた。又彼の優しい心には此の氣味の惡るい物を熊野寺の溫泉に連れて行つて、さうして元の人間の姿に還れるやうにしてやらうといふ望みが起こつた。

そこで彼は『餓鬼阿彌』の爲めに車を造つて、例の何とも言へぬ恰好の物を中に入れ、其の胸に大きな文字を書き誌した木の札を結び附けた。

書かれた言葉はかうである、『此の不運なる者に憐れみを垂れよ、且つ熊野寺の溫泉への道中に力を添へよ。

『たとひ僅の距離たりとも綱を引きて此の車を輓き進めたる者は大なる福運を以て報いらるべし。

『たとひ一歩と雖も車を輓かば其の功德は僧侶千人を養ふに足り、二歩輓かば其の功德は一萬の僧侶を養ふに足らん。

『三歩輓かば其の功德は親類緣者――父、母、或は夫――の亡者を成佛せしむるに足るべし』

かくて其の道を通り掛かつた旅人共は忽ち此の纒まつた形もない者を憐んだ。或る人達は何哩も車を輓き又或る人達は隨分親切で何日も何日も一緒に輓いて行つた程であつた。

さういふ次第で、大分長い事經つてから、車に乘つた『餓鬼阿彌』は萬屋長兵衛の『女郎屋』の前にやつて來た。常陸の小萩はそれを見て、書いてある事に非常に感動した。

其の時彼女はたとひ僅一日でも良いからあの車が挽きたい、そしてかういふ情深い仕事をしたお蔭で自分の死んだ夫の爲めに功德を授けたいといふ望みが急に起こつて來たので、自分の親方にあの車を挽かうと思ふから三日のお暇を許して呉れと懇願した。

これを頼むのに彼女は兩親の爲めにと言つた、親方が事實を知ると隨分腹を立てるかも知れないと氣遣つて、夫の事は話すまいと思つたからである。

長兵衛は始めは拒んだ、此の前に言ひ附けに從はなかつたから、たとひ一時間でも此の家から出て行く事はならんと嚙み附くやうな聲で呶鳴りながら。

然し小萩は彼にかう言つた、『御覽なさい、親方。雌雞だつて陽氣が寒くなると自分の巢に行くし、小鳥だつて深い森に急ぐでしよ。人間も其の通り、災難のある時は慈悲の隱れ場に逃れますよ。

『此の家の塀の外で暫く『餓鬼阿彌』が休んだのはきつと親方が親切な方だつて評判されてゐるからですよ。

『それはさうと今若しあなた方が三日のお暇を下さりさへすれば、私は貴方やお神さんの爲めに御入用なら命でも投げ出すといふお約束を致しませう』

さういふ譯で到頭けちん坊な長兵衛は說き伏せられて切な願ひを聞き屆ける事にした、そして彼の女

力は許された日數の上に更に二日だけ附け足す事を快く肯つた。かくて五日間自由の身となつた小萩は嬉しくてたまらず、直ぐさま此の恐ろしい仕事に取り掛かつた。

隨分と辛苦艱苦しながら、不破ノ關、「ムサ」、番場、醒ケ井、大野、末永峠といふやうな場所を通り過ぎてから、彼女は有名な大津市に着いたが、それ迄に三日掛かつたのである。

其處で彼女はもう自分は車を離れなければならないと知つた、其處から美濃の國へ歸るのには彼女には二日掛かるからである。

彼女が大津へ來る迄の長い道中、眼を樂ませ耳を喜はせるものとては路傍に生へた野育ちの綺麗な百合、雲雀や四十雀や樹々に囀る有りとあらゆる春の鳥の啼き聲、田植ゑしてゐる百姓の娘共の歌、只たそれだけであつた。

然しかうした眼に觸れ耳に觸れるものはほんの一時彼女を慰めただけであつた、といふのは之等は大概在りし日を夢みさせ、望みなき今の有樣を想ひ出させて彼女を苦しめたからである。

丸三日の間引き受けた激しい勞働の爲めに隨分疲れたけれども、彼女は宿屋に行かうとはしなかつた。翌日は置いて行かねばならぬ、其の不恰好なものの側で最後の夜を過ごしたのである。

「度々聞く事だが」と彼女は自分で考へた、「『餓鬼阿彌』は冥界の者だといふ話しだ。さうだとすると、此處にゐるのは私の死んだ夫の事を何か知つてるかも知れない。

「此の「餓鬼阿彌」が眼が見えるか耳が聞こえるかしたらどんなにいいだらう！さうすれば口で言つても字で書いても、兼氏の事が訊かれる譯だ」

霧の懸かつた近くの山々の上に黎明（あさあけ）の光が射し始めると、小萩は硯と筆を手に入れようとて出掛けて行つた、そして間もなくそれを持つて車の置いてある所へ歸つて來た。

それから、「餓鬼阿彌」の胸に附いてゐる板札の文字の下に、かういふ言葉を、筆で書き添した――

「おん身もとのお姿に復（かへ）らせ給ひ御歸國の運びに到り給はば、願はくば美濃の國なるおばか町、高屋長兵衛の婢、常陸の小萩を訪（おとな）ひ給へかし。

『おん身の爲め妾（わらは）は辛うじて五日の間拘束（かうそく）なき身と成り申し、おん身の車を遙々此の地まで曳き參らせむ爲め三日を捧げ申しつ。かかるおん方に再び會ひまつらむ事妾に取りてよこと嬉しき事に候べし」

それから彼女は『餓鬼阿彌』に別かれを告げ、家路を辿つて急ぎ歸つた、かうして車だけを殘して行くのは隨分心苦しい事ではあつたけれど。

一〇　蘇生

遂に「餓鬼阿彌」は有名な熊野權現の溫泉に運ばれ、そして、其の樣を憐れに思ふ慈悲深い人達の力添へで、身體の治る湯の效果（ききめ）を毎日經驗する事が出來たのである。

一週間經つとお湯の効果によつて眼と鼻と耳と口が元のやうに現はれた。十四日經つと手足は四本共そつくり元の形に戻つた。

それから二十一日の後には其の何とも言へない恰好をした者はすつかり姿を變へて、在りし頃のやうな五體揃つた立派な、本物の小栗判官兼氏に返つたのである。

此の不思議な變はりやうをして仕舞つた時、兼氏は身の廻はり四方八方を眺め廻はして、自分がこんな名も知らぬ所へ何時どうして連れて來られたのか非常に驚き怪しんだ。

然し熊野の權現樣の御利益により、物事は頗る工合よく定まつてゐたので、蘇つた兼氏卿は無事に京都二條の自宅に歸る事が出來た。家では彼の兩親、兼家卿と其の奥方は大層喜んで彼を迎へた。

すると天子樣が、此の顛末を逐一聽こし召されて、御自分の臣下の或る者が、死んで三年經つてから、かやうに生き還つたとは不思議な事であると思召された。

そしてお國拂ひにされた程の判官の罪を快くお許しになつたばかりではなく、尚は其の上常陸、相模、美濃の三箇國の領主たるべき事を彼に御任命遊ばされたのである。

一一　面會

或る日小栗判官は己が住家を後にして自分が治めるやうに任命された國々視察の旅に上つた。美濃に

着いた時、彼は常陸の小萩を訪ねよう、そして彼女の並々ならぬ好意に對して禮を述べようと決心した。それ故彼は萬屋に宿を取つたが、其處ではどの部屋よりも一番立派な客間に通された、幾つもの金屏風や、支那の絨毯や、印度の掛布や、其の他隨分金のかかつた珍らしい品々で、綺麗にしつらへた客間である。

兼氏が自分の面前に常陸の小萩を招ぶやうに言ひ附けた時、あの女は此の上なしの下司つぽい女に過ぎないし、餘り汚ならしくてあなた樣の前に出されないといふ返事であつた。けれども彼はそんな文句にはお構ひなく、其の女がどんなに汚なからうと直ぐに來させるやうに命ずるばかりであつた。

それ故小萩は、いやでいやでたまらないのに、無理やりに殿の前に出されたのだが、始め衝立の蔭から覗くと、判官そつくりに見えたので飛び上がるばかりに驚いたのであつた。

小栗は彼女が出て來ると本名を明かして呉れと頼んだ、が、小萩はかう言つて撥ね付けた、『本名を明かすなどといふ事柄は抜きにして、お酌を致すのでなければ、私は殿樣の御前を引退るばかりで御座います』

然し彼女が行き掛けた時、判官は呼び止めた、『いや、暫くお待ちなさい。あなたの名を聞くには相當な譯があるのです、といふのは實は私はあなたが去年親切にも大津まで車に乘せて輓いて行つて呉れたあの「餓鬼阿彌」です』

かう言ひながら彼は小萩の書いたあの木の札を差し出した。

そこで彼女は全く昂奮して言つた、『こんなに元の御身體になられたあなた樣にお目に懸かるとはほんたうに嬉しう御座います。さあ今こそ喜んで私の經歷を殘らずお話し申しませう。唯たこれだけのお願ひがあります、厨子王樣、あなたに私はあの世の事を少しお伺ひしたいのです、あの世からあなたは還つていらつしやいました、そして其處には私の夫が、哀呼！今居るので御座います。

『私は（昔の事をお話すると胸が張り裂けさうです）相模の國『ソバ』郡に住む横山長者の一人娘に生まれまして、名は照手姫と申します。

「よく覺えて居りますが、哀呼！私は三年前に、身分のある名高いお方と結婚しました、名は小栗判官兼氏と言ひ、常陸の國に住んでゐた方です。けれども夫は毒害されました、三男の三郎に唆かされた私の父の爲めに。

『此の私は父の咎めを受けて相模の海に沈められようとしました。今かうして生きてゐるのは父の忠義な家來、鬼王と鬼次のお蔭で御座います』

其の裁判官殿は言つた、『あなたは今眼の前に、照手の夫、兼氏を見てゐるのですよ。私は家來共と一緒に殺されはしたけれど、尚ほ幾年も久しい間此の世に生き永らへるやうに運命られたのです。

『私は藤澤寺の偉いお上人に助けられて、車を當てがはれ、大勢の親切な人達に熊野寺の溫泉まで曳かれて行つて、其處で元のやうに丈夫になり、姿も元のやうに治つたのです。そして今は三箇國の領主に任命されて、何でも望み次第の物を手に入れる事が出來るのです』

此の話を聞いて、照手は何もかもすつかり夢ではないのだとは殆ど信ずる事が出來なかつた、そして嬉し泣きに泣いたのである。それから言つた、「噫！此の前お目に懸かつてから此のかた、私はどれ程憂い目辛い目に會つた事でせう。

「七日七晩海で丸木舟に搖られまして、それから直江津で隨分危い所を、村上大夫といふ親切な人に助けられたのです。

「其の後七十五遍も賣られたり買はれたりして、終ひに此處に連れて來られました、此處では私が女郎になるのを斷わつたばつかりに、有る限りの苦しみを受けて參りました。こんな淺ましい姿で今お目にかかるのは其の爲めです」

人でなしの長兵衛の殘酷な振る舞ひを聞くと兼氏は非常に立腹して、直に彼を成敗しようとした。然し照手は命を助けてやるやうに夫に懇願した、かくて彼女がすつと以前長兵衛に約束した事——即ち『餓鬼阿彌』の車を挽く爲め自分を五日の間自由にさせて呉れれば親方やお神に、入用なら、命でもやらうと言つた——あの約束を彼女は果たしたのである。

之を長兵衛は心から有難がつた。其のお禮として判官には自分の廐に居る百頭の馬を贈り、照手には家にゐる三十六人の召使を與へた。

そこで照手姫は相應に着飾つて、兼氏の君と共に出掛けて行つた。彼等は心の中を喜びで一杯にしながら相模への旅を始めたのである。

一二　懲罰

此處は相模の國のソバ郡、照手の生まれた土地である。其の地は毎年に多くの美しい思ひや悲しい思ひを我等の心に呼び起こさせる事だらう。

此處は亦、小栗判を毒殺した横山や其の子の住る所でもあるのだ。

それ故三男の三郎は戸塚の原といふ菅野に連れて行かれて、其處で處刑された。

然し横山長者は罪の深い男ではあつたが、罰は受けなかつた。どんなに惡るくても兩親といふものは子供達に取つてはいつも日と月のやうなものでなければならないからである。此の仰せを聞いて、横山は自分のした事を深く深く後悔した。

鬼王鬼次の兄弟は、相模灘の沖で照手の姫君を助けた廉で澤山の賜物を頂戴した。

かくて善人は榮え、惡人は滅ぼされた。

目出度く樂く、小栗樣と照手姫は共に都へ還り、二條の邸で暮らしたが、二人揃つた所は春の花のやうに綺麗であつた。

目出度し。目出度し。

八百屋の娘『お七』の唄

秋の鹿が仲間の啼き聲に似た笛の音に誘はれて、獵人の矢玉の屆く所に入つて來る、そこで殺される。大方それと同じやうに、江戸で一番美しい五人の娘、其の綺麗な顏は丁度櫻の花のやうに都中殘らずをうつとりさせたのだが、其の五美人の一人が、戀の爲めに眼が眩んで其の刹那自分の命を捨てて仕舞つたのである。

無分別な事をして仕舞つてから、彼女は江戸の町奉行の前に連れて來られたが、其の時、位の高い役人は若い科人にかう言つて訊問した、『お前は八百屋の娘、お七ではないか。そんな若い身空で、どうしてあんな恐ろしい放火罪を犯すやうな事になつたのだ』

するとお七は、泣きながらそして自分の手を握り締めながらかういふ答辯をした、『本當に、あれが私の今迄に犯したたつた一つの罪で御座います。あれには特別譯があるのではありません、只だこれだけです、——

『何時だつたか以前、大火事のあつた時、——隨分大きな火事で江戸中殆ど殘らず燒き盡くされましたが、——私共の家も燒け落ちて仕舞つたのです。それで私共三人——兩親と私——は外に行く所がな

いと知つたので、或るお寺に身を寄せて、私共の家が又普請の出來るまで其處に泊まりました。

『若い者達二人を互に近寄せる因緣といふものは確に解らないもので御座います。……其のお寺に若いお弟子の坊さんが居りましたが、私共は思ひ思はれる仲になつたのです。

『こつそり二人は逢引きして、お互に必らず見捨てないやうにと約束しました、それから私共は小指に附けた小さい斬り傷から血を吸り合つたり、起請を取り交はしたりして、お互にいつまでも可愛がらうと誓ひ合つたのです。

『私共の枕が未だ定まつて仕舞はない內に、本鄕に新しい家が建てられて私共が何時でも入れるやうになつたのです。

註　此の珍らしい言ひ方は戀人同志が「枕を取り交はす」といふ日本の言葉が其の起原である。暗い所では、小さい日本の木枕はよくあつちこつち入れ代はりになる。それ故、「枕が未だ定らない內に」といふのは、二人の戀人が相變はらず夜分こつそりと互ひに會ひ續けてゐたといふ意味であらう。

『けれども私が二世と契つた吉三樣に悲いお別かれを告げた日からは、其の方に手紙位貰つても私の心は落ち着きませんでした。

『夜獨りで寢床に入ると、いつも私は考へて考へ拔いたのですが、たうとう或る晩の夢の中で家に附け火をしようといふ恐ろしい考へが浮かんで來ました、愛しい綺麗な人に又會へるのにはこれより外方法がありませんから。

『そこで、或る晩、枯草を一束取つて來て、其の中に火の附いた炭を幾つか乘せて、家の裏の物置にそつと其の束を入れました。

『火事が起こつて、大騷ぎになりました、そして私は逮まへられて此處へ連れて來られたのです――おゝ。本當に恐ろしい事で御座いました。

『私は決して、決してもう二度とこんな罪は犯しません。けれどもどうあらうと、おゝ、どうぞ私をお助け遊ばして、御奉行樣。おゝ、どうぞ私を憐れんで下さいませ』

あゝ！飾り氣のない言ひ譯だ！……だが彼女は年は幾つだ。十二ではないか。十三ではないか。十四ではないか。十四の後には十五が來る。噫呼！彼女は十五だつた、それで助かる譯には行かなかつた。それ故お七は掟に從つて宣告された。然し彼女は先づ丈夫な繩で括られて、日本橋と言ふ橋の上で七日間世間の人の眼に晒された。あゝ！何といふ可哀相な見世物だつたらう。

彼女の伯母達や從兄弟達、家僕の『べくらい』や角助までが、涙に濡れた袖を何遍も度々絞つたのであつた。

けれども、罪は許す事は出來ないので、お七は四本の柱に縛られた、薪に火は附けられた、火は燃え上がつた。……そして哀れなお七は火の眞中に！

あとがき

『東の國から』は一八九五年、ボストンのハウトン・ミフリン會社、及びロンドンのオスグッド・マックイルヴェン會社から同時に出版された。出雲時代の友人西田千太郎氏に捧げてある。重に熊本時代の見聞に基づいて居るこの十一篇のうち「夏の日の夢」は「ヂャパン・デイリー・メイル』に、「博多にて」「永遠の女性に就て」「赤い婚禮」「叶へる願」の四篇は『太西洋評論』に、その以前發表された物である。

「九州學生」のうち、譯者が註に書いた當時の生徒の名は全部安河内麻吉氏の教示によつた事を述べてここで謝意を表したい。當時は生徒の數も少なかつたので、文科と法科は勿論、理科工科も共通學課は時として一緒に授業を受けた事を注意すべきである。

『心』は一八九六年、ボストンのハウトン・ミフリン會社、及びロンドンのオスグッドマックイルヴェン會社から同時に出版された。友人雨森信成(のぶしげ)氏に捧げてある。熊本時代の物一部分を除いて大部分神戸時代になつた十五篇のうち「日本文化の眞髓」「旅行日記より」「戰後雜感」「神佛の黄昏時」の四篇は、その以前『太西洋評論』で發表されて居る。附錄の「俗唄三つ」は出雲松江附近の或部落を訪うて得た物である。

これ等の諸篇は多くは事實に基づいて居る。たとへば「停車場にて」の記事は、著者が實際巡査殺しの犯人を停車場に迎へたのであつた。「戰後雜話」「コレラ流行時に」「門つけ」の記事も皆事實であつた。「コレラ流行時に」の著者の家は神戸市中山手通、七丁目番外十六番にあつた。

著者は夫人にいつも話を聞くやうに、肴屋でも魚屋でも珍らしい經驗をもつた人の話を尊重して聞くやうにと云つた。神戸で門つけを呼び入れて歌を聞いたあとで御馳走をしてきたのがこの一篇であつた。この歌の原文は一つから二十まである數へ歌。大阪の男女が京都の疏水で心中した事實を歌つた物。女が遺書を書いて居るところと、二つの新しい墓の繪があるだけ。歌の文句は「一つとせー、評判名高き西京の今度開けし疏水にて、浮名を流す情死の話」と云ふやうな物であつた。しかし十吉と云ふ男の名も、若菊と云ふ女の名も、印刷者發行人の名まで變へてある。

昭和二年二月

田部隆次

第五卷要目索引

Bits of Life and Death. 生と死の斷片

The Stone Buddha. 石　佛

Jiujitsu. 柔　術

The Red Bridal. 赤い婚禮

A Wish Fulfilled. 叶へる願

In Yokohama. 横濱にて

Yuko : a Reminiscence. 勇子——追懷談

Kokoro 心

Hints and Echoes of Japanese Inner Life. 日本内面生活の暗示と反響

1) Dedication 獻 詞

To my Friend
Amenomori Nobushige
Poet, Scholar and Patriot.

詩人・學者・愛國者なる
友人
雨森信成へ

2) Content 本 文

At a Railway Station. 停車場にて

The Genius of Japanese Civilization. 日本文化の眞髓

A Street Singer. 門つけ

From a Travelling Diary. 旅行日記より

東の國から

田部隆次　夏の日の夢。　九州學生。　生と死の斷片。

戸澤正保　博多にて。　永遠の女性に就て。　石佛。　柔術。　赤い婚禮。
叶へる願。　横濱にて。　勇子。

心

田部隆次　停車場にて。　門つけ。

石川林四郎　日本文化の眞髓。　旅行日記より。　阿彌陀寺の比丘尼。　戰後雜感。　お春。

戸澤正保　趨勢一瞥。　業の力。　保守主義者。　薄暗がりの神佛。　前世の觀念。
コレラ流行時に。　祖先崇拜に就て　きみ子。

稻垣巖　俗唄三つ（附錄）

第三回配本

小泉八雲全集第五巻

第一回豫約菊判背革裝　大正十五年十月配本開始　昭和三年十一月配本完了

第二回豫約菊判總布裝　昭和四年六月配本開始　昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版　昭和五年十月配本開始　昭和七年三月配本完了

最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）

豫約者に限り每月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】

昭和十二年二月十一日印刷

昭和十二年二月十五日發行

著作者　小泉八雲全集刊行會代表　田部隆次

發行者　東京市麴町區三番町一　長谷川巳之吉

發行所　東京市麴町區三番町一　第一書房

振替東京[illegible]二二三　電話九段三三四四

牛込區山吹町一九八　印刷者　[illegible]

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 內容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷〔上〕
知られぬ日本の面影

第四卷〔下〕
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穗。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戶クロニクル社說
隨筆八種。

別册
小泉八雲。